岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第146集

堅田遺跡
美濃国分尼寺東遺跡

2020
岐阜県文化財保護センター

堅田遺跡
美濃国分尼寺東遺跡

2020

岐阜県文化財保護センター

平成 26 年度堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡発掘区遠景（北東から）

平成 27 年度堅田遺跡発掘区遠景（西から）

堅田遺跡出土遺物

序

堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡が所在する不破郡垂井町は濃尾平野の北西部に位置し、北西部の池田山塊や南西部の南宮山塊に囲まれた地形的特徴から、古来より東西交通の要衝とされてきた地域です。特に古代においては、西から不破の関（関ケ原町）、美濃国府（垂井町）、美濃国分尼寺（垂井町）、美濃国分寺（大垣市）と連なるこの一帯は、美濃地域の政治・文化の中心地でした。

このたび、大垣土木事務所による公共社会資本整備総合交付金事業（県道赤坂垂井線拡幅工事）に伴い、不破郡垂井町東部に所在する堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡の発掘調査を実施しました。

両遺跡の発掘調査では、主に古墳時代から古代、中世、近世の遺構・遺物を確認しました。東西に長いトレンチ状の発掘区において、掘立柱建物、竪穴建物、柵、柱穴、溝状遺構、土坑を検出したことから、集落域の一部にあたると考えられます。また、土器や石器、金属製品及び木製品が出土しました。土器では須恵器、灰釉陶器、山茶碗が出土遺物の大半を占め、少量ながら土師器、瀬戸美濃産陶器も出土しました。また鞴の羽口や鉄滓といった鍛冶関連遺物や、火舎香炉、転用硯、墨書土器、水瓶といった寺院に関連する遺物も出土しました。残念ながら美濃国分寺及び美濃国分尼寺と直接関連する遺構・遺物を確認することはできませんでしたが、両遺跡周辺の人々の暮らしぶりを考えるうえで重要な資料を得ることができました。本報告書が広く県民の皆様に活用され、埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史的研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、垂井町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和２年２月

岐阜県文化財保護センター
所長　小林　法良

例　言

1　本書は、岐阜県不破郡垂井町平尾に所在する堅田遺跡（岐阜県遺跡番号 21361-11678）及び美濃国分尼寺東遺跡（岐阜県遺跡番号 21361-11679）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、公共社会資本整備総合交付金事業（県道赤坂垂井線拡幅工事）に伴うもので、岐阜県大垣土木事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　三重大学名誉教授八賀晋氏及び大垣市教育委員会高田康成氏の指導のもとに、発掘作業は平成 26（堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡）・27 年度（堅田遺跡）に実施した。整理等作業は平成 30 年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は佐竹正憲が行った。なお、第４章・第５章については、柏木賢一の所見をもとに佐竹が行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記は、株式会社イビソク（平成 26 年度）、株式会社文化財サービス（平成 27 年度）に委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社フジヤマに委託して行った。金属製品保存処理は株式会社イビソクに委託して実施した。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　木製品の放射性炭素年代測定及び鉄滓成分分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第６章に掲載した。執筆は、株式会社パレオ・ラボによる結果をもとに佐竹が行った。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

　林正憲、藤澤良祐、渡邉博人、垂井町教育委員会

10　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

巻頭図版
序
例言
第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……3
第２章　遺跡の環境……7
　第１節　地理的環境……7
　第２節　歴史的環境……9
第３章　調査の成果……13
　第１節　基本層序……13
　第２節　遺構の概要……15
　第３節　遺物の概要……17
第４章　美濃国分尼寺東遺跡……20
　第１節　遺構と遺物……20
　第２節　撹乱坑・遺物包含層出土遺物……28
第５章　堅田遺跡……36
　第１節　縄文時代の遺構と遺物……36
　第２節　古墳時代及び古代の遺構と遺物……41
　第３節　中世の遺構と遺物……97
　第４節　近世以降の遺構と遺物……129
　第５節　その他の遺構と遺物……135
　第６節　撹乱坑・遺物包含層出土遺物……139
第６章　自然科学分析……206
　第１節　分析の概要と成果……206
　第２節　放射性炭素年代測定……207
　第３節　鉄滓成分分析……210
第７章　総括……212
　第１節　美濃国分尼寺東遺跡の遺物について……212
　第２節　堅田遺跡の遺物について……214
　第３節　遺構について……220
　引用・参考文献……227
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　遺跡位置図 …… 1
図２　試掘調査坑、本発掘調査範囲 …… 2
図３　発掘区地区割図 …… 4
図４　発掘区周辺地形図 …… 7
図５　遺跡周辺の地質概略図 …… 8
図６　周辺遺跡位置図 …… 12
図７　基本層序柱状図 …… 14
図８　遺構属性模式図 …… 16
図９　SP１、SD１・２遺構図 …… 21
図 10　SD３・４・５・６・７遺構図 …… 23
図 11　SK４・５・17・19 遺構図、SK４・５遺物実測図 …… 25
図 12　SK22 遺構図、遺物実測図 …… 26
図 13　SK27・32 遺構図、SK27 遺物実測図 …… 27
図 14　撹乱坑・遺物包含層出土遺物実測図 …… 28
図 15　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　割付図 …… 29
図 16　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（１）30
図 17　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（２）31
図 18　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（３）32
図 19　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（４）33
図 20　SK290・291・420 遺構図、SK290・420 遺物実測図 …… 37
図 21　SK425・444・460 遺構図、SK460 遺物実測図 …… 38
図 22　SK786・1069 遺構図、遺物実測図 …… 33
図 23　SK1120・1121 遺構図 …… 40
図 24　SI１遺構図、遺物実測図 …… 41
図 25　SI２遺構図（１）…… 43
図 26　SI２遺構図（２）・遺物実測図 …… 44
図 27　SB１遺構図 …… 45
図 28　SB１遺物実測図 …… 46
図 29　SB２遺構図 …… 47
図 30　SB３遺構図 …… 48
図 31　SA１遺構図 …… 49
図 32　SA２遺構図 …… 50
図 33　SA３遺構図 …… 51
図 34　SA４遺構図 …… 52
図 35　SA８遺構図 …… 53
図 36　SP９・21・23・161・162 遺構図、SP161 遺物実測図 …… 55
図 37　SD６・10 遺構図、SD10 遺物実測図 …… 57
図 38　SD11・15 遺構図 …… 58
図 39　SD16 遺構図 …… 59
図 40　SD17 遺構図 …… 60
図 41　SD18・22 遺構図 …… 61
図 42　SD23・25 遺構図、SD25 遺物実測図 …… 62
図 43　SD26 遺構図、遺物実測図（１）…… 64
図 44　SD26 遺物実測図（２）…… 65
図 45　SD27・28 遺構図、遺物実測図 …… 66
図 46　SD30・35・36 遺構図 …… 67
図 47　SD39 遺構図 …… 68
図 48　SD39 遺物実測図 …… 69
図 49　SD43 遺構図 …… 70
図 50　SK31・34・43 遺構図、遺物実測図 …… 71
図 51　SK55 遺構図、遺物実測図 …… 72
図 52　SK56 遺構図、遺物実測図 …… 73
図 53　SK72・88 遺構図、遺物実測図 …… 75
図 54　SK132・158 遺構図、SK158 遺物実測図 …… 76
図 55　SK165・207 遺構図、SK207 遺物実測図 …… 77
図 56　SK210 遺構図、遺物実測図 …… 78
図 57　SK234・263 遺構図、遺物実測図 …… 79
図 58　SK269・271 遺構図 …… 81
図 59　SK293・318・453・512 遺構図、SK318・453・512 遺物実測図 …… 82
図 60　SK597・619 遺構図、遺物実測図 …… 83
図 61　SK694 遺構図、遺物実測図 …… 85
図 62　SK742 遺構図、遺物実測図 …… 86
図 63　SK816・838 遺構図、遺物実測図 …… 88
図 64　SK882・891・894 遺構図、SK882 遺物実測図 …… 89
図 65　SK905・928 遺構図、SK928 遺物実測図 …… 90
図 66　SK931 遺構図、遺物実測図 …… 91
図 67　SK950・974 遺構図、遺物実測図 …… 92
図 68　SK982・985・986 遺構図、SK982 遺物実測図 …… 94
図 69　SK997・1135 遺構図、遺物実測図 …… 95
図 70　SK1136・1139 遺構図、遺物実測図 …… 96
図 71　SA５遺構図、遺物実測図 …… 98
図 72　SA６遺構図、遺物実測図 …… 99
図 73　SD２・３遺構図（１）…… 101
図 74　SD２・３遺構図（２）、SD２遺物実測図 …… 102
図 75　SD９・12・14 遺構図 …… 103
図 76　SD19・20 遺構図、遺物実測図 …… 105
図 77　SD21・24 遺構図、遺物実測図 …… 106
図 78　SD33 遺構図、遺物実測図 …… 107
図 79　SD34 遺構図、遺物実測図 …… 109
図 80　SD41 遺構図、遺物実測図 …… 110

図 81　SD42 遺構図、遺物実測図 …… 111
図 82　SK141・343 遺構図、遺物実測図 …… 113
図 83　SK519 遺構図、遺物実測図 …… 114
図 84　SK623 遺構図、遺物実測図 …… 115
図 85　SK627 遺構図、遺物実測図 …… 116
図 86　SK637・652 遺構図、遺物実測図 …… 117
図 87　SK654・658 遺構図、遺物実測図 …… 119
図 88　SK660 遺構図、遺物実測図 …… 120
図 89　SK661・766・777・826 遺構図、SK766・777・826 遺物実測図…… 122
図 90　SK879・888・984 遺構図、遺物実測図 …… 124
図 91　SK988・1119・1137 遺構図、SK1119・1137 遺物実測図…… 126
図 92　SK1138 遺構図、遺物実測図 …… 127
図 93　SD１・４・５・８遺構図…… 130
図 94　SD13 遺構図、遺物実測図 …… 131
図 95　SK61・134 遺構図、SK61 遺物実測図…… 133
図 96　SK673 遺構図 …… 134
図 97　SA７遺構図、遺物実測図…… 136
図 98　SK148・618 遺構図、SK618 遺物実測図…… 137
図 99　SK1072 遺構図、遺物実測図 …… 138
図 100　撹乱坑・遺物包含層出土遺物実測図（１）… 139
図 101　撹乱坑・遺物包含層出土遺物実測図（２）… 140
図 102　堅田遺跡発掘区全域図　割付図 …… 141
図 103　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（１）…… 142
図 104　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（２）…… 143
図 105　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（３）…… 144
図 106　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（４）…… 145
図 107　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（５）…… 146
図 108　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（６）…… 147
図 109　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（７）…… 148
図 110　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（８）…… 149
図 111　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（９）…… 150
図 112　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（10）…… 151
図 113　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（11）…… 152
図 114　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（12）…… 153
図 115　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（13）…… 154
図 116　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（14）…… 155
図 117　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（15）…… 156
図 118　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（16）…… 157
図 119　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（17）…… 158
図 120　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（18）…… 159
図 121　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（19）…… 160
図 122　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（20）…… 161
図 123　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（21）…… 162
図 124　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（22）…… 163
図 125　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（23）…… 164
図 126　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（24）…… 165
図 127　堅田遺跡発掘区全域図　分割図（25）…… 166
図 128　暦年較正結果…… 208
図 129　須恵器・灰釉陶器・山茶碗類の時期別破片数と美濃国分寺の変遷…… 217
図 130　須恵器・灰釉陶器・山茶碗類の分布状況…… 218
図 131　古墳時代から古代の遺構…… 221
図 132　中世前期の遺構…… 222
図 133　発掘区周辺の字絵図…… 223
図 134　字絵図の区画と溝の位置…… 224
図 135　堅田古墳現況地形測量図…… 225

表目次

表　1　試掘・確認調査結果…… 2
表　2　周辺遺跡一覧表…… 11
表　3　検出遺構一覧表…… 15
表　4　出土遺物点数等一覧表…… 17
表　5　柱穴一覧表…… 34
表　6　溝状遺構一覧表…… 34
表　7　土坑一覧表…… 34
表　8　土器類観察表…… 35
表　9　竪穴建物一覧表…… 167
表　10　竪穴建物付属遺構一覧表…… 167
表　11　掘立柱建物一覧表…… 167
表　12　掘立柱建物付属遺構一覧表…… 167
表　13　柵一覧表…… 168
表　14　柵付属遺構一覧表（１）…… 168
表　15　柵付属遺構一覧表（２）…… 169
表　16　柱穴一覧表（１）…… 169
表　17　柱穴一覧表（２）…… 170
表　18　柱穴一覧表（３）…… 171
表　19　柱穴一覧表（４）…… 172
表　20　柱穴一覧表（５）…… 173
表　21　溝状遺構一覧表（１）…… 173
表　22　溝状遺構一覧表（２）…… 174
表　23　土坑一覧表（１）…… 174
表　24　土坑一覧表（２）…… 175

表 25　土坑一覧表（3）…… 176
表 26　土坑一覧表（4）…… 177
表 27　土坑一覧表（5）…… 178
表 28　土坑一覧表（6）…… 179
表 29　土坑一覧表（7）…… 180
表 30　土坑一覧表（8）…… 181
表 31　土坑一覧表（9）…… 182
表 32　土坑一覧表（10）…… 183
表 33　土坑一覧表（11）…… 184
表 34　土坑一覧表（12）…… 185
表 35　土坑一覧表（13）…… 186
表 36　土坑一覧表（14）…… 187
表 37　土坑一覧表（15）…… 188
表 38　土坑一覧表（16）…… 189
表 39　土坑一覧表（17）…… 190
表 40　土坑一覧表（18）…… 191
表 41　土坑一覧表（19）…… 192
表 42　土坑一覧表（20）…… 193
表 43　土坑一覧表（21）…… 194
表 44　土坑一覧表（22）…… 195
表 45　土坑一覧表（23）…… 196
表 46　土坑一覧表（24）…… 197
表 47　土坑一覧表（25）…… 198
表 48　土器類観察表（1）…… 199
表 49　土器類観察表（2）…… 200
表 50　土器類観察表（3）…… 201
表 51　土器類観察表（4）…… 202
表 52　土器類観察表（5）…… 203
表 53　土器類観察表（6）…… 204
表 54　石製品観察表…… 205
表 55　金属製品観察表…… 205
表 56　測定試料及び処理…… 207
表 57　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果…… 208
表 58　XRF 分析による半定量値…… 210
表 59　EDS 分析結果…… 210
表 60　須恵器・灰釉陶器の時期別破片数…… 212
表 61　土師器・近世陶磁器の時期別破片数…… 213
表 62　須恵器・灰釉陶器の時期別破片数…… 215
表 63　山茶碗類の時期別破片数…… 216
表 64　土師器・常滑産陶器・中国産陶磁器の時期別破片数… 216

挿入写真目次

写真 1　鉄滓の断面組織…… 211

写真図版目次

巻頭図版

図版 1　平成 26 年度堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡発掘区遠景
　　平成 27 年度堅田遺跡発掘区遠景
図版 2　堅田遺跡出土遺物

巻末図版

図版 1　美濃国分尼寺東遺跡発掘区
図版 2　美濃国分尼寺東遺跡の遺構
図版 3　堅田遺跡発掘区（1）
図版 4　堅田遺跡発掘区（2）
図版 5　堅田遺跡発掘区（3）
図版 6　堅田遺跡発掘区（4）
図版 7　堅田遺跡の遺構（1）
図版 8　堅田遺跡の遺構（2）
図版 9　堅田遺跡の遺構（3）
図版 10　堅田遺跡の遺構（4）
図版 11　堅田遺跡の遺構（5）
図版 12　堅田遺跡の遺構（6）
図版 13　堅田遺跡の遺構（7）
図版 14　堅田遺跡の遺構（8）
図版 15　堅田遺跡の遺構（9）
図版 16　堅田遺跡の遺構（10）
図版 17　堅田遺跡の遺構（11）
図版 18　堅田遺跡の遺構（12）
図版 19　堅田遺跡の遺構（13）
図版 20　堅田遺跡の遺構（14）
図版 21　美濃国分尼寺東遺跡出土遺物
　　堅田遺跡出土遺物（1）
図版 22　堅田遺跡出土遺物（2）
図版 23　堅田遺跡出土遺物（3）
図版 24　堅田遺跡出土遺物（4）
図版 25　堅田遺跡出土遺物（5）
図版 26　堅田遺跡出土遺物（6）
図版 27　堅田遺跡出土遺物（7）
図版 28　堅田遺跡出土遺物（8）
図版 29　堅田遺跡出土遺物（9）

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

堅田遺跡及び美濃国分尼寺東遺跡は、不破郡垂井町大字平尾に所在する。堅田遺跡の範囲内には堅田古墳があり、遺跡の東側には国分寺遺跡が隣接し、東へ約 120ｍの地点には国史跡美濃国分寺跡が存在する。また、美濃国分尼寺東遺跡の西側には美濃国分尼寺跡がある（図１）。

今回の発掘調査は、平成 26・27 年度公共社会資本整備総合交付金事業（県道垂井赤坂線拡幅工事）に伴う調査である。この事業予定地は、国分寺遺跡内を通り、美濃国分尼寺跡や堅田古墳に隣接するため、平成 25 年度に岐阜県大垣土木事務所の依頼により、岐阜県教育委員会が試掘・確認調査を行った。試掘調査坑は、垂井町の事業予定地内に 36 箇所（TR6～TR41）設定された（図２：試掘調査坑番号は試掘・確認調査時の名称を記載した）。その結果、TR10・12、TR14～TR18、TR20・21・23・24・26・28・30 で遺構を検出し、TR8～TR10、TR12、TR14～TR21、TR23・24・26・27・30・37・39・41 で土師器や須恵器、中近世陶器などの遺物が出土した（表１）。

試掘・確認調査の結果をもとに、岐阜県教育委員会社会教育文化課は、平成 25 年 12 月 24 日に平成 25 年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、本発掘調査が必要であると結論づけた。また、垂井町教育委員会は、試掘・確認調査によって事業予定地周辺が埋蔵文化財包蔵地であることを確認

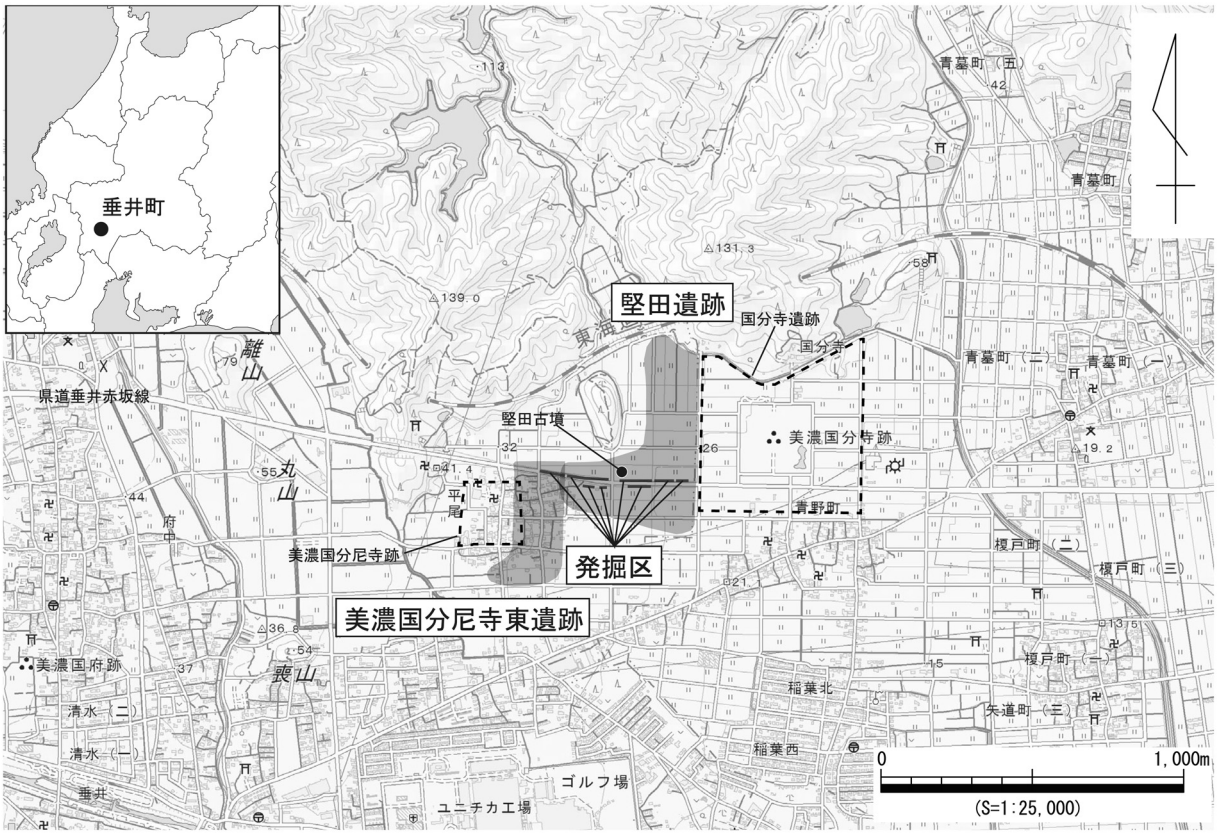


図１　遺跡位置図（平成 29 年国土地理院発行２万５千分の１地形図「大垣」を使用）

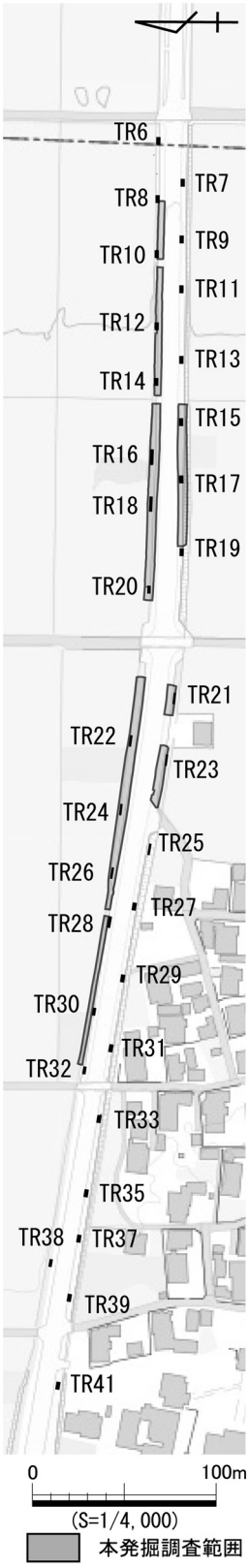


図２　試掘調査坑、本発掘調査範囲

したため、南北方向の旧道を境に東側を堅田遺跡、西側を美濃国分尼寺東遺跡として、遺跡発見の通知（平成 26 年１月 29 日付け垂教タ第 103 号）を提出した。これを受けて岐阜県教育委員会は、堅田遺跡を岐阜県遺跡番号 21361-11678、美濃国分尼寺東遺跡を岐阜県遺跡番号 21361-11679 として遺跡地図に登載した（平成 26 年１月 30 日付け社文第７号の５）。

本工事は、文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づき、岐阜県大垣土木事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あてに埋蔵文化財発掘の通知（平成 26 年３月６日付け大土第 601 号）が提出され、同条第４項の規定に基づき、県教育長は同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成 26 年３月 20 日付け社文第４号の 233）をした。同事務所長は県教育長に発掘調査の実施を依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）が実施した。本発掘調査は、平成 26 年度に堅田遺跡 1,621 ㎡と美濃国分尼寺東遺跡 388 ㎡、平成 27 年度に堅田遺跡 2,058.4 ㎡を対象に、当センターが発掘調査を実施した。当センターは調査着手後、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づく発掘調査の報告（平成 26 年７月８日付け文財セ第 104 号、平成 27 年７月３日付け文財セ第 113 号）を県教育長に提出した。

表１　試掘・確認調査結果

試掘坑No.	検出遺構（基数）	出土遺物（点数）					
		縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	陶磁器	金属製品
TR6	なし						
TR8	なし		9	3	6	2	
TR9	なし					1	
TR10	溝1		6	3	8	4	
TR12	土坑6		11	5	5	2	
TR13	なし						
TR14	溝		4				
TR15	土坑1	1					
TR16	溝1 土坑3		1	2		1	
TR17	溝		5	3	2		
TR18	土坑2		2		2		
TR19	なし		1		9		
TR20	土坑3				1		
TR21	土坑2		1	1	4	2	
TR22	なし						
TR23	溝1			3		1	1

試掘坑No.	検出遺構（基数）	出土遺物（点数）					
		縄文土器	土師器	須恵器	山茶碗	陶磁器	金属製品
TR24	土坑				1		
TE25	なし						
TR26	土坑1		1				
TR27	なし			1		1	
TR28	溝1						
TR29	なし						
TR30	溝1 土坑1		1				
TR31	なし						
TR32	なし						
TR33	なし						
TR35	なし						
TR37	なし					2	
TR38	なし						
TR39	なし		1		2		
TR41	なし					1	

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

堅田遺跡の発掘区は東西に長く、県道によって南北に分断されるため、平成 26 年度の発掘区について、県道の北側をＡ地点、県道の南側を西からＢ地点、Ｄ地点、平成 27 年度の発掘区について、県道の北側を西からＤｗ地点、Ｄｅ地点、南側をＥ地点と呼称した。発掘作業は、平成 26 年度に美濃国分尼寺東遺跡（388 ㎡）と堅田遺跡のＡ～Ｃ地点（1,621 ㎡）を、平成 27 年度に堅田遺跡のＤｗ～Ｅ地点（2,058.4 ㎡）を実施した。

世界測地系座標をもとに 100ｍ×100ｍの大グリッドを設定した。さらにその中に５ｍ×５ｍの小グリッド（以下「グリッド」という。）を設定し、南北列にＡ～Ｔのアルファベット、東西列に１～20 のアラビア数字を付けて併用した（図３）。そのため、美濃国分尼寺東遺跡北西端のグリッドは AB３、堅田遺跡Ｄｅ地点南東端のグリッドは EL18 となる。

表土掘削は重機を用いて行い、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削はスコップ・草削り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構埋土は半截又は４分割して土層堆積状況などの必要な記録を作成した後に完掘した。また、遺構基盤層と遺構埋土の識別が困難な場合は、必要最低限のサブトレンチを設定し、両者の識別を明確にした上で遺構埋土を掘削した。なお、発掘区内は湧水が激しいため、排水溝を発掘区内に掘削して、排水を行いつつ作業を実施した。

遺物包含層掘削及び遺構検出時に出土した遺物は、原則として層位、グリッド単位で取り上げた。また、遺構出土遺物は半截前後で取り上げ方法を変えた。すなわち、半截前は検出面から約５㎝下までをａ、約５～10 ㎝下をｂ、というように遺構内を概ね５㎝単位の人工層位として取り上げ、半截後は分層した層位ごとに取り上げた。また、溝については土層観察用畦部分を分層した層位で、それ以外を人工層位で取り上げた。なお、遺構の性格や時期が分かるなど、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土状況図の作成あるいは、トータルステーションを用いた３次元測量による出土位置の測定を行い取り上げた。

遺構番号は、原則として検出順に通番を付し、平成 26 年度は、美濃国分尼寺東遺跡の遺構はＳと３桁の数字で表記し、堅田遺跡は各地点名を示すＡ～Ｅの後に、Ｓと４桁の数字で表記した。この番号は二次整理作業時に遺構種別ごとに振り替えた。

遺構等の実測作業は、原則として平面図はデジタル測量にて、断面図は手測り測量にて、それぞれ実施した。図面の縮尺は 20 分の１を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影は、35 ㎜フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、６×4.5 ㎝版フィルムカメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラを使用した。また、各地点の完掘後に景観写真撮影を実施した。

自然科学分析は、SK165・SK269・SK271 から出土した炭化物の放射性炭素年代測定と、SP134 から出土した鉄滓の金属製品成分分析を行った。

２　調査の経過

発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を以下に記載する。

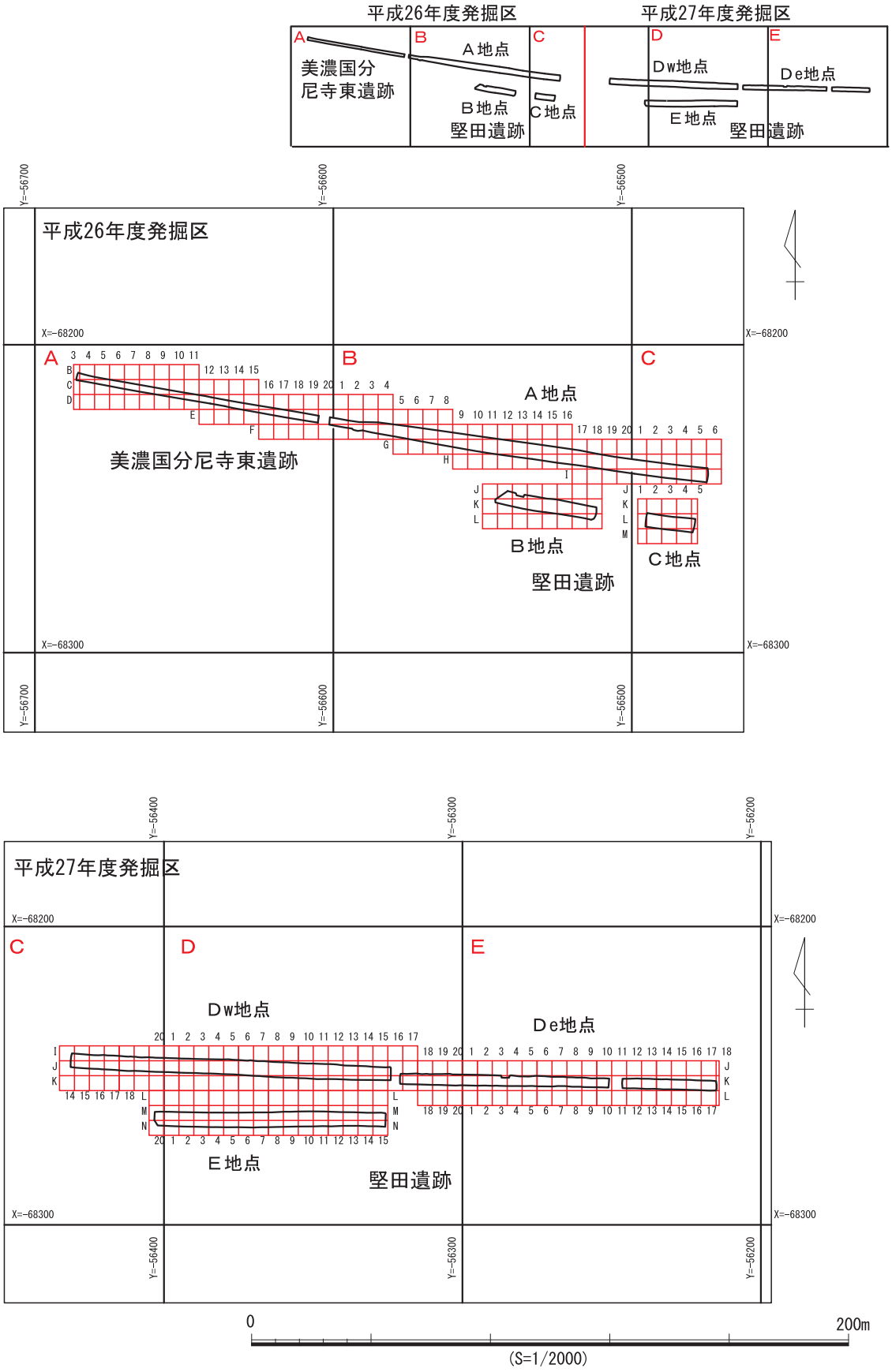

平成26年度発掘区
平成27年度発掘区
A
B
C
D
E
美濃国分
尼寺東遺跡
A地点
B地点
C地点
Dw地点
De地点
E地点
堅田遺跡
Y=-56700
Y=-56600
Y=-56500
X=-68200
X=-68300
平成26年度発掘区
美濃国分尼寺東遺跡
A地点
B地点
C地点
堅田遺跡
Y=-56400
Y=-56300
Y=-56200
平成27年度発掘区
Dw地点
De地点
E地点
堅田遺跡
0
200m
(S=1/2000)

図３　発掘区地区割図

（１）美濃国分尼寺東遺跡（平成 26 年度）

第１週（8/18～8/22）　重機による表土掘削開始。

第２週（8/25～8/29）　重機による表土掘削終了。

第３週（9/1～9/5）　人力掘削開始。

第４週（9/8～9/12）　並行する３条の溝状遺構（SD３・SD４・SD５）を検出。

第５週（9/16～9/19）　大型の土坑（SK４）を検出。

第６週（9/22～9/26）　調査終了、ラジコンヘリによる景観撮影実施。

（２）堅田遺跡（平成 26 年度）

第１週（7/1～7/4）　重機によるＢ地点西半の表土掘削開始。

第２週（7/7～7/11）　Ｂ地点西半の表土掘削終了、人力掘削開始。

第３週（7/14～7/17）　Ｂ地点西半の調査終了、景観撮影実施。重機によるＣ地点の表土掘削終了、人力掘削開始。

第４週（7/22～7/25）　Ｂ地点西半の埋戻し終了。重機によるＢ地点東半の重機掘削開始。

第５週（7/28～8/1）　土坑（SK263）から転用硯（灰釉陶器）出土。Ｃ地点の調査終了、景観撮影実施。

第６週（8/4～8/8）　Ｂ地点東半の人力掘削開始。Ｃ地点の埋戻し終了。

第７週（8/11～8/15）　並行する３条の溝状遺構（SD19・SD20・SD21）を検出。

第８週（8/18～8/22）　溝状遺構（SD21）から墨書土器（山茶碗）出土。Ｂ地点の調査終了、景観撮影実施。重機によるＡ地点西端部の表土掘削開始・終了。

第９週（8/25～9/28）　Ａ地点西端部の人力掘削開始。

第 10 週（9/1～9/5）　美濃国分尼寺東遺跡の表土掘削に伴い作業休止。

第 11 週（9/8～9/12）　Ａ地点西端部の調査継続。

第 12 週（9/16～9/19）　Ａ地点西端部の調査継続。

第 13 週（9/22～9/26）　Ａ地点西端部の調査終了。

第 14 週（9/29～10/3）　重機によるＡ地点東半の表土掘削開始。Ａ地点東半の表土掘削終了、人力掘削開始。

第 15 週（10/6～10/10）　Ａ地点東半の調査継続。

第 16 週（10/14～10/17）　竪穴建物（SI１）を検出。

第 17 週（10/20～10/24）　Ａ地点東半の調査終了。

第 18 週（10/27～10/31）　重機によるＡ地点西半の表土掘削開始。

第 19 週（11/4～11/7）　Ａ地点西半の人力掘削開始。八賀晋氏（三重大学名誉教授）現地指導。

第 20 週（11/10～11/14）　溝状遺構（SD２・SD３）調査終了。

第 21 週（11/17～11/21）　ラジコンヘリによるＡ地点の景観撮影実施。

第 22 週（11/25～11/28）　Ａ地点の調査終了。発掘区埋戻し作業終了（11/28）。

（３）堅田遺跡（平成 27 年度）

第１週（7/1～7/3）　重機によるＥ地点の表土掘削開始。

第２週（7/6～7/10）　Ｅ地点の表土掘削継続。

第３週（7/13～7/17）　Ｅ地点の表土掘削終了。
第４週（7/20～7/24）　Ｅ地点の人力掘削開始。
第５週（7/27～7/31）　並行する３条の溝状遺構（SD39・SD41・SD42）を検出。
第６週（8/3～8/7）　大型土坑（SK1138）を検出。
第７週（8/10～8/14）　並行する３条の溝状遺構（SD33・SD34・SD36）を検出。
第８週（8/17～8/21）　高所作業車によるＥ地点の景観撮影実施。
第９週（8/24～8/29）　Ｅ地点の調査終了。重機によるＤe 地点の表土掘削開始。Ｄe 地点の人力掘削開始。
第 10 週（9/1～9/4）　Ｄe 地点の表土掘削と人力掘削を継続。
第 11 週（9/7～9/11）　土坑（SK838）から完形の坏蓋２点出土。
第 12 週（9/14～9/18）　竪穴状の土坑（SK931）を検出。
第 13 週（9/21～9/25）　Ｄe 地点の表土掘削と人力掘削を継続。
第 14 週（9/28～10/2）　高所作業車によるＤe 地点の景観撮影実施。Ｄe 地点の調査終了。重機によるＤｗ地点の表土掘削開始。
第 15 週（10/5～10/9）　掘立柱建物２軒（SB２・SB３）を検出。
第 16 週（10/12～10/16）　土坑（SK420）から縄文土器出土。
第 17 週（10/19～10/23）　大型の土坑（SK623）を検出。
第 18 週（10/26～10/30）　Ｄｗ地点の表土掘削と人力掘削を継続。
第 19 週（11/2～11/6）　土坑（SK654）から転用硯（山茶碗）出土。
第 20 週（11/9～11/13）　高田康成氏（大垣市教育委員会）現地指導。
第 21 週（11/16～11/20）　堅田古墳の現況地形測量実施。
第 22 週（11/23～11/27）　ラジコンヘリによる発掘区全体の景観撮影実施。
第 23 週以降　Ｄｗ地点の調査終了（11/30）。発掘区埋戻し作業終了（12/26）。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成 26 年度と平成 27 年度に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は平成 30 年度に、それぞれ当センターにおいて実施した。平成 27 年１月 30 日と平成 28 年２月 29 日と平成 30 年 11 月６日に渡邉博人氏（元各務原市教育委員会）に須恵器に関する指導を、平成 27 年２月 17 日と平成 30 年９月 28 日に藤澤良祐氏（愛知学院大学）に灰釉陶器と中近世陶磁器に関する指導を受けた。また、平成 31 年１月 15 日に、林正憲氏（奈良文化財研究所）に調査成果全体についての指導を受けた。なお、土坑（ＳＫ165・ＳＫ269・ＳＫ271）から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を平成 28 年度に、出土金属製品の成分分析及び保存処理を平成 30 年度に実施した。

３　調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長　宮田敏光（平成 26・27 年度）、野村幹也（平成 30 年度）
総務課長　二宮　隆（平成 26・27 年度）、加藤武裕（平成 30 年度）
調査課長　成瀬正勝（平成 26・27 年度）、春日井恒（平成 30 年度）
調査担当係長　吉田　靖（平成 26・27 年度）、山本厚美（平成 30 年度）
担当調査職員　柏木賢一（平成 26・27 年度）、佐竹正憲（平成 30 年度）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

堅田遺跡と美濃国分尼寺東遺跡が所在する不破郡垂井町は、濃尾平野の北西部に位置する。町の北部・北西部には池田山塊が東西に連なり、南西部には南宮山塊が北西から南東に横たわる。こうした山に囲まれた地形的特徴から、古来より東西の交通路が集中する交通の要衝であり、東西方向にＪＲ東海道本線、新幹線、国道 21 号線が貫いている。町の中央部から東部及び南東部は、相川とその支流である大谷川などの河川によって形成された堆積平野で、濃尾平野へと続き、西部は相川に沿って狭隘な平地となり、関ケ原方面へと続く。町域には崖下泉、崖端泉、池が多く存在し、平地部の多くは水を得にくい扇状地のため、古くからそれらの水は生活用水として利用されてきた。また、岐阜県西濃地方から三重県北勢地方にかけて見られる「マンボ」と呼ばれる灌漑用の地下水路や、山麓や平地の浅い谷には溜池が造られてきた。扇状地の端部では伏流水が自然湧出し、「ガマ」と呼ばれる扇端泉が多く見られる。

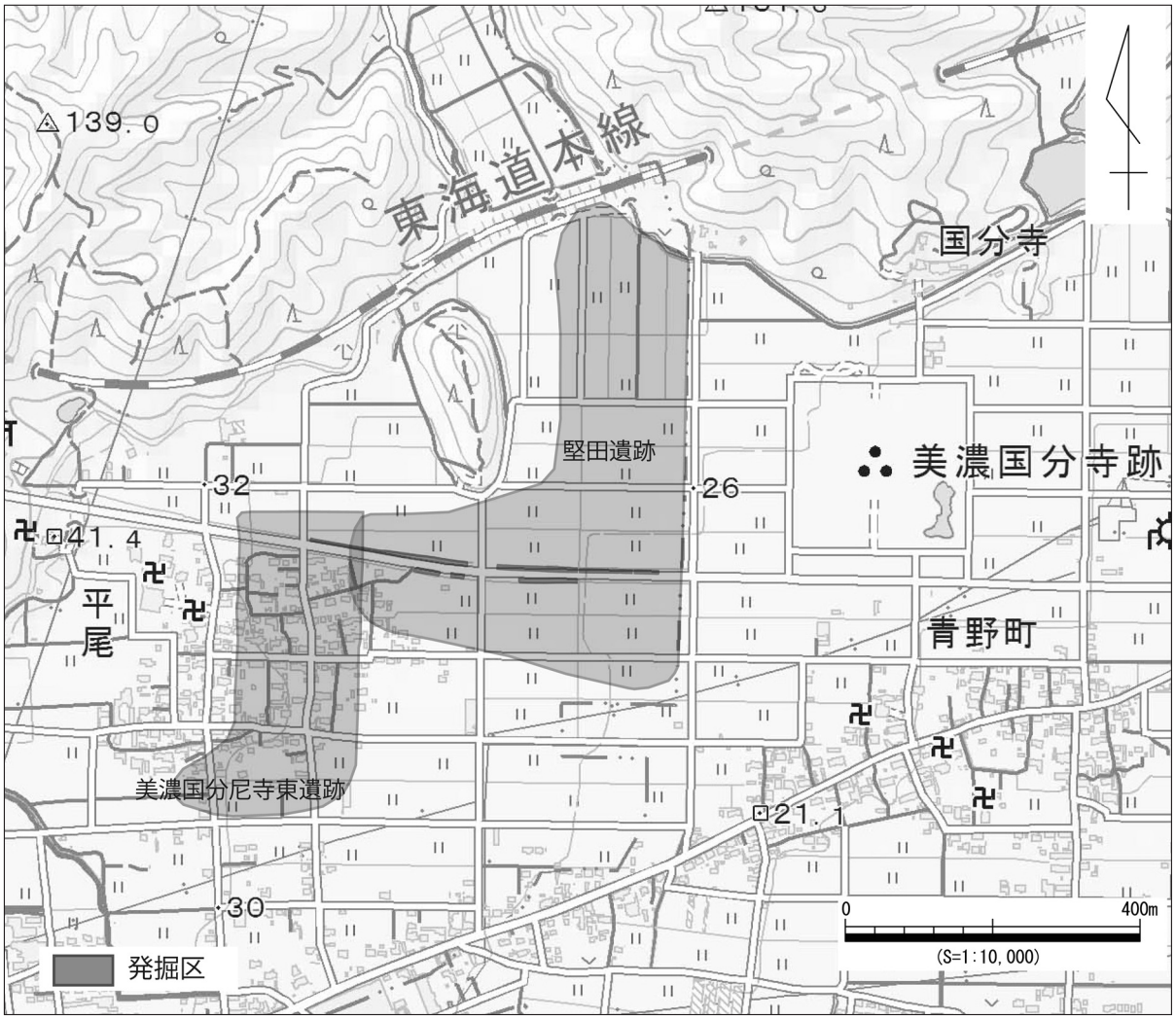


図４　発掘区周辺地形図（平成 29 年国土地理院発行２万５千分の１地形図「大垣」を使用）　網掛け範囲：発掘区

当遺跡は、池田山塊から南側に突き出した親ヶ谷の尾根の南端にある、段丘化した扇状地上に立地する。堅田遺跡の大部分は水田として利用され、美濃国分尼寺東遺跡の大部分は平尾集落と重なっているが、二遺跡とも今回の発掘区とその周辺は、主に水田として利用されている。また、集落の南側には西南西－東北東に県道栗原青野線が通るが、これは江戸時代の中山道であり、古くは古代官道東山道と推定される。遺跡周辺の地形は北及び西から南東に向かって緩やかに傾斜しており、地表面の標高はそれぞれ、美濃国分尼寺東遺跡西端部では 29.6m、堅田遺跡東端部では 24.5m となっている。

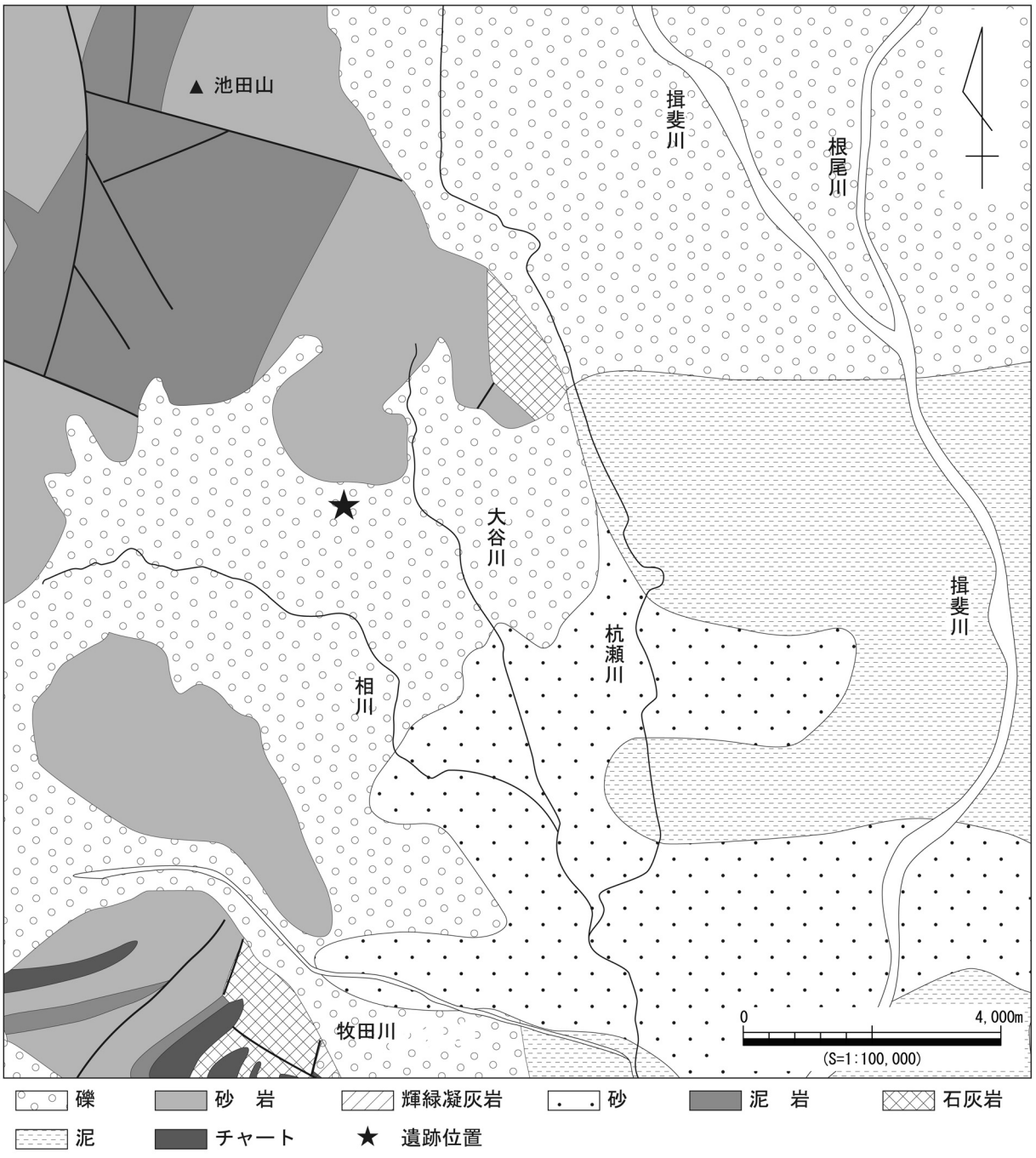


図５　遺跡周辺の地質概略図（地質調査所 1999『地質図 1/50,000 岐阜』を基に作成）

第２節　歴史的環境

当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布しており、本節では各時期の主要な遺跡について、概要を時代順に記す[1)]。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表２、図６と一致する。

旧石器時代　当遺跡周辺では確認されていない。

縄文時代　垂井町域では、大滝野瀬遺跡、南森下遺跡（77）、朝倉遺跡（49）、北野遺跡（50）、日守遺跡、小黒見遺跡（80）で遺物が採集されているが、詳細は不明である。大垣市域では中期以降の遺物が断片的に確認されている。

弥生時代　垂井町域では、日守遺跡、朝倉遺跡、境野遺跡で遺物が採集されているが、詳細は不明である。大垣市域では、東町田遺跡は平成３年度以降、大垣市教育委員会（以下「市教委」という。）によって延べ約10,000㎡の調査が実施され、中期後半の方形周溝墓群や後期から古墳時代初頭の墓域が確認されている。また、国分寺遺跡（101）からは前期の遠賀川系土器が出土し、十六遺跡からは菱環紐式銅鐸と、中期から後期の土器が出土したとされる。

古墳時代　当遺跡周辺には多くの古墳が所在し、濃尾平野の中でも早い段階から古墳の築造が始まった地域として知られるが、それに伴う集落については詳細が明らかになっていない。垂井町域では、４世紀後半に造営された親ヶ谷古墳（6）は全長85mの前方後円墳で、鍬形石や車輪石が出土している。親ヶ谷古墳が立地する池田山塊の平尾山には、５世紀初頭の前方後円墳である清塚４号古墳（10）や、５世紀前半の円墳である清塚１号古墳（13）等、古墳時代前期から中期にかけての主要な古墳が分布している。後期には、相川北岸に方墳である南大塚古墳、相川南岸には円墳である兜塚古墳（56）が立地するが、目立った群集墳は築かれていない。大垣市域では、市の北西部に大型の前期前方後円墳が集中して築造されている。昼飯大塚古墳は岐阜県下最大（墳丘長150m）の前方後円墳で、４世紀後半に築造されたものである。粉糠山古墳は、東海地方最大規模（墳丘長100m）の前方後方墳である。遊塚古墳は前方後円墳（墳丘長80m）で、前方部頂の副葬品埋納施設から、多くの滑石製模造品や鉄製農耕具・武器類が出土している。矢道長塚古墳（114）は前方後円墳（墳丘長87m）で、２つの主体部からは、三角縁神獣鏡５面、内行花文鏡１面、石釧76点、石製合子、杵形石製品、勾玉、管玉、ガラス玉、鉄刀、銅鏃、鉄斧が出土している。矢道長塚古墳の北西50mには前方後円墳（墳丘長約60m）である矢道高塚古墳（113）がある。前期古墳の他、横穴式石室をもつ後期古墳も金生山麓を中心に築造され、そのほとんどは６世紀末から７世紀前半にかけてのものと考えられる。

飛鳥時代　律令国家成立期に起こった壬申の乱では、垂井町周辺は乱の主たる舞台として登場する。これを契機として美濃地域には諸豪族により寺院が造営される。白鳳期創建寺院としては、宮代廃寺跡（76）、宮処寺跡（46）、美濃国分寺前身寺院が確認されている。宮代廃寺は、垂井町教育委員会（以下「町教委」という。）によって、昭和42年度と昭和47年度に調査が行われ、瓦積基壇と築地跡が確認されている。推定時域は約150m四方である。宮処寺跡は平成14年度に町教委が調査を実施し、推定寺域北辺から多くの瓦が出土している。

古代　西から不破の関（関ケ原町）、美濃国府（垂井町）、美濃国分尼寺（垂井町）、美濃国分寺（大垣市）と連なるこの地域は、古代美濃の政治・文化の中心地であった。また垂井町には、美濃国一宮である南宮大社と二宮である伊富岐神社、不破郡の大領であった宮勝木実を祀る大領神社が所在する。垂井町宮代地

内には不破郡家が所在するとされるが、詳細は不明である。美濃国府跡（28）は、平成３年度から平成15年度にかけて町教委による発掘調査が行われ、政庁跡と東方官衙地区、朱雀路が確認されている。また、硯や墨書土器、緑釉陶器、巡方等が出土している。美濃国分寺跡（102）は昭和43年度から昭和45年度にかけて、市教委による発掘調査が行われ、塔跡、金堂跡、鐘楼跡、南大門跡等が確認され、大官大寺式の伽藍配置であることが明らかになった。美濃国分寺跡の周囲に広がる国分寺遺跡では、平成８年度から平成14年度にかけて市教委による調査が行われ、国分寺跡の南側隣接地で撞竿支柱や参道、井戸、掘立柱建物等、国分寺に関連する遺構が確認された。美濃国分尼寺跡（19）は、古くから古代瓦が散布することや地形・地名などから、垂井町平尾に所在すると推定されていたが、詳細は不明であった。平成16年度から平成20年度にかけて、町教委による範囲確認を目的とした発掘調査が行われ、周辺に残る土塁から、寺域が東西約150m、南北150m以上の長方形になる可能性が指摘されている。

当遺跡周辺には古窯跡が多く所在する。垂井町域では、国府の瓦を焼いたとする説がある大石古窯跡や、古代の瓦窯である市之尾古窯跡（14）、美濃国分尼寺跡表採瓦と同様の瓦が出土したとされる平尾古窯跡（16）等がある。平尾古窯跡では、平成24年度から平成28年度にかけて町教委が行った遺跡詳細分布調査で、窯体の一部と考えられる遺構が確認されている。大垣市域では、美濃国分寺跡の北東に位置する美濃国分寺附瓦窯跡（103）等がある。

日守遺跡、朝倉グランド遺跡（42）、真禅院遺跡、宮代遺跡（54）等が古代の散布地として知られるが、当遺跡周辺の古代の集落跡は不明な部分が多い。平成24年度から平成28年度にかけて町教委が実施した遺跡詳細分布調査では、野田遺跡（39）で美濃刻印須恵器や円面硯が採集されている。

中世　石越遺跡（９）では、明治時代に宋銭・明銭を含む備蓄銭が入った壺が出土している。現在の垂井町平尾集落は、室町時代まではこの付近に所在していたという伝承がある。南宮山中に所在する薬師堂遺跡（63）や観音堂跡（65）、南宮山頂経塚群（67）では、山茶碗や古瀬戸が出土している。

近世　、池田輝政陣跡（43）、安国寺恵瓊陣跡（69）は、関ケ原合戦の際に設けられた陣跡である。中山道沿いに築かれた垂井一里塚は国史跡に指定されている。青野城跡（111）は、青野藩主稲葉氏の居城である。

注

1)各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

垂井町1996『新修垂井町史　通史編』

垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書（１）』

垂井町教育委員会2005『美濃国府掘調査報告Ⅲ』

垂井町教育委員会2010『美濃国分尼寺発掘調査報告書』

大垣市2011『大垣市史　考古編』

大垣市教育委員会2004『東町田遺跡』（大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書　第14集）

大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡―国分寺遺跡（伽藍南面隣接地の調査）―』（大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書　第15集）

岐阜県教育委員会2002『岐阜県中世城館跡総合調査報告書　第１集（西濃地区・本巣郡）』

なお、表２の遺跡名、種別、時代と、図９の遺跡位置、範囲は、岐阜県教育委員会2007『改訂版　岐阜県遺跡地図』を参考とした。

また、その後の改訂については、岐阜県生活環境部県民文化局文化伝承課に確認した。

表２　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	種別
1	堅田遺跡	縄文・古墳・古代・中世・近世	集落跡
2	美濃国分尼寺東遺跡	古代･古墳・中世・近世	散布地
3	大滝東山１号古墳	古墳	古墳
4	大滝東山２号古墳	古墳	古墳
5	岡田堂古墳	古墳	古墳
6	親ヶ谷古墳	古墳	古墳
7	石仏谷遺跡	古代･中世	散布地
8	清塚５号古墳	古墳	古墳
9	石越遺跡	古代・中世・近世	散布地
10	清塚４号古墳	古墳	古墳
11	清塚３号古墳	古墳	古墳
12	清塚２号古墳	古墳	古墳
13	清塚１号古墳	古墳	古墳
14	市之尾古窯跡	古代	生産遺跡
15	不動北古墳	古墳	古墳
16	平尾古窯跡	古代	生産遺跡
17	出目地山古墳	古墳	古墳
18	美濃国分尼寺西遺跡	古代・中世	散布地
19	美濃国分尼寺跡	古代	社寺跡
20	堅田古墳	古墳	古墳
21	新井中根古墳	古墳	古墳
22	赤辺古墳	古墳	古墳
23	黄金古墳	古墳	古墳
24	忍勝寺山古墳	古代	古墳
25	若宮古墳	古墳	古墳
26	府中城跡	中世	城館跡
27	民安寺跡	古代	社寺跡
28	美濃国府跡	古代	官衙跡
29	喪山古墳	古墳	古墳
30	法華塚	近世	その他の墓
31	高札場跡	中世・近世	その他の遺跡
32	長屋氏屋敷跡	中世	城館跡
33	六斎市跡	近世	その他の遺跡
34	本陣跡	中世・近世	その他の遺跡
35	垂井の泉	古代	その他の遺跡
36	郷学泗水庵跡	近世	その他の遺跡
37	紙屋塚	古代	その他の遺跡
38	金蓮寺跡	中世	社寺跡
39	野田遺跡	古代・中世	散布地
40	西野古墳	古墳	古墳
41	西野遺跡	中世	古墳
42	朝倉グランド遺跡	古代	散布地
43	池田輝政陣跡	中世	その他の遺跡
44	春王・安王の墓	中世	その他の墓
45	御所野遺跡	古代・中世	散布地
46	宮処寺跡	古代	社寺跡
47	神明屋遺跡	古代	散布地
48	朝倉古墳群	古墳	古墳
49	朝倉遺跡	縄文・弥生	散布地
50	北野遺跡	縄文	散布地
51	隣松寺古墳	古墳	古墳
52	鎧塚古墳	古墳	古墳
53	吉川広家陣跡	中世	その他の遺跡
54	宮代遺跡	古代	散布地
55	中屋敷古墳群	古墳	古墳
56	兜塚古墳	古墳	古墳
57	中屋敷５号古墳	古墳	古墳
58	中屋敷６号古墳	古墳	古墳

No.	遺跡名	時代	種別
59	最勝寺観音堂跡	古墳	社寺跡
60	政所遺跡	古墳・古代・中世	散布地
61	中瀬遺跡	古代・中世	散布地
62	四辻遺跡	古墳・古代	散布地
63	薬師堂遺跡	中世	散布地
64	薬師堂跡	古代・中世・近世	社寺跡
65	観音堂跡	近世	社寺跡
66	千手堂跡	近世	社寺跡
67	南宮山頂経塚群	中世	その他の遺跡（経塚）
68	南宮神社神宮跡	中世・近世	社寺跡
69	安国寺恵瓊陣跡	中世	その他の遺跡
70	大外道遺跡	古代・中世	散布地
71	天皇遺跡	古代・中世	散布地
72	大領神社北古墳	古墳	古墳
73	大領神社古墳	古墳	古墳
74	森上古墳	古墳	古墳
75	杉ノ本古墳群	古墳	古墳
76	宮代廃寺跡	古墳・古代	社寺跡
77	南森下遺跡	縄文・古墳・古代・中世	散布地
78	茶臼山古墳群	古墳	古墳
79	平古墳群	古墳	古墳
80	小黒見遺跡	縄文・古代	散布地
81	谷の舞古墳	古墳	古墳
82	綾戸古墳	古墳	古墳
83	一色八幡古墳	古墳	古墳
84	勝宮古墳	古墳	古墳
85	鬼塚古墳	古墳	古墳
86	業平川船着場跡	中世・近世	その他の遺跡
87	滝ヶ谷古墳	古墳	古墳
88	こいち谷古墳	古墳	古墳
89	石越古墳	古墳	古墳
90	元円興寺谷古墳	古墳	古墳
91	元円興寺跡	古代・中世・近世	社寺跡
92	地蔵古墳	古墳	古墳
93	西山古墳	古墳	古墳
94	陵山古墳群	古墳	古墳
95	東中道１号古墳	古墳	古墳
96	西中道遺跡	古代・中世	散布地
97	東中道古墳	古墳	古墳
98	圓願寺跡推定地	中世	社寺跡
99	山田古墳	古墳	古墳
100	青墓枡町遺跡	古代・中世	散布地
101	国分寺遺跡	古代・中世	散布地
102	美濃国分寺跡	古代	社寺跡
103	美濃国分寺附瓦窯跡	古代	古窯跡
104	美濃国分寺附１号瓦窯跡	古代	古窯跡
105	美濃国分寺附２号瓦窯跡	古代	古窯跡
106	美濃国分寺附３号瓦窯跡	古代	古窯跡
107	国分寺東遺跡	古代・中世	散布地
108	青墓大堀遺跡	古代・中世	散布地
109	青野東浦遺跡	古代・中世	散布地
110	青野遺跡	弥生	散布地
111	青野城跡	近世	城館跡
112	矢道Ａ遺跡	古代・中世	散布地
113	矢道高塚古墳	古墳	古墳
114	矢道長塚古墳	古墳	古墳
115	十六西遺跡	弥生	散布地
116	中山道	中世	その他の遺跡

図６　周辺遺跡位置図（平成 28 年国土地理院発行２万５千分の１地形図「大垣」を使用）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

基本層序は、平成25年度に県教委が実施した試掘・確認調査で確認された層序を基に、以下のとおりⅠ層からⅣ層に分層した（図７）。美濃国分尼寺東遺跡と堅田遺跡は隣接する遺跡で、共通の基本層序をもつ。発掘区は県道垂井赤坂線に沿って整備された歩道と重なる。発掘区の大半は、近代以降の水田化や県道建設の影響を受けており、広い範囲で遺物包含層や基盤層が削平されている。

Ⅰ層　表土　2.5Y3/1黒褐色土～10YR5/4にぶい黄褐色土

県道垂井赤坂線の建設に伴う盛土や、水田に伴う用水路の覆土などをまとめてⅠ層とした。発掘区全域で確認した。層厚は約0.30～1.35ｍである。

Ⅱ層　水田耕作土

Ⅱａ層　2.5Y4/1黄灰色粘質土～10YR3/2黒褐色粘質土

昭和48年度から昭和54年度にかけて行われた圃場整備後の水田耕作土である。堅田遺跡のＡ地点東端部とＤｅ地点西半、Ｅ地点全域で確認した。層厚は約0.1～0.2ｍである。

Ⅱｂ層　10YR3/1黒褐色粘質土～10YR5/1褐灰色粘質土

圃場整備前の水田耕作土である。国分尼寺東遺跡の西端部を除く区域と、堅田遺跡のＡ地点東部、Ｄｗ地点東端部、Ｄｅ・Ｅ地点全域で確認した。層厚は約0.20～0.55ｍである。古代から現代にかけての遺物を含む。

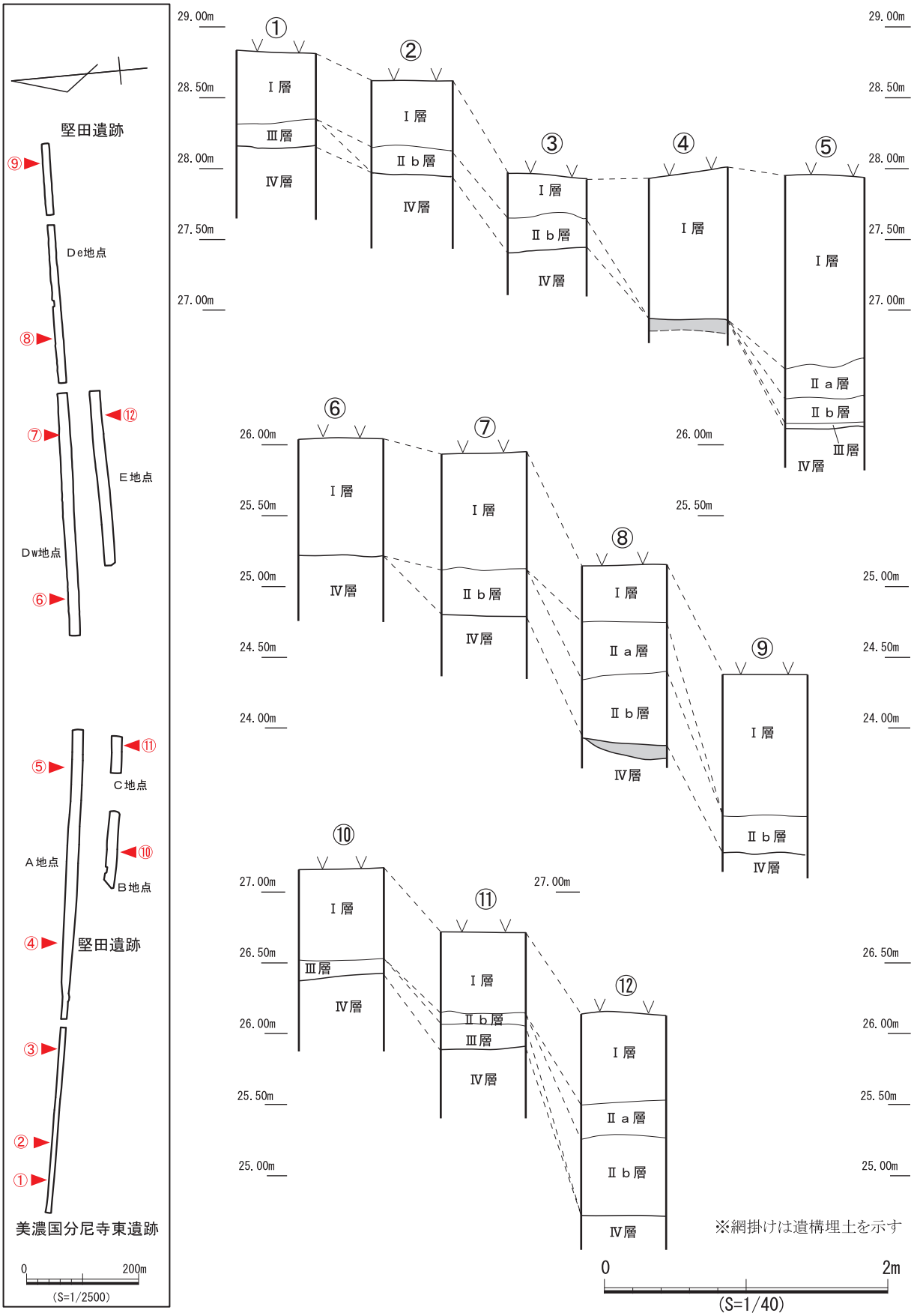
Ⅲ層　遺物包含層　2.5Y4/3オリーブ褐色土～10YR2/2黒褐色土

国分尼寺東遺跡西端部と、堅田遺跡のＡ地点東端部、Ｂ・Ｃ地点全域で確認した。層厚は約0.05～0.2ｍである。古代から近世にかけての遺物を含む。

Ⅳ層　基盤層　2.5Y5/4黄褐色土～10YR7/6明黄褐色土

国分尼寺東遺跡と堅田遺跡の発掘区全域で確認し、本層上面で縄文時代から近世にかけての遺構を検出した。無遺物層である。Ａ・Ｄ地点では径２～５㎝の円礫を多量に含む箇所がある。なお、本層から下位の堆積物については確認していない。

遺構はⅣ層の上面で検出したが、遺物包含層（Ⅲ層）が存在しない箇所では、検出面の呼称として「Ⅰ層基底面」又は「Ⅱｂ層基底面」を用いた。


堅田遺跡
⑨
De地点
⑧
⑫
⑦
E地点
Dw地点
⑥
⑤
⑪
C地点
A地点
⑩
B地点
④
堅田遺跡
③
②
①
美濃国分尼寺東遺跡
0
200m
(S=1/2500)
29.00m
28.50m
28.00m
27.50m
27.00m
26.00m
25.50m
25.00m
24.50m
24.00m
26.50m
Ⅰ層
Ⅱａ層
Ⅱｂ層
Ⅲ層
Ⅳ層
※網掛けは遺構埋土を示す
0
2m
(S=1/40)

第７図　基本層序柱状図

第２節　遺構の概要

１　概要

今回の調査では、古代から中世前期を中心とした多数の遺構を検出した。検出した遺構数は表３のとおりであり、所属時期は縄文時代、古代、中世前期、近世以降の４時期である。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。

本報告書では、これらの遺構のうち、竪穴建物や掘立柱建物、柵、井戸、土器製作遺構は遺跡の性格を反映すると考えられるものであることから、すべての遺構を報告した。溝状遺構や土坑などは検出数が多いため、区画施設のように遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合前の破片数を示す。

表３　検出遺構一覧表

遺跡名	地点	SI	SI 付属	SB	SB 付属	SA	SA 付属	SP	SD	SK	合計
美濃国分尼寺東遺跡								1	8	36	45
堅田遺跡	Ａ	2	11			3	13	28	18	173	235
	Ｂ								4	69	73
	Ｃ							3	2	24	29
	Ｄｗ			3	16	3	18	78	4	518	640
	Ｄｅ					2	10	78	4	178	272
	Ｅ							15	10	174	199
	計	2	11	3	16	8	41	202	42	1136	1448
合計		2	11	3	16	8	41	203	50	1172	1493

２　遺構略号

遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＩ－竪穴建物、ＳＢ－掘立柱建物、ＳＡ－柵、ＳＰ－柱穴、ＳＤ－溝状遺構、ＳＫ－土坑、

Ｐ－竪穴建物柱穴・掘立柱建物柱穴・柵柱穴

なお、建物と柵に付属する柱穴は、「SB1-P3」のように付属する建物や柵の番号を先頭に記し、遺構の種別（Ｐ・壁際溝）と種別ごとに通し番号を付与した。

３　遺構の分類

今回の調査で確認した遺構はそれぞれ、形状と規模、構造から、竪穴建物、掘立柱建物、柵、柱穴、溝状遺構、土坑に分類した。各遺構の分類基準は以下のとおりである。

竪穴建物　地表を掘り下げて床面をつくり、その内部に柱穴・炉・カマドなど建物の付属施設やその跡を確認できる遺構を竪穴建物とした。

掘立柱建物　向かい合う辺が２組以上確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成され、上屋構造を有すると推定できる遺構を掘立柱建物とした。

柵　直線的に並んだ複数の柱穴・杭跡によって構成された遺構を柵とした。

柱穴　柱根や柱痕跡、柱当たりが残存しているものや、底部に礎盤石若しくは根石が確認できる遺構のうち、規則的な配列が確認できず、建物や柵として認定できなかったものを柱穴とした。

溝状遺構　人為的に掘られた、細長い平面形（短軸と長軸比=１：３以上）の遺構を溝状遺構とした。ただし、短軸と長軸比が１：３未満のものでも連続していると見なせる遺構については含めることとする。

土坑　上記以外の人為的に掘り込まれた遺構を土坑とした。

４　遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面　基本層序の層位名を使用し、遺物包含層（Ⅲ層）掘削後Ⅳ層上面で検出した遺構は「Ⅳ上」とした。しかし、表土（Ⅰ層）と水田耕作土（Ⅱｂ層）下にⅢ層が存在せず、基盤層上で遺構を検出した場合は、その上に堆積した土層の基底面の遺構とし、「Ⅰ基」もしくは「Ⅱｂ基」と表記した。

平面形　以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

Ａ－円形、Ｂ－方形、Ｃ－不定形、Ｄ－不明

埋土　以下のとおり、堆積状況をアルファベットで表記し、分層した層位数を数字で表記した。

Ａ－埋土が単一層、Ｂ－ほぼ水平な堆積、Ｃ－中央がＵ字状に窪むような堆積、

Ｄ－窪みが偏った堆積、Ｅ－ブロック状に土が入る堆積、Ｆ－最上層が掘り込んだ状態となるもの、

Ｇ－柱痕跡状の土層があるもの、Ｈ－その他

断面形　以下のとおり、形状をアルファベットで表記した。

Ａ－半円形、Ｂ－方形、Ｃ－逆三角形、Ｄ－不明

規模　（　）は残存長を示す。

重複関係　「新＞旧」の関係を示す。

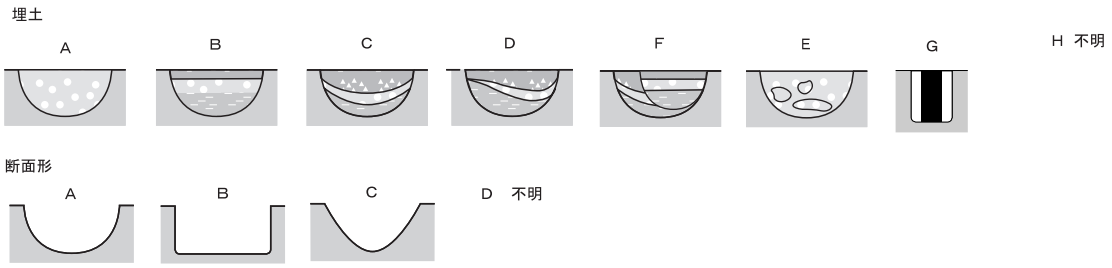


図８　遺構属性模式図

第３節　遺物の概要

１　概要

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器、中国産陶磁器などの土器類と、土製品、石器類、木製品、金属製品、炭化物等が出土した。それらの出土数は表４のとおりである[1)]。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。

（１）土器類

各遺跡から出土した土器類の種別ごとの点数は表４のとおりである。

表４　出土遺物点数等一覧表

種別		美濃国分尼寺東遺跡			堅田遺跡		
		接合前破片数	接合後破片数	口縁部残存率	接合前破片数	接合後破片数	口縁部残存率
土器類	縄文	0	0	0	164	150	8.24
	古墳・古代土師器	132	131	2.5	2351	2247	73.9
	須恵器	20	20	2	1000	956	160
	灰釉陶器	2	2	0	250	245	50.4
	中世土師器	2	2	0.5	22	20	7
	山茶碗類	0	0	0	691	672	191.2
	古瀬戸・大窯	0	0	0	4	4	0
	常滑産陶器	1	1	0.5	10	10	0
	中国産陶磁器	0	0	0	26	26	6
	近世陶磁器	45	22	8.2	108	106	32.6
	近代陶磁器	33	32	22.1	34	34	8.4
合計		235	210	35.8	4660	4470	537.74
瓦		17	17	－	56	49	－
土製品		1	1	－	17	17	－
石器		0	0	－	17	17	－
木製品		0	0	－	2	2	－
金属製品		0	0	－	13	13	－
炭化物		0	0	－	65	65	－
合計		19	19	－	149	142	－

美濃国分尼寺東遺跡では、出土点数は土師器が最も多く、大半は甕の破片である。土師器以外では、近世陶磁器が最も多く、次いで近代陶磁器、須恵器が続く。須恵器は６世紀後半から８世紀にかけてのものが存在する。堅田遺跡では、出土点数は土師器が最も多く、大半を占める甕以外に、皿や坏、鍋などが少量出土している。土師器以外では、須恵器、中近世陶磁器、灰釉陶器、縄文土器が出土している。須恵器は６世紀後半から９世紀前半のものが存在し、長頸瓶のミニチュアや大甕、坏蓋の転用硯、水瓶、提瓶などがある。比較的出土数の多い坏類については、下記のとおり分類を行った。

・坏蓋Ａ類…かえりをもたないもの。

・坏蓋Ｂ類…口縁部内面にかえりをもつもの。

・坏蓋Ｃ類…口縁端部を折り返すもの。

・坏身Ａ類…蓋受けを持つもの。

・坏身Ｂ類…受け部をもたず、無高台のもの。

・坏身Ｃ類…有高台のもの。

灰釉陶器は所属時期が美濃窯編年の光ヶ丘１号窯式期から西坂１号窯式期までが存在し、皿・碗以外に、深碗、輪花碗、段皿、瓶、甕がある。中近世陶磁器は山茶碗類が多く、大半は尾張型で第３型式から第７型式までのものが存在し、美濃須衛産、東濃型、渥美産は微量である。山茶碗類以外の中近世陶磁器は近世以降の陶磁器が大半で、古瀬戸や大窯は微量である。縄文土器は器種が分かるものは大半が晩期の深鉢である。縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器、中国産陶磁器の年代観や器種分類は既存の研究に従った[2)]。なお、須恵器は渡邉博人氏（元各務原市教育委員会）から、灰釉陶器と中近世陶磁器は藤澤良祐氏（愛知学院大学）から、それぞれ指導をいただいたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

（２）石器類

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、砥石が９点、敲石３点、凹石が１点、台石が１点、石鏃が１点、打斧が１点、ＲＦが１点出土した。

（３）木製品

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、板状木製品が１点、棒状木製品が１点出土した。いずれも小片で加工痕はなく、性格は不明である。

（４）金属製品

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。堅田遺跡では、釘が３点、鉄鏃が３点、刀子が１点、鏃又は刀子が２点、鉄滓が３点、鉛玉が１点出土した。このうち鉄滓１点について成分分析を行い、結果を第６章に記載した。

（５）その他の出土遺物

美濃国分尼寺東遺跡では出土しなかった。その他の遺物として、堅田遺跡では炭化物65点が出土した。このうち焼土を伴う３基の土坑（SK165・SK269・SK271）から出土した３点について、放射性炭素年代測定を行い、結果を第６章に記載した。

２ 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置　複数の地区（グリッド）や遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を表記した。

出土層位　表土と遺物包含層から出土した場合は、基本層序名（Ⅰ・Ⅱ・Ⅱｂ・Ⅲ）を表記した。また、遺構出土の場合、土層分層前は埋土を深さ約５㎝ごとに区切り、上層から順に「ａ・ｂ・ｃ・・」の順に表記し、土層分層後はその土層番号（１・２・３・・）を表記した。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

法量　（　）は復元長を示す。

胎土　色調は「新版標準土色帖」（小山・竹原2014）に基づき肉眼観察で判断した。

備考　器面調整については、磨滅等により不明な場合は「調整不明」と記載した。

注

1)　口縁部残存率の計測は以下の文献を参考とし、12分の１未満の破片は12分の１に切り上げ、12分の１以上の破片は小数点以下第１位まで計測した。また、底部残存率の計測は、４分の１未満の破片は４分の１に切り上げ、４分の１以上の破片は小数点以下第１位まで計測した。

宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館

2)　出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。

赤塚次郎2002「総説　土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観　第２巻　弥生・古墳時代　土器Ⅱ』、小学館

早野浩二2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観　第２巻　弥生・古墳時代　土器Ⅲ』、小学館

斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録　第３巻　東日本Ⅰ』、雄山閣

愛知県史編さん委員会2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』、愛知県

日本貿易陶磁研究会1982『貿易陶磁研究　第２号』

第４章　美濃国分尼寺東遺跡

第１節　遺構と遺物

１　柱穴

SP１（図９）

検出状況　AC９グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状　長軸長0.28ｍ、短軸長0.14ｍ以上、深さ0.18ｍで、柱痕跡が残存する柱穴である。遺構の南側は発掘区外となるが、平面形は円形と考えられる。西側の壁面は緩やかに立ち上がるが、東側は垂直に近い。底面はやや丸味がある。土層断面で確認した柱痕跡は、柱穴の中心から東に寄る。

埋土　２層に分層したが、１層が柱痕跡で、２層が掘方埋土である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構がないため、時期は不明である。

２　溝状遺構

SD１（図９）

検出状況　AB３～AB４グリッド、Ⅳ層上面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－17°－Ｗで、遺構の東西端は発掘区外に広がる。幅0.56ｍ、深さ0.24ｍである。両壁面はやや急な立ち上がりで、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土　単層である。Ⅳ層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。小径の亜円礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

SD２（図９）

検出状況　AD12グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK21より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－22°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.62ｍ、深さ0.07ｍである。断面形状は浅い皿状で、両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土　単層である。Ⅳ層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器16点、須恵器１点が出土した。いずれも小片で、散在して出土した。

遺物　土師器は全て甕の胴部の破片である。須恵器は甕の胴部片である。いずれも小片で分類不能で

ある。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

SD３（図10）

検出状況　AD14グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－10°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.43ｍ、深さ0.12ｍである。断面形状は浅い皿状で、底部形状はほぼ平坦である。

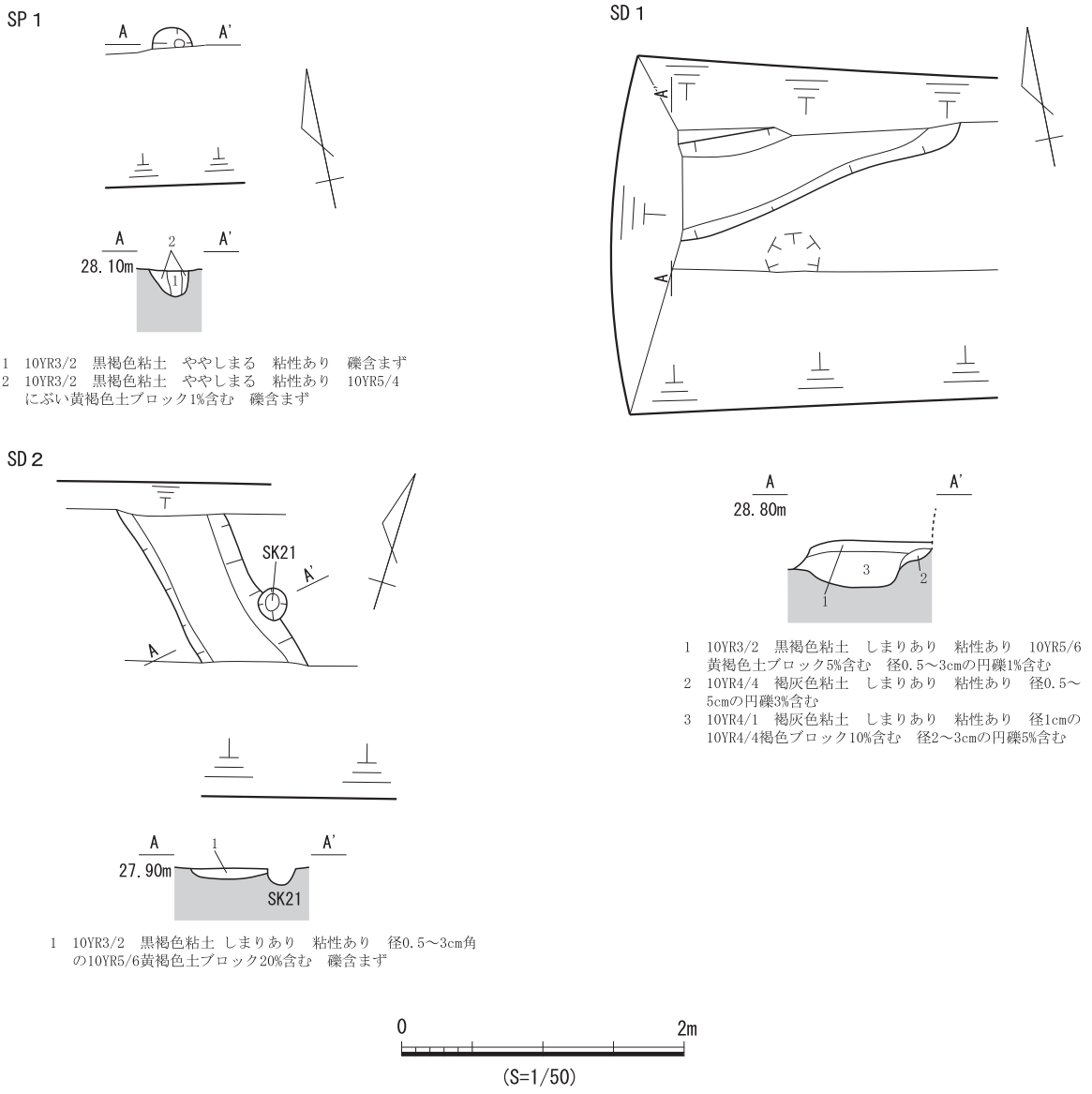


図９　SP１、SD１・２遺構図

埋土　単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

ＳＤ４（図10）

検出状況　AD15グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－14°－Ｅで、遺構の南端は発掘区外に広がる。幅0.55ｍ、深さ0.27ｍである。断面形状は半円形で、底部形状はほぼ平坦である。

埋土　単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

ＳＤ５（図10）

検出状況　AD17～AE17グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK31・SK32より新しい。

規模・形状　主軸方位はＮ－9°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に広がる。幅0.58ｍ、深さ0.2ｍである。西側の壁面は緩やかに浅く掘り込まれ底面は平坦だが、東側は一段深く掘られ、東壁の立ち上がりは垂直に近い。

埋土　２層に分層した。埋土は礫を含まず、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

ＳＤ６（図10）

検出状況　AE18～AE19グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－85°－Ｅで、遺構の西端は発掘区外に広がる。幅0.4ｍ、深さ0.04ｍで、底面は東に向けて緩やかに浅くなり、掘方は消滅する。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土　単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

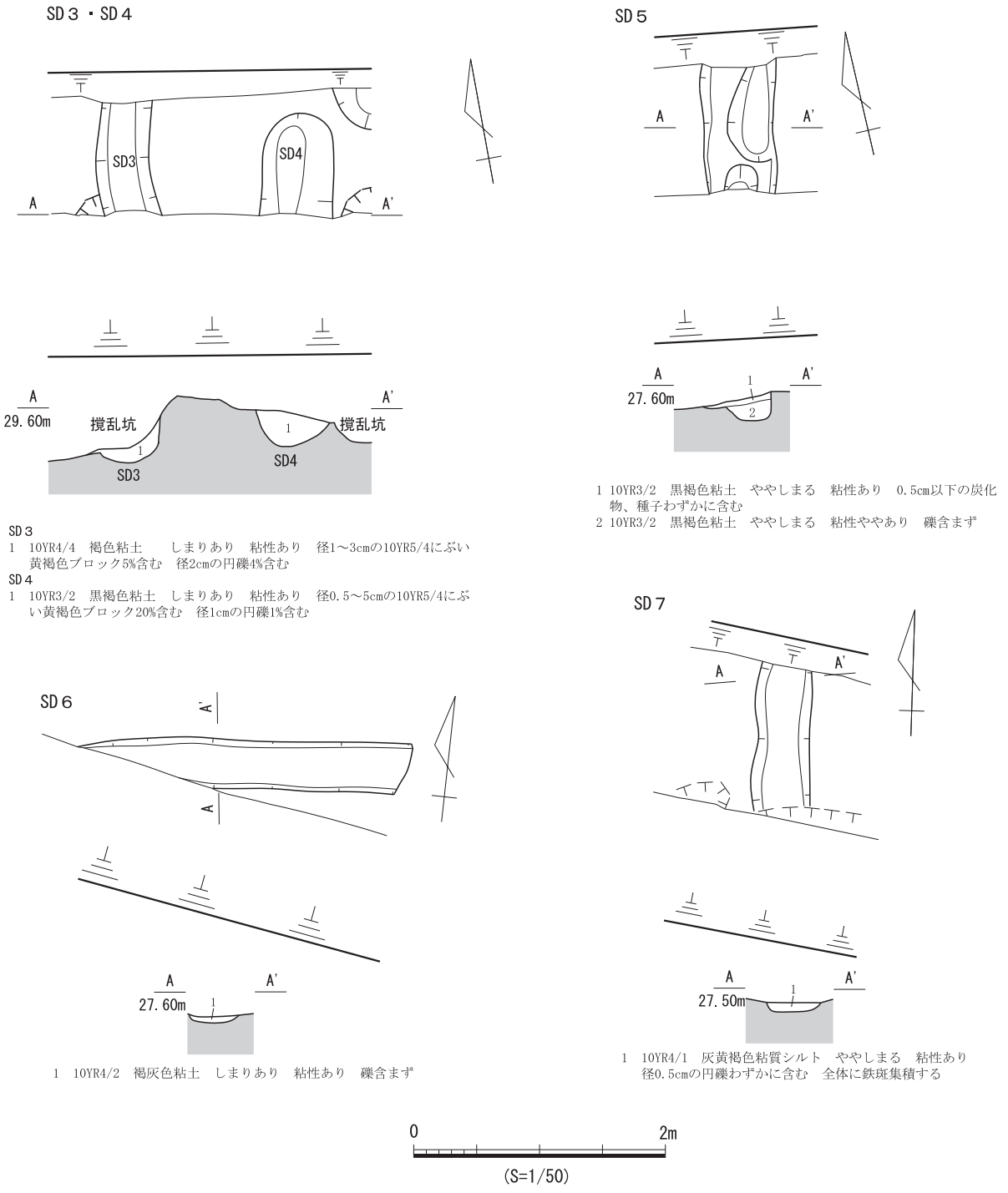
ＳＤ７（図10）

検出状況　AE19グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は

明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－1°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外へ広がる。幅0.47ｍ、深さ0.08ｍで、南北端で底面標高の差は見られない。壁面の傾斜は緩やかで、底面は平坦である。

埋土　単層である。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。



SD３
1　10YR4/4　褐色粘土　　しまりあり　粘性あり　径1～3cmの10YR5/4にぶい黄褐色ブロック5%含む　径2cmの円礫4%含む

SD４
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～5cmの10YR5/4にぶい黄褐色ブロック20%含む　径1cmの円礫1%含む

1　10YR3/2　黒褐色粘土　ややしまる　粘性あり　0.5cm以下の炭化物、種子わずかに含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土　ややしまる　粘性ややあり　礫含まず

1　10YR4/2　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

1　10YR4/1　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　径0.5cmの円礫わずかに含む　全体に鉄斑集積する

図10　SD３・４・５・６・７遺構図

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　時期を判別できる遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に類似する地割が存在することから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

３　土坑

SK４（図11）

検出状況　AC８グリッド、Ⅳ層上面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、埋土表面には円礫が露出し、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK５より新しく、SK38より古い。

規模・形状　長軸長2.62ｍ以上、短軸長1.05ｍ以上、深さ0.13ｍである。遺構の北部と南部は発掘区外に広がるため全形は不明だが、大型の方形土坑の可能性がある。壁面の立ち上がりは緩やかで、底面は比較的平坦だが、西端部に畝状の起伏が存在する。

埋土　２層に分層した。埋土中に円礫と黒褐色土ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　１は甕の口縁部である。外面には口縁に沿って連続した指頭圧痕が見られ、内面には横方向のハケ調整後、横ナデが施される。内外面ともに被熱による変色が見られ、内面には煤が付着する。

時期　SK５との重複関係から、中世以降と考えられる。

SK５（図11）

検出状況　AC８グリッド、SK４完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、埋土表面には円礫が露出し、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK４より古い。

規模・形状　長軸長0.75ｍ、短軸長0.62ｍ、深さ0.19ｍである。平面形状はほぼ正円形で、断面形状は浅い皿状である。

埋土　単層である。埋土中に円礫と基盤層であるⅣ層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器３点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は、皿（２）と甕の胴部の破片である。２は推定口径約15㎝の大型の土師器皿である。底部内面に微小な指頭圧痕が確認できるが、摩滅が激しく調整の詳細は不明である。

時期　出土遺物から、中世以降と考えられる。

SK17（図11）

検出状況　AC11・AD11グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK15・SK16より古い。

規模・形状　遺構の北端は発掘区外に広がる。長軸長1.04ｍ、短軸長0.92ｍ以上、深さ0.21ｍである。平面形状は不整円形で、断面形状は浅い皿状である。

埋土　２層に分層した。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の頸部の小片で、分類不能である。

時期　出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK19（図11）

検出状況　AD11グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は

明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK18より新しい。

規模・形状　遺構の北端は発掘区外に広がる。長軸長0.4ｍ以上、短軸長0.36ｍ、深さ0.23ｍである。平面形状は楕円形と考えられる。底面の東部はテラス状の平坦部が設けられ、西部は一段深く掘り込まれ、壁面はほぼ垂直である。

埋土　単層である。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器７点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

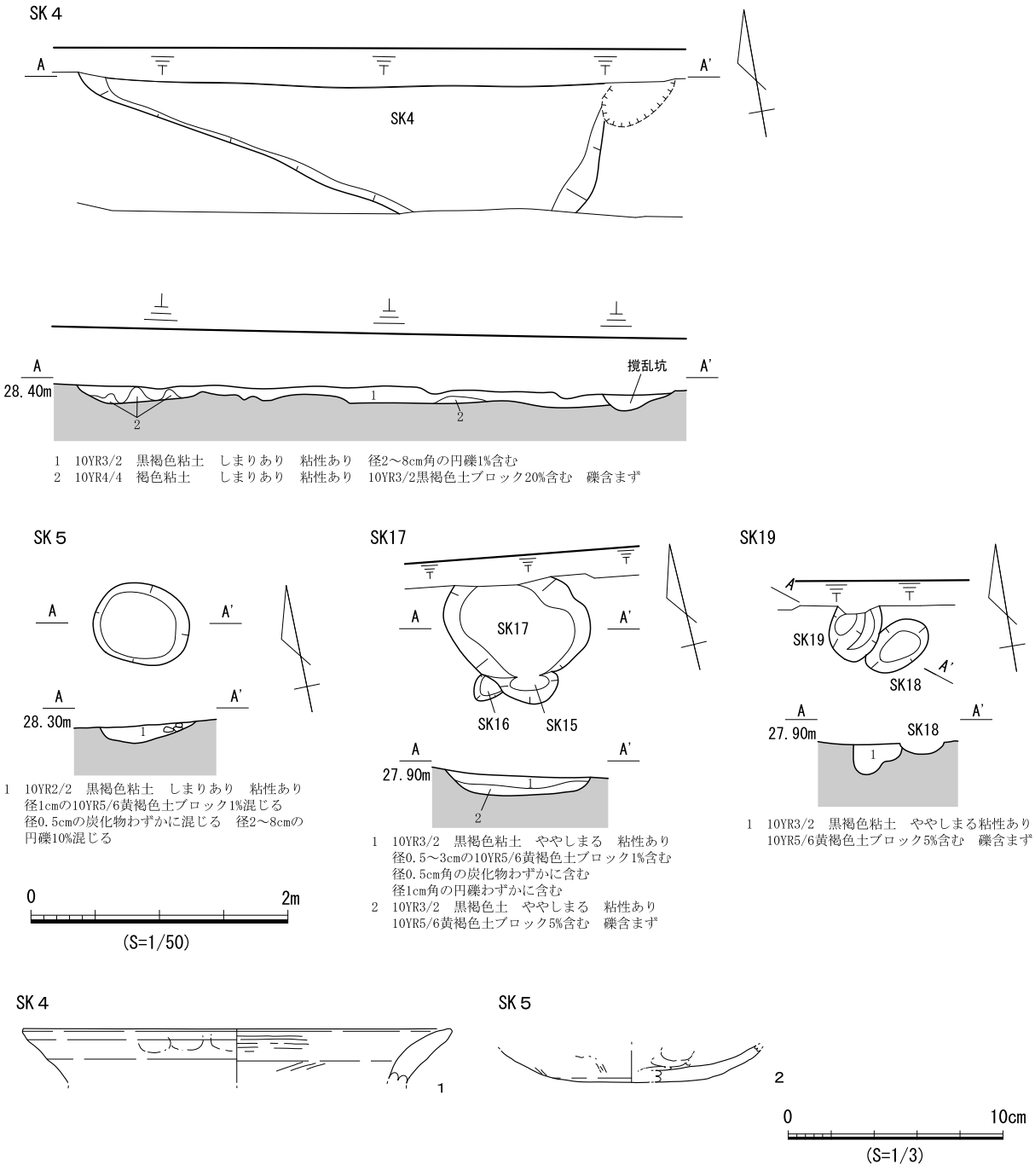


図11　SK４・５・17・19遺構図、SK４・５遺物実測図

遺物　土師器は全て甕の胴部の小片で、分類不能である。

時期　出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK22（図12）

検出状況　AD12グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.33m、短軸長0.25m以上、深さ0.10mである。遺構東部が撹乱坑と重複するが、平面形状はほぼ正円形と考えられる。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は、甑の把手（３）と甕の胴部の小片である。３は被熱による変色や、煤等の付着物は確認できなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK27（図13）

検出状況　AD12グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.25m、短軸長0.2m、深さ0.13mである。平面形状は不整円形で、西部から南部にかけての壁面の傾斜は緩やかだが、北東部が一段深く掘り込まれる。

埋土　単層である。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

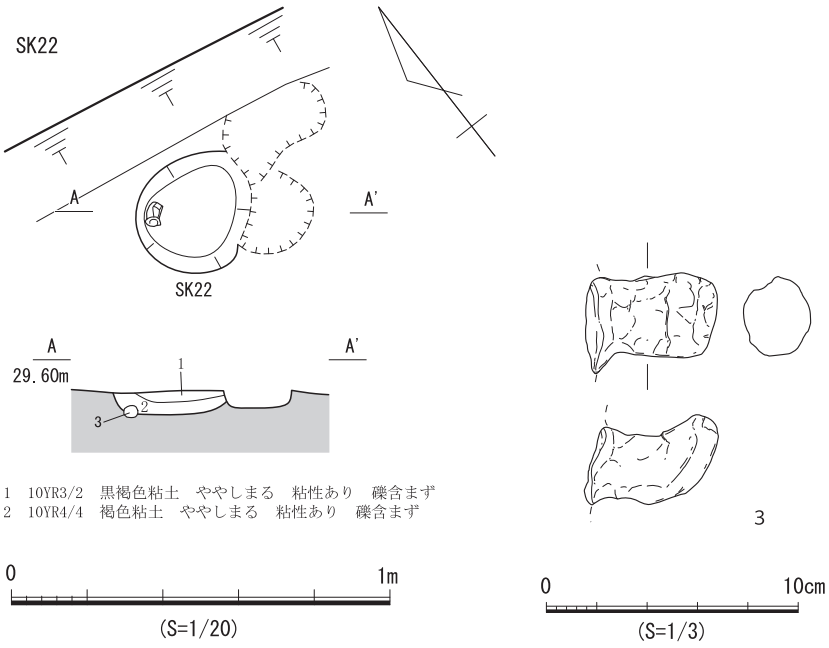


図12　SK22遺構図、遺物実測図

遺物出土状況　土師器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　14は甕の頸部である。摩滅が著しく調整は不明瞭で、外面上部に被熱による変色が見られる。

時期　出土遺物から、古墳時代以降と考えられる。

SK32（図13）

検出状況　AE17グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD５より古い。

規模・形状　長軸長0.56ｍ以上、短軸長0.44ｍ、深さ0.09ｍである。平面形状は楕円形、断面形状は浅い皿状で底面は平坦である。

埋土　単層である。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器は甕の胴部の小片で、美濃須衛Ⅳ期第３小期からⅤ期に比定した。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

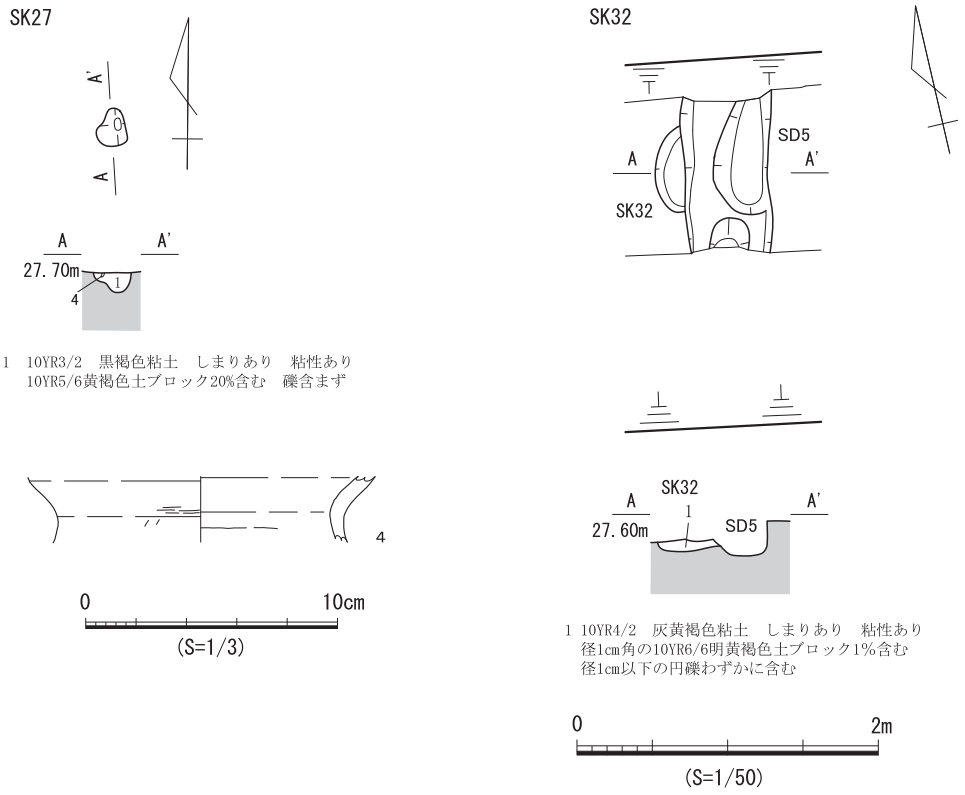


図13　SK27・32遺構図、SK27遺物実測図

第２節　撹乱坑・遺物包含層出土遺物

比較的残存状態が良い遺物を12点図示した（図14）。

５～12は須恵器である。５は産地不明の坏身で、無台で受け部を有する。胴部内面のロクロ目が顕著に残る。美濃須衛Ⅲ期後半併行に比定した。６は産地不明の坏身で、美濃須衛産のものと比べて胎土が暗い。美濃須衛Ⅱ期からⅢ期前半併行に比定した。６世紀後半から７世紀前半にかけてのものと考えられる。７は美濃須衛産の坏蓋と考えられるが、摘みの接合痕がないため、坏身の底部の可能性もある。外面に二重沈線が施され、Ⅳ期第３小期に比定した。８は美濃須衛産で形状から盤と考えられるが、高台の接合痕は確認できない。底部外面には回転ヘラ削り痕が残り、Ⅲ期後半のものと考えられる。９は美濃須衛産の台付の盤である。口縁部を折り返さずに端部を直截するタイプで、Ⅳ期に比定した。10は美濃須衛産の壺又は瓶の底部である。高台はなく、外面底部には回転ヘラ削り痕が残る。Ⅲ期後半からⅣ期第２小期に比定した。11は産地不明の甕の胴部で、内面には同心円状の当て具痕、外面には斜め方向の叩き目が残る。時期は不明である。12は産地不明の甕の胴部で、外面には斜格子叩き目が確認できるが、内面はナデ消しが施される。

13～16は、近世陶器である。13は瀬戸美濃産の広東茶碗で、登窯第10小期のものである。山呉須による染付が施される。14は瀬戸産の箱形湯呑で、近世後期のものである。外面胴部に鉄釉による二重線が回る。15と16は瀬戸産の擂鉢で、15は近世前期、16は近世後期のものと考えられる。

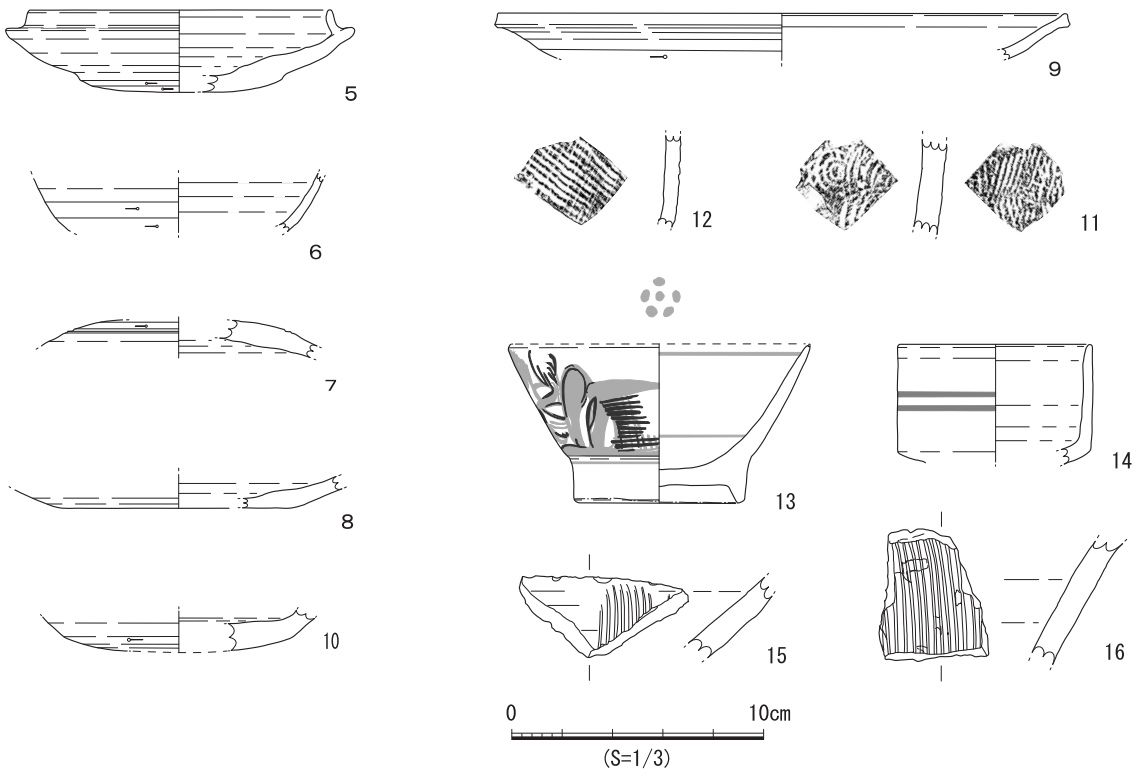


図14　撹乱坑・遺物包含層遺物実測図

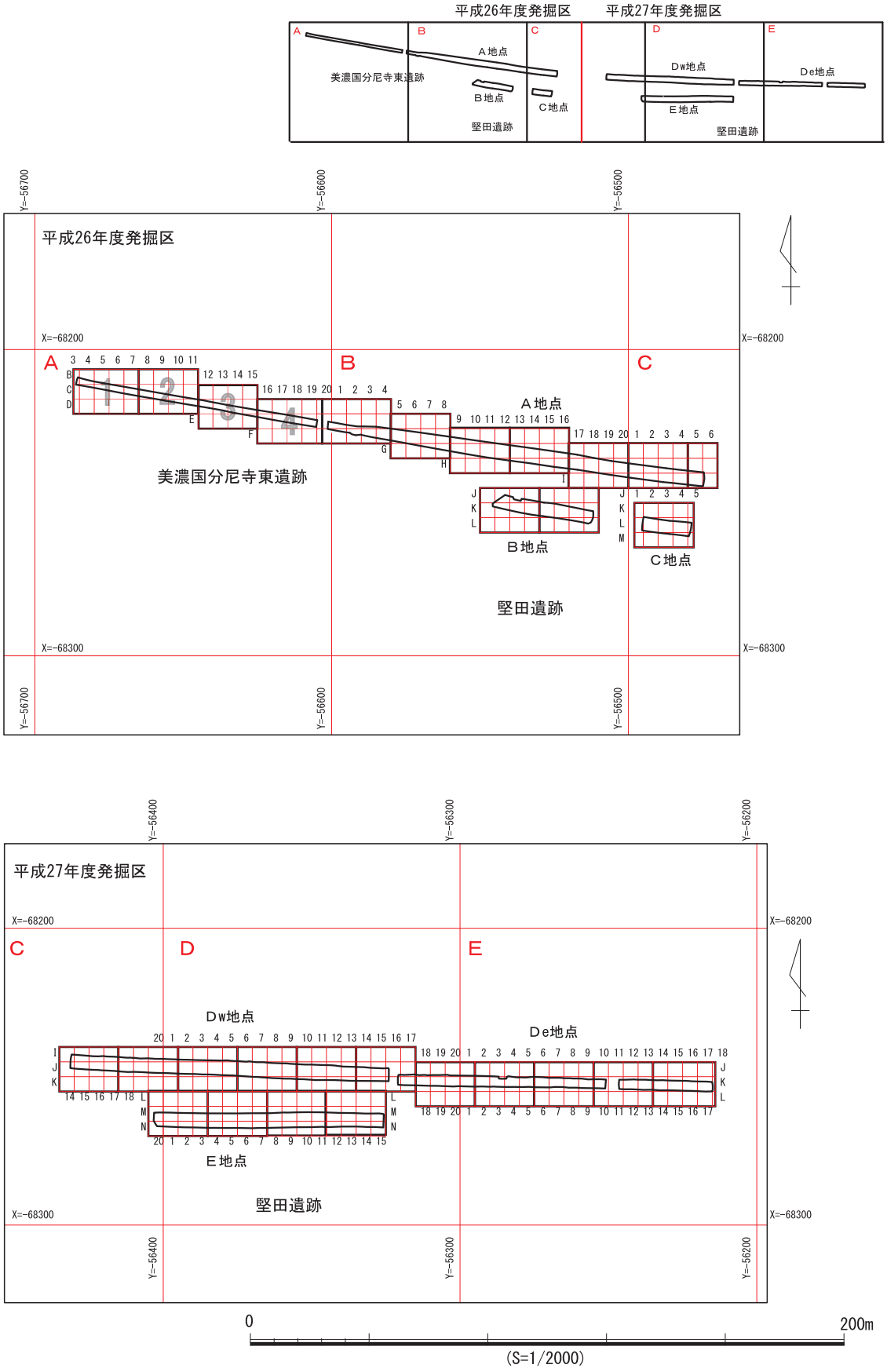


図 15　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　割付図

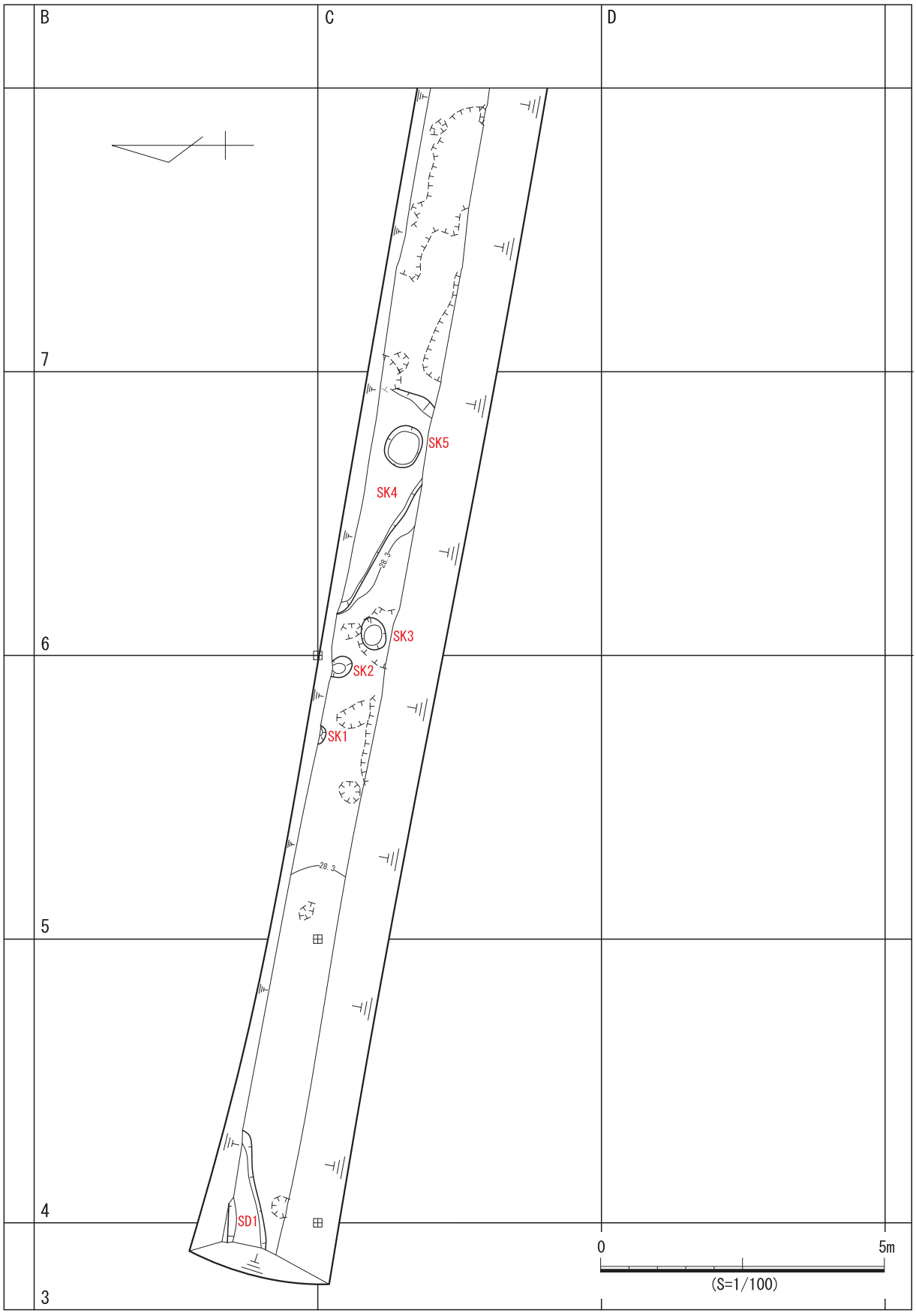


図 16　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（１）

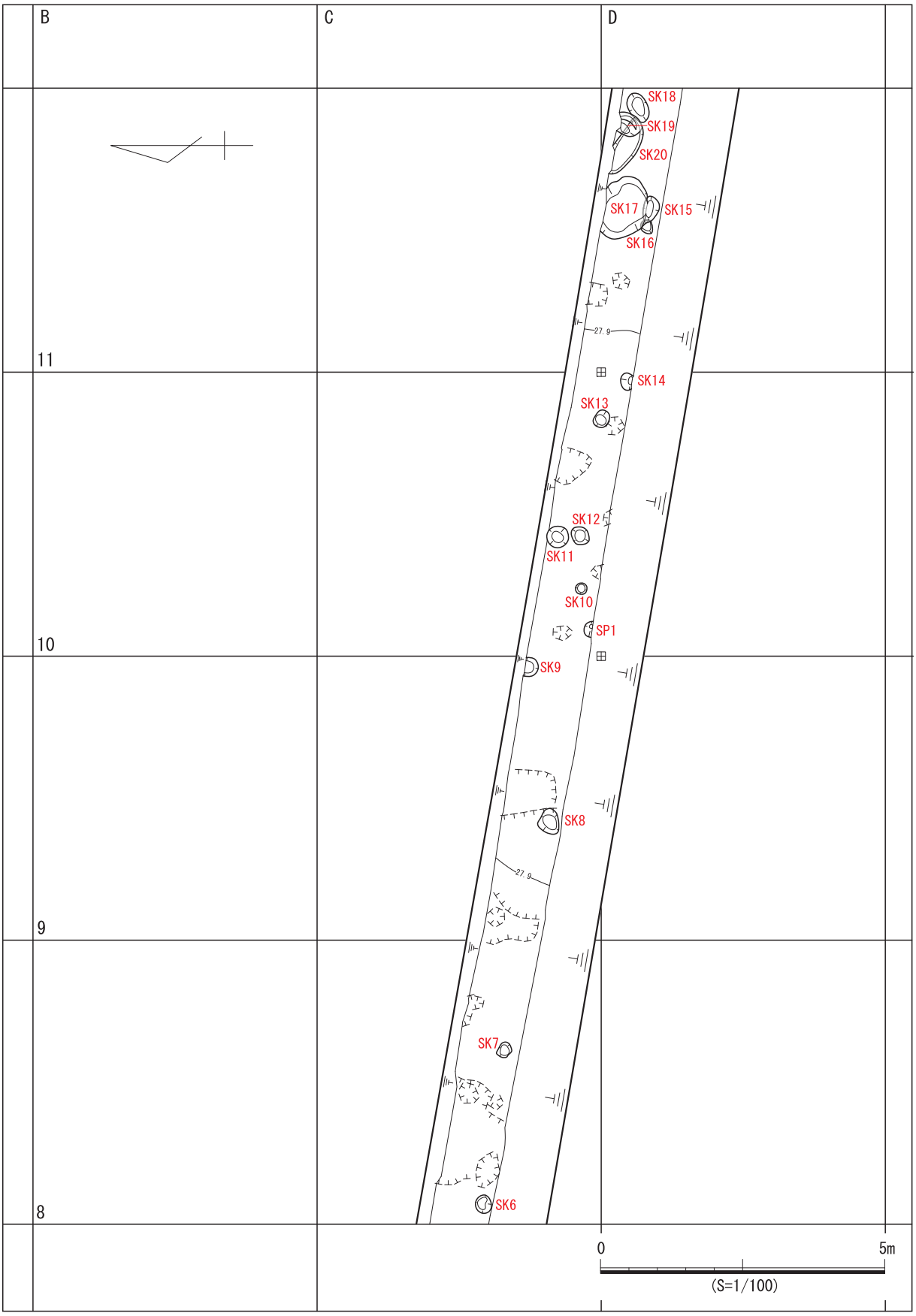


図 17　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（２）

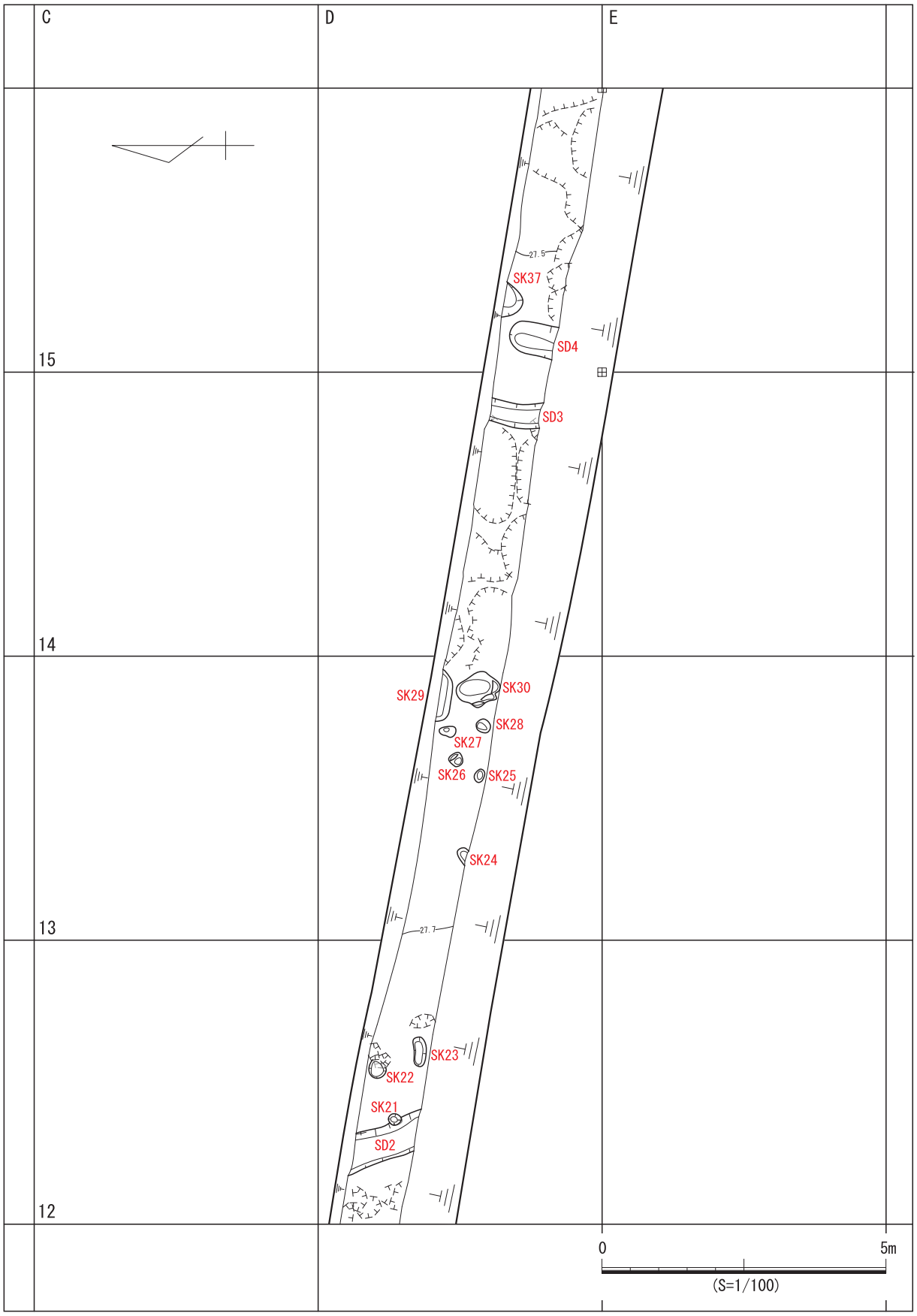


図 18　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（３）

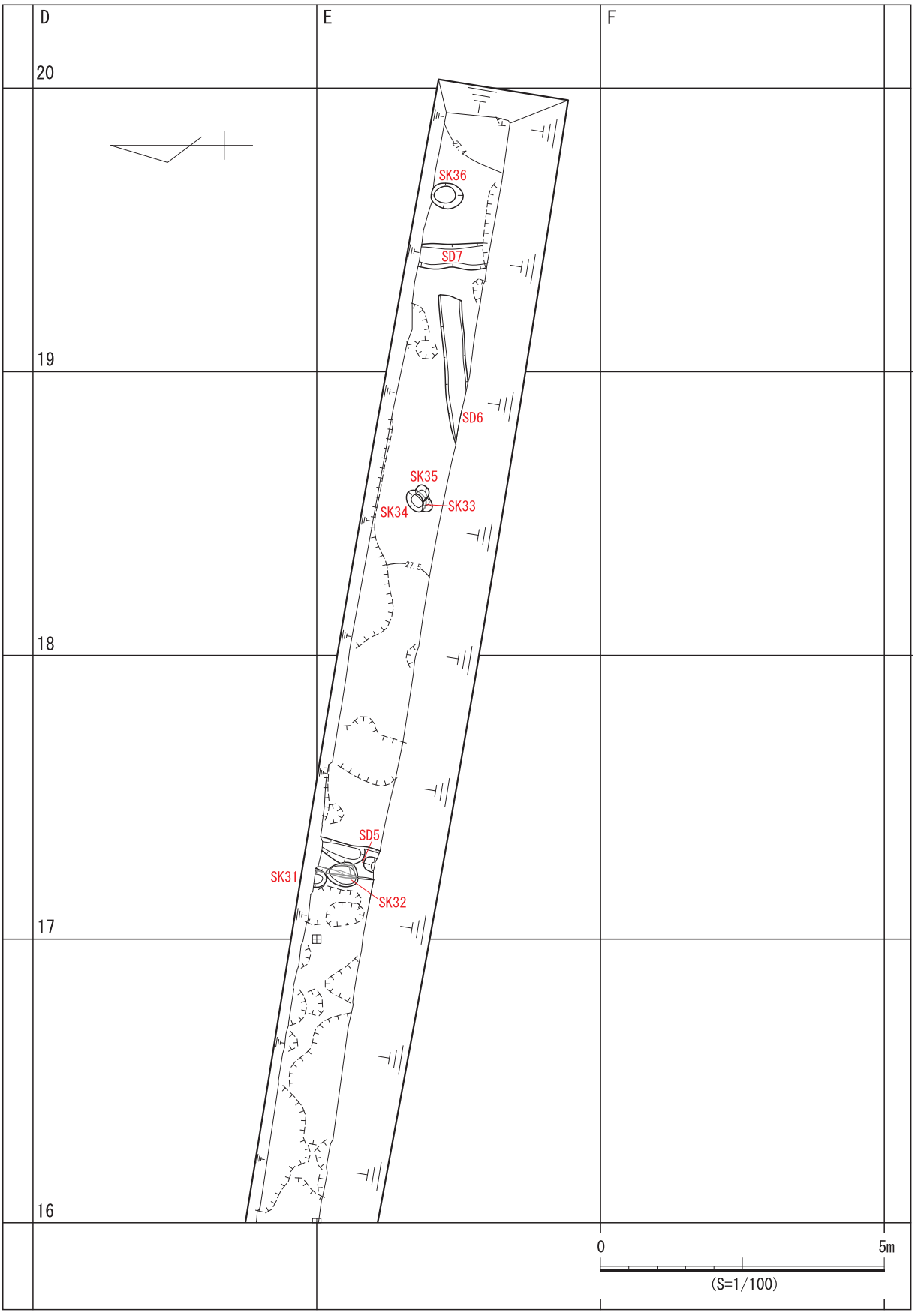


図 19　美濃国分尼寺東遺跡発掘区全域図　分割図（４）

表５　柱穴一覧表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	分層	堆積状況	規模（m）					重複関係		挿図番号	図版番号
										上端		下端		深さ	旧	新		
										長軸	短軸	長軸	短軸					
－	SP1	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	A	2	G	0.28	(0.14)	(0.14)	0.07	0.18			9	2

表６　溝状遺構一覧表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	分層	堆積状況	規模（m）					重複関係		挿図番号	図版番号
										上端		下端		深さ	旧	新		
										長軸	短軸	長軸	短軸					
－	SD1	A	B	3・4	Ⅳ層上面	B	B	1	A	(1.41)	0.56	(1.41)	0.46	0.24			9	2
－	SD2	A	D	12	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(1.17)	(1.17)	0.62	0.42	0.07	SK21		9	2
－	SD3	A	D	14	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(0.84)	0.43	(0.84)	0.22	0.12			10	2
－	SD4	A	D	15	Ⅱb層基底面	B	C	1	A	(0.80)	0.55	(0.69)	0.22	0.27			10	2
－	SD5	A	D・E	17	Ⅱb層基底面	B	B	2	B	(0.96)	(0.96)	0.58	0.20	0.20		SK31	10	2
－	SD6	A	E	18・19	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(2.12)	(2.12)	0.40	0.32	0.04			10	2
－	SD7	A	E	19	Ⅱb層基底面	B	B	1	A	(1.12)	(1.12)	0.47	0.30	0.08			10	2

表７　土坑一覧表

地点名	掲載番号	調査区画			検出面	平面形	断面形	分層	堆積状況	規模（m）					重複関係		挿図番号	図版番号
										上端		下端		深さ	旧	新		
										長軸	短軸	長軸	短軸					
－	SK1	A	C	5	Ⅳ層上面	A	A	3	G	0.32	(0.10)	0.10	(0.03)	0.17				
－	SK2	A	C	5・6	Ⅳ層上面	A	B	1	A	(0.36)	0.34	(0.24)	0.17	0.06				
－	SK3	A	C	6	Ⅳ層上面	A	B	1	A	0.58	0.42	0.34	0.30	0.18				
－	SK4	A	C	6	Ⅳ層上面	B	B	3	H	(2.62)	(1.05)	(2.62)	(1.00)	0.13		SK5	11	
－	SK5	A	C	6	Ⅳ層上面	A	A	1	A	0.75	0.62	0.59	0.49	0.13			11	
－	SK6	A	C	8	Ⅳ層上面	A	A	3	G	0.33	0.28	0.21	0.18	0.31				
－	SK7	A	C	8	Ⅳ層上面	A	B	3	C	0.28	0.27	0.18	0.16	0.28				
－	SK8	A	C	9	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.46	0.37	0.27	0.22	0.07				
－	SK9	A	C	9	Ⅱb層基底面	A	A	2	B	0.33	0.24	0.21	0.15	0.38				
－	SK10	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.21	0.20	0.14	0.14	0.07				
－	SK11	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.39	0.39	0.21	0.18	0.20				
－	SK12	A	C	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.35	0.31	0.20	0.20	0.14				
－	SK13	A	C・D	10	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.32	0.26	0.20	0.17	0.28				
－	SK14	A	D	10	Ⅱb層基底面	A	B	2	D	0.36	(0.20)	0.14	(0.06)	0.28				
－	SK15	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.48	0.27	0.31	0.11	0.16		SK16.SK17		
－	SK16	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.26	0.20	0.19	0.16	0.06	SK15	SK17		
－	SK17	A	C・D	11	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	1.04	0.92	0.85	0.58	0.15	SK15.SK16		11	
－	SK18	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	2	F	0.54	0.34	0.32	0.20	0.08		SK19		
－	SK19	A	D	11	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.40	(0.36)	(0.20)	0.13	0.23	SK18	SK20	11	
－	SK20	A	D	11	Ⅱb層基底面	C	B	1	A	1.02	0.43	0.85	0.30	0.07	SK19			
－	SK21	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.24	0.20	0.12	0.09	0.11		SD2		
－	SK22	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	0.33	0.29	0.25	0.22	0.10			12	2
－	SK23	A	D	12	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.52	0.23	0.40	0.12	0.07				
－	SK24	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	4	D	(0.25)	(0.21)	(0.15)	(0.14)	0.23				
－	SK25	A	D	14	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.24	0.17	0.16	0.09	0.08				
－	SK26	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.24	0.22	0.18	0.17	0.07				
－	SK27	A	D	13	Ⅱb層基底面	C	A	1	A	0.25	0.20	0.08	0.04	0.13			13	
－	SK28	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.22	0.22	0.14	0.12	0.16				
－	SK29	A	D	13	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.88	(0.21)	0.74	(0.11)	0.14				
－	SK30	A	D	13	Ⅱb層基底面	C	B	1	A	0.78	0.56	0.53	0.36	0.08				
－	SK31	A	D・E	17	Ⅱb層基底面	A	A	1	A	0.33	(0.22)	0.17	(0.15)	0.12	SD5			
－	SK32	A	E	17	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.56	0.44	0.47	0.32	0.09	SD5		13	
－	SK33	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	A	3	D	0.26	(0.26)	(0.26)	0.16	0.15				
－	SK34	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	B	3	B	0.41	0.31	0.23	0.14	0.22		SK35.SK33		
－	SK35	A	E	18	Ⅱb層基底面	A	B	2	B	0.25	(0.16)	0.16	(0.11)	0.19	SK34	SK33		
－	SK36	A	E	19	Ⅱb層基底面	A	B	3	D	0.55	0.45	0.47	0.40	0.30				
－	SK37	A	D	15	Ⅱb層基底面	A	B	1	A	0.62	(0.22)	0.40	(0.20)	0.34				

表８　土器類観察表

掲載番号	遺構名グリッド名	層位	種類	器種	産　地	時期・型式等	法量（cm）			色　調			備　　考	挿図	図版
							口径	底径	器高	内面	外面	断面			
1	SK4	1	土師器	甕(濃尾型)	—	古墳時代後期	(19.8)	—	—	10YR8/4	7.5YR6/3	7.5YR5/1	内面はヨコハケ後、ヨコナデ、外面指押え痕	11	22
2	SK5	a	土師器	皿	—	中世	—	(5.5)	—	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	非ロクロ成形、内面に指頭痕	11	22
3	SK22	a	土師器	甑	—	７～８世紀	—	—	—	10YR8/4	10YR8/4	10YR8/4	把手部、手捏ねによる指押え痕とナデ調整、２次的被熱痕あり	12	22
4	SK27	1	土師器	甕	—	古墳～古代	(13.7)	—	—	10YR8/3	7.5YR6/3	10YR7/3	内外面ナデ調整、外面に２次的被熱痕	13	22
5	AD12	Ⅱ	須恵器	坏身A	畿内系（産地不明）	Ⅲ期後半	(11.9)	(7.9)	3.3	10YR8/1	10YR8/1	10YR8/1	内外面ロクロ痕、底部外面回転ヘラ削り	14	22
6	撹乱	—	須恵器	坏身A	畿内系（産地不明）	Ⅱ期～Ⅲ期前半	—	—	—	N4/0	N4/0	2.5Y5/2	内面ロクロ痕、外面下半回転ヘラ削り	14	22
7	撹乱	—	須恵器	蓋	美濃須衛	Ⅳ期第３小期	—	—	—	2.5Y6/1	2.5Y6/1	2.5Y7/2	天井部外面に回転ヘラ削りと二重沈線、内面ロクロ痕	14	22
8	AD13	3	須恵器	盤	美濃須衛	Ⅲ期後半	—	(9.0)	—	10YR8/1	10YR8/1	2.5Y7/1	無高台、内面ロクロ痕顕著、底部外面回転ヘラ削り	14	22
9	AE17	Ⅱ	須恵器	盤	美濃須衛	Ⅳ期	(22.5)	—	—	5Y7/1	5Y7/1	5Y7/1	胴部外面下半回転ヘラ削り、内面微かなロクロ痕	14	22
10	—	a	須恵器	壺又は瓶	美濃須衛	Ⅲ期後半～Ⅳ期第２小期	—	—	—	2.5Y7/1	2.5Y7/1	2.5Y7/1	底部外面に回転ヘラ切り痕、内面ロクロ痕	14	22
11	撹乱	—	須恵器	甕	畿内系（産地不明）	不明	—	—	—	N4/0	N4/0	5YR5/2	胴部外面斜方向叩き目、内面同心円文当て具痕	14	22
12	撹乱	—	須恵器	甕	畿内系（産地不明）	不明	—	—	—	N3/0	N3/0	2.5Y6/1	胴部外面斜格子叩き、内面同心円文当て具痕軽くナデ消し	14	22
13	撹乱	Ⅰ	陶磁器	広東茶碗	瀬戸美濃	登窯第10小期	11.8	6.3	(6.3)	7.5Y8/1	7.5Y8/1	2.5Y7/1	柘器染付、ロクロ成形、削り出し高台、高台端部のみ露胎	14	22
14	AD14	2	陶磁器	箱形湯呑	瀬戸	登窯第10小期	(7.6)	—	—	5Y7/1	5Y7/1	2.5Y8/2	胴外に鉄の二重線、内外面に灰釉塗布、ロクロ成形	14	22
15	撹乱	1	陶磁器	擂鉢	瀬戸	17世紀	—	—	—	5TR4/2	5TR4/2	10YR7/3	錆釉塗布、内面に卸目、ロクロ成形、外面下半ヘラ削り	14	22
16	撹乱	—	陶磁器	擂鉢	瀬戸	～19世紀	—	—	—	5YR3/4	5YR3/4	2.5Y7/3	内外面錆釉塗布、内面に卸目、ロクロ成形	14	22

第５章　竪田遺跡

第１節　縄文時代の遺構と遺物

１　土坑

SK290（図20）

検出状況　CJ15グリッド、SK291完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SP37・SK291より古い。

規模・形状　長軸長0.37ｍ以上、短軸長0.25ｍ、深さ0.27ｍである。平面形状は楕円形で、北側壁面の下部が段状に深く掘り込まれる。

埋土　３層に分層した。３層に基盤層であるⅣ層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点（１）が、３層から出土した。

遺物　１は縄文時代晩期の深鉢で、幅１㎝ほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。

時期　出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK291（図20）

検出状況　CJ15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK290より新しく、SP37・SK292・SK293・SB１より古い。

規模・形状　長軸長0.91ｍ、短軸長0.80ｍ、深さ0.11ｍである。平面形状は不定形で、断面形状は浅い皿型である。

埋土　単層である。ブロック土を含むことから、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況　縄文土器４点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は、器種が分かるものに深鉢の胴部１点がある。

時期　出土遺物と重複するSK290の出土遺物から、縄文時代晩期以降と考えられる。

SK420（図20）

検出状況　CJ19グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭で、埋土上面では土器が露出していた。

規模・形状　長軸長0.40ｍ、短軸長0.39ｍ、深さ0.08ｍである。平面形状は円形で、断面形状は浅い皿型である。

埋土　２層に分層した。遺物の出土状況から、人為堆積の可能性がある。

遺物出土状況　縄文土器38点が出土した。このうち、深鉢（２）の底部から胴部下半にかけての部分が、遺構底面から正位で出土した。

遺物　２は縄文時代晩期の深鉢で、胴部内外面に２次的被熱による煤や炭化物が付着する。３は縄文時代晩期末の深鉢で、浮線網状文を施す。

時期　出土遺物とその出土状況から、縄文時代晩期と考えられる。

SK425（図21）

検出状況　CJ19・CJ20グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面

形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK426より新しい。

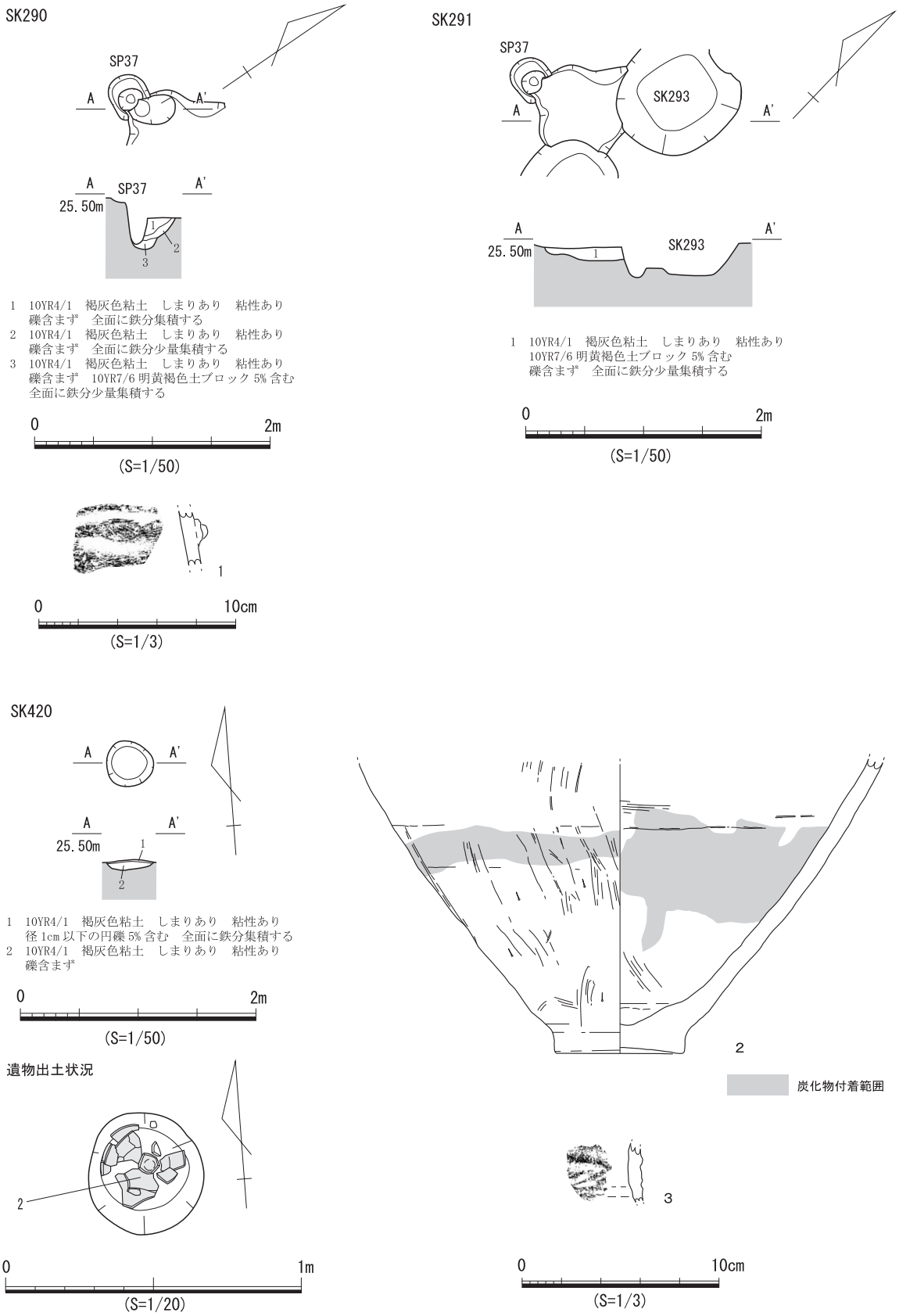


図20　SK290・291・420遺構図、SK290・420遺物実測図

規模・形状　長軸長0.46ｍ、短軸長0.41ｍ、深さ0.18ｍである。平面形状は不整円形で、断面形状は半円形である。

埋土　単層である。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は胴部の小片である。

時期　出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK444（図21）

検出状況　CJ20グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。SK445より古い。

規模・形状　長軸長0.41ｍ、短軸長0.36ｍ以上、深さ0.29ｍである。平面形状は不整円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。埋土中に一定量の礫を含み、人為堆積と考えられる。

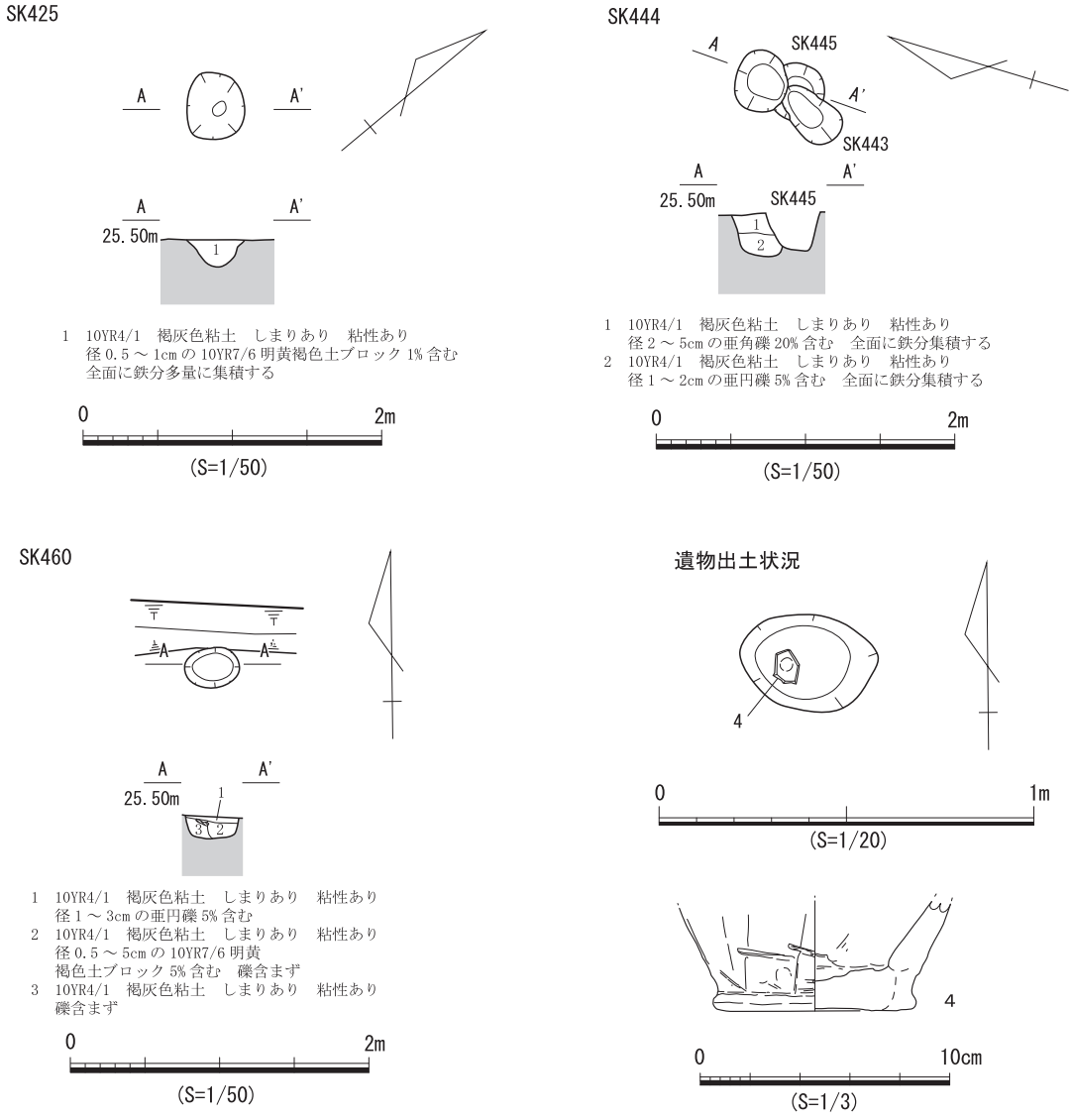


図21　SK425・444・460遺構図、SK460遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は深鉢の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK460（図21）

検出状況　DJ１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.37m、短軸長0.26m、深さ0.15mである。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土　３層に分層した。礫と基盤層であるⅣ層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器の底部１点（４）が、１層と３層の層界付近から正位で出土した。

遺物　４は縄文時代晩期の深鉢で、底部が外にやや張り出す。底部外面には網代痕が残る。

時期　出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK786（図22）

検出状況　CJ15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。他遺構との重複関係は、SK787より古い。

規模・形状　長軸長0.50m以上、短軸長0.44m、深さ0.12mである。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形で、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。埋土中に礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　縄文土器１点（５）が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　５は縄文時代晩期の深鉢で、口縁部に突帯を巡らせ、突帯に縦方向のキザミを施す。

時期　出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK1069（図22）

検出状況　DN８グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は

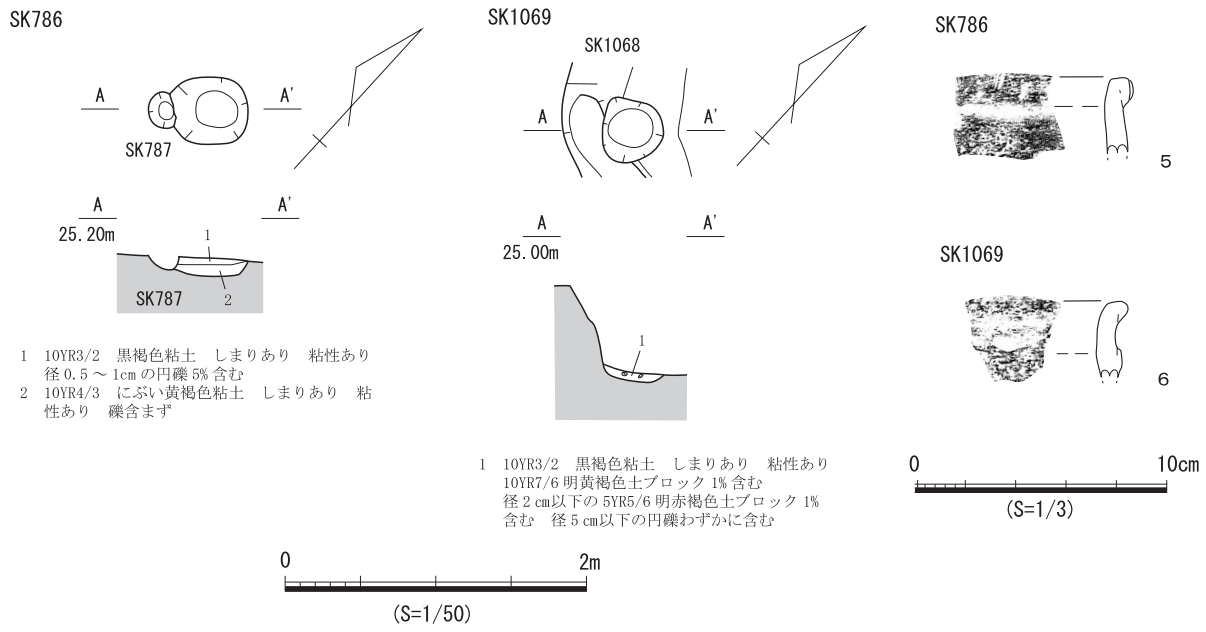


図22　SK786・1069遺構図、遺物実測図

明瞭である。他遺構との重複関係は、SK1068より古い。

規模・形状　長軸長0.42ｍ、短軸長0.40ｍ、深さ0.06ｍである。平面形状は不整円形、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

埋土　単層である。埋土中に基盤層であるⅣ層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点（６）が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　６は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部は端部を外に折り返し肥厚させ、その下に幅１cmほどの突帯を貼り付ける。

時期　出土遺物から、縄文時代晩期と考えられる。

SK1120（図23）

検出状況　DN11・DN12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。

規模・形状　遺構の北部は撹乱によって消失する。長軸長0.24ｍ、短軸長0.16ｍ以上、深さ0.11ｍである。平面形状は不整円形、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　縄文土器３点が散在して出土した。

遺物　縄文土器はいずれも小片である。

時期　出土遺物から、縄文時代と考えられる。

SK1121（図23）

検出状況　DN12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭である。

規模・形状　遺構の南部は発掘区外に広がる。長軸長0.48ｍ、短軸長0.20ｍ以上、深さ0.07ｍである。平面形状は円形と考えられ、断面形状は浅い皿型で、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。埋土中に礫を少量含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　縄文土器１点と黒曜石の剥片１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は深鉢の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、縄文時代と考えられる。

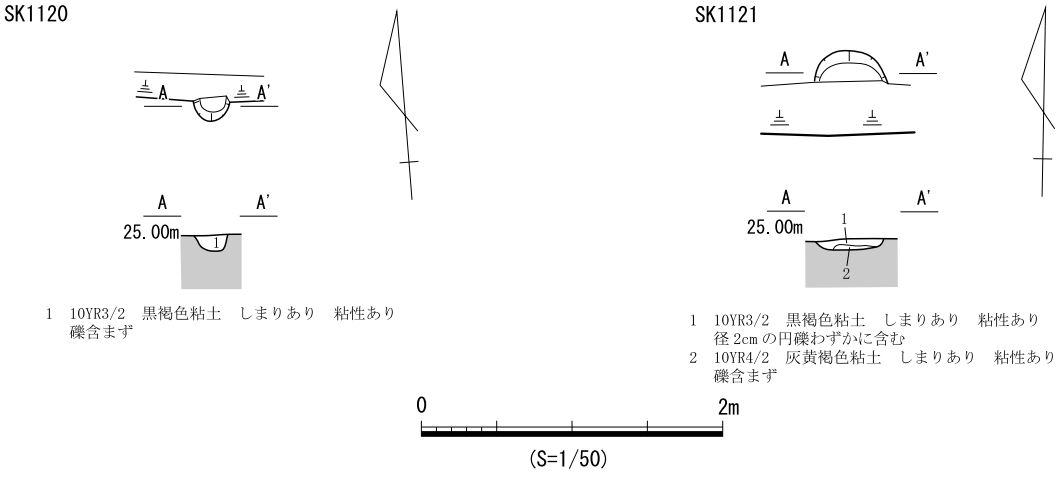


図23　SK1120・1121遺構図

第２節　古墳時代及び古代の遺構と遺物

１　竪穴建物

SI１（図24）

検出状況　BG９・10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP13・SK56より新しく、SP12、SK51、SK53等より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－４°－Ｅである。遺構の南部は発掘区外に広がり、西部は撹乱坑と重複するが、残存部分の形状から平面形状は隅丸方形の可能性がある。長軸長3.87ｍ以上、短軸長1.17ｍ以上、深さ0.11ｍである。

埋土　単層である。Ⅳ層（基盤層）ブロックを含むことから人為堆積と考えられる。

床面・掘方　床面の硬化や整地土は確認できなかったが、壁際溝を検出した面を床面とした。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

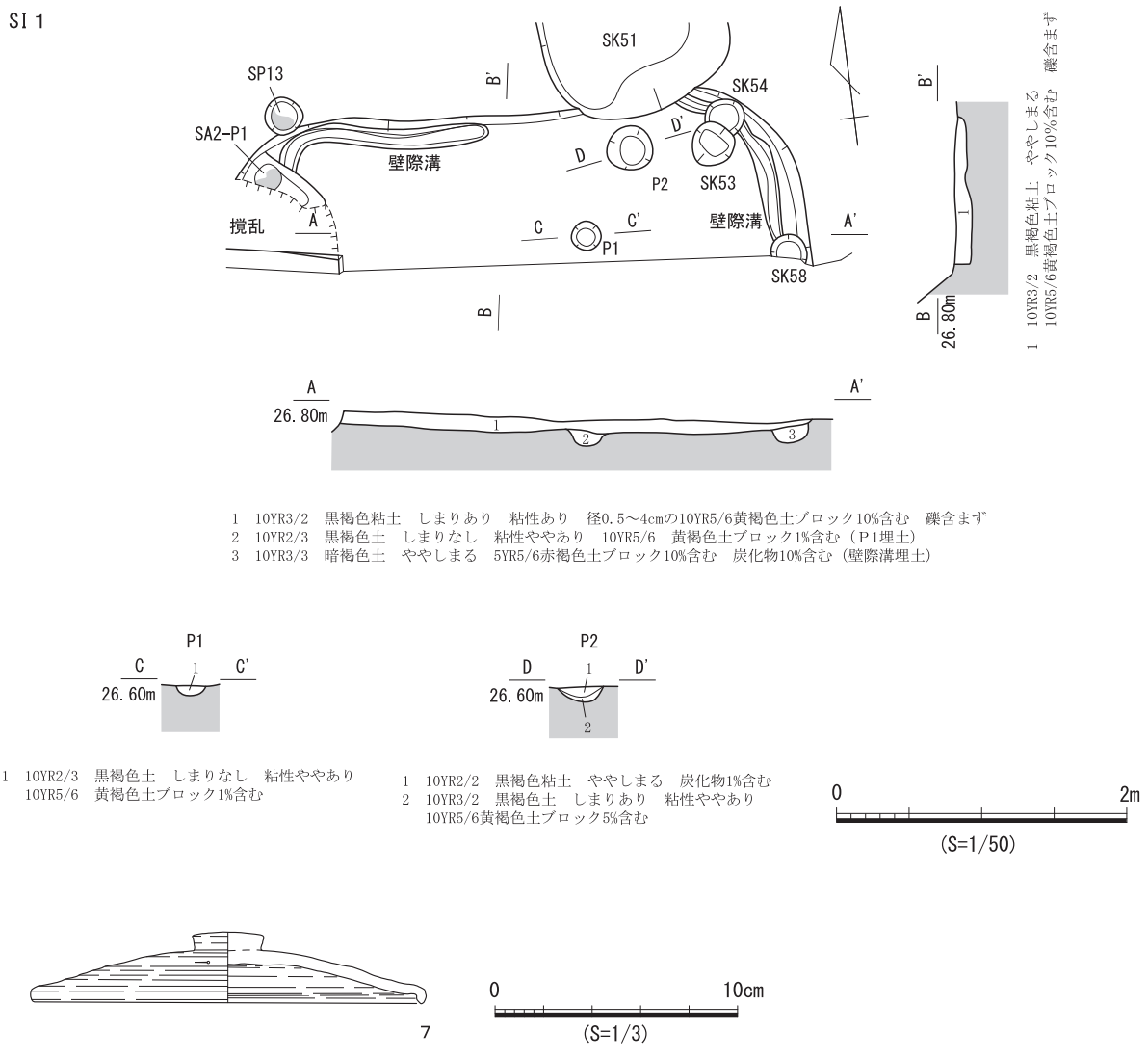


図24　SI１遺構図、遺物実測図

付属遺構　柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝は幅13cm、深さ６cmで、遺構北辺で途切れる箇所がある。床面で検出した土坑２基を付属遺構としたが、いずれも位置、形状等から柱穴とは判断できず、性格不明である。

遺物出土状況　遺構埋土から土師器18点と須恵器25点が出土した。床面直上で出土した遺物はなく、特徴的な出土状況は確認できなかった。また、付属遺構からの出土遺物はなかった。

遺物　土師器は全て甕の頸部と胴部の破片である。須恵器は、坏身と坏蓋と瓶類で、残存状況の良好な７を図化した。７は美濃須衛産の坏蓋Ｃ類で口縁部に明瞭な内側への折り返しが確認でき、Ⅳ期第３小期に比定した。

時期　出土遺物と重複するSK56から８世紀後半の須恵器が出土することから、８世紀後半以降と考えられる。

SI２（図25・26）

検出状況　BH20グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD14・SK134より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－10°－Ｅである。遺構の北部は発掘区外に広がり、東部はSD14との重複により残存しないが、残存部分の形状から、平面形状は隅丸方形の可能性がある。長軸長2.84m以上、短軸長2.63m以上、深さ0.05mである。

埋土　単層である。Ⅳ層（基盤層）ブロックと小径の亜角礫を少量含むことから人為堆積と考えられる。

床面・掘方　床面の硬化や整地土は確認できなかったが、壁際溝を検出した面を床面とした。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構　柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝は幅14cm、深さ10cmで、遺構南辺と西辺の壁際溝底面では、径約10cmの小穴４基を検出した。床面で検出した土坑７基を付属遺構としたが、位置や形状からＰ５又はＰ６が柱穴である可能性が考えられる。Ｐ１とＰ２の上層には少量の炭化物と焼土が混じるが、カマドや炉との関連は不明である。

遺物出土状況　床面直上から土師器95点、須恵器４点、壁際溝から土師器１点、Ｐ１から土師器１点Ｐ２から土師器３点、Ｐ６から土師器５点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は大半が甕の破片で、このうち残存状況のよい２点（８・９）を図化した。８はつまみ上げ状の口縁端部をもつ丸底甕で、７世紀代のものと考えられる。胴部内面には横方向、外面には斜め方向のハケ調整を施す。９は長胴甕の下半部で、胴部内面には板ナデ、外面にはハケによる調整を施す。時期と産地は不明である。須恵器は、坏身の胴部と甕の胴部、壺又は鉢の口縁部である。いずれも小片のため分類不能である。

時期　出土遺物から、７世紀代と考えられる。

２　掘立柱建物

SB１（図27・28）

検出状況　CI15～CJ16グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP40・SK291・SK294等より新しく、SK293より古い。

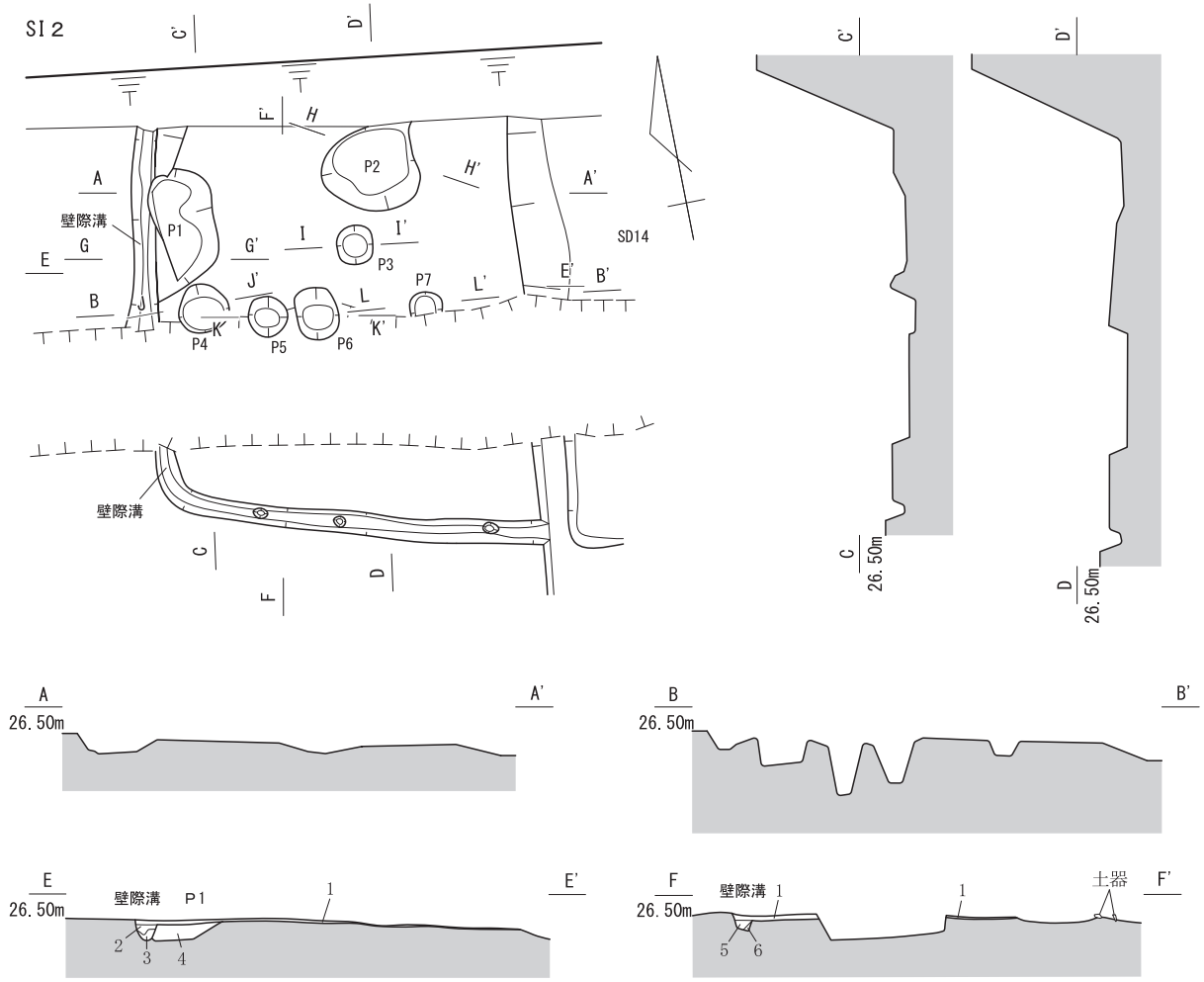
規模・形状　遺構南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行２間（柱間1.8m）以上、梁行２間（3.5

ｍ、柱間1.6ｍ－1.9ｍ）の側柱建物である。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。

柱穴　柱穴の平面形は方形又は楕円形で、径は0.43ｍ～0.82ｍ、深さは0.2ｍ～0.45ｍである。Ｐ５では柱痕跡を確認した。Ｐ２完掘後の底面で長さ９cm～17cmの亜円礫５点を確認したが、礎盤石かどうかは不明である。

遺物出土状況　Ｐ１から縄文土器２点、Ｐ２から土師器３点、須恵器１点、石製品１点（10）が出土した。10は砥石で、Ｐ２底面の５点の礫のうち、最大のものである。それ以外に特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は深鉢の口縁部と胴部、土師器は器種不明、須恵器は甕の胴部である。いずれも小片

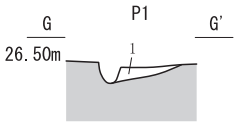


1　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.2～3cmの10YR5/6黄褐色土ブロック1%含む　径0.5～3cmの亜角礫5%含む
2　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む　礫含まず
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cmの10YR5/6黄褐色土ブロック1%含む
4　10YR4/4　褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cmの10YR5/6黄灰褐色土ブロック1%、径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む
　径0.5～3cmの亜角礫5%含む　径0.5cmの5YR5/6明赤褐色土ブロックわずかに含む
5　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック1%含む　礫含まず
6　10YR4/4　褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

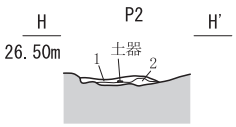
0　2m
(S=1/50)

図25　SI２遺構図（１）

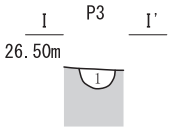
SI２



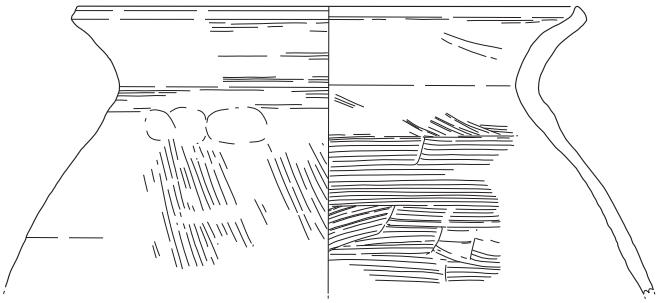
1　10YR4/4　褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5cmの10YR5/6黄灰褐色土ブロック1%、
径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%、
径0.5cmの5YR5/6明赤褐色土ブロックわずかに含む
径0.5～3cmの亜角礫5%含む

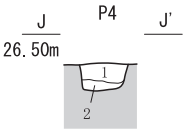


1 10YR3/2 黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径1cm以下の5YR5/6明赤褐色土ブロック1%、
径0.5～2cmの10YR7/6明黄褐色土ブロックわずかに含む
径0.5～1cmの円礫1%含む
2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

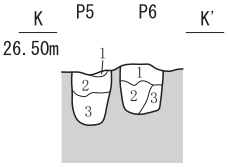


1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの10YR7/6明黄褐色土ブロック、
径0.5cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック含む
径0.5～5cmの亜角礫5%含む

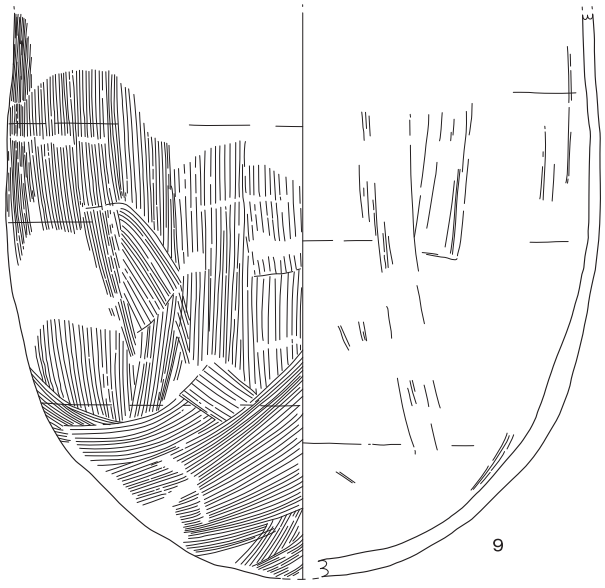


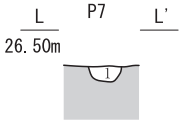


1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5cmの炭化物わずかに含む
径0.5～2cmの亜角礫1%含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む
礫含まず

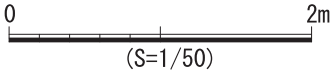


P5
1 10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5cmの円礫1%含む
2 10YR4/2　灰黄褐色粘土　ややしまる　粘性あり
径0.5～2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む
径0.5～3cmの円礫5%含む
3 10YR5/4　にぶい黄褐色粘土　しまりなし　粘性あり
径0.5～1cmの円礫5%含む
P6
1 10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～8cmの亜円礫5%含む
2 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径4cmの円礫5%含む
3 10YR4/3　にぶい黄褐色粘土（やや暗い）しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの円礫わずかに含む





1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック1%、
5YR5/6明赤褐色土ブロック含む
径0.5～1cmの円礫わずかに含む



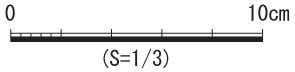
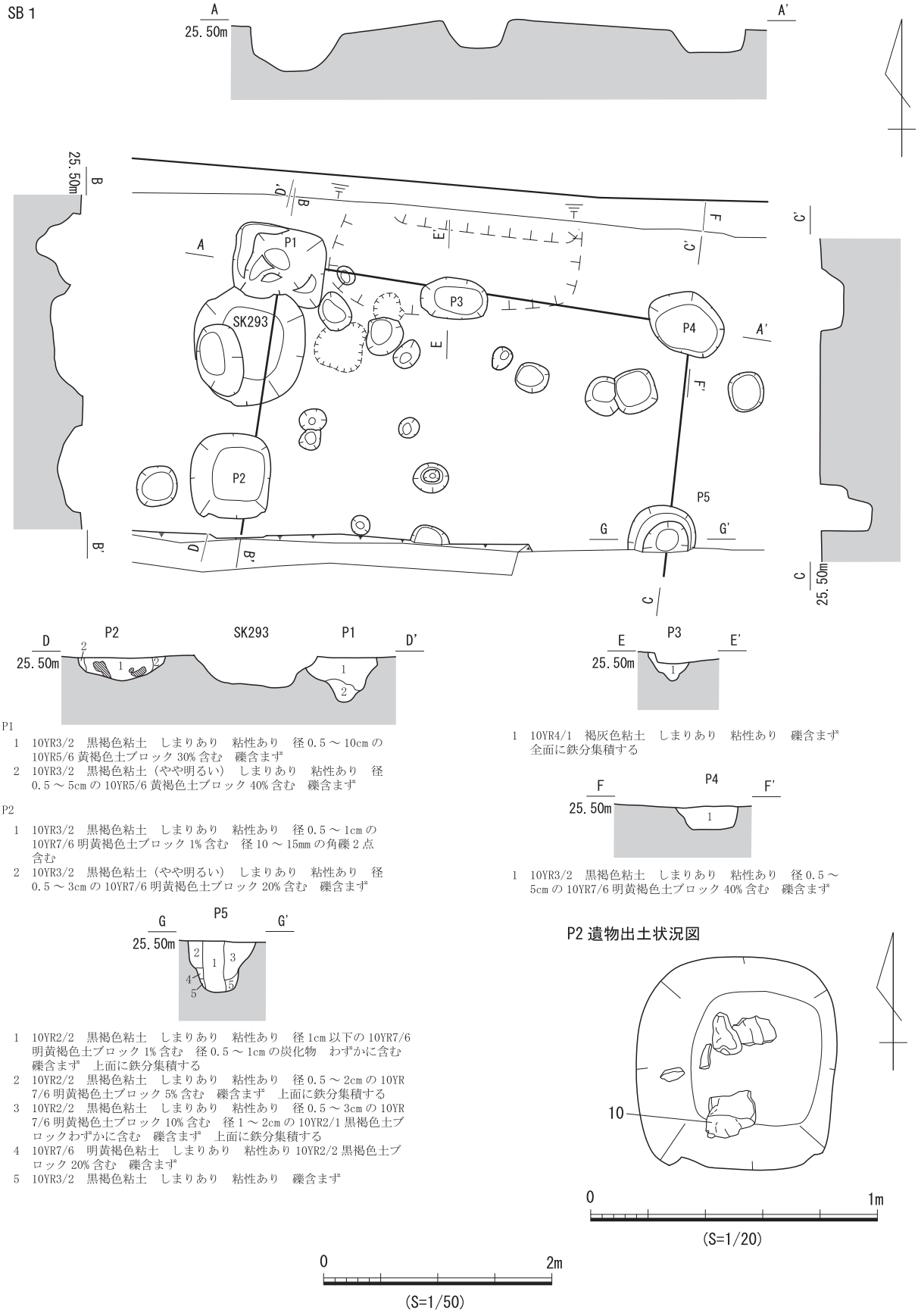


図26　SI２遺構図（２）、遺物実測図



P1

1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 10cm の 10YR5/6 黄褐色土ブロック 30% 含む　礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土（やや明るい）　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 5cm の 10YR5/6 黄褐色土ブロック 40% 含む　礫含まず

P2

1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 1cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 10 ～ 15mm の角礫２点含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土（やや明るい）　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 20% 含む　礫含まず

1　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1cm 以下の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 0.5 ～ 1cm の炭化物　わずかに含む　礫含まず　上面に鉄分集積する
2　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 2cm の 10YR 7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず　上面に鉄分集積する
3　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の 10YR 7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　径１～ 2cm の 10YR2/1 黒褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず　上面に鉄分集積する
4　10YR7/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり 10YR2/2 黒褐色土ブロック 20% 含む　礫含まず
5　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず　全面に鉄分集積する

1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 5cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 40% 含む　礫含まず

図27　SB１遺構図

のため図示しなかった。10は砂岩製の砥石で、被熱後に割れた面を砥面に用いている。

時期　出土遺物から時期の判別はできないが、本遺構の東側に位置するSB２とSB３とは、主軸方位が本遺構と類似し、同時期の遺構の可能性があるため、古代以降と考えられる。

SB２（図29・30）

検出状況　CI17グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK341・SK349・SK350等より新しく、SK337・SK351より古い。

規模・形状　Ｐ３に対応する側柱が存在しないため、遺構南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行２間（柱間1.7m）以上、梁行２間（3.8m、柱間1.9m－1.9m）の側柱建物である。主軸方位はＮ－３°－Ｅである。

柱穴　柱穴の平面形は不整円形又は楕円形で、径は0.42m～0.83m、深さは0.16m～0.50mである。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　Ｐ３から土師器１点、Ｐ５から土師器２点が出土した。

遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から時期の判別はできないが、本遺構の西側に位置するSB１と東側に位置するSB３は、主軸方位が本遺構と類似し、同時期の遺構の可能性があるため、古代以降と考えられる。

SB３（図30・31）

検出状況　CJ18・19グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ６を検出した。柱穴の平面形はいずれも明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK409・SK411・SK412等より新しく、SK368・SK410より古い。

規模・形状　Ｐ３とＰ４に対応する側柱が存在しないため、建物の南部は発掘区外へ広がると考えられ、桁行３間（5.4m、柱間1.8m－1.7m－1.9m）、梁行２間（柱間２m）以上の側柱建物である。主軸方位はＮ－２°－Ｅである。

柱穴　柱穴の平面形は円形又は楕円形で、径は0.38m～0.61m、深さは0.17m～0.41mである。Ｐ２、Ｐ３、Ｐ５、Ｐ６では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　Ｐ１から土師器１点、Ｐ３から土師器３点、Ｐ４から土師器２点、須恵器１点、Ｐ５から土師器４点、Ｐ６から土師器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

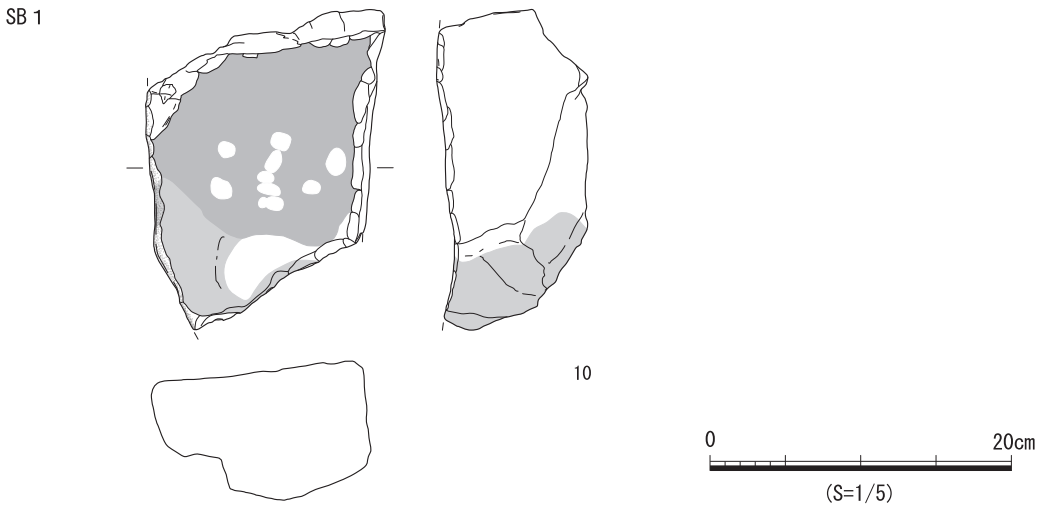
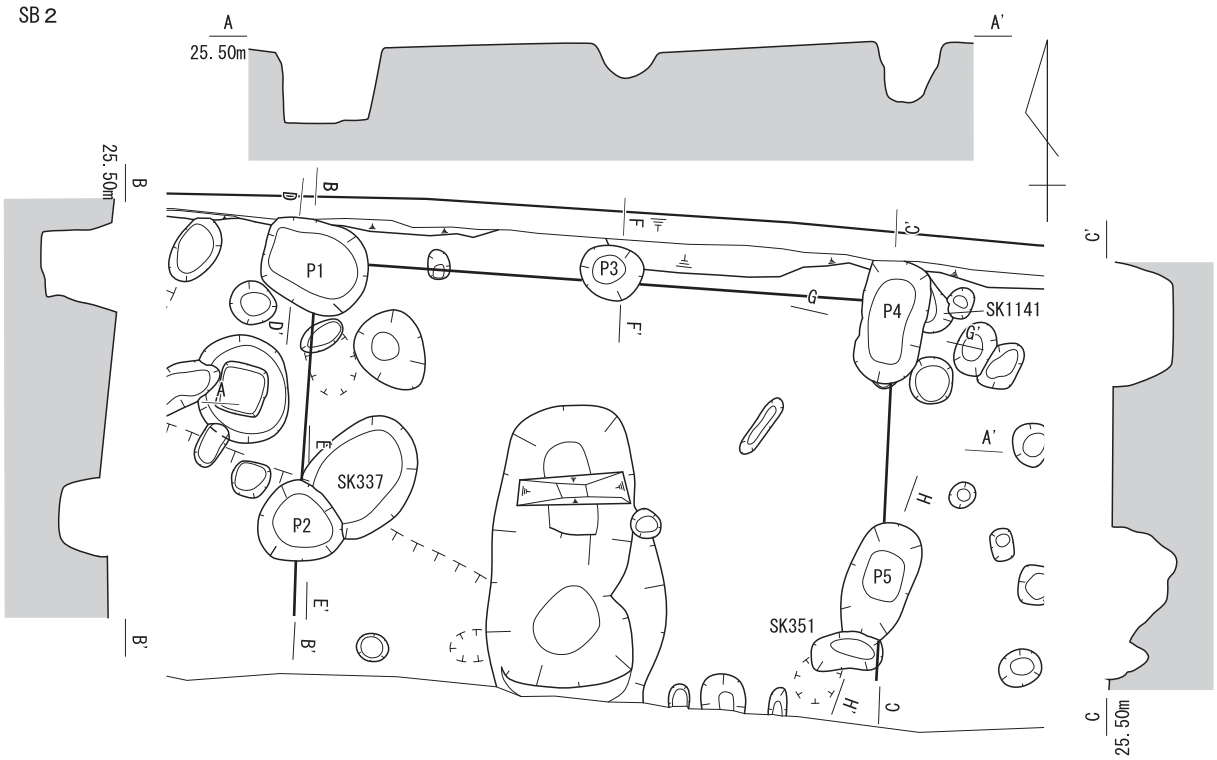
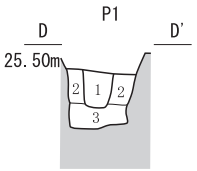
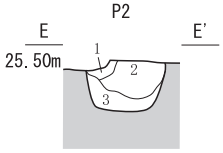


図28　SB１遺物実測図

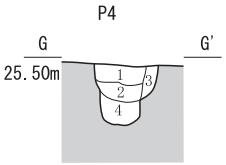




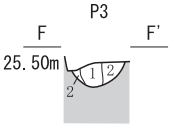
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 4cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 40% 含む　径 0.5 ～ 2 cm の亜円礫わずかに含む
3　10YR7/6 明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり 10YR3/2 黒褐色土ブロック 20% 含む　礫含まず



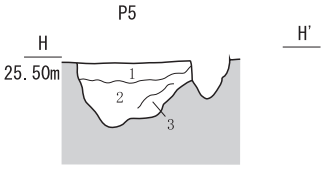
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 3cm 以下の 10YR7/6 黄褐色土ブロック 30% 含む　礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 1cm 以下の 10YR7/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　礫含まず
3　10YR7/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 7cm 以下の 10YR3/2 黒褐色土ブロック 40% 含む　礫含まず



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1cm 以下の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 2cm 以下の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
4　10YR7/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR3/2 黒褐色土ブロック 40% 含む　径 2cm の亜角礫 1% 含む



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり径 0.5 ～ 1cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 2cm 以下の亜角礫 1% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　径 1cm 以下の亜角礫わずかに含む



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり径 0.5 ～ 3cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　径 1 ～ 5cm の亜角礫 5% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 5cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 15% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

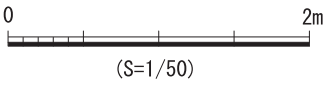
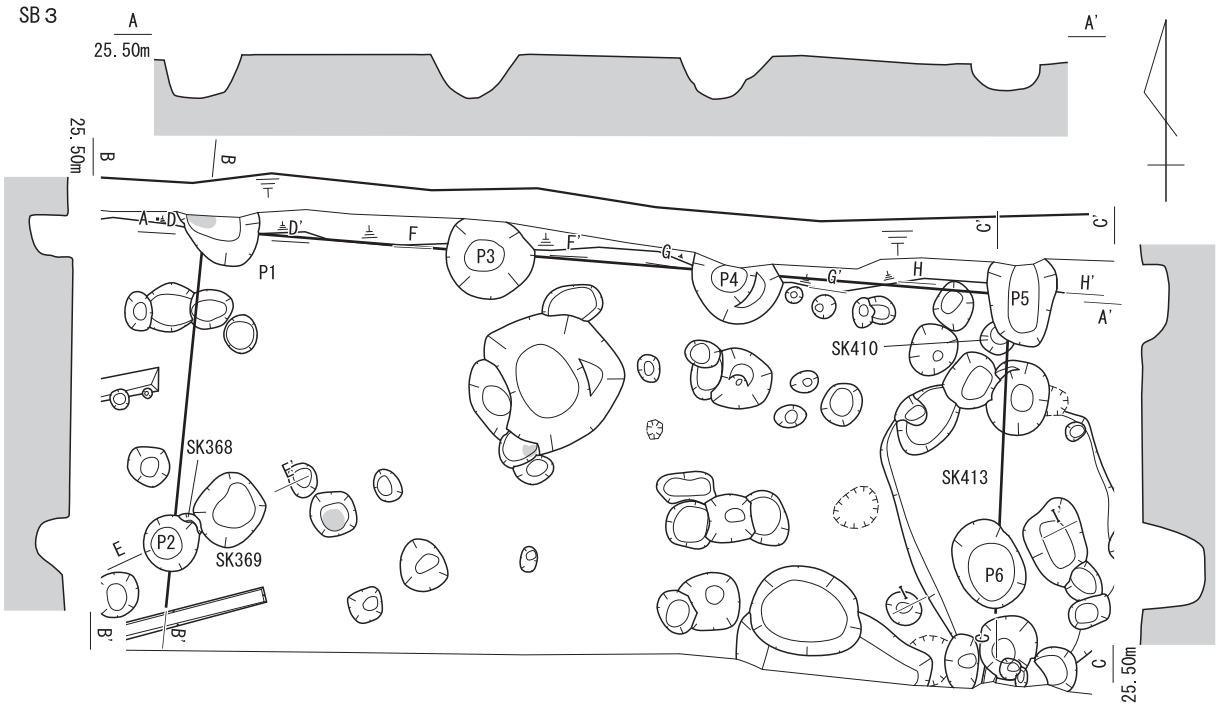
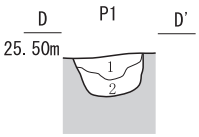
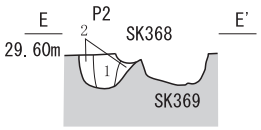


図29　SB２遺構図

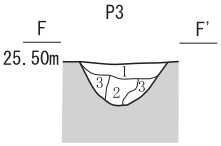




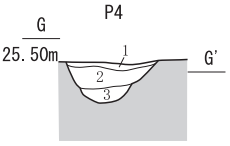
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5cm 以下の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 1cm 以下の円礫わずかに含む　長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5cm 以下の 10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む



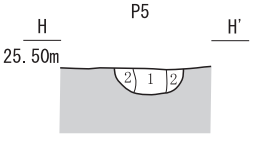
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～ 4cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　上面に径 5cm の角礫 1 点含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず



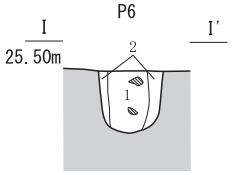
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 1cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　径 0.5 ～ 3cm の亜角礫わずかに含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 30% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず



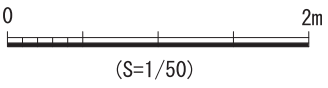
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　径 1cm の円礫 1% 含む



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
径 0.5 ～ 5cm の 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む
径 2 ～ 5cm の角礫 20% 含む　全面に鉄分多量に集積する
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
礫含まず　全面に鉄分集積する



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
径 5 ～ 8cm の亜角礫 5% 含む　全面に鉄分集積する
2　10YR4/1　褐灰色粘土（やや明るい）　しまりあり　粘性あり
礫含まず



(S=1/50)

図30　SB３遺構図

遺物　土師器はいずれも甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏身Ｂ類がある。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。本遺構の西側に位置するSB１とSB２は、主軸方位が本遺構と類似するため、同時期の遺構の可能性がある。

３　柵

SA１（図31）

検出状況　BF３・BF４グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。

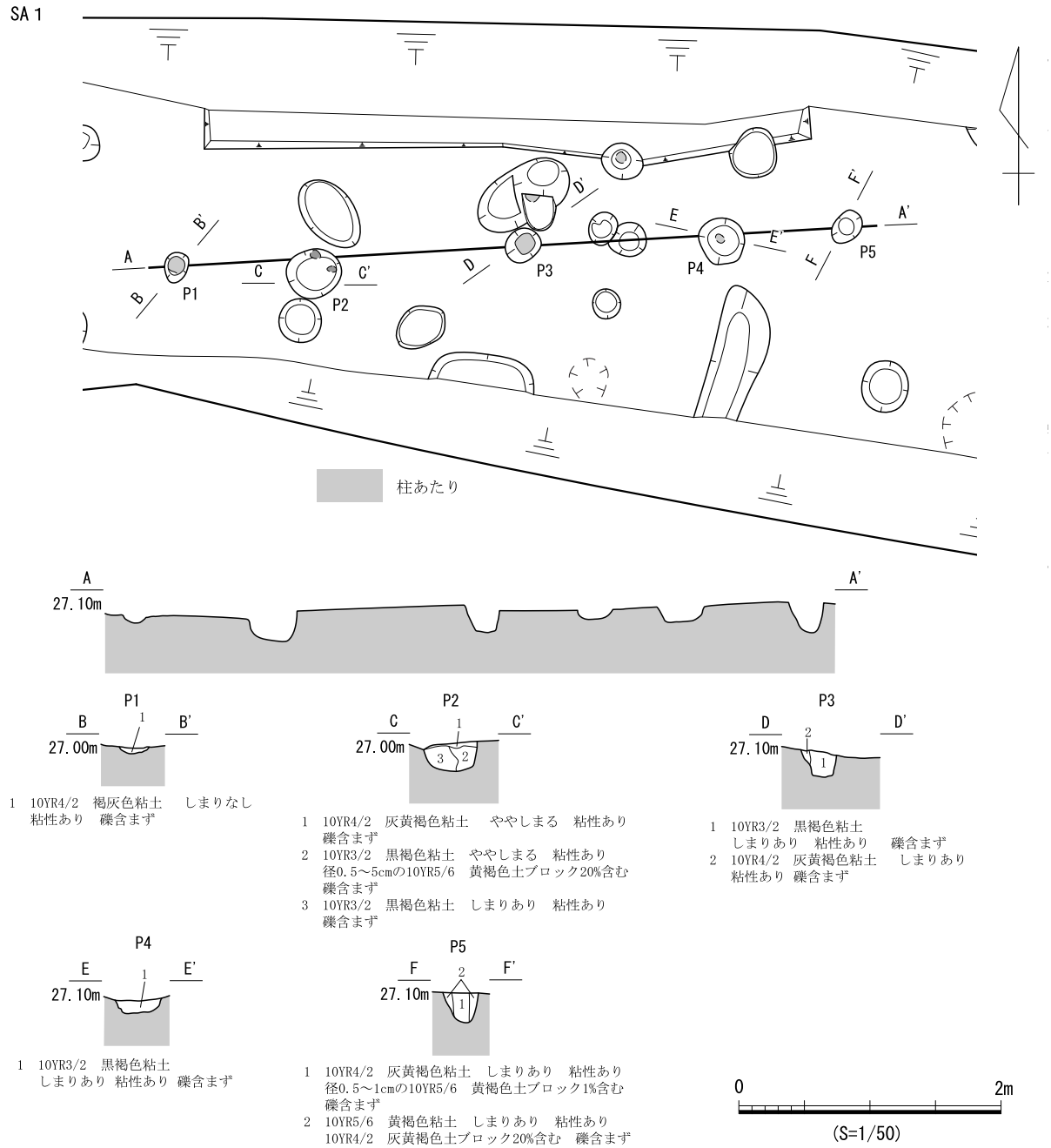


図31　SA１遺構図

規模・形状　東西方向に５基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－３°－Ｗ、柱間は１.０m～1.６m、東西長5.1mである。

柱穴　柱穴の平面形は円形及び楕円形で、径は0.24m～0.42m、深さは0.04m～0.22mである。Ｐ５では柱痕跡を確認し、Ｐ１～Ｐ４では柱あたりを確認した。

遺物出土状況　Ｐ２から土師器１点、Ｐ５の柱痕跡埋土から須恵器１点が出土した。いずれも特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器、須恵器ともに甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA２（図32）

検出状況　BG９・BG10グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ３を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SI１より新しく、SK47・SK51・SK55より古い。

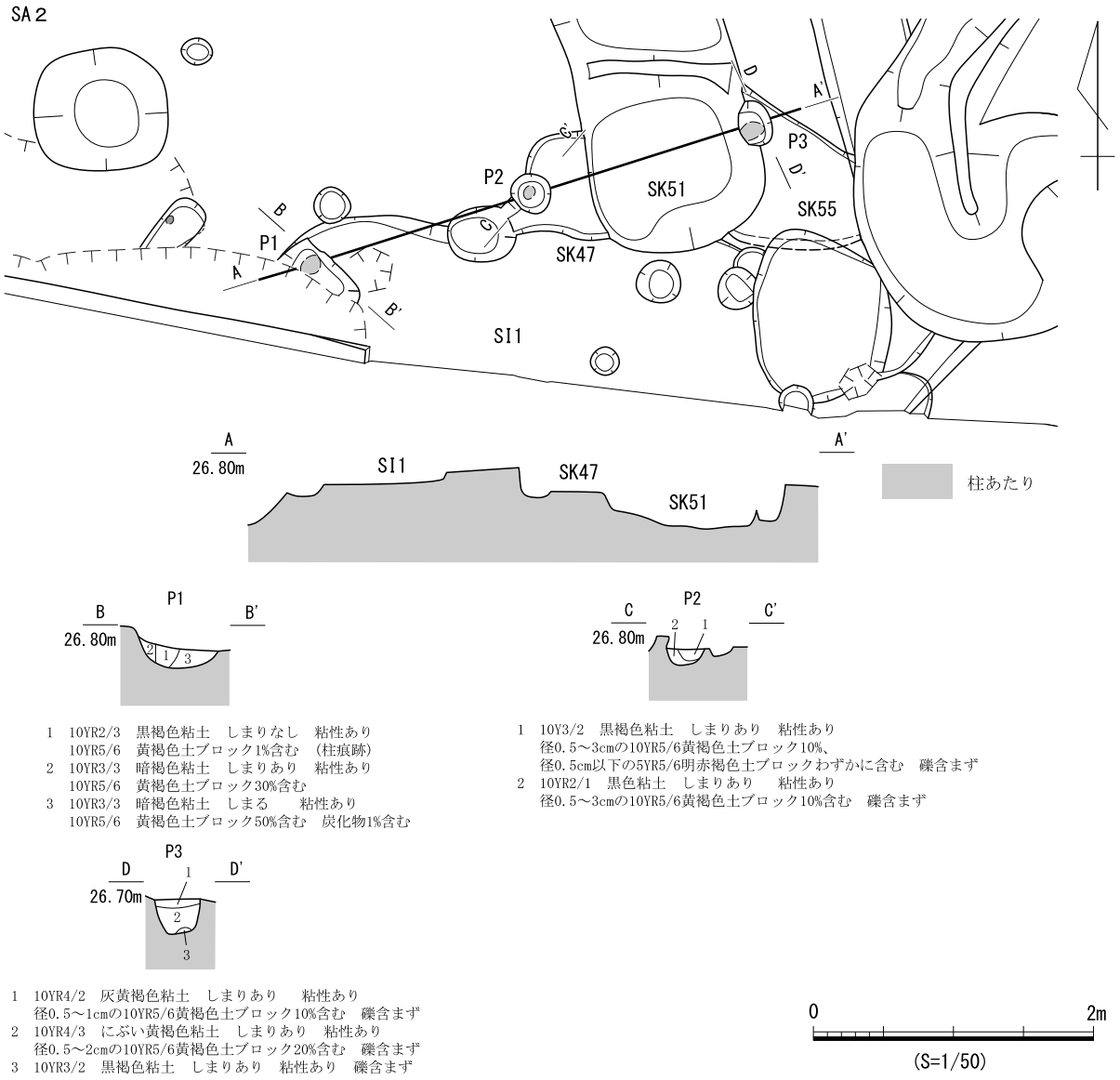


図32　SA２遺構図

規模・形状　東西方向に３基の柱穴が、ほぼ等間隔で直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－18°－Ｗ、柱間は1.6m、東西長3.2mである。西側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形及び不定形で、径は0.30m～0.61m、深さは0.12m～0.25mである。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ３では柱あたりを確認した。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　重複するSI１の出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA３（図33）

検出状況　CH４・CI４グリッド、Ⅱｂ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。

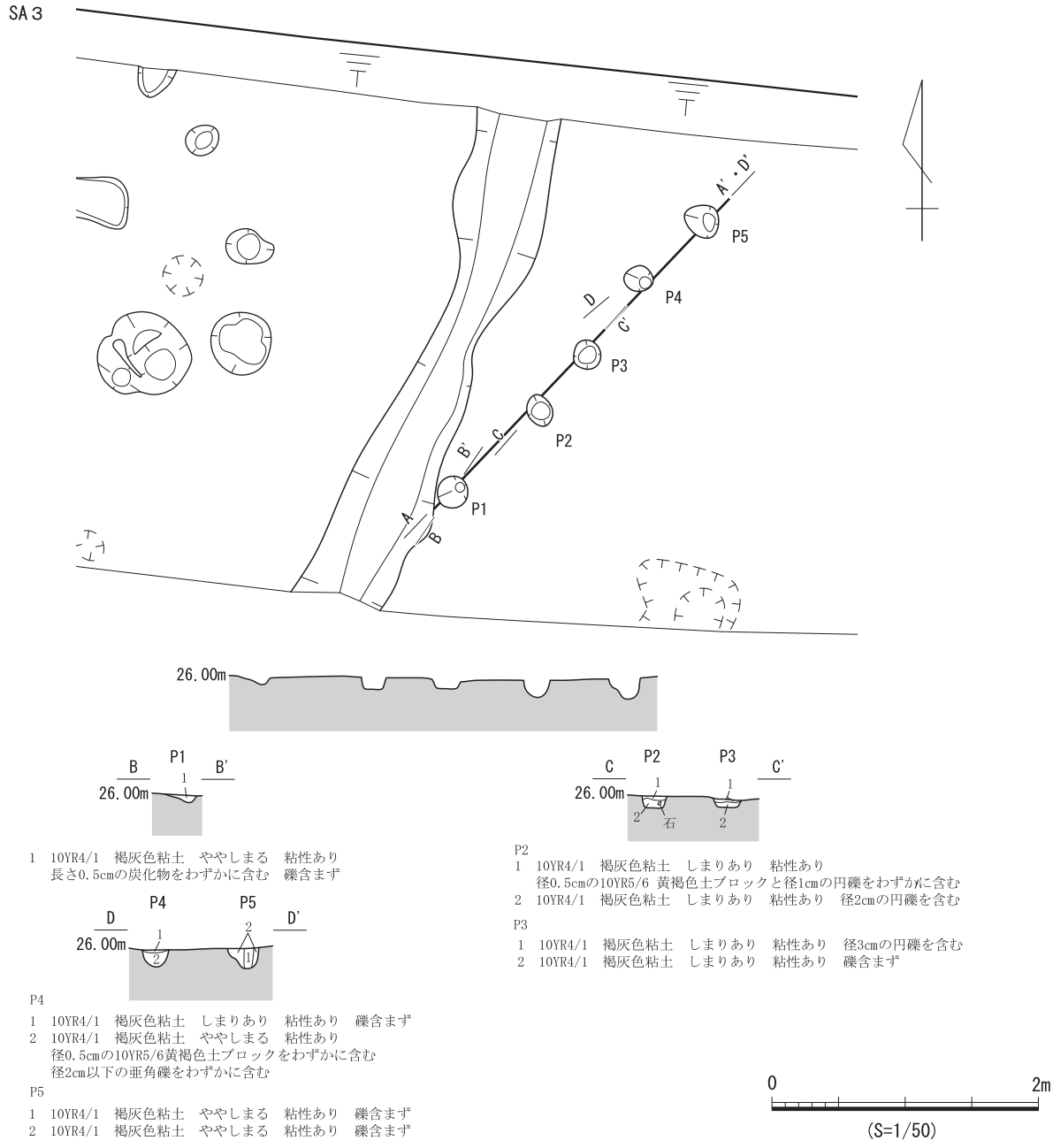


図33　SA３遺構図

規模・形状　南北方向に５基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－43°－Ｅ、柱間は0.6～0.9m、東西長2.8mである。北側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形及び不整円形で、径は0.22m～0.27m、深さは0.06m～0.15mである。Ｐ５では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　当遺構の約３m東に位置する古代の溝状遺構SD18と主軸方位が類似するため、同時期と考えられる。

SA４（図34）

検出状況　CJ15・CI16グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SB１・SK39より新しい。

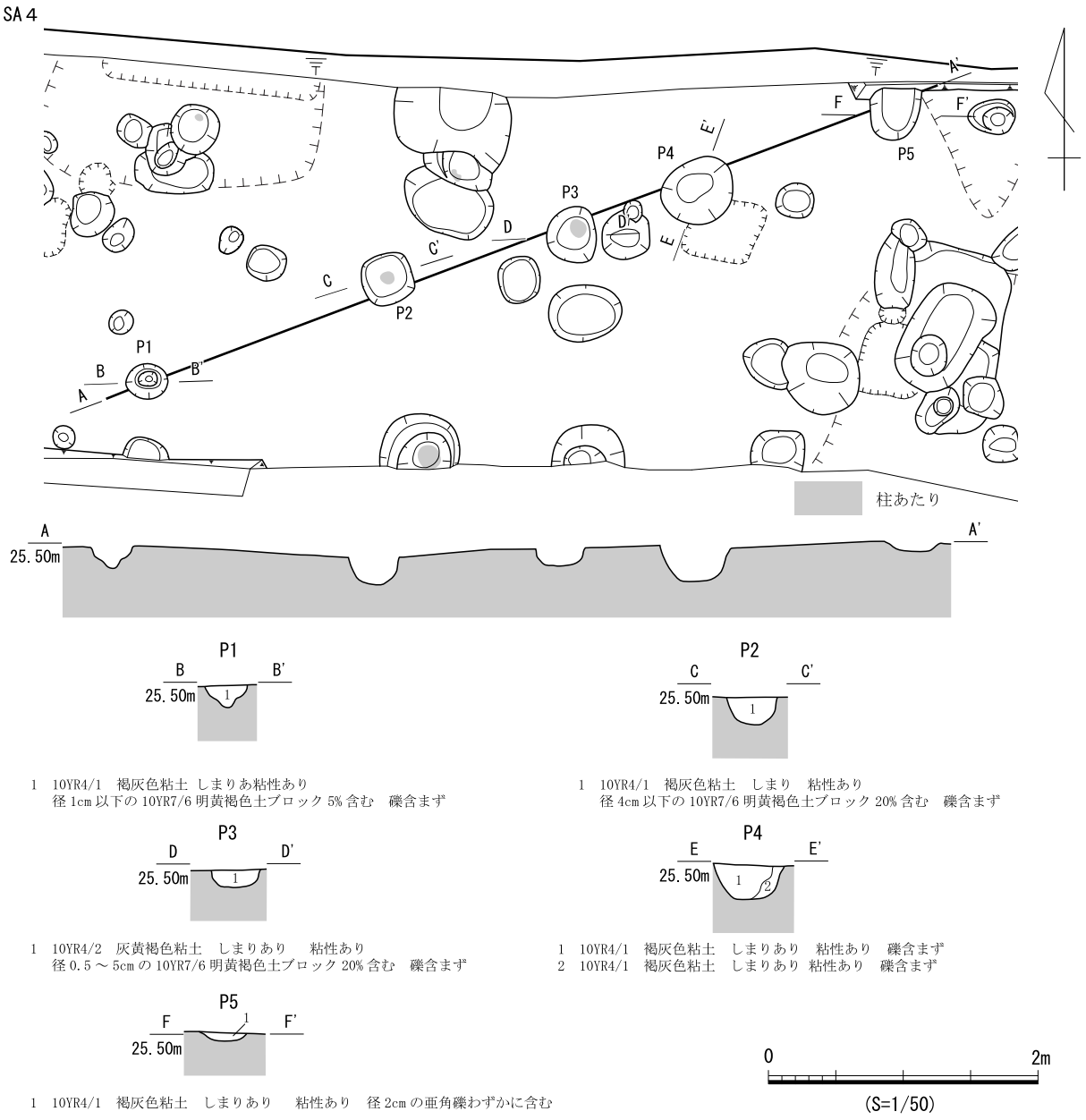


図34　SA４遺構図

規模・形状　東西方向に５基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－19°－W、柱間は1.0m～1.9m、東西長5.9mである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は不整円形及び方形で、径は0.3m～0.56m、深さは0.06m～0.26mである。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５では柱あたりを確認した。

遺物出土状況　Ｐ４から須恵器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　小片のため図示していないが、須恵器は美濃須衛産の坏蓋で、Ⅳ期の第２小期又は第３小期に比定した。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SA８（図35）

検出状況　EK４・EK５グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK138より新しく、SK156より古い。

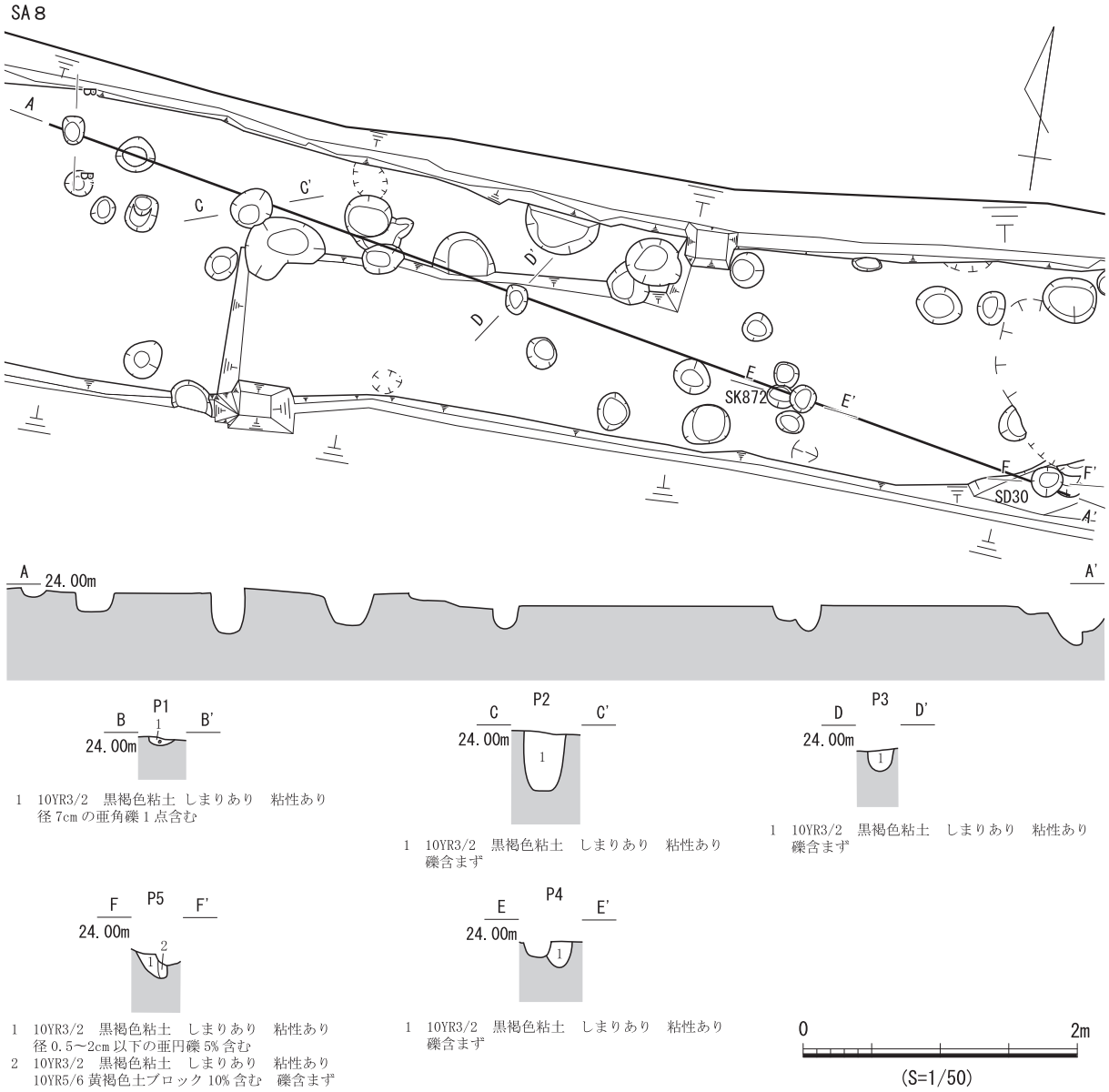


図35　SA８遺構図

規模・形状　東西方向に５基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－78°－Ｗ、柱穴間は1.0ｍ～1.5ｍ、東西長7.5ｍである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形及び不整円形で、径は0.20ｍ～0.31ｍ、深さは0.06ｍ～0.44ｍである。全ての柱穴で柱痕跡や柱あたりは確認できなかった。

遺物出土状況　Ｐ３から土師器１点、Ｐ４から須恵器１点と灰釉陶器１点が出土した。いずれも特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器は甕の胴部、灰釉陶器は碗の胴部で、いずれも小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

４　柱穴

SP９（図36）

検出状況　CL２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状　長軸長0.52ｍ、短軸長0.44ｍ、深さ0.37ｍで、平面形は不整円形である。断面形は、南東側にテラス状の段を有し、北西側が大きく掘り込まれる。最深部の底面は丸くなり、柱当たりは確認できなかった。

埋土　６層に分層した。

遺物出土状況　土師器２点が１層から、須恵器１点が３層から出土した。

遺物　土師器と須恵器はともに甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SP21（図36）

検出状況　BG11～BG12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に柱痕跡は確認できなかった。他遺構との重複関係は、SK72より古い。

規模・形状　長軸長0.40ｍ、短軸長0.38ｍ、深さ0.23ｍで、平面形は不整円形である。断面形は概ね半円形だが、東側の壁面にはやや凹凸がみられ、底面は中央部がやや深くなる。底面で柱当たりを確認した。

埋土　２層に分層した。１層は柱当たりとの位置関係から、柱痕跡と考えられる。２層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況　土師器１点と山茶碗類１点が１層から出土した。

遺物　土師器は小片のため器種不明である。山茶碗類は美濃須衛産山茶碗の壺又は瓶の胴部で、12世紀代のものである。

時期　出土遺物から12世紀以降と考えられる。

SP23（図36）

検出状況　BG12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状　長軸長0.60ｍ、短軸長0.27ｍ、深さ0.25ｍで、平面形は楕円形である。断面形は概ね逆台形状だが、壁面にはやや凹凸がみられ、底面は平坦である。柱当たりは確認できなかった。

埋土　２層に分層した。検出時に明瞭な柱痕跡を確認できなかったが、遺構半截時に１層が柱痕跡で

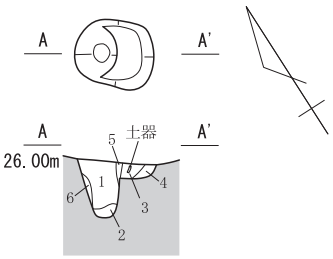
あることを確認した。２層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況　須恵器１点が１層から出土した。

遺物　須恵器は坏身の胴部である。小片のため図示しなかった。

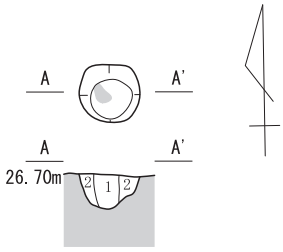
時期　出土遺物から古代以降と考えられる。

SP９



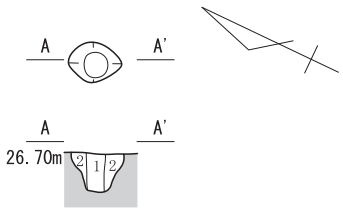
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり
径2cmの円礫わずかに含む
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり
礫含まず
3　10YR4/3　にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性あり
径2cmの円礫含む
4　10YR4/4　褐色土　しまりあり　粘性ややあり　礫
含まず
5　10YR4/4　褐色土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6
明黄褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず
6　10YR4/6　褐色土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

SP21



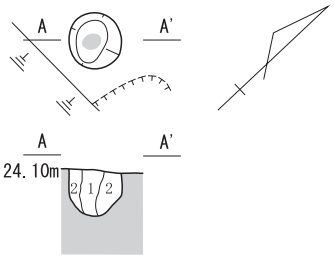
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～3cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック
40%含む　礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～4cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック
10%含む　径1～2cmの円礫1%含む

SP23



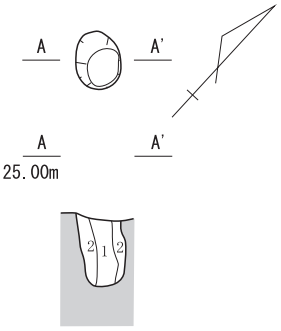
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～3cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック
20%含む　礫含まず

SP161

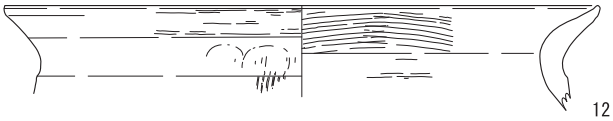


1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR5/4にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む
礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり粘性あり径
1～2cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック3
%含む　礫含まず

SP162



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
礫含まず　全面に鉄分少量集積する
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR7/6明黄褐色土ブロック3%含む　礫含ま
ず　全面に鉄分集積する



0　2m
(S=1/50)

0　10cm
(S=1/3)

図36　SP９・21・23・161・162遺構図、SP161遺物実測図

SP161（図36）

検出状況　EK２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であったが、検出時に柱痕跡は確認できなかった。

規模・形状　長軸長0.37ｍ、短軸長0.37ｍ、深さ0.31ｍで、平面形は円形である。断面形はやや深い半円形で壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸くなる。柱当たりを確認した。

埋土　２層に分層した。１層は柱当たりとの位置関係から、柱痕跡と考えられる。２層が柱掘方埋土である。柱痕跡に歪みがみられる。

遺物出土状況　土師器32点、須恵器６点が１層・２層から散在して出土した。

遺物　土師器は全て甕の破片で、分類可能なものとして、６世紀後半から７世紀前半と考えられる伊勢型長胴甕Ａ類（11）と、６世紀後半から７世紀代と考えられる伊勢型長胴甕Ｂ類（12）がある。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏蓋Ｃ類、猿投産の高蔵寺２号窯式から折戸10号窯式に比定した坏蓋Ｃ類、産地不明の美濃須衛産Ⅲ期後半併行に比定した坏身Ａ類がある。

時期　出土遺物から８世紀代と考えられる。

SP162（図36）

検出状況　DM９グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.38ｍ、短軸長0.31ｍ、深さ0.44ｍで、平面形は不整円形である。西側壁面の立ち上がりは急で、東側壁面は若干袋状となる。底面は丸くなり、最深部が東側に寄る。柱当たりは確認できなかった。

埋土　２層に分層した。柱当たりが存在しないが、底部の形状から１層は柱痕跡と考えられる。２層が柱掘方埋土である。

遺物出土状況　土師器１点が１層から出土した。

遺物　土師器は小片である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から古代以降と考えられる。

５　溝状遺構

SD６（図37）

検出状況　BG10・BG11グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP17より新しく、SK64より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－48°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.12ｍ、深さ0.07ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。礫を少量含むが、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　須恵器１点、灰釉陶器２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器は器種不明の小片である。灰釉陶器は碗の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD10（図37）

検出状況　BH17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD11・SK113より新しく、SD13より古い。当遺構の北側に隣接するSD

９は、同一遺構の可能性があるが、遺構埋土と掘方の形状が異なるため、別遺構と判断した。

規模・形状　主軸方位はＮ－４°－Ｗで、遺構の南端は発掘区外に延びる。幅0.43ｍ、深さ0.20ｍである。断面形状は、両端壁面の傾斜は緩やかだが、中央部分が一段深く掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。Ⅳ層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　山茶碗類１点が出土した。

遺物　13は尾張型第４型式の山茶碗の小碗である。

時期　出土遺物と、本遺構より古いSD11から尾張型第３型式の山茶碗が出土していることから、12世紀前半以降と考えられる。

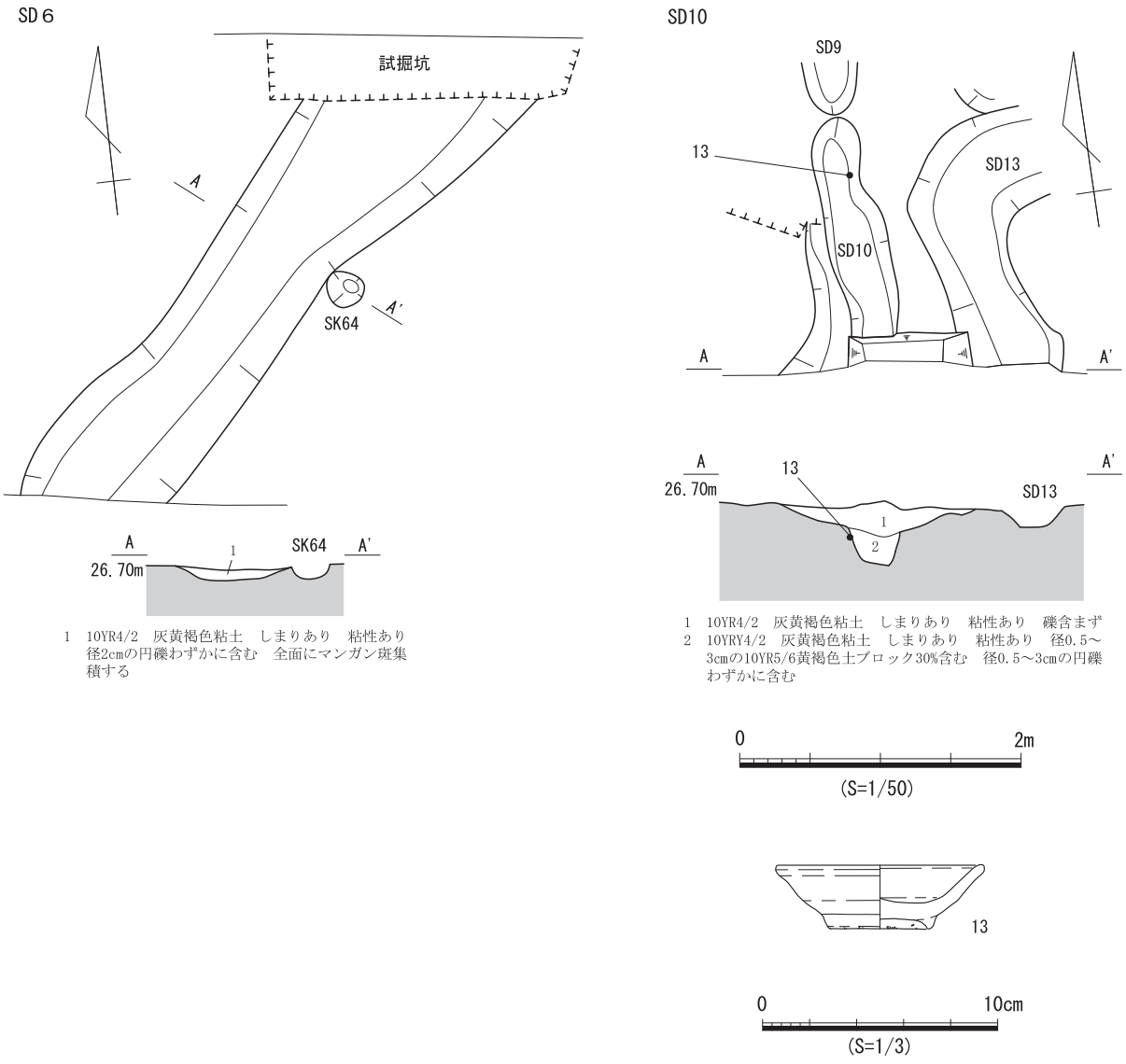


図37　SD６・10遺構図、SD10遺物実測図

SD11（図38）

検出状況　BH17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD10・SD13より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－２°－Ｗで、遺構の南端は発掘区外に延びる。幅0.41ｍ、深さ0.35ｍである。東側の壁面がオーバーハング気味に立ち上がる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。Ⅳ層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　須恵器１点、山茶碗１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器は壺又は瓶の胴部である。山茶碗類は尾張型第３型式の碗である。

時期　出土遺物から、12世紀前半以降と考えられる。

SD15（図38）

検出状況　CH１・CH２グリッド、SD16完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD16より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－20°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.62ｍ、深さ0.18ｍで、断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構と重複するSD16と主軸方位が類似する。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　６世紀から７世紀の溝SD16より古いことから、６世紀以前と考えられる。

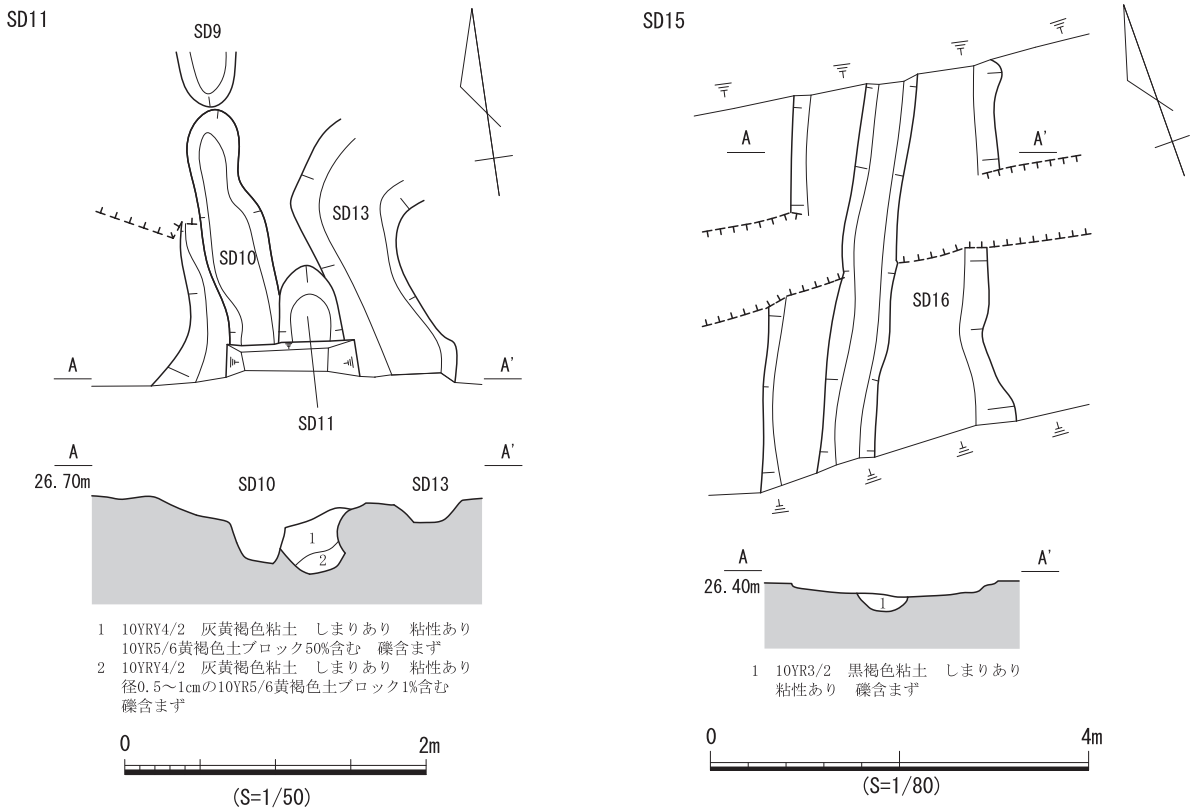


図38　SD11・15遺構図

SD16（図39）

検出状況　CＩ１グリッド、Ｉ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD９・SK114より古い。SD９と主軸方位が類似する。

規模・形状　主軸方位はＮ－20°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.68ｍ、深さ0.16ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。少量の礫を含むが、流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は、美濃須衛産Ⅱ期に比定した脚付壺と、７世紀のものと考えられる畿内系の甕である。

時期　出土遺物から、６世紀から７世紀と考えられる。

SD17（図40）

検出状況　CＩ４グリッド、Ｉ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－24°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70ｍ、深さ0.12ｍである。断面形状は浅い皿型で、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。遺構の北部では、２層埋土内に0.5㎝～20㎝の礫を多量に含む箇所を確認した。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器１点、須恵器１点、灰釉陶器１点、山茶碗類２点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部、須恵器は坏蓋で、いずれも小片である。灰釉陶器は明和27号窯式に比定した碗である。山茶碗類は碗の口縁部と胴部の小片である。

時期　出土遺物から、11世紀初頭から12世紀前半と考えられる。

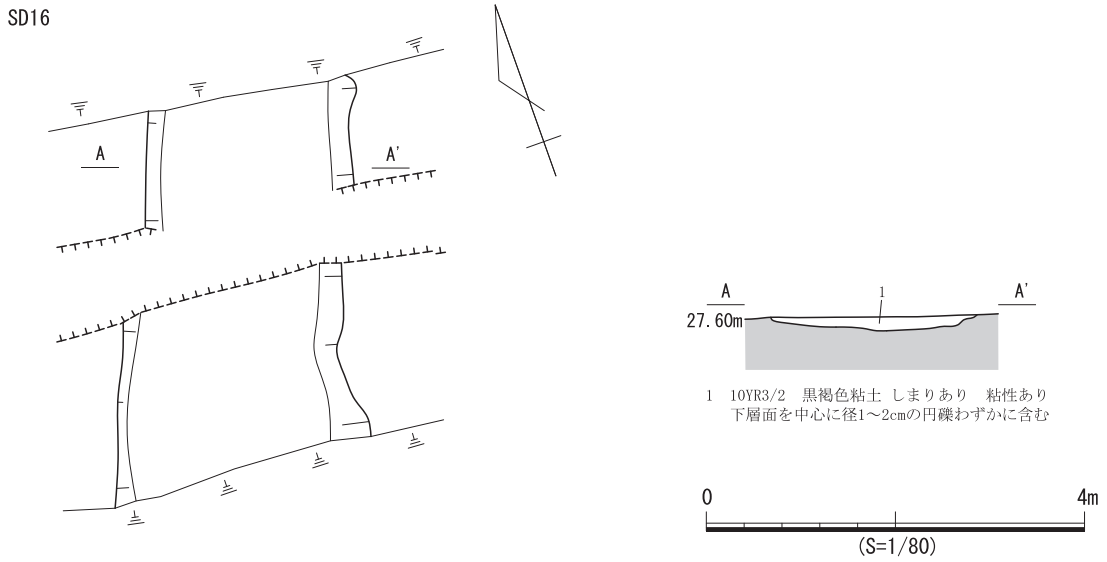


図39　SD16遺構図

SD18（図41）

検出状況　CH５・CI５グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。遺構上部が削平されているため掘方は浅く、南北に途切れる。

規模・形状　主軸方位はＮ－33°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.53ｍ、深さ0.04ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の約３ｍ西に位置するSA３と主軸方位が類似する。

埋土　単層である。基盤層であるⅣ層ブロックと少量の亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　当遺構を境にして東側は遺構が多く、西側は空閑地となっており、当遺構東側の遺構に関わる区画溝と判断した。このため、当遺構東側の遺構の所属時期から、古代以降と考えられる。

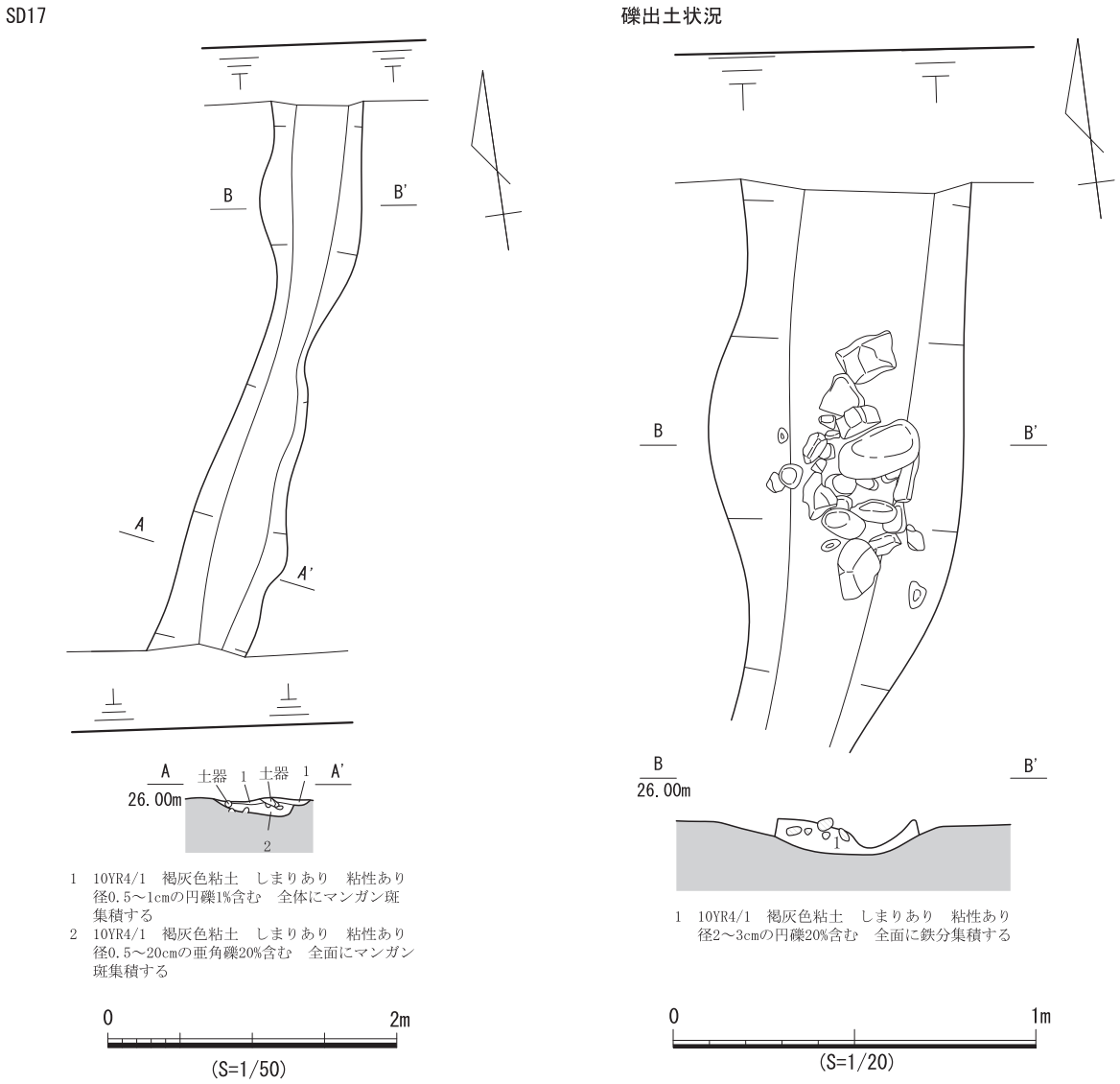


図40　SD17遺構図

SD22（図41）

検出状況　BK16～BL17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK213・SK219・SK220より古い。

規模・形状　クランク状に屈曲し、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.43ｍ、深さ0.08ｍである。断面形状は半円形で、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。基盤層であるⅣ層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物と、当遺構より新しいSK219・SK220から土師器の甕の小片が出土していることから、古代以降と考えられる。

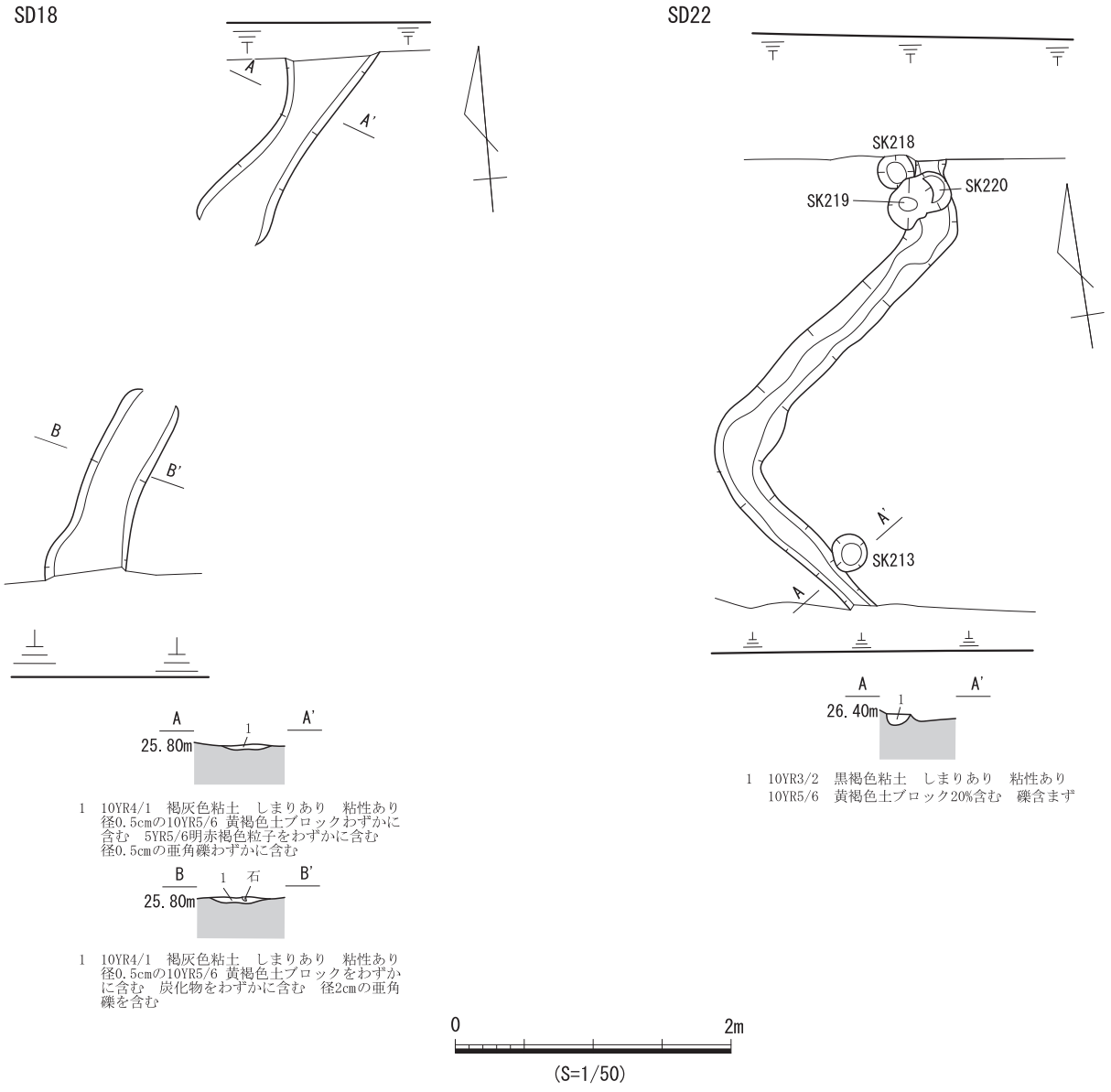


図41　SD18・22遺構図

SD23（図42）

検出状況　CL３・CM３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層のⅣ層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK261より新しく、SP32より古い。当遺構の東側に隣接するSD24とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状　主軸方位はＮ－10°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.21ｍ、深さ0.19ｍである。壁面の傾斜が急であるが、遺構の南東部にテラス状の平坦部がある。底面は平坦である。底面標高は、北から南へ緩やかに傾斜する。

埋土　３層に分層した。３層埋土に基盤層であるⅣ層ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器７点と須恵器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は小片のため、器種不明である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD25（図42）

検出状況　CI14・CJ14グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK273・SK274・SK275等より新しい。当遺構の東側に隣接するSD24とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

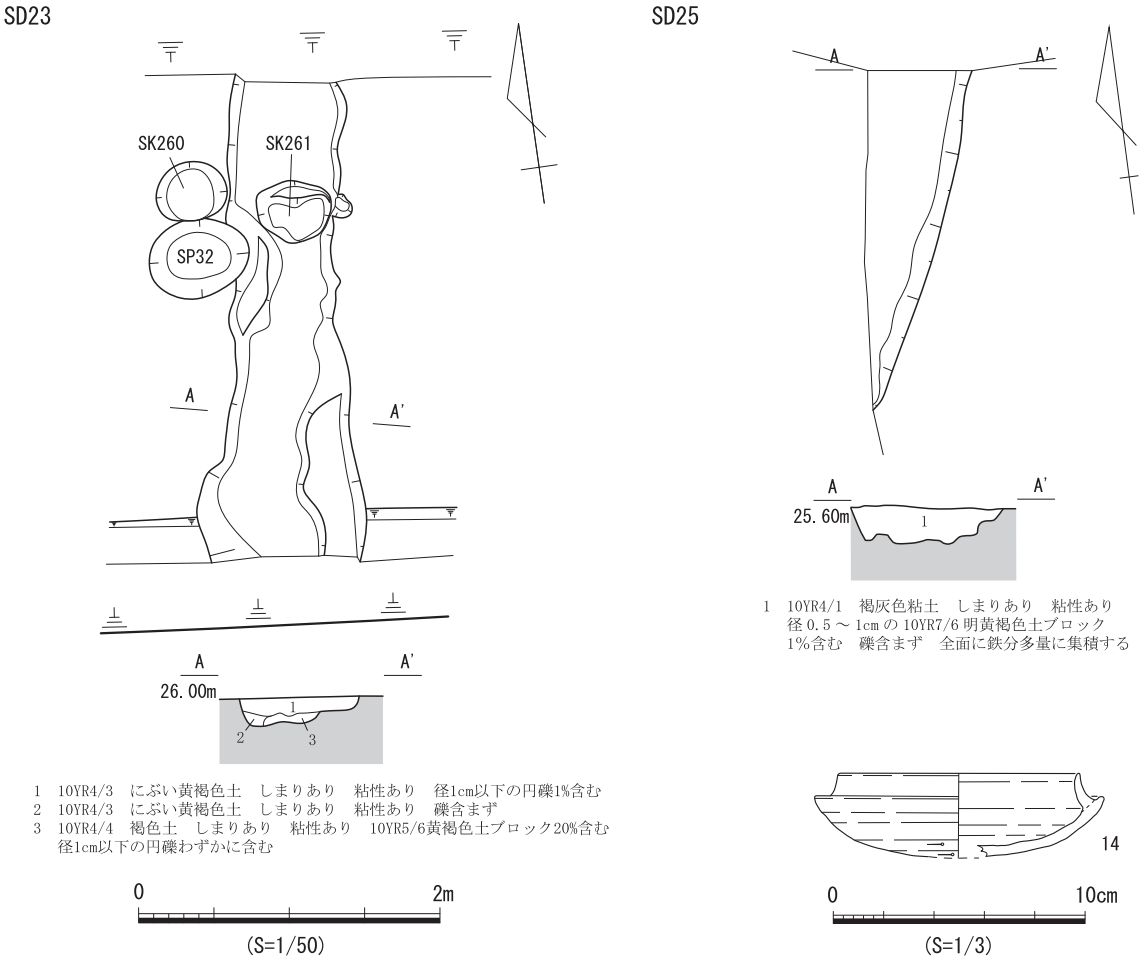


図42　SD23・25遺構図、SD25遺物実測図

規模・形状　主軸方位はＮ－21°－Ｅで、遺構の西端と南北端は発掘区外に延びる。幅0.59ｍ以上、深さ0.25ｍである。断面形状は、東側壁面の一部に階段状の立ち上がりが見られるが、大部分は緩やかに傾斜する。底面は不規則に起伏する。両端部の底面標高に大きな差は確認できない。

埋土　単層である。基盤層であるⅣ層ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　須恵器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　14は須恵器の坏身Ａ類で、美濃須衛産のⅢ期に比定した。焼成不良のため、色調が赤褐色である。

時期　出土遺物から、７世紀代と考えられる。

SD26（図43・44）

検出状況　DJ２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似しており、平面形は不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP72より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－32°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.47ｍ以上、深さ0.35ｍである。壁面には部分的にテラス状の平坦部分が存在する。遺構南部では西側壁面の傾斜が急であるが、北部では西側壁面の傾斜が緩やかになる。底面標高は北から南に向かって緩やかに傾斜する。

埋土　４層に分層した。ほぼ水平堆積で、４層は砂礫を含むシルトで、流水による堆積と考えられるが、埋土全体の堆積状況は不明である。

遺物出土状況　縄文土器７点、土師器140点、須恵器36点、山茶碗類３点、常滑産陶器１点、瓦８点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとしては、７世紀又は８世紀の濃尾型長胴甕、11世紀又は12世紀代の伊勢型鍋がある。美濃須衛産の須恵器では、Ⅲ期後半又はⅣ期第１小期に比定した坏蓋Ｃ類、Ⅳ期第３小期に比定した盤、Ⅳ期に比定した坏身Ｃ類（15）、Ⅱ期又はⅢ期に比定した甕（16）とⅣ期に比定した甕（17）、猿投産の須恵器では、岩崎17号窯式期に比定した坏身Ｂ類（18）と壺（19）がある。山茶碗類は尾張型第３型式併行に比定した東濃型の碗（20）である。常滑産陶器は甕の胴部の小片である。瓦は全て平瓦で、布目痕の残存状況が良好な１点（21）を図示した。石製品は砂岩製の台石（22）である。扁平な円礫で、一面に堅果類を設置できるような凹みを有する。

時期　出土遺物から、12世紀以降と考えられる。

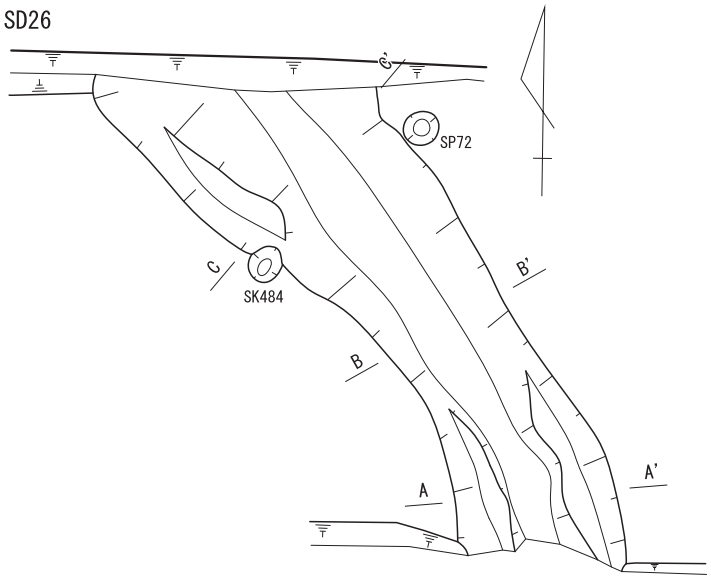
SD27（図45）

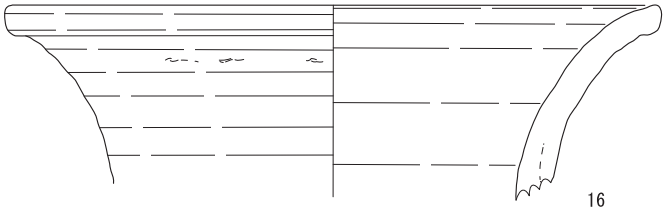
検出状況　DJ９・DJ10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK731より古い。

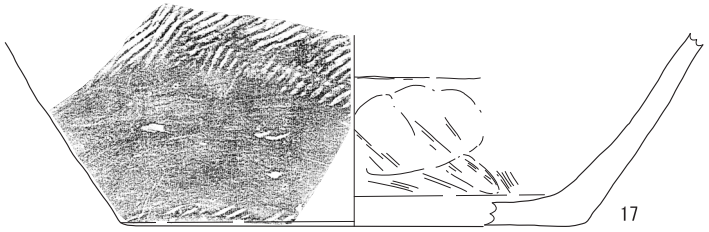
規模・形状　主軸方位はＮ－19°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.84ｍ以上、深さ0.63ｍである。遺構北部の底面は、方形の土坑状に一段深く掘り込まれ、東西の壁面は緩やかに立ち上がる。

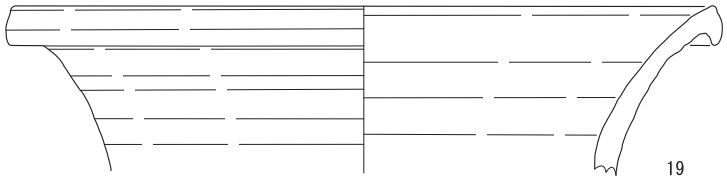
埋土　５層に分層した。ほぼ水平堆積で、５層ともに礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

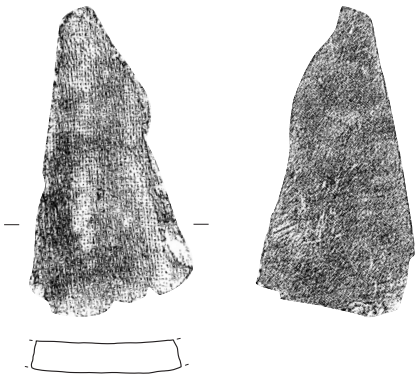
遺物出土状況　土師器１点、須恵器５点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

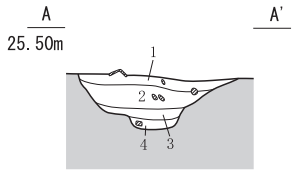




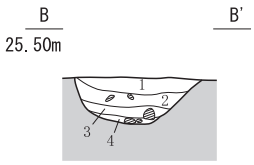




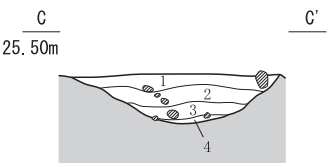




1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 1cm の亜角礫わずかに含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 2cm の亜円礫 1% 含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 3cm の亜角礫 15% 含む　わずかに細砂含む
4　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 6 cmの亜円礫 10%と中砂多量に含む

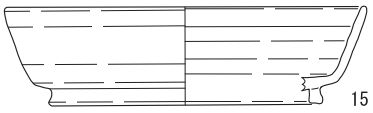


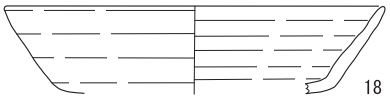
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 2cm の円礫 5% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 5cm の亜角礫 10% 含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 3cm の亜角礫 20% 含む　わずかに細砂含む
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 11 cmの亜角礫 40%と中砂多量に含む

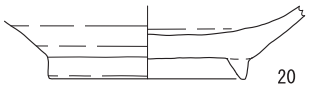


1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 4cm の亜円礫 5% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1 ～ 3cm の亜角礫 5% 含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 3cm の円礫 10% 含む　わずかに細砂含む
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 10 cmの亜角礫 10%と中砂多量に含む

(S=1/50)







(S=1/3)

図43　SD26遺構図、遺物実測図（１）

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期に比定した坏身Ａ類（23）、産地不明の６世紀初頭の坏蓋Ａ類（24）がある。

時期　出土遺物から、７世紀以降と考えられる。

SD28（図45）

検出状況　DJ11グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似しており、平面形は不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP121・SK742・SK743より新しい。

規模・形状　主軸方位はＮ－17°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.91ｍ以上、深さ0.16ｍである。断面形状は概ね逆台形で、遺構南部の東側壁面にテラス状の平坦部分が存在する。底面標高は南から北に向かって緩やかに深くなる。

埋土　単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水による堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器18点、須恵器２点、灰釉陶器３点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器は甕の胴部と底部の小片である。灰釉陶器の分類可能なものとして、黒笹90号窯式に比定した猿投産の皿（25）がある。25は内外面とも器面全体が刷毛塗りによって施釉される。

時期　出土遺物から、９世紀後半以降と考えられる。

SD30（図46）

検出状況　EK５・EK６グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－48°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70ｍ以上、深さ0.08ｍである。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。底面標高は北から南に向かって緩やかに傾斜する。

埋土　２層に分層した。堆積状況は不明である。流水による堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器２点出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SD35（図46）

検出状況　DM２・DM３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK976・SK977・SK980より新しく、SK973より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－10°－Ｅで、遺構の西端は発掘区外に延びる。幅1.21ｍ以上、深さ0.19ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差は

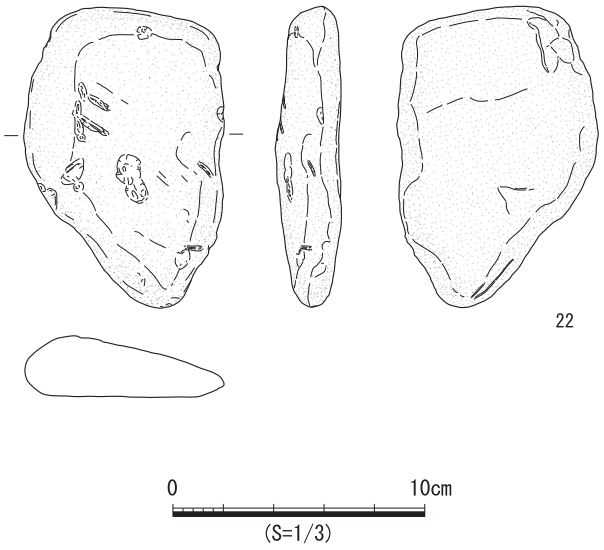


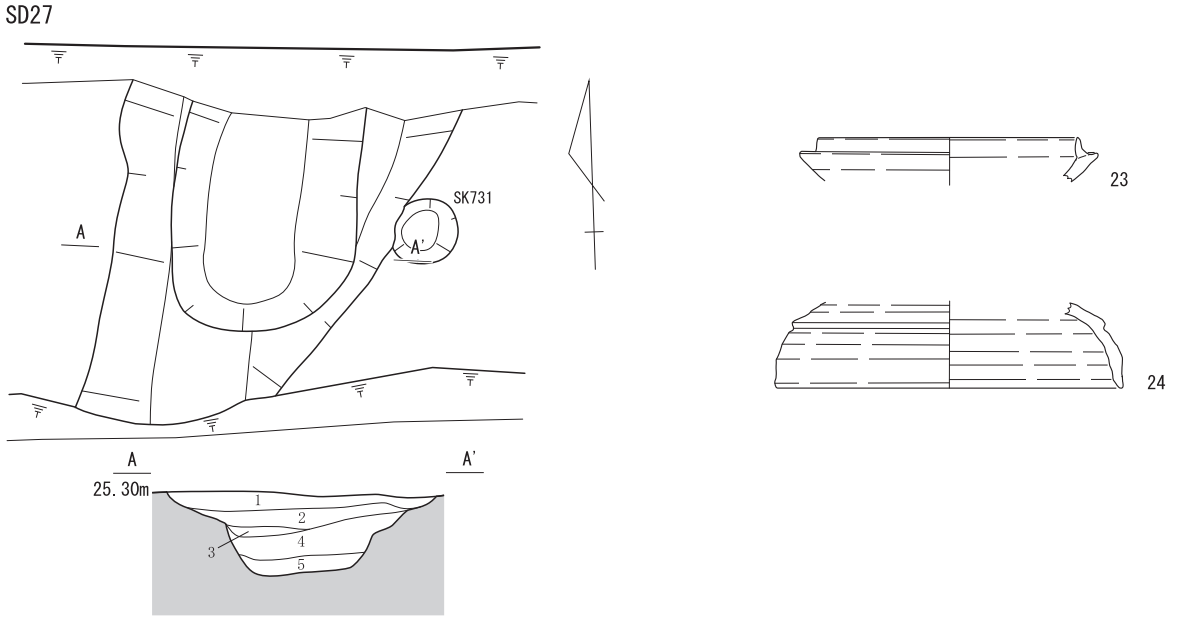
図44　SD26遺物実測図（２）

ない。

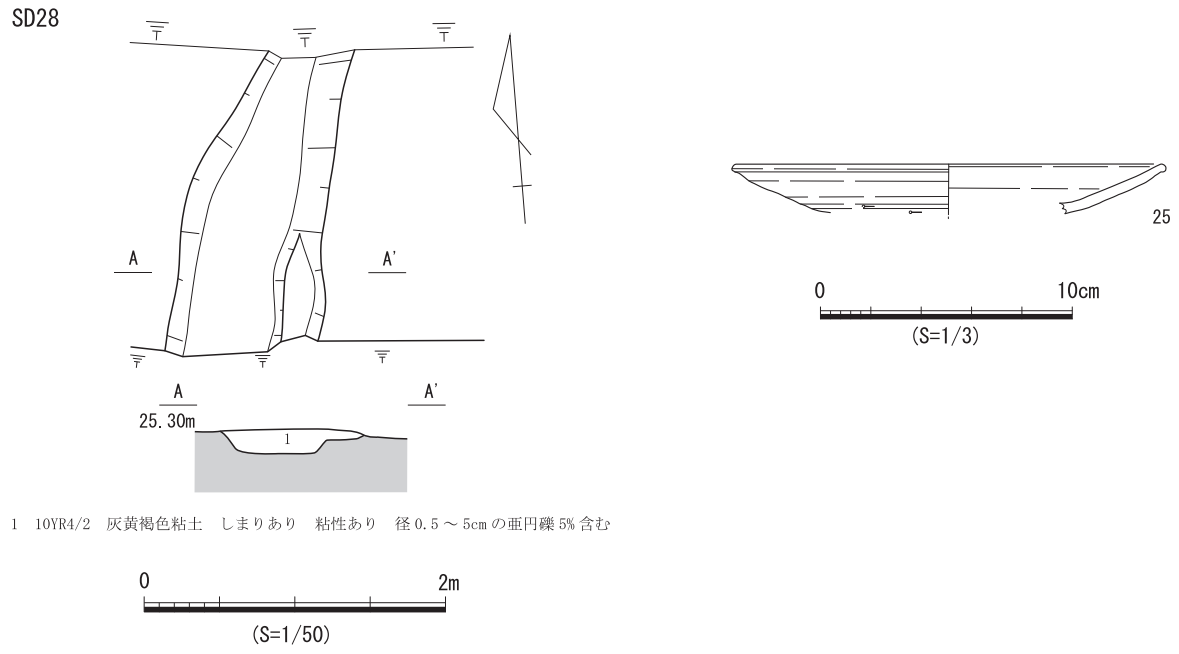
埋土　単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　須恵器４点、灰釉陶器３点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期又はⅣ期に比定した坏蓋Ｃ類がある。灰釉陶器は碗の小片である。



1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～5cmの亜円礫5%含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径０.５～２cmの亜円礫10%含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　細礫（亜角礫）40%含む
4　10YR3/2　黒褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　径０.５～３cmの円礫10%　極細砂20%含む
5　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　しまりあり　粘性あり　径0.5～3cmの円礫15%　極細砂10%含む



1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径０.５～５cmの亜円礫5%含む

図45　SD27・28遺構図、遺物実測図

時期　当遺構の北側に並行する中世の溝SD34と同時期の可能性があるが、出土遺物から、古代以降と判断した。

SD36（図46）

検出状況　DN１～DM２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD34より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－71°－Ｅである。幅0.16ｍ、深さ0.05ｍで、全体的に掘方が浅く、遺構中央部で東西に分断する。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の周辺に位置するSD33・SD34・SD35と主軸方位が類似する。

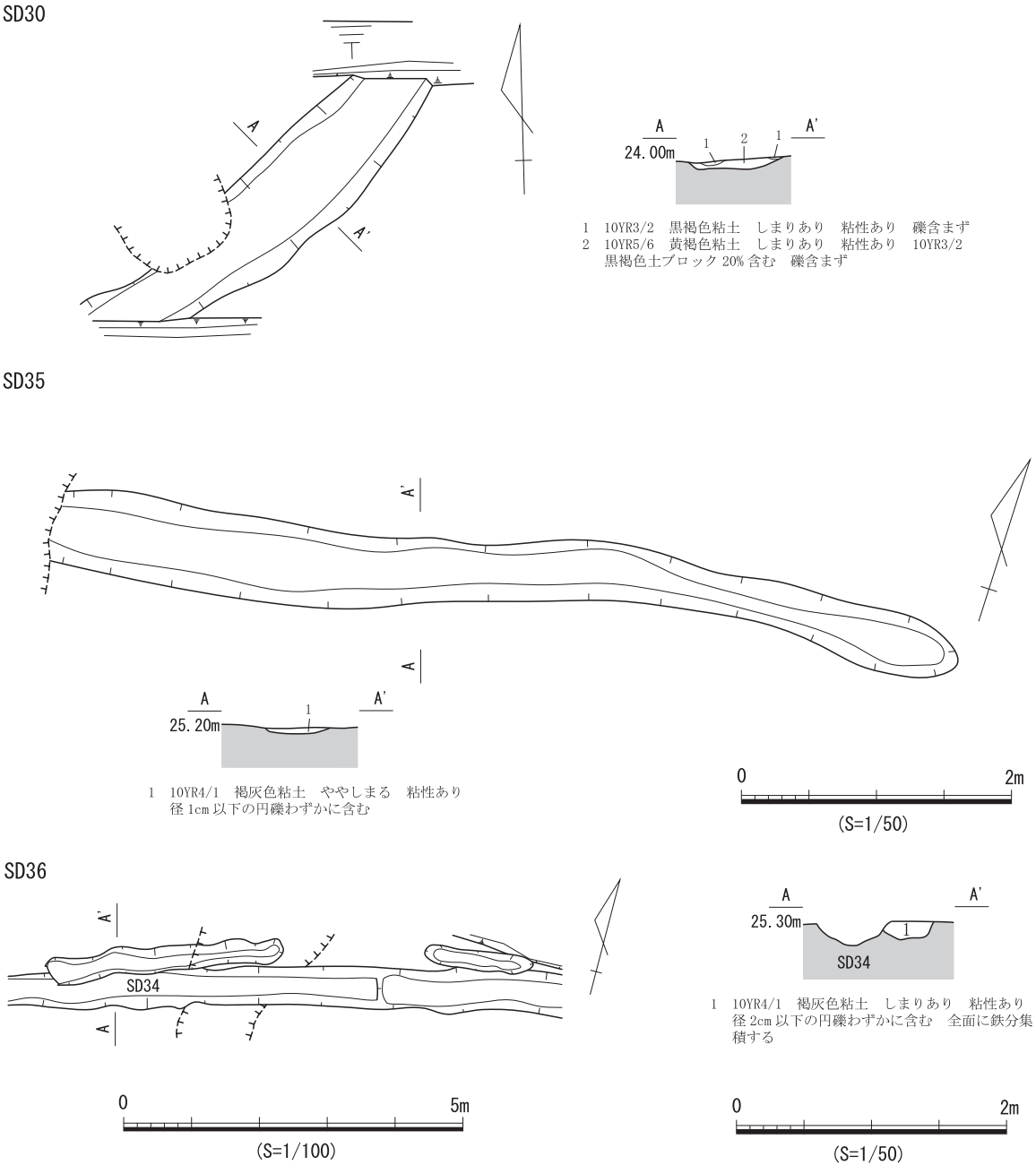


図46　SD30・35・36遺構図

埋土　単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

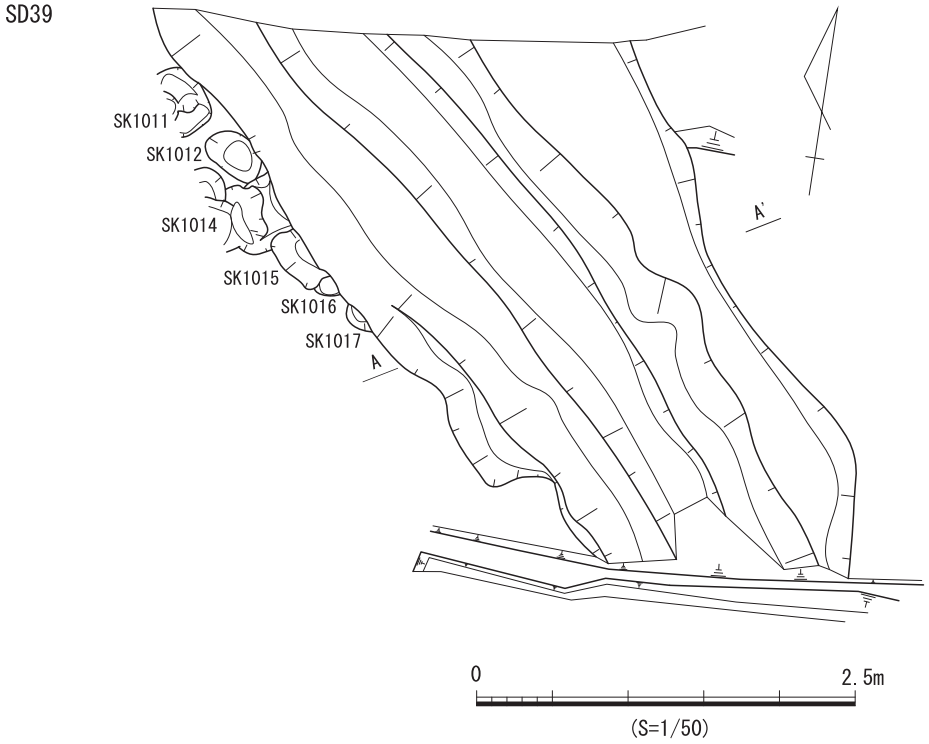
遺物出土状況　土師器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

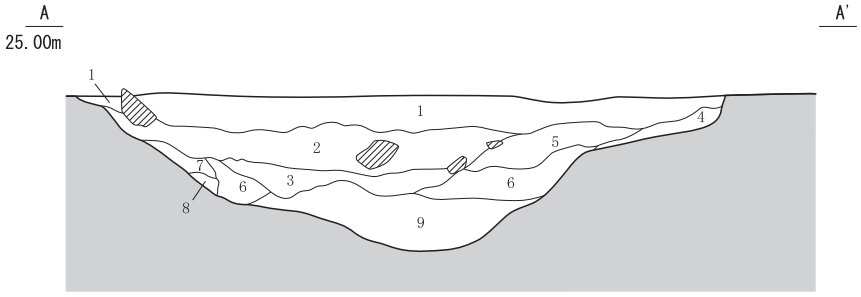
遺物　土師器は甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物と中世の溝SD34より古いことから、古代と考えられる。

SD39（図47・48）

検出状況　DM７・DN７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP219・SK1011・SK1012等より新しい。





1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径2cm以下の円礫1%含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり径10cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック1%含む　径２～14cmの亜角礫5%含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
4　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径２～5cm以下の亜角礫1%含む
5　10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径3cm以下の10YR4/1褐灰色土ブロック10%含む　礫含まず
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径1cm以下の10Y5/6黄褐色土ブロックわずかに含む
7　10YR4/1　褐灰色粘土（やや明るい）　しまりあり　粘性あり　径2cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロック20%含む　礫含まず
8　10YR6/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
9　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり上面に径３～8cmの亜角礫、底面から5cm上までの下面に2cm以下の亜角礫80%含む

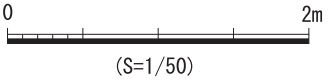


図47　SD39遺構図

規模・形状　主軸方位はＮ－43°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.38ｍ以上、深さ0.52ｍである。東側壁面にテラス状の平坦面が広がり、底面は丸みを帯びる。底面標高は北から南に向かって緩やかに深くなる。

埋土　９層に分層した。６層～８層は基盤層であるⅣ層ブロックを含み、崩落土と考えられる。９層は多量の亜角礫を含み、人為的な堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　縄文土器２点、土師器17点、須恵器32点、灰釉陶器３点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は甕の胴部と坏（26）で、23は口縁部が大きく外反する。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅣ期第３小期に比定した台付皿（27）、Ⅳ期第３小期又はＶ期第１小期に比定した台付盤（28）、Ｖ期第１小期に比定した坏身Ｃ類（29・30）、Ⅳ期に比定した壺（31）がある。29の底部外面には「吉祥」の墨書がある。灰釉陶器は猿投産の黒笹14号窯式に比定した碗（32）と皿（33・34）である。33は無高台の大型の皿で、内面に陰刻花紋が施される。石製品はチャート製のＲＦ（35）である。側辺に連続した調整がみられるが、刃部は確認できない。

時期　出土遺物から、９世紀代と考えられる。

SD39

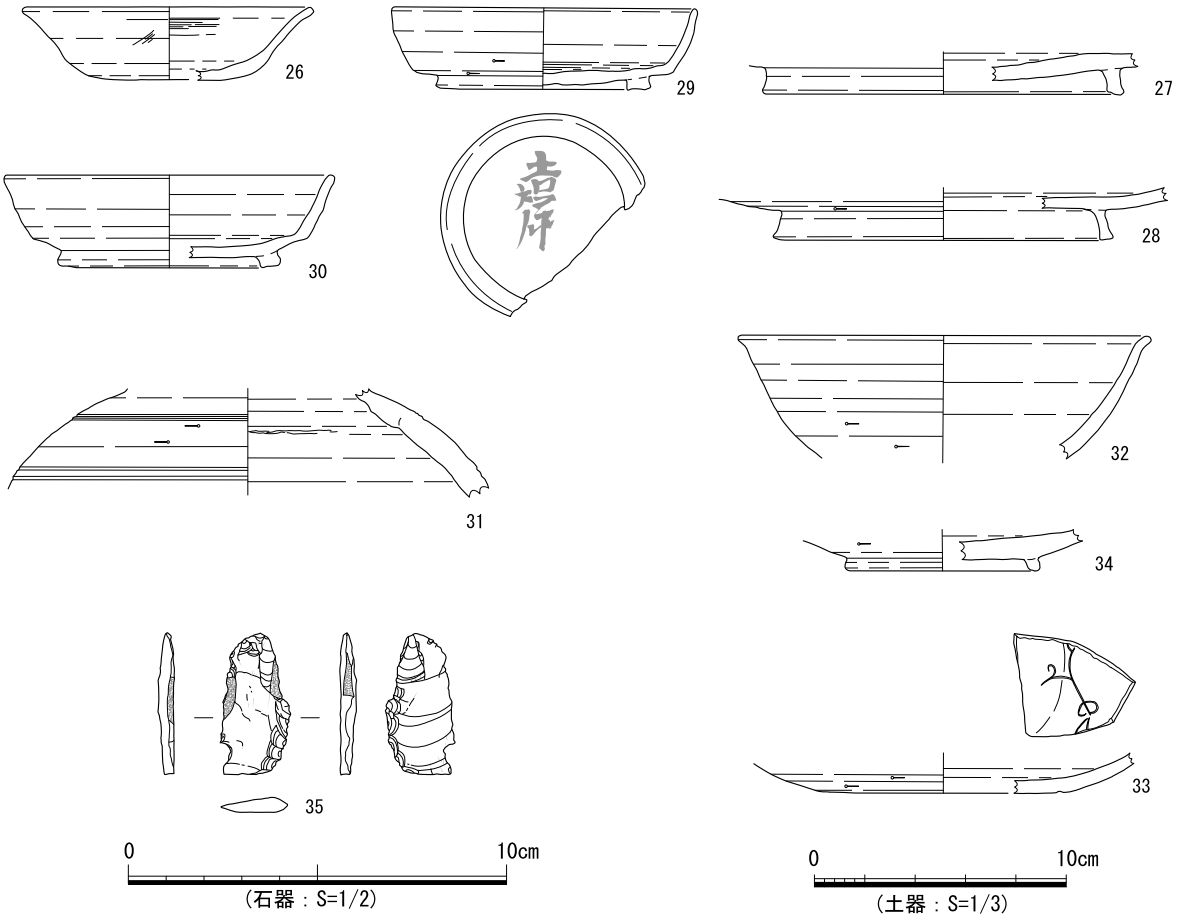


図48　SD39遺物実測図

SD43（図49）

検出状況　DN11・DN12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－56°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.26ｍ以上、深さ0.05ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

６　土坑

SK31（図50）

検出状況　BF４・BF５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長1.19ｍ、短軸長1.20ｍ、深さ0.51ｍであり、平面形は不定形である。北部から東部にかけてテラス状の段を有し、中央部が深くなる。最深部の底部は丸くなる。

埋土　５層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器１点、須恵器３点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の小片である。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期第１小期又は第２小期に比定した甕（36）がある。

時期　出土遺物から、８世紀前半以降と考えられる。

SK34（図50）

検出状況　BF５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.22ｍ、短軸長0.20ｍ、深さ0.10ｍであり、平面形は不整円形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土　単層である。少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　須恵器１点が底面から出土した。

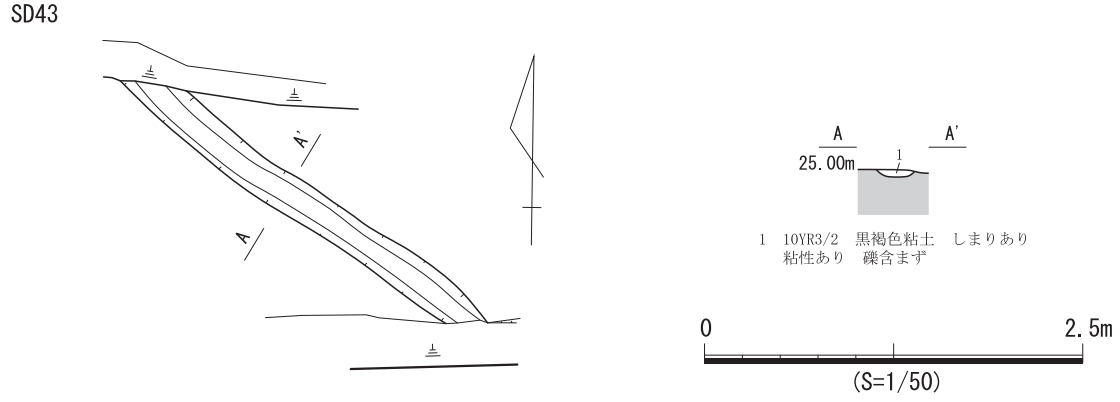


図49　SD43遺構図

出土遺物　37は美濃須衛産Ⅲ期又はⅣ期に比定した甕である。

時期　出土遺物から、８世紀前半以降と考えられる。

SK43（図50）

検出状況　BG９グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.96ｍ、短軸長0.86ｍ、深さ0.51ｍであり、平面形は隅丸方形である。断面形は概ね逆台形だが、西側壁面は丸く立ち上がる。底面は平坦になる。

埋土　２層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土中に基盤層ブロックが混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器６点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅱ期に比定した坏身Ａ類（38）がある。38は口径が推定約９㎝と小型である。

時期　出土遺物から、７世紀前半以降と考えられる。

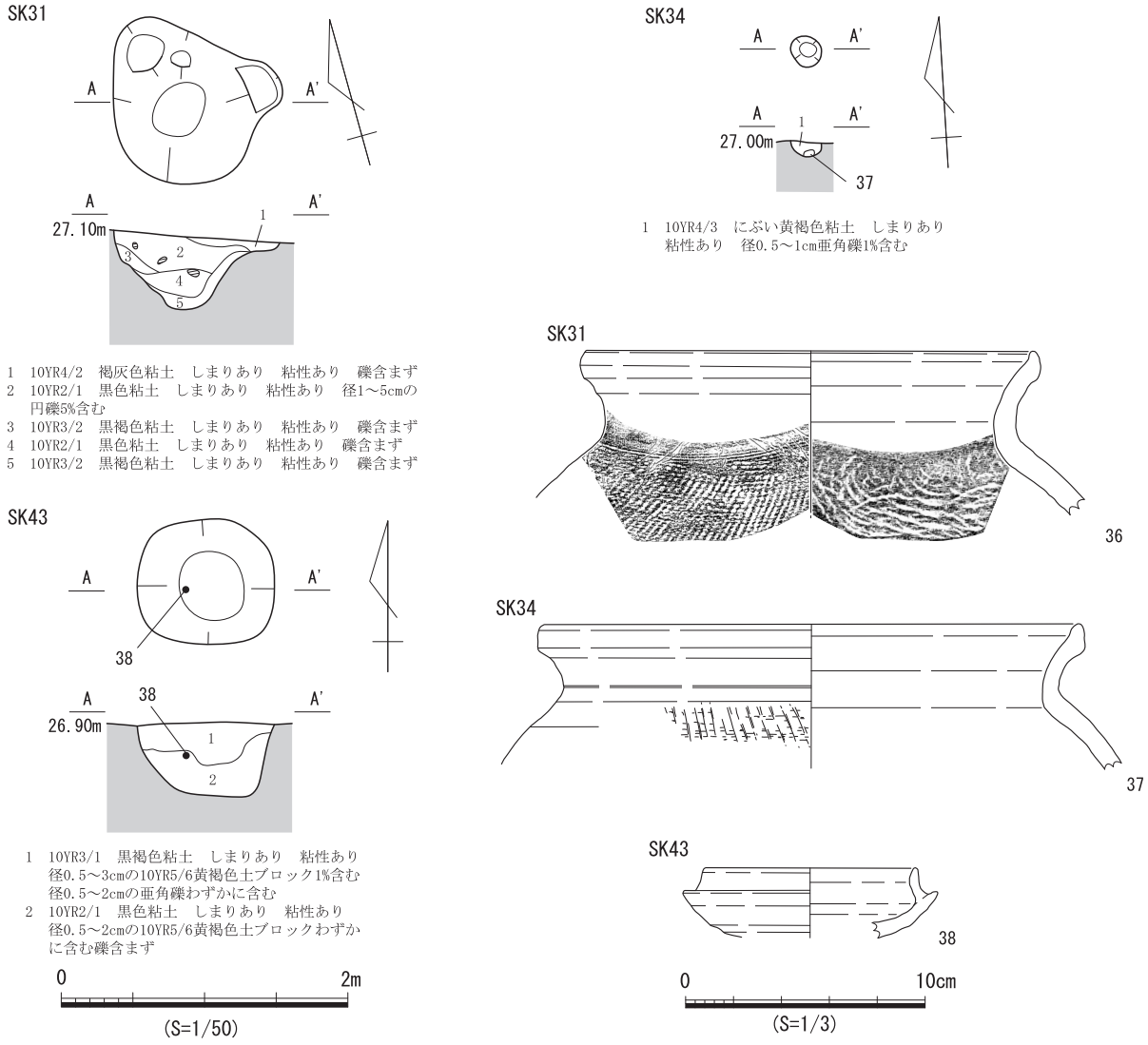


図50　SK31・34・43遺構図、遺物実測図

SK55（図51）

検出状況　BG10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA２より新しく、SD４・SK51・SK56等より古い。

規模・形状　長軸長0.97ｍ、短軸長0.64ｍ以上、深さ0.08ｍであるが、他遺構と重複するため全形は不明である。断面形は浅い皿状で、北側の壁面は直立気味に立ち上がる。底面は広く平坦になる。

埋土　２層に分層した。埋土中に基盤層ブロック土が混じることから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器２点が１層埋土から出土した。

出土遺物　須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏身Ａ類（39）がある。39は外面胴部に直線状のヘラ描沈線が施される。

時期　出土遺物から、７世紀前半以降と考えられる。

SK56（図52）

検出状況　BG10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SI１・SD４・SK55等より新しく、SK58より古い。

規模・形状　長軸長1.25ｍ以上、短軸長0.92ｍ以上、深さ0.13ｍである。他遺構と一部重複するが、平面形は概ね不整円形と考えられる。断面形は浅い皿状で、底面は広く平坦になる。

埋土　４層に分層した。１層・２層は複雑な堆積状況を示し、焼土ブロックや炭化物が混じる。また、１層・２層と３層との層界には凹凸がみられ、３層にも焼土ブロックや炭化物が混じるため、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器23点、須恵器８点、金属製品１点が、２層・３層から散在して出土した。

出土遺物　土師器は分類可能なものとして、７世紀代から８世紀代の濃尾型長胴甕（40）がある。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏蓋Ｃ類（41）、美濃須衛産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した水瓶（42）、猿投産東山61号窯式又は蝮ヶ池窯式に比定した甕（43）がある。41は内面の摩滅が著しく、墨痕が沈着することから、転用硯として用いられたと考えられる。43は大型の甕で、外面にはヘラ描波状文と３条の平行沈線が施され、内面には回転台を用いた細密なハケ目痕が残る。金属製品は鉄製の角釘（44）である。

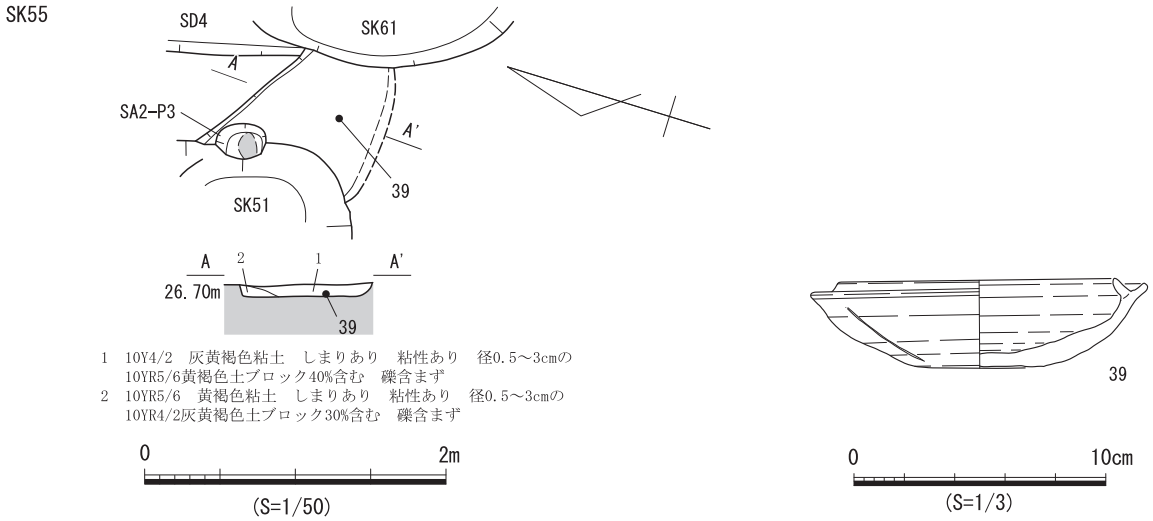
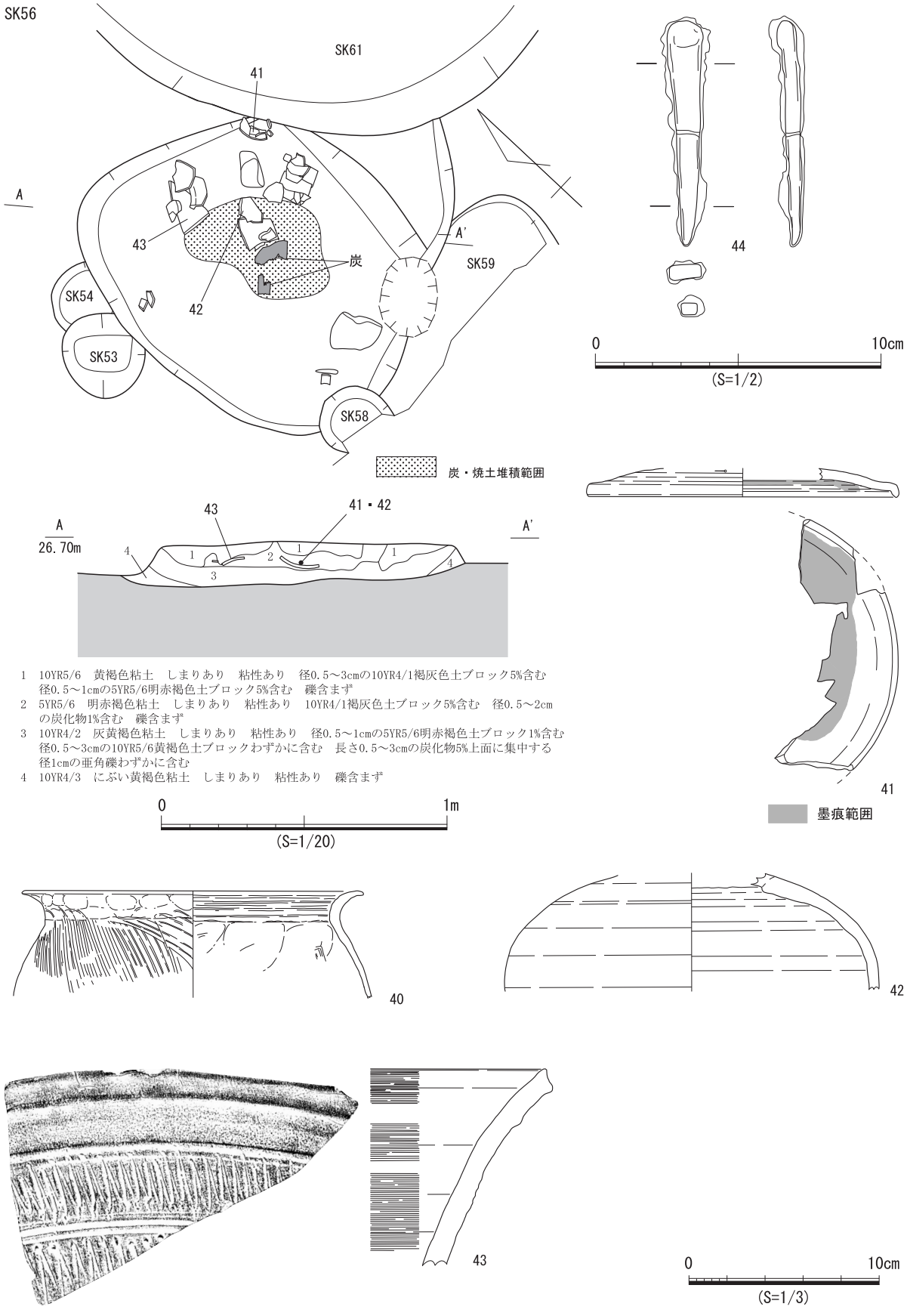


図51　SK55遺構図、遺物実測図



1　10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～3cmの10YR4/1褐灰色土ブロック5%含む
径0.5～1cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック5%含む　礫含まず
2　5YR5/6　明赤褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR4/1褐灰色土ブロック5%含む　径0.5～2cm
の炭化物1%含む　礫含まず
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～1cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック1%含む
径0.5～3cmの10YR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む　長さ0.5～3cmの炭化物5%上面に集中する
径1cmの亜角礫わずかに含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

図52　SK56遺構図、遺物実測図

時期　出土遺物から、８世紀以降と考えられる。

SK72（図53）

検出状況　BG12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP21より古い。

規模・形状　長軸長0.37ｍ以上、短軸長0.32ｍ、深さ0.08ｍである。SP21と一部重複するが、平面形は概ね楕円形と思われる。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土　単層である。

遺物出土状況　縄文土器２点、土師器２点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　縄文土器は浅鉢（45）の口縁部である。45は口縁端部上面に工具による刺突列が、口縁部外面には凹線による文様が施され、後期後葉のものと考えられる。土師器は甕の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK88（図53）

検出状況　BG・BH14グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK87・SK93・SK100等より古い。

規模・形状　長軸長3.52ｍ、短軸長3.20ｍ、深さ0.11ｍである。撹乱坑によって遺構北部が消失し、南側は発掘区外となるため、全形は不明である。底面は概ね平坦になるが、一部に凹凸がみられる。

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器22点、須恵器34点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部小片で、分類可能なものとして濃尾型長胴甕の底部（46）がある。46の外部底面には木葉痕が残る。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した高坏の脚部、Ⅳ期に比定した坏蓋Ｃ類、Ⅳ期第２小期に比定した無台盤（47）、Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した有台盤（48）がある。

時期　出土遺物から、８世紀以降と考えられる。

SK132（図54）

検出状況　BF７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.81ｍ以上、短軸長0.80ｍ、深さ0.20ｍであり、平面形は概ね隅丸方形である。断面形は逆台形だが、壁面はやや丸く立ち上がる。底面は平坦になる。

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器８点、須恵器２点が出土した。

出土遺物　須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅴ期に比定した盤がある。

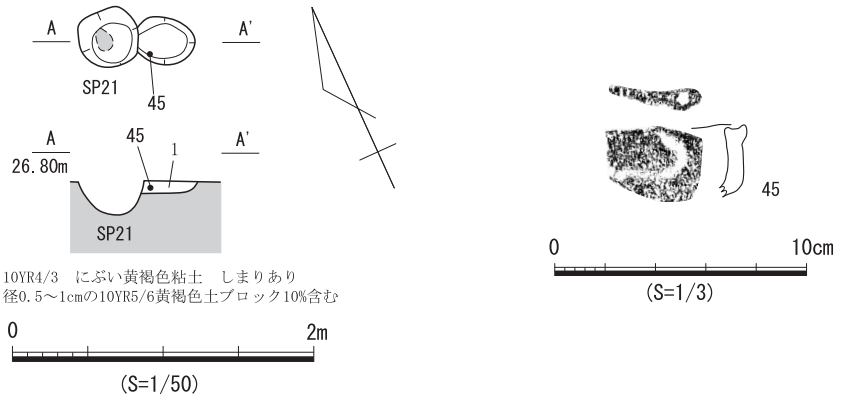
時期　出土遺物から、９世紀以降と考えられる。

SK158（図54）

検出状況　CI２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。遺構埋土上面に炭化物や焼土ブロックが散布していたが、埋土が基盤層と類似するため平面形は不明瞭であった。特に遺構北部の輪郭が漸移的で不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK144より新しく、SK142より古い。

規模・形状　長軸長1.42ｍ以上、短軸長1.16ｍ、深さ0.15ｍである。南北方向に長い楕円形状と思わ

SK72



SK88

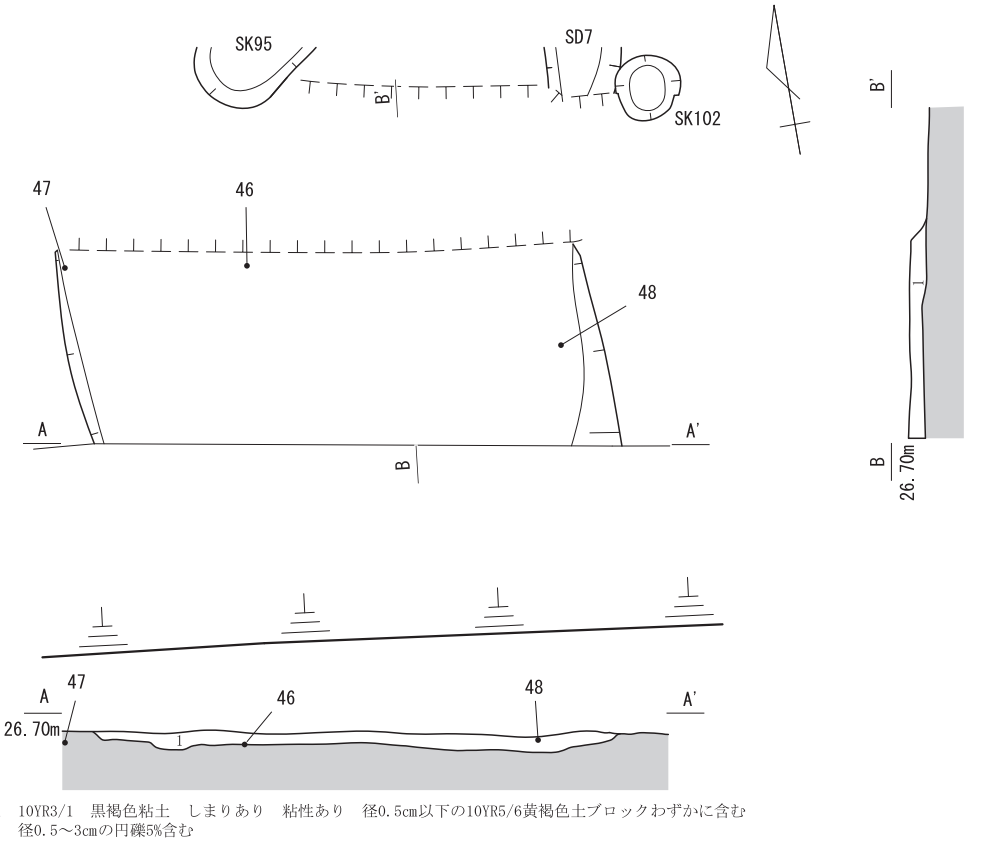
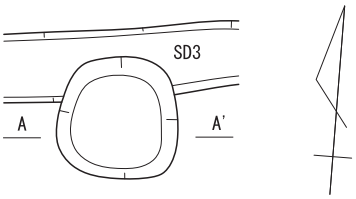
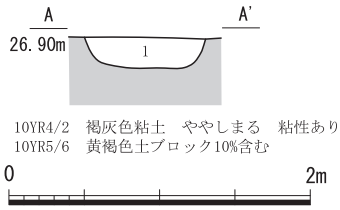


図53　SK72・88遺構図、遺物実測図

SK132

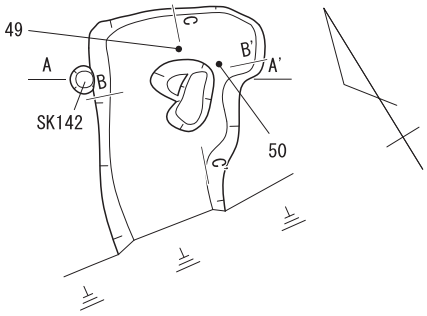


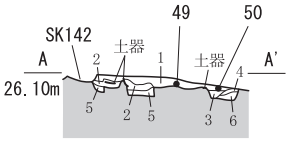


1　10YR4/2　褐灰色粘土　ややしまる　粘性あり
10YR5/6　黄褐色土ブロック10%含む

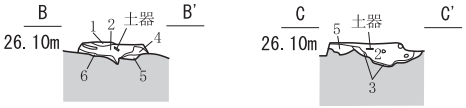
(S=1/50)

SK158





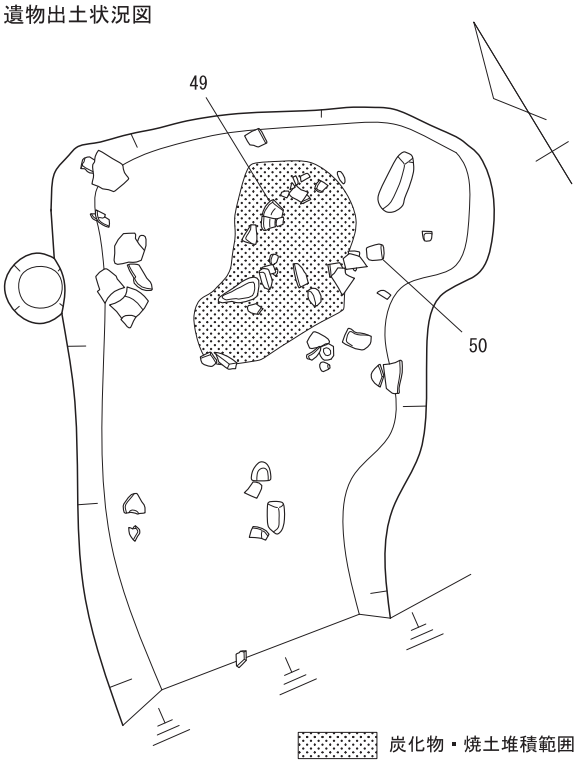
A-A'
1　10YR3/4　暗褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～2cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック1%含む　径2cmの7.5YR6/8橙色土ブロック、10YR5/6黄橙色土粒子わずかに含む長さ0.5cm以下の炭化物、径0.5～2cmの円礫わずかに含む
2　10YR4/4　褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む　径0.5cm以下の5YR5/6明赤褐色土ブロックわずかに含む　円礫わずかに含む
3　10YR3/4　暗褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～3cmの5YR5/6明赤褐色土ブロック5%含む　径0.5cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む　円礫わずかに含む
4　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径3cmの10YR3/4褐色土ブロック20%含む　径1cmの円礫1%含む
5　10YR3/4　暗褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック20%含む　5YR5/6明赤褐色土粒子わずかに含む
6　10YR3/4　暗褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径3cmの円礫30%含む



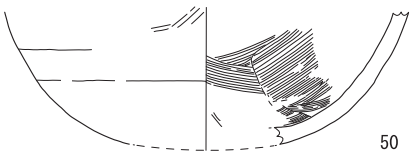
B-B'・C-C'
1　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径4cmの10YR5/8黄褐色土ブロック20%含む　5YR5/6明赤褐色土ブロック（焼土）5%含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　全面に5YR5/6明赤褐色土ブロック（焼土）50%含む　径0.5cmの炭化物わずかに含む
3　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　YR5/6明赤褐色土ブロック（焼土）5%含む　礫含まず
4　10YR3/3　暗褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cmの10YR5/4にぶい黄褐色土ブロック5%含む　5YR5/6明赤褐色土ブロック(焼土)1%含む　長さ1cmの炭化物わずかに含む　礫含まず
5　10YR3/3　暗褐色粘土しまりあり　粘性あり　径0.5cmの5YR5/6明赤褐色ブロックわずかに含む　径1cmの亜角礫わずかに含む
6　10YR5/4　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～2cmの円礫5%含む

(S=1/50)

遺物出土状況図



(S=1/20)



(S=1/3)

図54　SK132・158遺構図、SK158遺物実測図

れるが、南側が発掘区外に広がるため全形は不明である。底面は概ね平坦になるものの、やや凹凸がみられる。遺構中央部には掘り込みが確認でき、掘り込みの北西部にはテラス状の段がみられる。

埋土　検出面から約0.15m掘り下げた時点で、遺構中央部付近において、炭化物と焼土を多量に含む堆積を確認し、カマドや炉等の存在を想定した。このため、炭化物・焼土堆積範囲をＢ－Ｂ'断面・Ｃ－Ｃ'断面で四分割して掘り下げたが、カマドや炉と考えられる焼土堆積や構造物、埋土が面的に被熱・変色している状況は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器89点、須恵器３点、灰釉陶器１点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、７世紀代の丸底甕（49・50）がある。須恵器はいずれも甕の胴部の小片である。灰釉陶器は碗の胴部の小片である。

時期　出土遺物から、９世紀以降と考えられる。

SK165（図55）

検出状況　CI５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構埋土上面で焼土ブロックと炭化物を確認した。

規模・形状　長軸長0.82m、短軸長0.65m、深さ0.16mであり、平面形は隅丸方形である。断面形は浅い皿状で、壁面は直線的に開く。底面は概ね平坦である。完掘後の南壁と西壁で、被熱の痕跡を確認した。

埋土　４層に分層した。埋土中に基盤層ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。また、埋土全体に焼土ブロックと炭化物を少量含むが、遺構壁面の被熱の痕跡との関係は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかったが、２層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

時期　放射性炭素年代測定によって、炭化物の伐採年は679年から771年という結果が出た。このこと

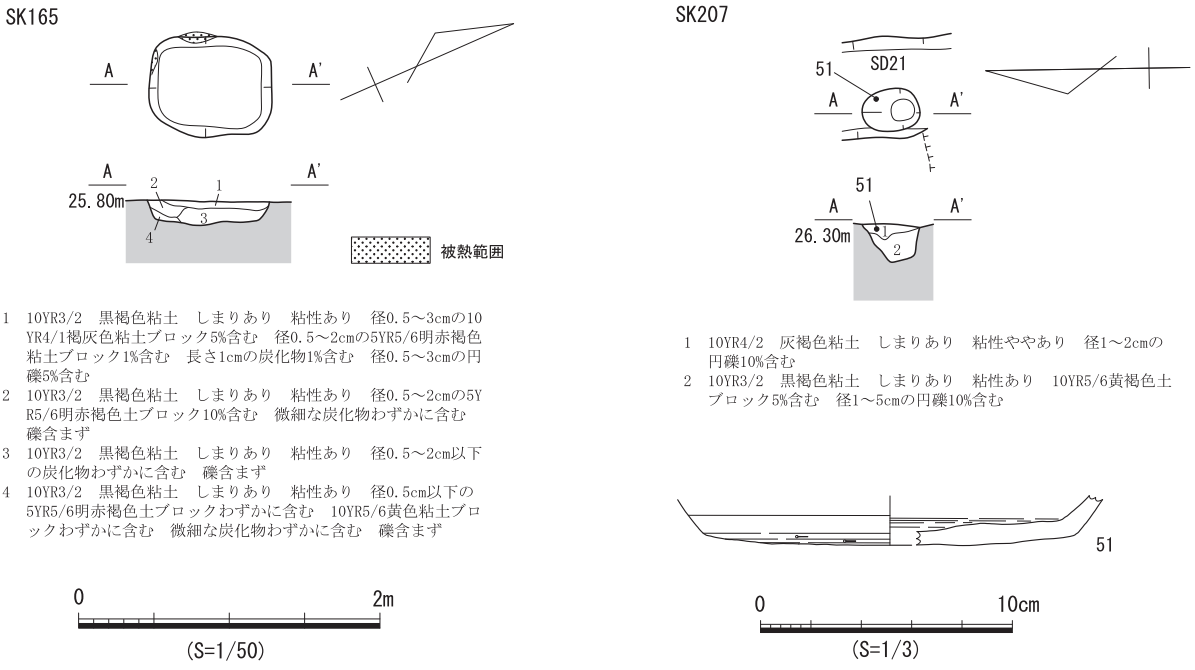


図55　SK165・207遺構図、SK207遺物実測図

から、７世紀後半から８世紀後半以降と考えられる。

SK207（図55）

検出状況　BK16グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD21より新しい。

規模・形状　長軸長0.38m、短軸長0.28m、深さ0.25mであり、平面形は楕円形である。最深部が南側に寄り、南側の壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土に基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器２点、須恵器３点が出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した無台盤（51）がある。

時期　出土遺物から、８世紀後半以降と考えられる。

SK210（図56）

検出状況　BK16グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD21より古い。

規模・形状　長軸長0.22m以上、短軸長0.21m以上、深さ0.07mであり、遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。断面形は半円形で、底面は丸みを帯びる。

埋土　２層に分層した。概ね水平な堆積で、１層に少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　瓦１点が１層と２層の層界付近から出土した。

出土遺物　52は平瓦で表面が摩滅しているが、凹面には布目痕、凸面には縄目痕が確認でき、古代のものと考えられる。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK234（図57）

検出状況　BK18グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に須恵器片が表出していた。他遺構との重複関係は、SK233・SK235より新しい。

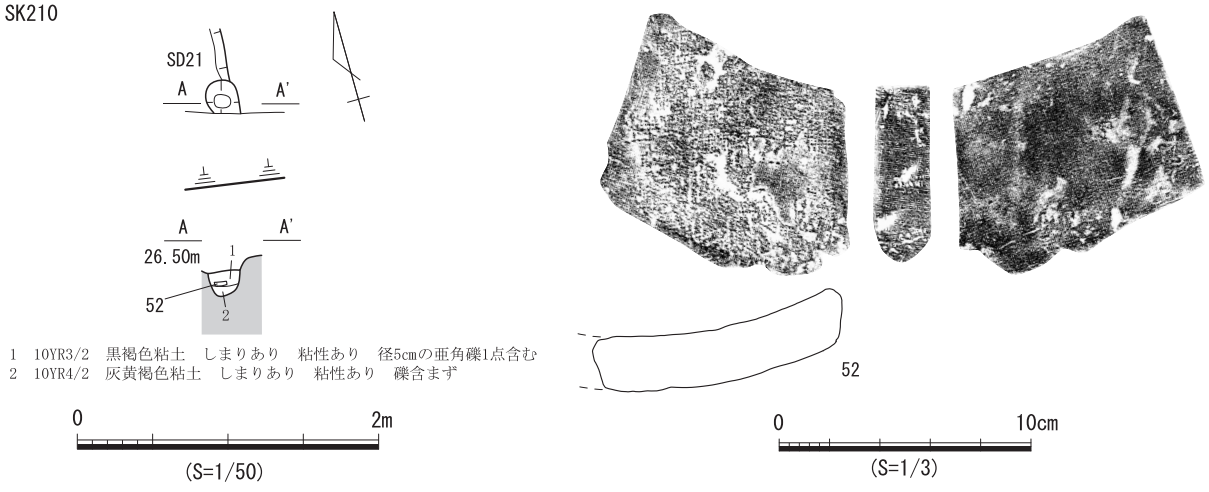


図56　SK210遺構図、遺物実測図

規模・形状　長軸長0.52ｍ、短軸長0.30ｍ、深さ0.21ｍである。東側が攪乱坑によって消失するが、平面形は概ね楕円形と思われる。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土　４層に分層した。中央が窪む堆積でブロック土が含まれないことから、自然堆積と考えられる。

時期　出土遺物から、８世紀後半以降と考えられる。

SK263（図57）

出土遺物　土師器は分類不能な小片である。須恵器は美濃須衛産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した長頸瓶（53）である。

検出状況　CJ17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK266より古い。

規模・形状　長軸長0.49ｍ、短軸長0.46ｍ、深さ0.89ｍで、平面形は不整円形である。断面形は下層に向かって徐々に細くなる円筒状で、底面が一段深く掘り込まれる。

埋土　５層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックと礫が少量混じり、人為堆積と考えられる。

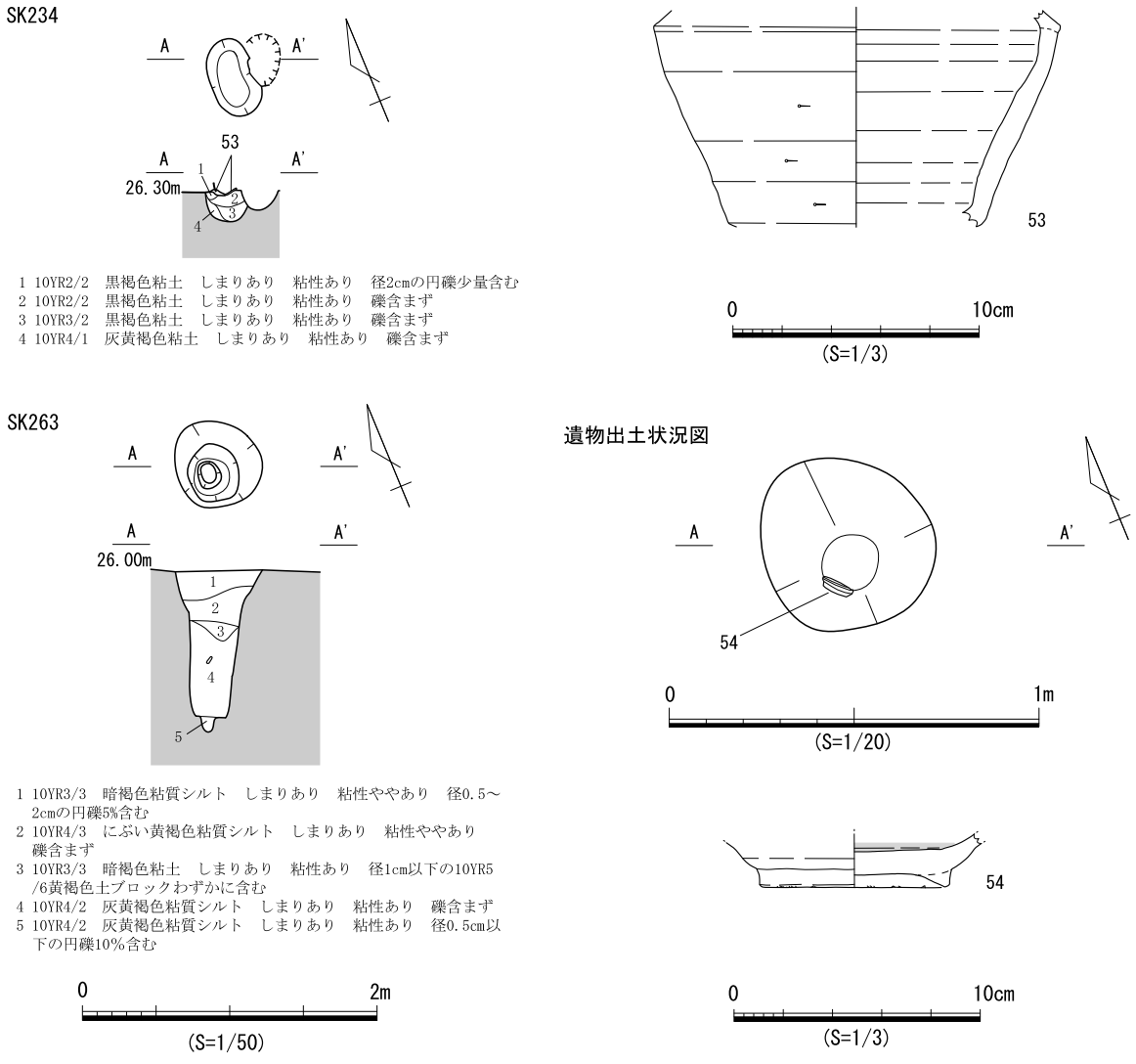


図57　SK234・263遺構図、遺物実測図

遺物出土状況　土師器８点、灰釉陶器２点、山茶碗類１点が出土した。土師器は埋土全体から散在して出土したが、灰釉陶器は５層から出土した。山茶碗（54）は２層から、内面を遺構中央に向けた立位で出土した。

出土遺物　土師器は甕と皿、灰釉陶器は碗で、いずれも小片であった。山茶碗は谷迫間２号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗の底部（204）で、内面の摩滅が著しく、内面全体に墨痕があることから転用硯と考えられる。

時期　出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK269（図58）

検出状況　CL４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構の東辺・南辺では、遺構の輪郭に沿って基盤層上で被熱の痕跡を確認した。当遺構から約１ｍ西に位置するSK271とは、形状や埋土、被熱痕跡などの特徴が類似する。

規模・形状　長軸長1.18ｍ、短軸長0.82ｍ、深さ0.30ｍで、平面形は隅丸方形である。断面形は逆台形で、南側・北側壁面は急角度で立ち上がりつつ、南面のみ上面がやや外側に開く。底面は広く平坦になる。完掘時に、壁面と底面の全方位で被熱の痕跡を確認した。

埋土　５層に分層した。１層から４層はほぼ水平な堆積で、２層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。５層は崩落土と考えられる。全層に炭化物、１層・５層に焼土ブロックを含む。

遺物出土状況　土師器１点が１層から出土した。４層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

出土遺物　土師器は甕の胴部の小片である。炭化物の放射性炭素年代測定は、577年から647年という結果を得た（第６章２節）。

時期　炭化物の放射性炭素年代測定の結果から、６世紀後半から７世紀後半以降と考えられる。

SK271（図58）

検出状況　CL４・CM４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に遺構の東・南・北辺では、遺構の輪郭に沿って基盤層上で被熱の痕跡を確認した。当遺構から約１ｍ東に位置するSK269とは、形状や埋土、被熱痕跡などの特徴が類似する。

規模・形状　長軸長0.98ｍ、短軸長0.62ｍ、深さ0.28ｍで、平面形は不整方形である。断面形は逆台形で、北側壁面へは垂直に立ち上がり、南側壁面は急角度で立ち上がりつつ上面はやや外側に開く。底面は広く平坦になる。完掘時に、壁面と底面の全方位で被熱の痕跡を確認した。

埋土　５層に分層した。５層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。４層は崩落土と考えられる。１～３層・５層に炭化物、１層･４層に焼土ブロックを含む。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器１点が１層から出土した。４層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った。

出土遺物　土師器はいずれも小片で分類不能である。須恵器は甕の胴部の小片である。炭化物の放射性炭素年代測定は、602年から659年という結果を得た（第６章２節）。

時期　炭化物の放射性炭素年代測定の結果から、７世紀以降と考えられる。

SK293（図59）

検出状況　CI15・CJ15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、いずれも平

面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SB１・SK292・SK294より新しい。

規模・形状　長軸長1.10ｍ、短軸長0.99ｍ、深さ0.27ｍで、平面形は円形である。断面形は概ね逆台形だが、北側壁面では段差がみられ、上部は緩やかに立ち上がる。底面は、南側がやや浅くなる。

埋土　２層に分層した。層界に凹凸がみられ、埋土に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器３点が出土した。

出土遺物　須恵器は皿と甕の小片であるため、図示しなかった。

時期　出土遺物と、本遺構より古いSB１と同時期と考えられるSB３からは、美濃須衛産Ⅳ期の須恵器が出土していることから、８世紀以降と考えられる。

SK318（図59）

検出状況　CJ16グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP45より古い。

規模・形状　長軸長0.35ｍ、短軸長0.30ｍ以上、深さ0.05ｍである。SP45と一部が重複するが、平面形は概ね円形である。断面形は浅い皿状で、底面は緩やかに丸くなる。

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器１点が出土した。

出土遺物　55は美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏身Ｂ類である。口縁端部が欠損する。

時期　出土遺物から、８世紀以降と考えられる。

SK453（図59）

検出状況　DJ１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.29ｍ、短軸長0.24ｍ、深さ0.05ｍであり、平面形は不整円形である。断面形は

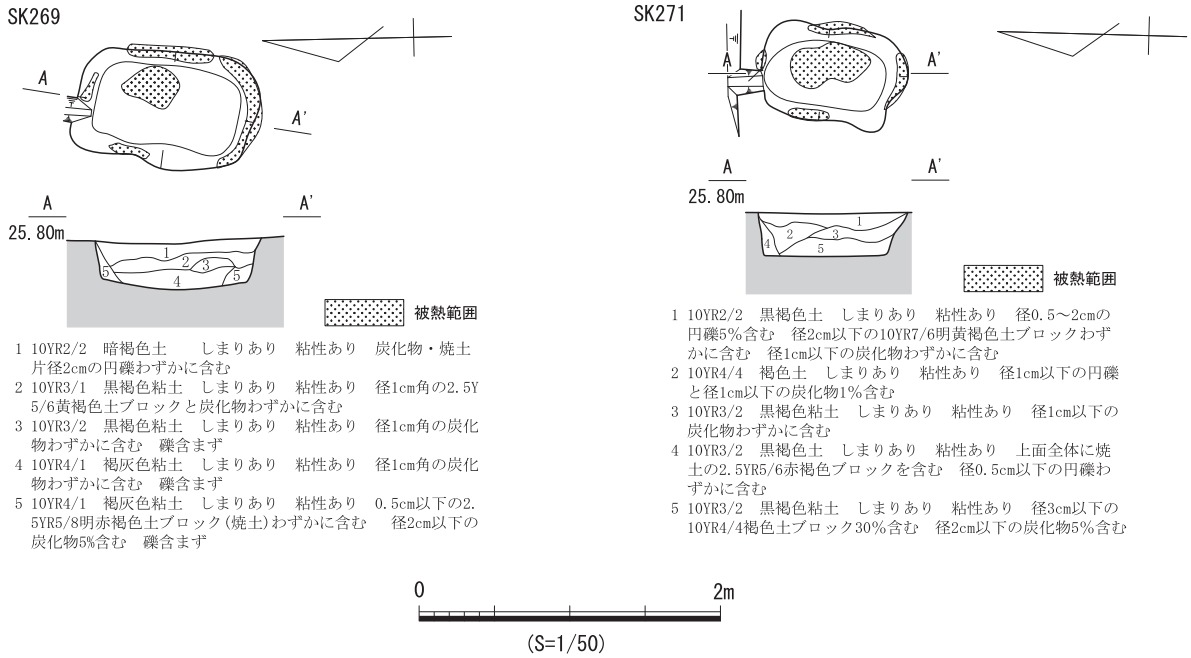


図58　SK269・271遺構図

浅い皿状だが、底面にやや起伏がみられる。

埋土　単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　中国産陶磁器１点が出土した。

出土遺物　56は白磁碗Ⅳ－１ａ類又はⅣ－１ｂ類で、厚めの玉縁状の口縁を有する。

時期　出土遺物から、11世紀後半から12世紀初頭以降と考えられる。

SK512（図59）

検出状況　DJ３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK511・SK513・SK515より古い。

規模・形状　長軸長0.80ｍ以上、短軸長0.65ｍ、深さ0.12ｍであり、平面形は概ね円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土　単層である。炭化物が少量混じる。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　縄文土器１点、瓦１点が埋土中から出土した。

出土遺物　57は縄文時代晩期の深鉢で、幅１cmほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。瓦は平瓦

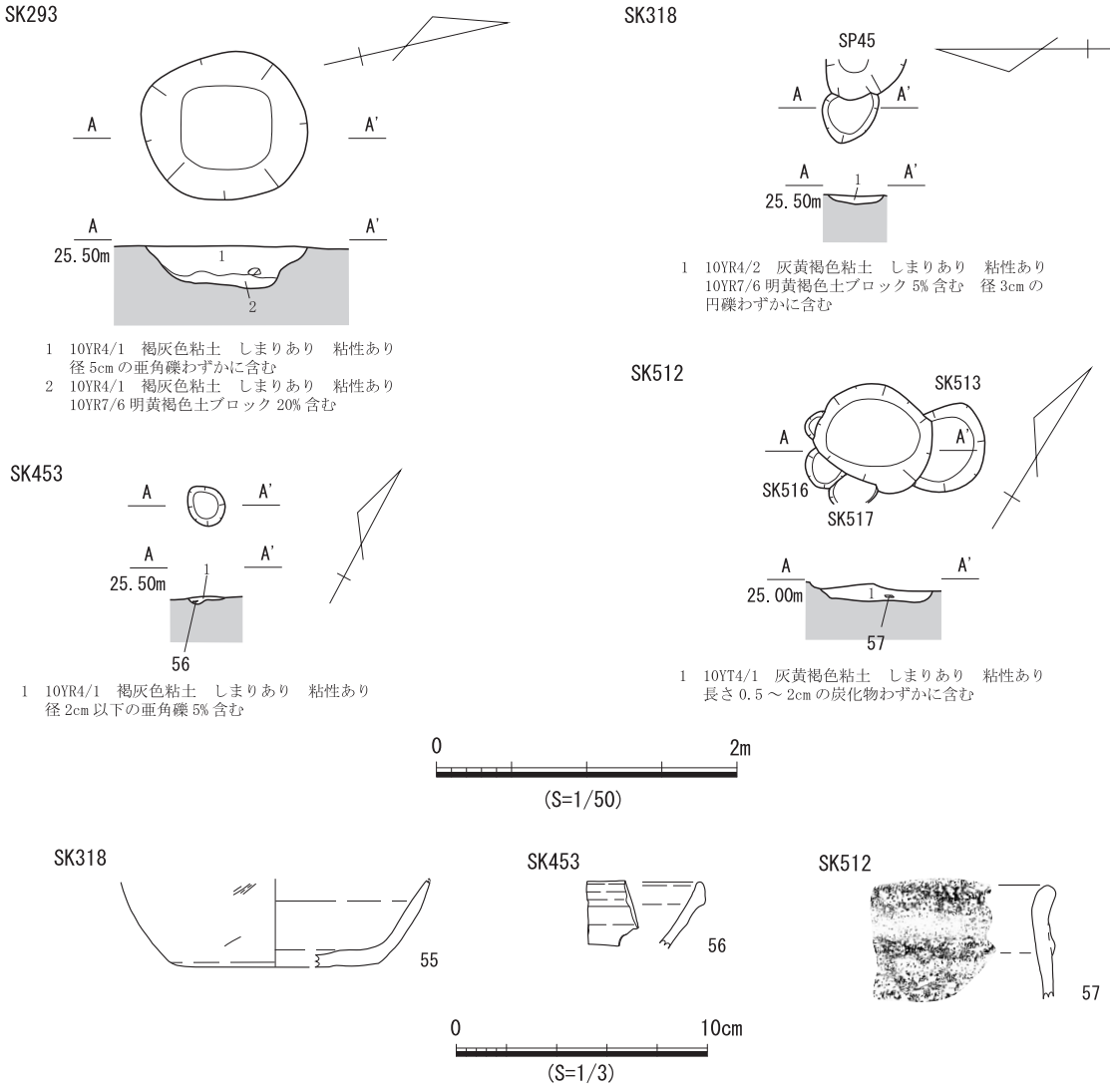


図59　SK293・318・453・512遺構図、SK318・453・512遺物実測図

の小片で、表面の摩滅が著しいが、微かに布目痕が確認できる。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK597（図60）

検出状況　DJ３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK598より古い。

規模・形状　長軸長0.34ｍ、短軸長0.25ｍ以上、深さ0.17ｍである。SK598と一部が重複するが、概ね楕円形である。壁面は開き気味に傾斜し、底面は丸くなる。

埋土　２層に分層した。２層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。また、１層・２層ともに炭化物を含む。

遺物出土状況　中国産陶磁器１点が出土した。

出土遺物　58は白磁碗Ⅳ－１ａ類又はⅣ－１ｂ類で、玉縁状の口縁を有する。

時期　出土遺物から、11世紀後半から12世紀初頭以降と考えられる。

SK619（図60）

検出状況　DJ４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.36ｍ、短軸長0.25ｍ、深さ0.11ｍであり、平面形は楕円形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土　２層に分層した。埋土に基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　山茶碗類１点が１層から出土した。

出土遺物　59は東濃型山茶碗の碗で、尾張型第３型式併行に比定した。

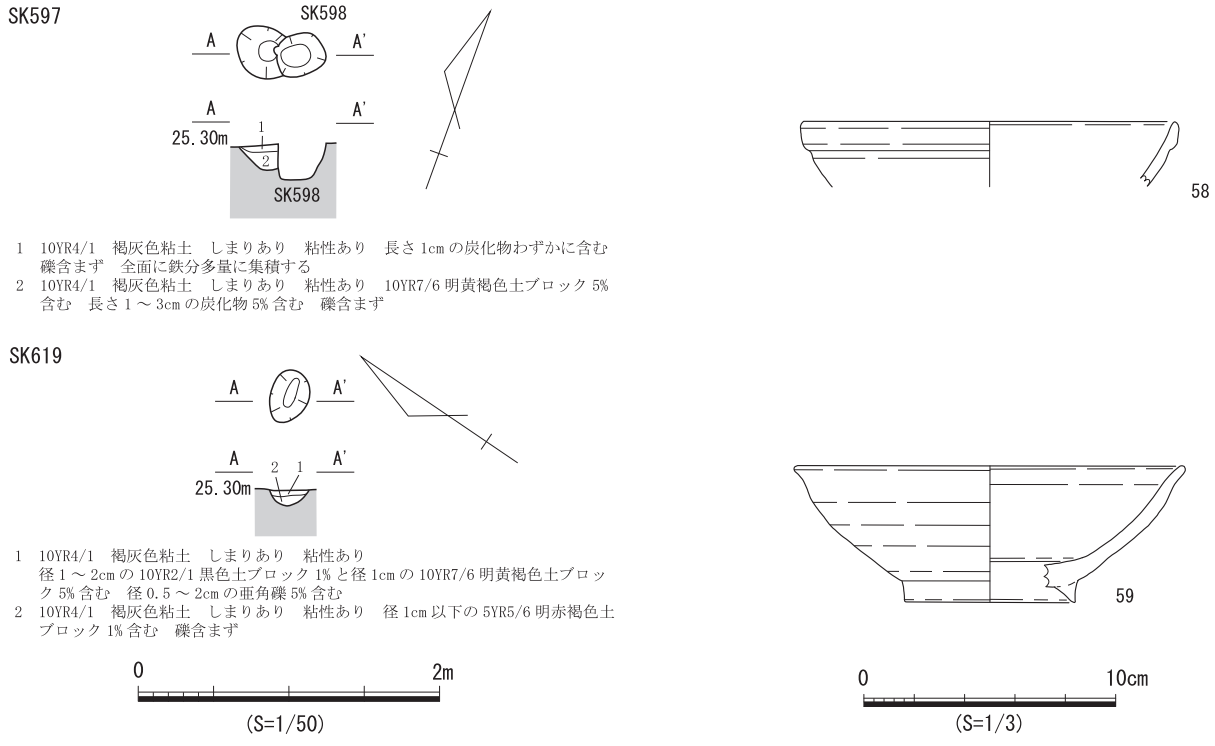


図60　SK597・619遺構図、遺物実測図

時期　出土遺物から、11世紀末以降と考えられる。

SK694（図61）

検出状況　DJ６・DJ７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。堅田古墳の南西に位置する大型の土坑である。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK685・SK686・SK687等より新しく、SK688・SK693より古い。

規模・形状　長軸長5.04m、短軸長3.02m以上、深さ0.57mである。南側が大きく発掘区外に広がるため全形は不明であるが、検出した北側の範囲から、平面形は不整円形と考えられる。発掘区内で最深部が確認でき、東西及び北側の壁面にはやや凹凸がみられるものの、概ねなだらかに立ち上がる。

埋土　６層に分層した。１層～４層がほぼ水平に堆積し、層界には凹凸は確認できる。５層・６層は崩落土の可能性がある。埋土全体に亜角礫や基盤層ブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。１層は崩落土と考えられる５層と６層の上に堆積することから、２層以下の埋土と堆積の時期が異なる可能性がある。

遺物出土状況　縄文土器５点、土師器72点、須恵器87点、山茶碗類１点、瓦１点、石製品１点が、埋土中から出土した。山茶碗類は１層から出土したが、それ以外の遺物は１層～３層から散在して出土しており、層位による遺物の時期的な偏りはみられなかった。

出土遺物　縄文土器は深鉢の胴部の小片である。土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期第２小期又は第３小期併行に比定した産地不明の坏身Ｃ類（60）がある。山茶碗類は胴部の小片で分類不能である。瓦は小片で表面の摩滅が激しく、詳細は不明である。石製品は泥岩製の砥石（61）で、４面に平滑な砥面が確認できる。

時期　図示した遺物以外には山茶碗類が１点のみ出土している。これは１層上部からの出土遺物であり、他の遺物との時期差が大きいことから、Ⅰ層から混入した可能性も考えられるが、埋土の堆積状況から１層の堆積時に入ったものと判断した。このため、２層から出土した60の時期から８世紀後半から機能しており、中世以降に完全に埋没したと考えられる。

SK742（図62）

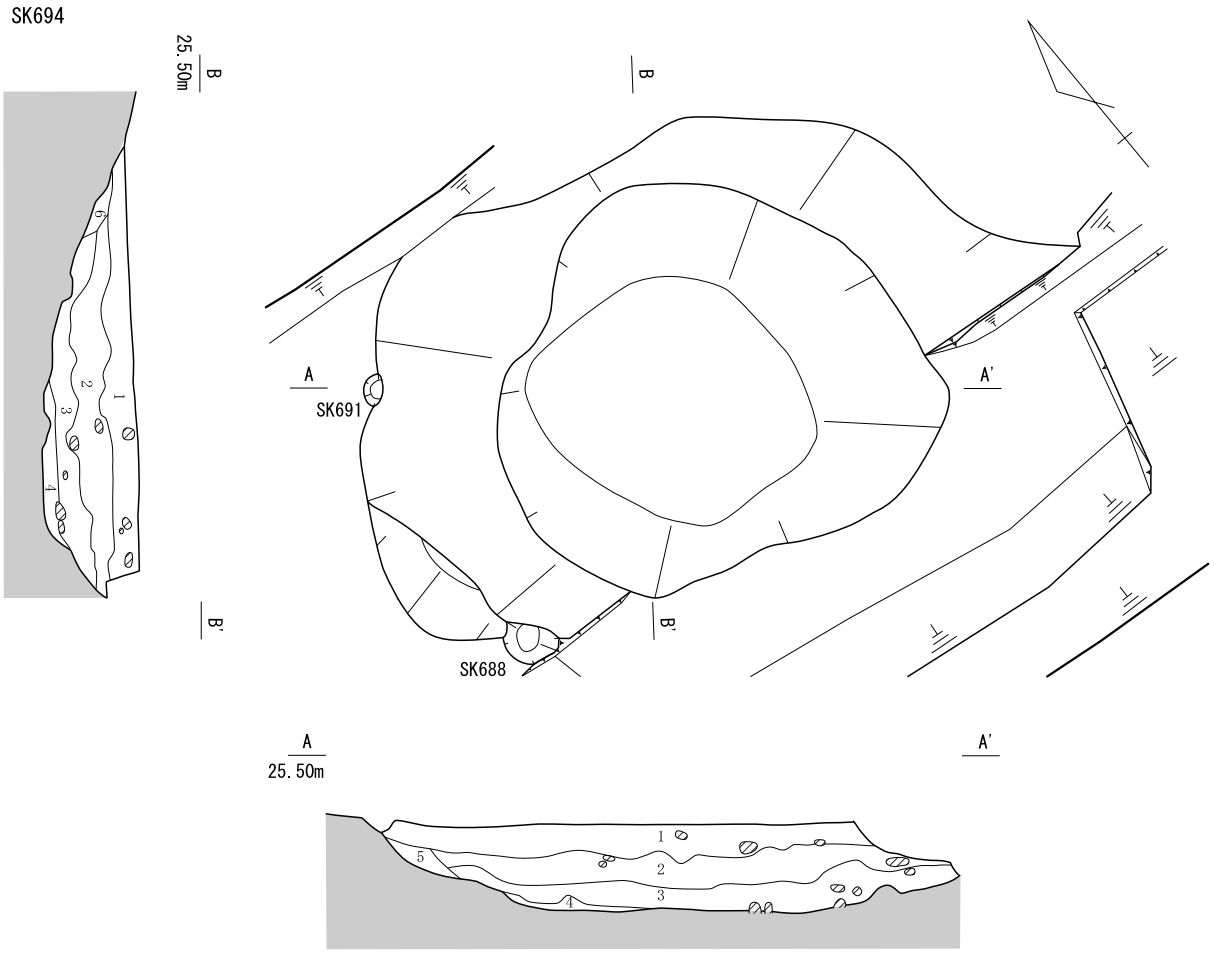
検出状況　DJ10グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP121・SK743・SK750等より新しく、SD28・SK748・SK749等より古い。

規模・形状　長軸長6.69m、短軸長1.73m以上、深さ0.52mである。南北両側ともに発掘区外に広がるため平面形の全形は不明であるが、検出可能な範囲では北側の東西幅が広くなり、南側は狭くなる。遺構の西側にはテラス状の段を２段有し、東側はテラス状の段を１段有する。遺構の最深部はやや東側に偏り、北側が幅広で南側に向かって狭くなる。底面は概ね平坦になるが、一部に凹凸がみられる。

埋土　６層に分層した。層界に凹凸はみられるが、概ね中央が窪む堆積である。埋土全体に亜角礫を含み、上層にはブロック土が混入するが、堆積状況は不明である。

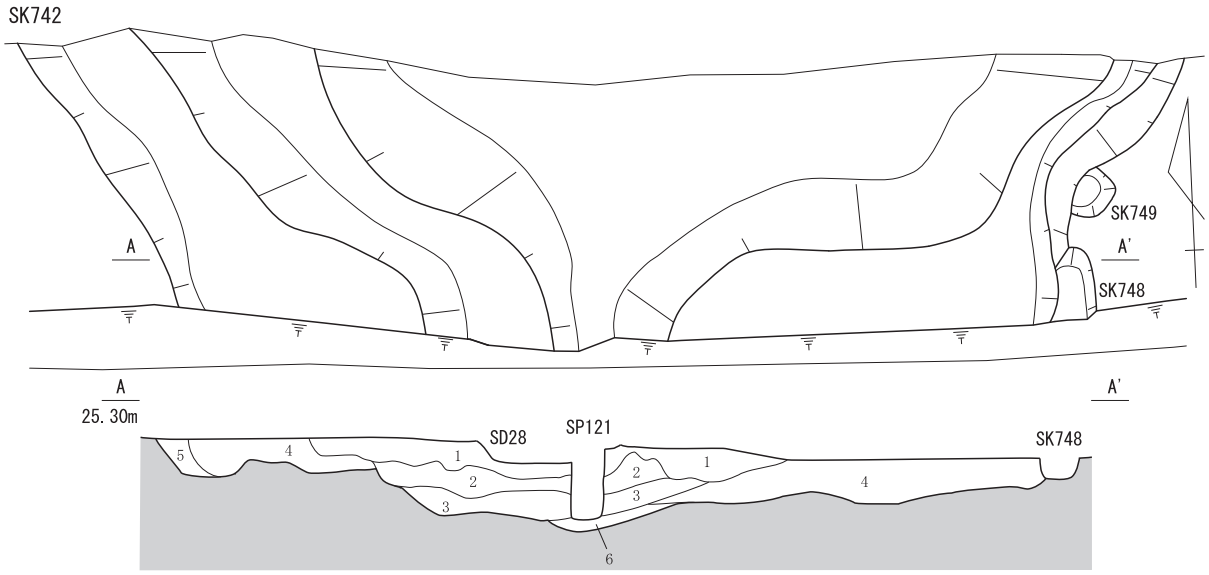
遺物出土状況　土師器34点、須恵器77点、灰釉陶器７点、山茶碗類２点、瓦１点、鉄製品２点、鉄滓１点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器の大半は甕の胴部の小片で、分類不能である。須恵器は大半が甕の小片で、分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅲ期に比定した広口壺（62）と高坏（63）、美濃須衛産Ⅲ期又はⅣ期に比定した大型の無台盤（64）と提瓶（65）がある。灰釉陶器は碗と皿と瓶類で、分類可能なものとし



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～5cmの2.5Y5/1黄灰色土ブロックわずかに含む　径0.5～13cmの亜角礫5%含む　全面に鉄分多量に集積する
2　2.5Y4/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土粒わずかに含む　径0.5～10cm亜角礫30%含む　全面に鉄分多量に集積する
3　2.5Y5/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～5cmの10YR5/6黄褐色土粒10%含む　径0.5～4cmの亜角礫1%含む　全面に鉄分少量集積する
4　10YR5/6黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～5cmの2.5Y5/1黄灰色土ブロック5%含む　長さ0.5cmの炭化物微量に含む　礫含まず　全面に鉄分少量集積する
5　2.5YR5/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～4cmの10YR5/6黄褐色土ブロック20%含む　径2cmの亜角礫わずかに含む　全面に鉄分少量集積する
6　2.5YR5/1　黄灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～5cmの10YR5/6黄褐色土粒ブロック5%含む　径1cmの亜角礫わずかに含む　全面に鉄分少量集積する

図61　SK694遺構図、遺物実測図



1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～５cmの2.5Y4/3オリーブ褐色土ブロック1%、径１～17cmの亜角礫5%含む　全面に鉄分多量に集積する
2　10YR4/2　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～５cmの2.5Y4/3オリーブ褐色土ブロックわずかに含む　径１～５cmの亜円礫5%含む　全面に鉄分集積する
3　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～３cmの亜円礫1%含む
4　10YR4/2　褐灰色粘土（やや暗い）　しまりあり　粘性あり　径１～５cmの角礫3%含む
5　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.５～４cmの亜角礫30%含む　全面に鉄分集積する
6　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～２cmの亜円礫20%含む

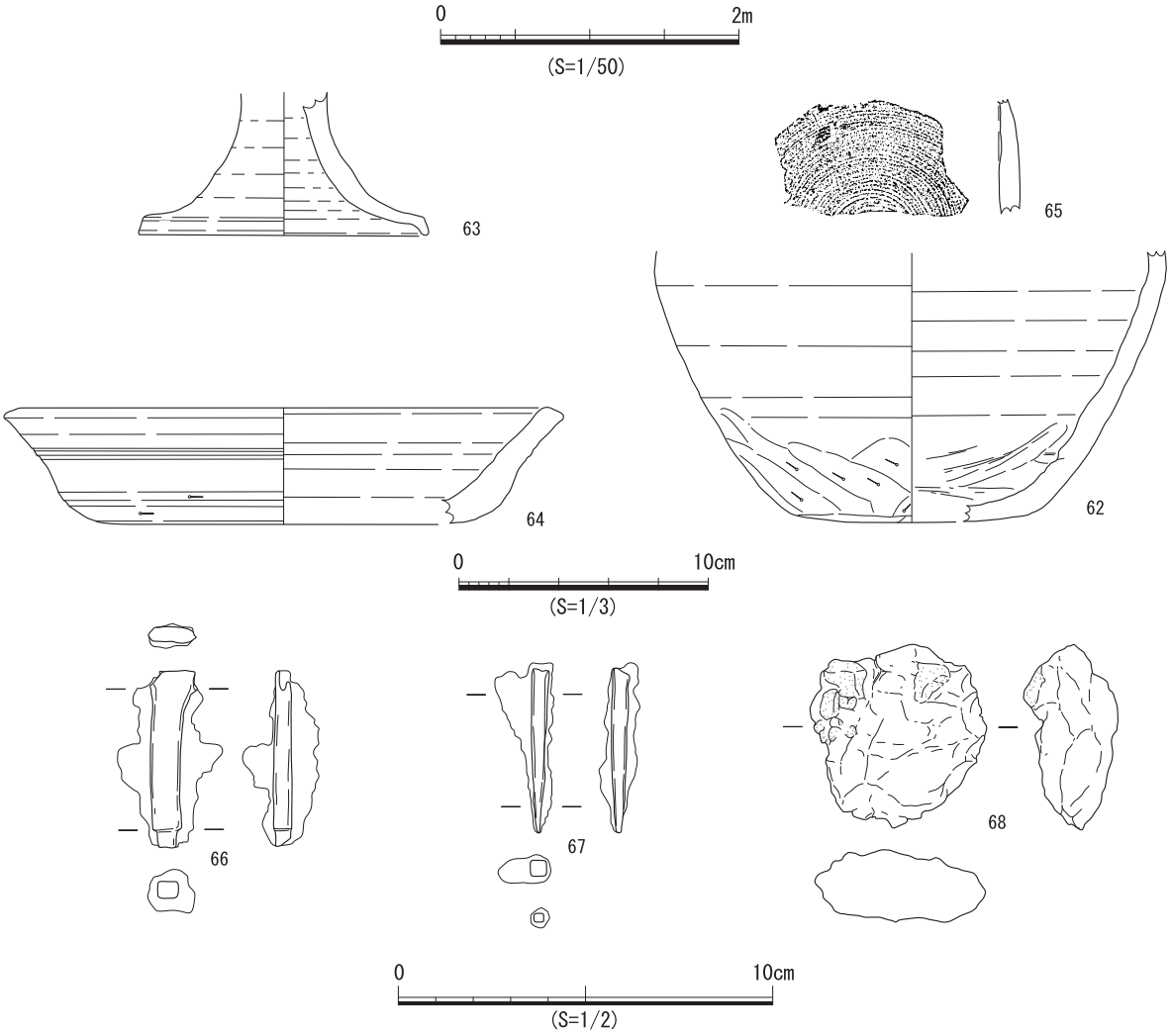


図62　SK742遺構図、遺物実測図

て、光ヶ丘１号窯式に比定した皿がある。山茶碗類は碗の小片で、分類不能である。鉄製品は短頸鏃（66）と角釘（67）である。68は椀型鉄滓の一部と考えられる。

時期　出土遺物の大半は古代に属するが、山茶碗が３層から出土している。このことから、７世紀代から中世にかけて、長い期間にわたって機能していたと考えられる。

SK816（図63）

検出状況　EJ１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK815より新しい。

規模・形状　長軸長0.24m、短軸長0.10m以上、深さ0.09mである。遺構北部が発掘区外となるため、全形は不明である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土　単層である。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土製品１点が埋土中から出土した。

出土遺物　69は甑の把手である。

時期　出土遺物から、古代と考えられる。

SK838（図63）

検出状況　EK２・EK３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK839・SK568より新しい。

規模・形状　長軸長0.71m、短軸長0.65m、深さ0.43mであり、平面形は隅丸方形である。南側の壁面上部は垂直気味に立ち上がるが、北側の壁面は傾斜して開く。最深部は遺構の中央で、底面は丸くなる。

埋土　３層に分層した。概ね水平な堆積で基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器23点、須恵器２点が出土した。土師器は全層から出土しているが、遺構底部付近から、須恵器の蓋２点が出土した。70は西側壁面付近で、角礫を背に立てかけるように横位で置かれていた。また、蓋内面には別の礫が置かれていた。71はほぼ完型で、逆位で出土した。

出土遺物　出土した土師器の大半は同一の甕（72）の破片であった。72はつまみ上げ状の口縁端部をもつ丸底甕で、６世紀後半から７世紀前半のものと考えられる。胴部内面には横方向、外面には斜め方向のハケ調整を施す。70は美濃須衛産Ⅲ期前半に比定した坏蓋Ａ類、71は産地不明の畿内系の坏蓋Ａ類で、美濃須衛産Ⅲ期前半併行に比定した。

時期　出土遺物とその出土状況から、７世紀中葉と考えられる。

SK882（図64）

検出状況　EK６グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.25m、短軸長0.20m、深さ0.07mであり、平面形は楕円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土　２層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器１点が出土した。

出土遺物　須恵器は美濃須衛産Ⅲ期に比定した坏蓋Ａ類（73）である。

時期　出土遺物から、７世紀以降と考えられる。

SK891（図64）

検出状況　EK６グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.43m、短軸長0.32m、深さ0.27mであり、平面形は楕円形である。東側にテラス状の段を有し、最深部は西側に寄る。底面は丸くなる。

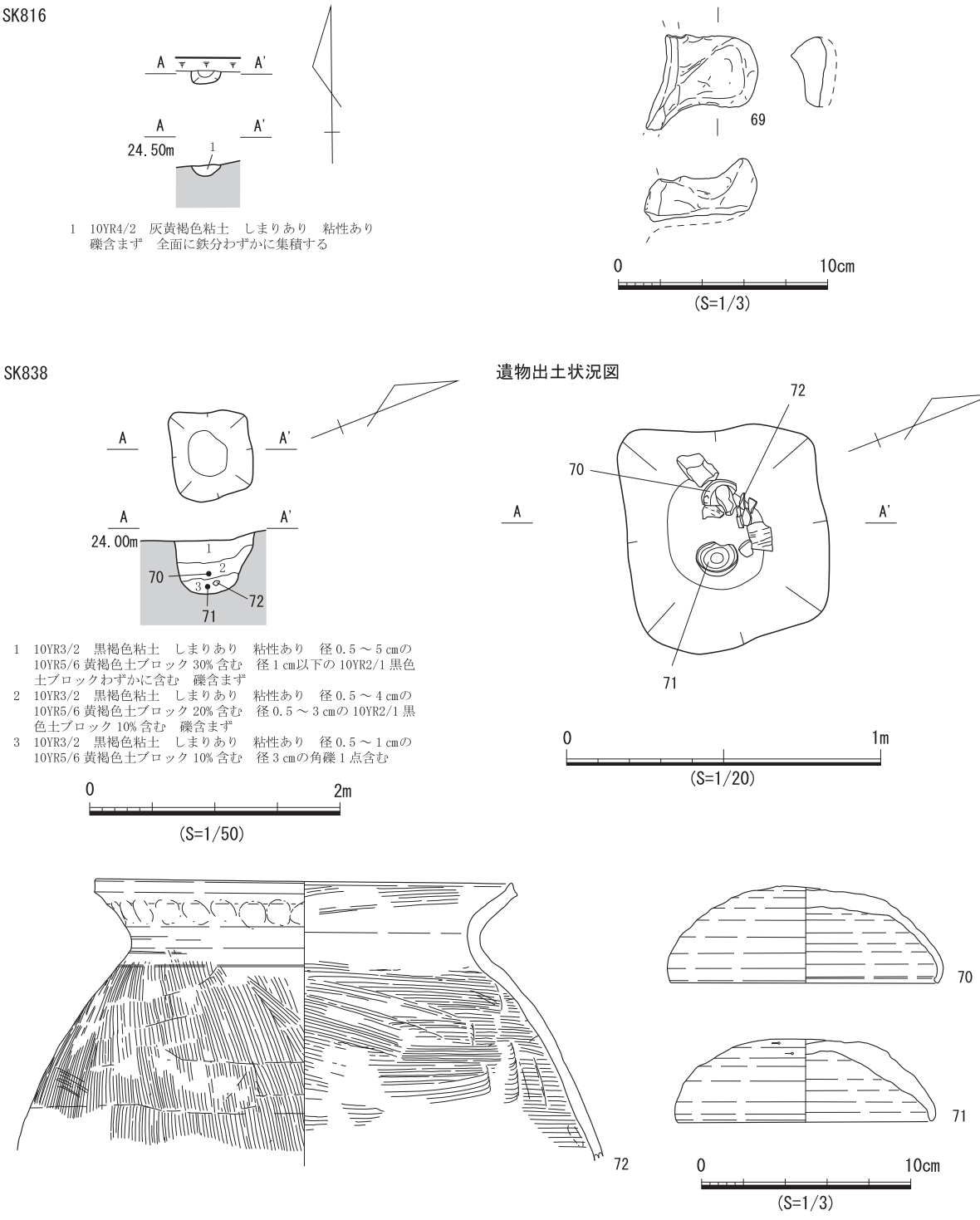


図63　SK816・838遺構図、遺物実測図

埋土　４層に分層した。２層・３層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器２点、須恵器２点が出土した。

出土遺物　土師器は皿と甕、須恵器は皿と坏身である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK894（図64）

検出状況　EK６グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.42ｍ、短軸長0.22ｍ、深さ0.23ｍであり、平面形は楕円形である。底面には西側と東側の２か所に掘り込みが確認でき、西側の掘り込み底面が最深部となる。底面はいずれも丸くなり壁面は垂直気味に立ち上がる。

埋土　３層に分層した。全ての層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　須恵器１点、中国産陶磁器１点が埋土中から出土した。

出土遺物　須恵器は器種不明の胴部、中国産陶磁器は白磁碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK905（図65）

検出状況　EK７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、平面形はやや不明瞭であ

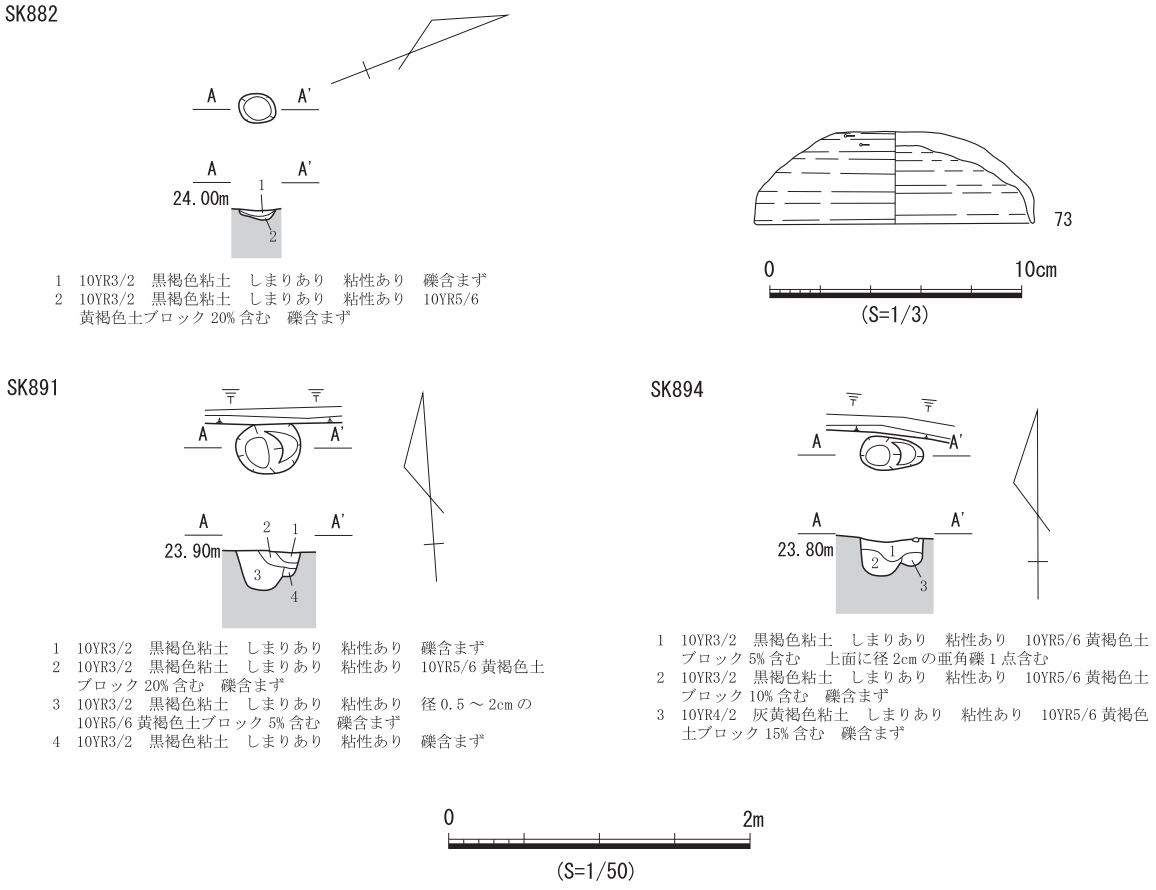


図64　SK882・891・894遺構図、SK882遺物実測図

った。他遺構との重複関係は、SK903・SK904・SK906より古い。

規模・形状　長軸長0.35m、短軸長0.33m以上、深さ0.21mであり、平面形は不整円形である。断面形は逆台形で、壁面は傾斜して開く。底面は平坦になる。

埋土　２層に分層した。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器１点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部、須恵器は美濃須衛産Ⅳ期に比定した甕の底部である。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、８世紀以降と考えられる。

SK928（図65）

検出状況　EK８グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP190より新しい。

規模・形状　長軸長0.47m、短軸長0.15m、深さ0.28mである。遺構北部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。東部壁面の傾斜は緩やかだが西部はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みがある。

埋土　単層である。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器４点、山茶碗類１点が埋土中から出土した。山茶碗類はほぼ完型の小碗（74）で、底部付近から逆位で出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第４型式に比定した小碗（74）である。

時期　出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK931（図66）

検出状況　EK８グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP15・SP39・SP41等より新しい。

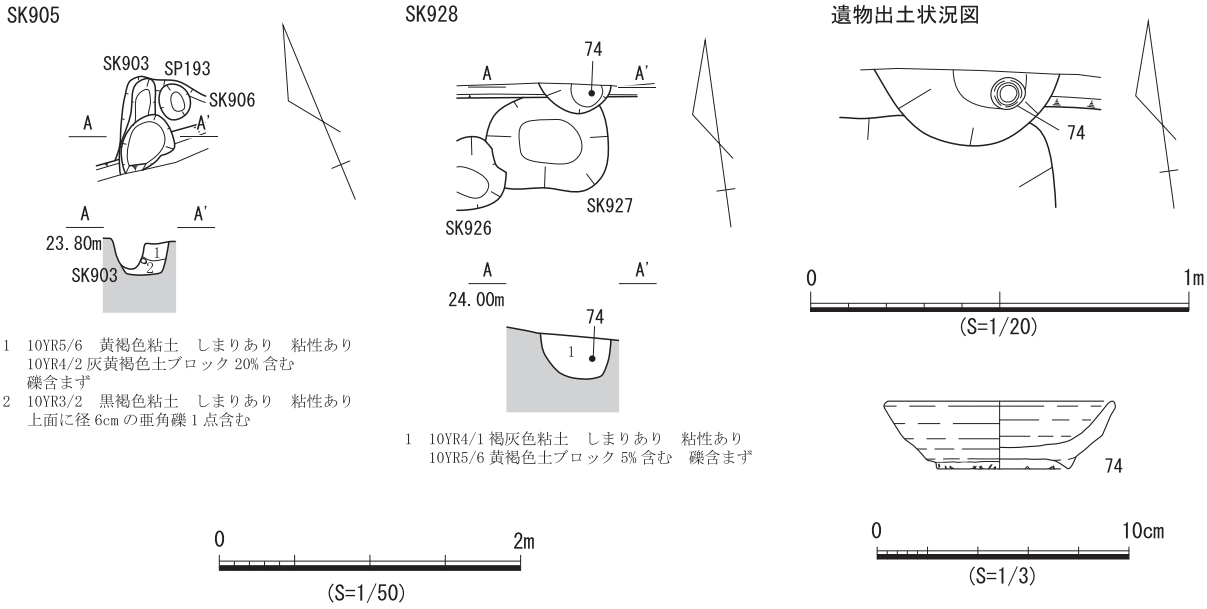


図65　SK905・928遺構図、SK928遺物実測図

規模・形状　長軸長1.74ｍ、短軸長0.83ｍ以上、深さ0.15ｍである。北側が発掘区外となるため、全形は不明だが、検出した範囲では隅丸方形である。断面形は浅い皿状で、底面は広く平坦になる。東側の壁面は緩やかに立ち上がるが、西側壁面の立ち上がりは急である。

埋土　２層に分層した。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器23点、須恵器３点、灰釉陶器２点が埋土中から出土した。土師器と須恵器は散在して出土したが、灰釉陶器２点は１層と２層の層界付近から出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部、須恵器は甕と壺の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。灰釉陶器は光ヶ丘１号窯式に比定した碗（75）である。75は玉縁状の口縁をもち、内面底部に径約３㎝の円形沈線が施される。

時期　出土遺物とその出土状況から、９世紀中葉から後葉と考えられる。

SK950（図67）

検出状況　EK12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であ

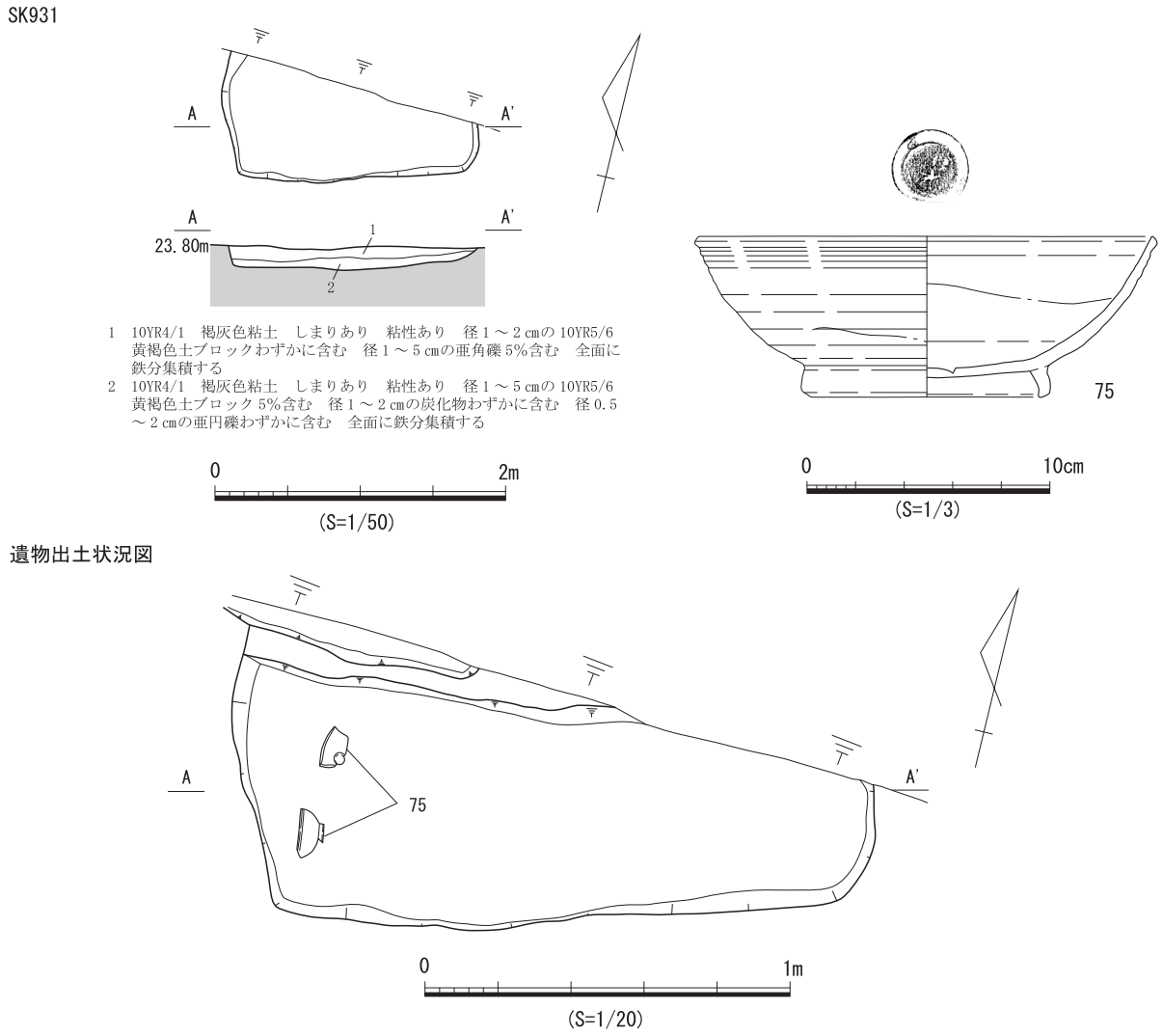


図66　SK931遺構図、遺物実測図

った。他遺構との重複関係は、SP44・SK951より新しい。

規模・形状　長軸長0.47ｍ、短軸長0.47ｍ、深さ0.07ｍであり、平面形は円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦になる。

埋土　２層に分層した。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器１点が全て１層から出土した。須恵器（76）は正位で遺構の西縁から出土した。また、この須恵器の南側と東側に角礫が１点ずつ、須恵器に重ならない程度の距離で出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は美濃須衛産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した碗（76）である。

時期　出土遺物とその出土状況から、８世紀中葉から後葉と考えられる。

SK974（図67）

検出状況　DM２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であ

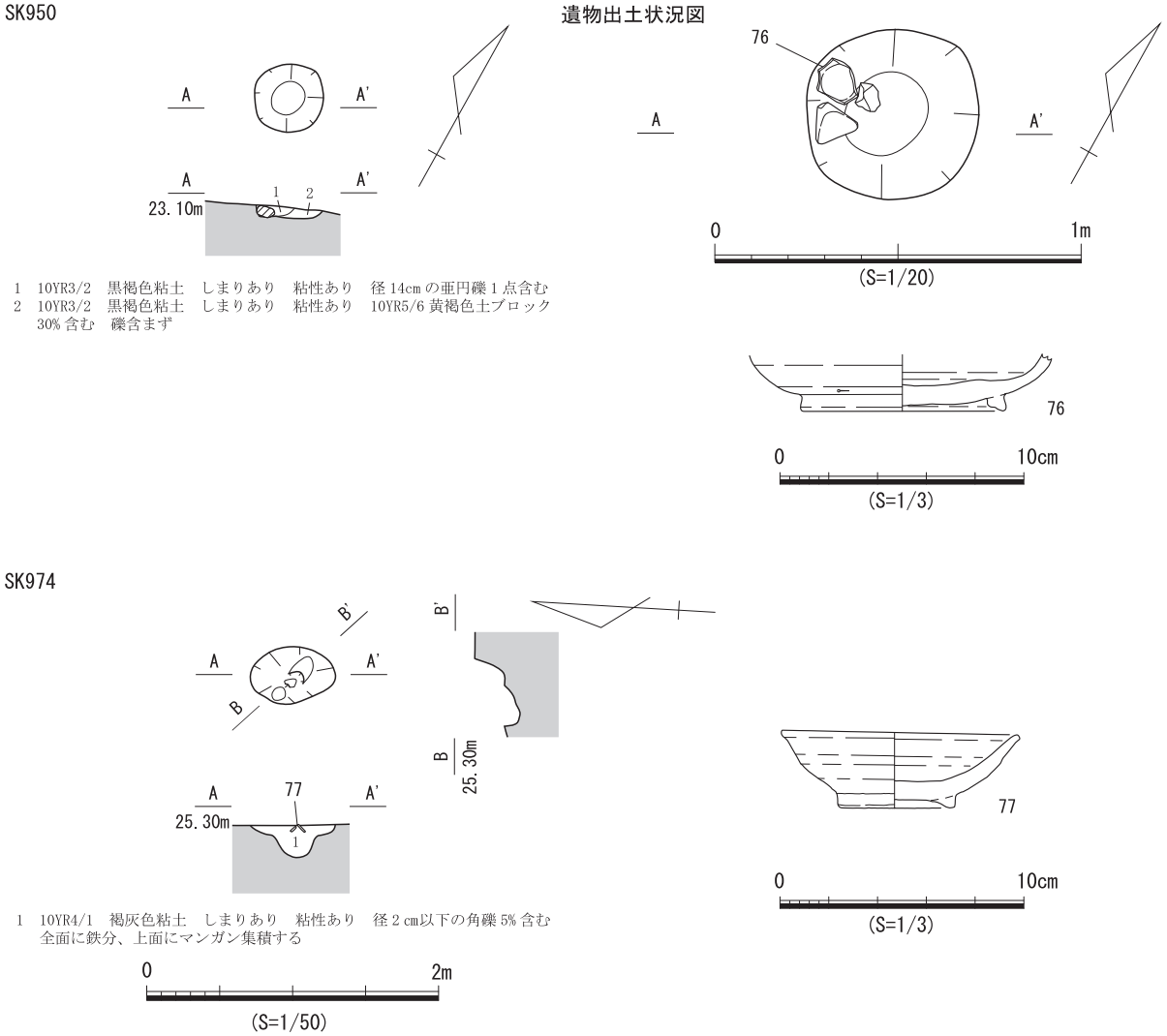


図67　SK950・974遺構図、遺物実測図

った。

規模・形状　長軸長0.47ｍ、短軸長0.43ｍ、深さ0.22ｍであり、平面形は楕円形である。南東部にテラス状の段を有し、最深部は北西側に偏る。

埋土　単層である。埋土中に角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器２点、須恵器１点が埋土中から散在して出土し、山茶碗類１点が１層上部から出土した。

出土遺物　土師器は器種不明の胴部､須恵器は甕の胴部である｡いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第４型式の小碗（77）である。

時期　出土遺物から、12世紀中葉以降と考えられる。

SK982（図68）

検出状況　DN３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.28ｍ、短軸長0.28ｍ、深さ0.16ｍであり、平面形は円形である。断面形は半円形だが、北側の壁面は垂直気味に立ち上がる。

埋土　２層に分層した。２層に多量の基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器２点、須恵器１点、中国産陶磁器１点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部の、須恵器は壺の頚部である。いずれも小片のため図示しなかった。中国産陶磁器はⅣ類の白磁皿（78）である。

時期　出土遺物から、11世紀後半以降と考えられる。

SK985（図68）

検出状況　DN３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK986より古い。

規模・形状　長軸長0.67ｍ、短軸長0.55ｍ以上、深さ0.12ｍであり、平面形は楕円形である。断面形は半円形で、底面は丸くなる。

埋土　７層に分層した。４層～７層に炭化物を含み、４層の含有率はやや多い。３～７層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器２点が埋土中から出土した。

出土遺物　土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK986（図68）

検出状況　DN３・DN４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、焼土が遺構の輪郭を囲っているため、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK985より新しい。

規模・形状　長軸長0.75ｍ、短軸長0.69ｍ以上、深さ0.24ｍであり、平面形は隅丸方形である。底面は平坦だが南側でわずかに窪み、北側壁面へは垂直に立ち上がる。南側壁面は、発掘区南側壁面に遮られ明確ではないが、底面の少し窪んだ部分から急角度で立ち上がる。遺構の完掘時に、南西角付近と北～東面の壁面で被熱の痕跡を確認した。

埋土　６層に分層した。３層･６層に炭化物を含み、６層の含有率は顕著である。１層・３層に基盤層

ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器１点が埋土中から出土した。

出土遺物　土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK997（図69）

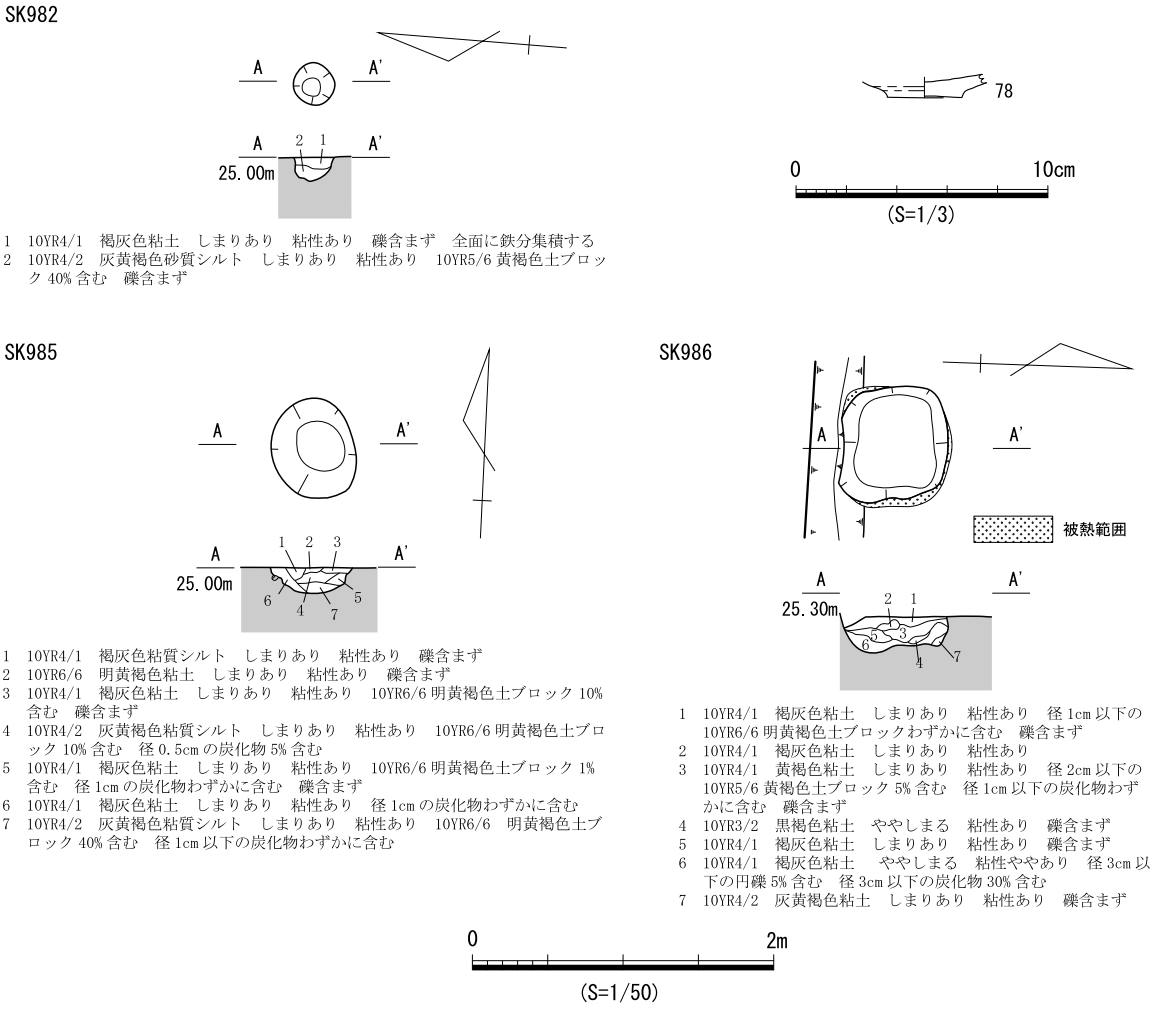
検出状況　DN４・DN５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.56ｍ、短軸長0.38ｍ以上、深さ0.16ｍである。南側が発掘区外となるため全形は不明だが、検出可能な範囲では、平面形は概ね円形である。断面形は半円形で、底面は緩やかに丸くなる。

埋土　３層に分層した。埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点、土師器２点、須恵器７点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　79は縄文時代晩期の深鉢の底部である。土師器は器種不明、須恵器は甕と坏身の胴部のである。小片のため図示しなかった。



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず　全面に鉄分集積する
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 40% 含む　礫含まず

1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　礫含まず
2　10YR6/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR6/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　礫含まず
4　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　10YR6/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　径 0.5cm の炭化物 5% 含む
5　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR6/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 1cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1cm の炭化物わずかに含む
7　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりあり　粘性あり　10YR6/6　明黄褐色土ブロック 40% 含む　径 1cm 以下の炭化物わずかに含む

1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 1cm 以下の 10YR6/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
3　10YR4/1　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径 2cm 以下の 10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　径 1cm 以下の炭化物わずかに含む　礫含まず
4　10YR3/2　黒褐色粘土　ややしまる　粘性あり　礫含まず
5　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
6　10YR4/1　褐灰色粘土　ややしまる　粘性ややあり　径 3cm 以下の円礫 5% 含む　径 3cm 以下の炭化物 30% 含む
7　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

図68　SK982・985・986遺構図、SK982遺物実測図

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK1135（図69）

検出状況　EK５グリッド、SD41完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.23ｍ、短軸長0.22、深さ0.18ｍで、平面形は正円形である。壁面はほぼ垂直に掘り込まれ、最深部が西に偏る。

埋土　単層である。亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器２点、金属製品１点が埋土中から出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。金属製品は鉄製の角釘（80）で、頭部が欠損している。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

SK1136（図70）

検出状況　DJ４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.26ｍ、短軸長0.24ｍ、深さ0.28ｍで、平面形は円形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土　３層に分層した。２層と３層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　山茶碗類１点が、１層と２層の層界付近から逆位で出土した。

出土遺物　山茶碗類は谷迫間２号窯式に比定した東濃型の碗（81）である。

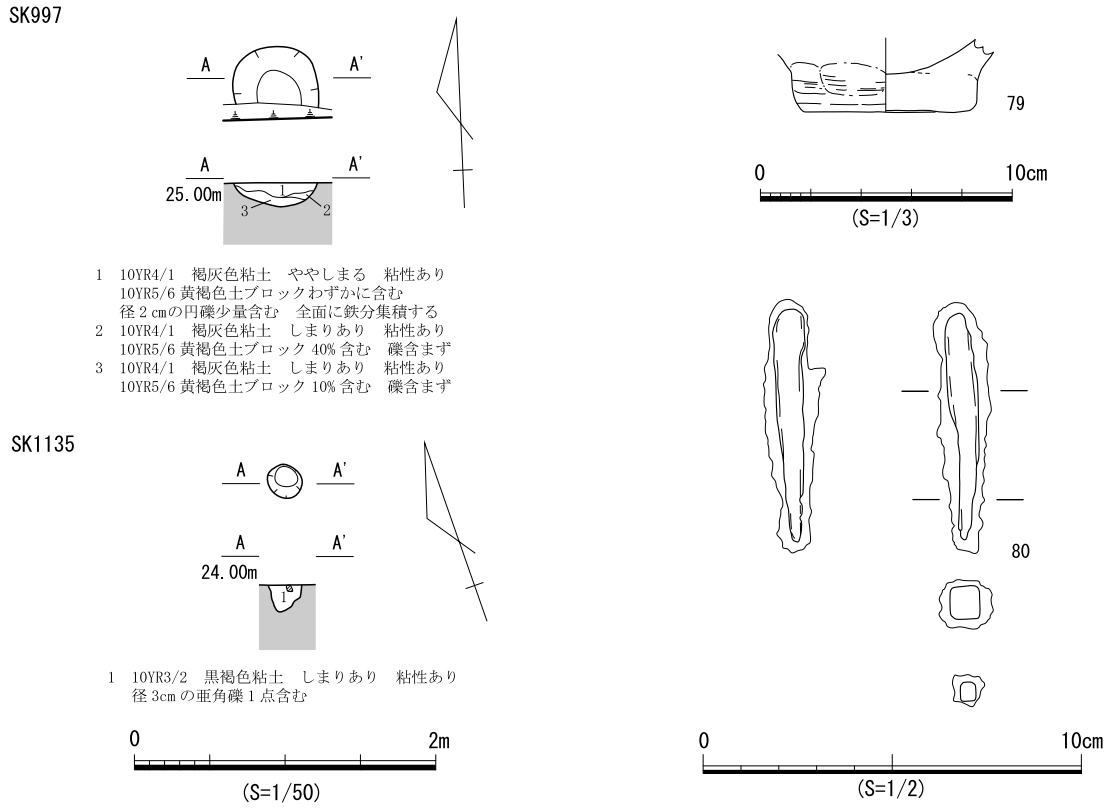


図69　SK997・1135遺構図、遺物実測図

時期　出土遺物から、12世紀後半以降と考えられる。

SK1139（図70）

検出状況　EK７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK895より新しい。

規模・形状　長軸長0.23m、短軸長0.21m、深さ0.39mで、平面形は不整円形である。壁面はほぼ垂直で、底面は半円形である。

埋土　単層である。礫やブロック土を含まず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器１点、石器１点が埋土中から出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。石器は砂岩製の敲石（82）で、一面にのみ敲打痕が確認できる。全体が被熱し、赤褐色に変色している。

時期　出土遺物から、古代以降と考えられる。

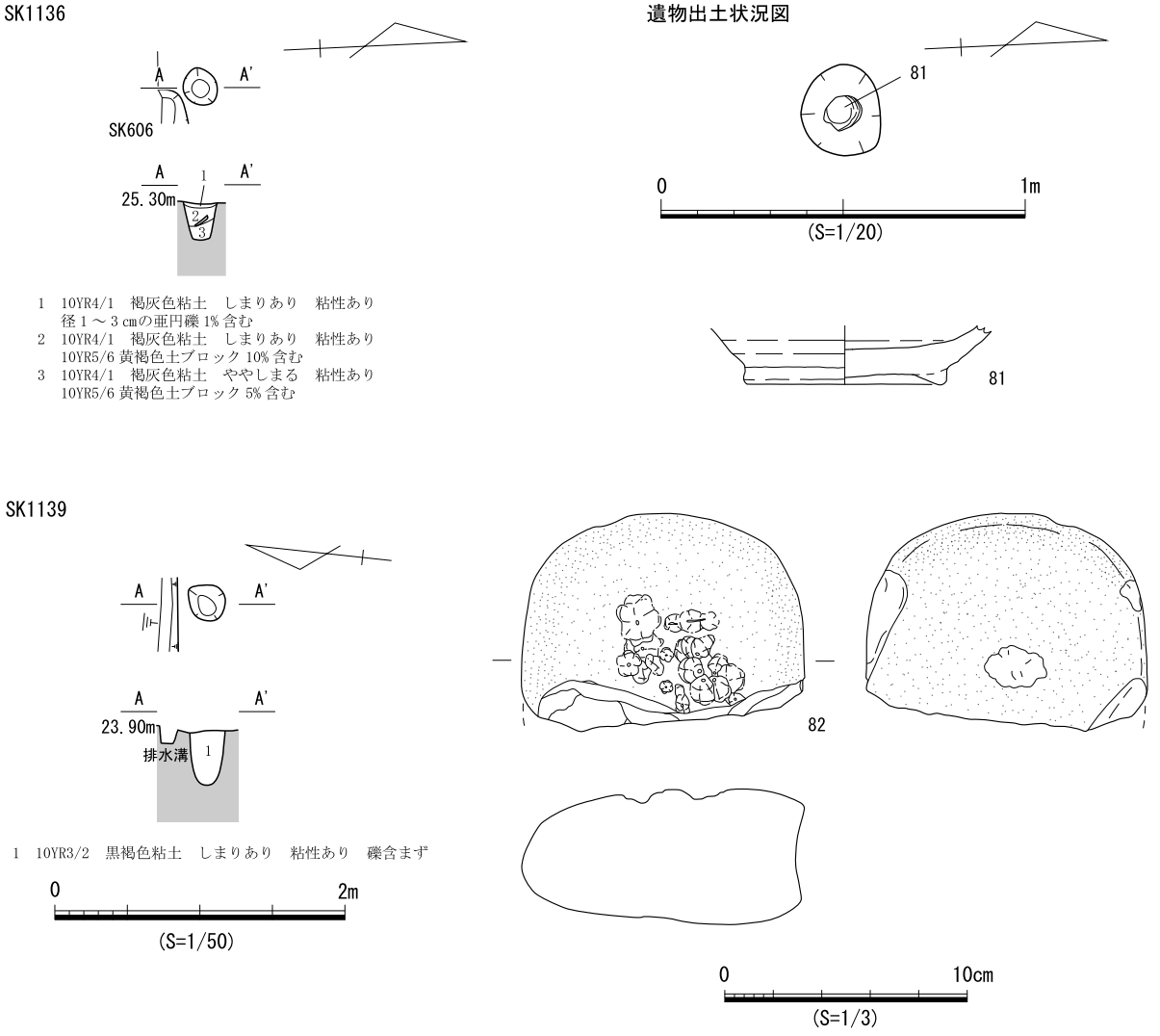


図70　SK1136・1139遺構図、遺物実測図

第３節　中世の遺構と遺物

１　柵

SA５（図71）

検出状況　DJ３・DJ４グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ６を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP92・SK583より新しく、SP83・SK1142より古い。

規模・形状　東西方向に６基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。方位がＮ－65°－W、柱間は1.0ｍ～1.9ｍ、東西長5.9ｍである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形若しくは不整円形で、径は0.2～0.5ｍ、深さは0.04～0.54ｍである。Ｐ３、Ｐ６では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　Ｐ３から土師器１点と山茶碗類３点、Ｐ６から土師器９点、須恵器１点、山茶碗類４点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器と須恵器は小片のため分類不能である。山茶碗類では分類可能なものとして、Ｐ３出土の尾張型第３型式の碗、谷迫間２号窯式に比定した小碗（83）、Ｐ６出土の尾張型第５型式の碗がある。

時期　出土遺物から、中世前期と考えられる。

SA６（図72）

検出状況　DJ４・DJ５グリッド、Ⅰ層基底面でＰ１～Ｐ７を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP100・SP102より新しく、SP111・SK627・SK636等より古い。

規模・形状　東西方向に７基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。方位がＮ－73°－Ｅ、柱間は1.1ｍ～1.9ｍ、東西長7.9ｍである。東側、西側ともに、発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形若しくは不整円形で、径は0.27～0.68ｍ、深さは0.07～0.57ｍである。Ｐ５では柱痕跡、Ｐ４では柱あたりを確認した。

遺物出土状況　Ｐ２から山茶碗類３点、Ｐ３から山茶碗類２点、Ｐ４から土師器７点、山茶碗類４点、Ｐ６から山茶碗類１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕である。小片のため図示しなかった。山茶碗類では分類可能なものとして、Ｐ２出土の尾張型第４型式の小碗（84）、Ｐ６出土の尾張型第４型式又は第５型式の碗がある。

時期　出土遺物から、中世前期と考えられる。

２　溝状遺構

SD２（図73・74）

検出状況　BF５～BF７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK35より古い。本遺構の南側に、SD３が並行する。

規模・形状　発掘区内でほぼ直角に屈曲し、遺構の両端は発掘区外に延びる。方位は、南北方向の直線部分はＮ－１°－Ｅ、屈曲部分から東端までの直線部分はＮ－77°－Ｅである。幅0.98ｍ、深さ0.20ｍで、内側の壁面は外側に比べて緩やかで、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　３層に分層した。１・２層埋土中に長さ0.5㎝～10㎝の多量の礫とⅣ層（基盤層）ブロックを含

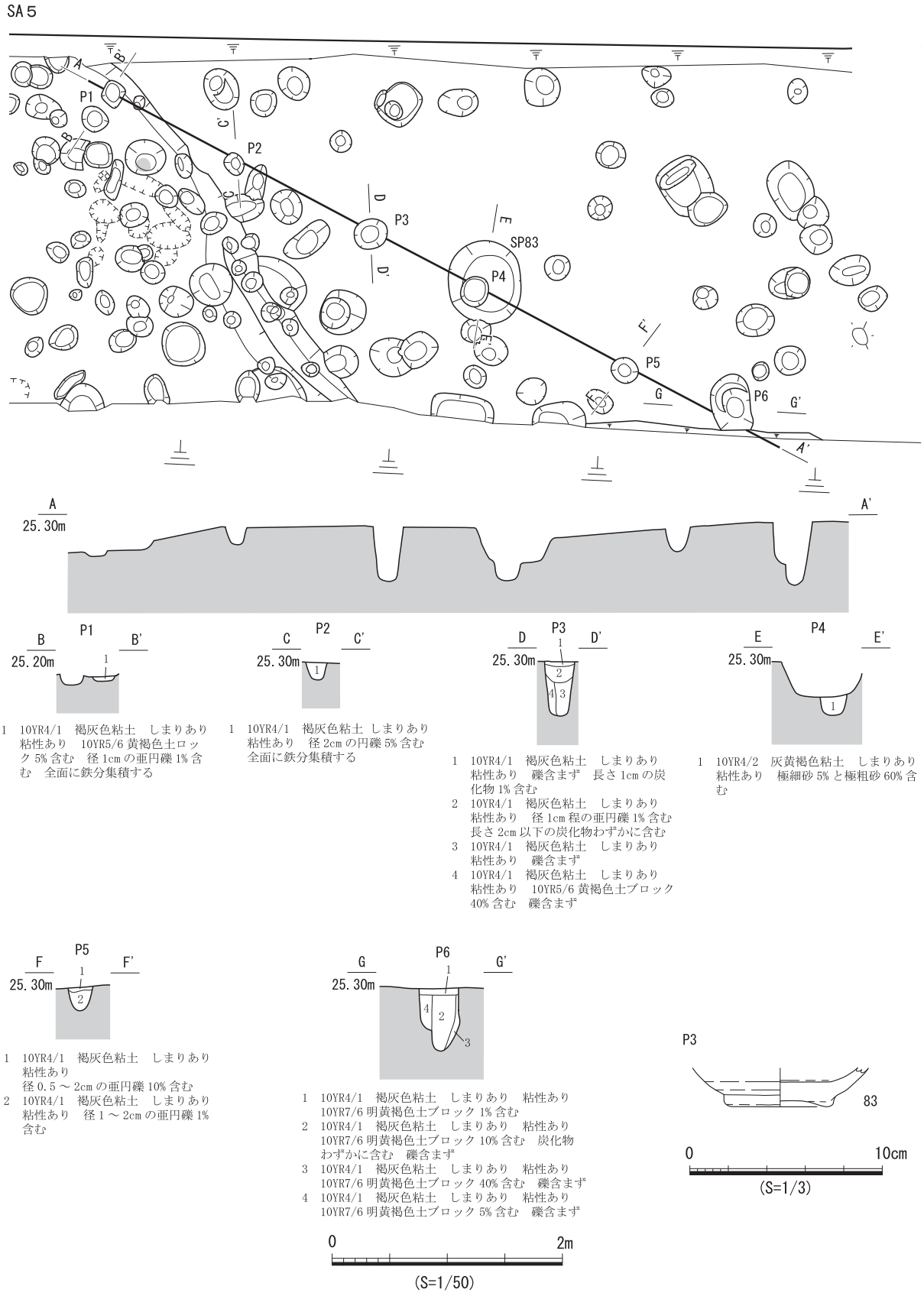
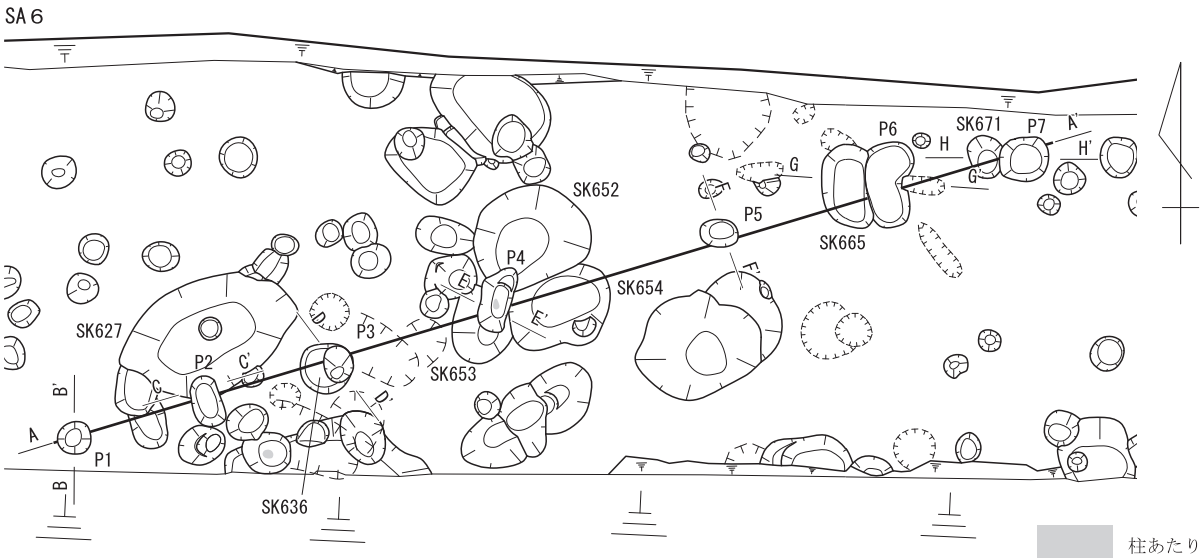
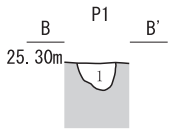
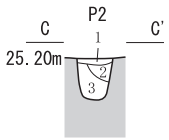


図71　SA５遺構図、遺物実測図

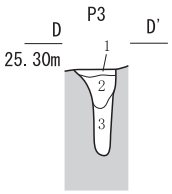




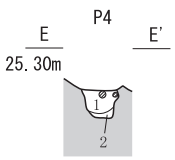
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず



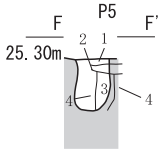
1　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　YR5/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　長さ 0.5 ～ 1cm の炭化物わずかに含む径 1cm の亜円礫わずかに含む
2　10Y5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　長さ 0.5 ～ 1cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
3　10Y5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 30% 含む　礫含まず



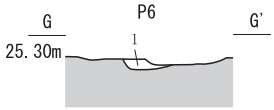
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　7.5YR5/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　長さ 0.5 ～ 1cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック　わずかに含む　長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む



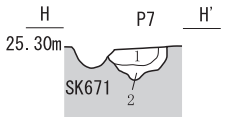
1　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　5YR5/6 明赤褐色土ブロックわずかに含む　10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む　径 4cm の円礫 5% 含む
2　10YR6/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり礫含まず



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 3cm の亜角礫 5% 含む
2　10YR7/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR4/1 褐灰色土ブロック 20% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
4　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 50% 含む　礫含まず

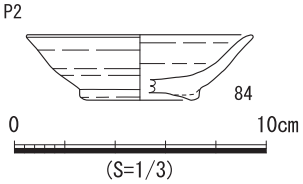


1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10% 含む　長さ 1cm 以下の炭化物と極粗砂わずかに含む　径 0.5 ～ 5cm の亜角礫 5% 含む



1　10YR4/2　灰黄褐色粘土しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　径 0.5 ～ 7cm の亜円礫 5% 含む
2　10YR7/6　明黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR4/2 灰黄褐色土ブロック 20% 含む　径 3cm の亜角礫 5% 含む

(S=1/50)



(S=1/3)

図72　SA６遺構図、遺物実測図

む。流水を示す堆積は確認できなかった。１層・２層埋土中の礫は円礫と亜角礫で、被熱したものが混じり、場所によって密度が異なる。１層・２層は、３層堆積後の人為的な堆積と考えられる。

遺物出土状況　１・２層埋土中から、土師器６点、須恵器９点、山茶碗類６点、常滑産陶器２点、渥美産陶器１点、石製品３点が散在して出土した。

遺物　土師器は大半が甕の胴部、須恵器は瓶類と甕の胴部で、いずれも小片である。山茶碗類は、美濃須衛産では尾張型第４型式併行に比定した碗（85）、尾張型第５型式併行に比定した碗（86）、尾張型では第４型式の碗と小碗がある。常滑産陶器は６型式又は７型式の甕である。渥美産陶器は火舎香炉の蓋（87）である。蓮弁文と心葉形の煙出しを施し、摘みをもつと考えられる。石製品は砂岩製の凹石（88）と砥石（89・90）である。88は敲打による凹みが４箇所に確認できる。全体が被熱し、破砕している。89と90はいずれも隣り合う２面に砥面をもつ。

時期　出土遺物から、14世紀後葉以降と考えられる。

SD３（図73・74）

検出状況　BF６・BF７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK37より新しい。本遺構の北側に、SD２が並行する。

規模・形状　遺構の南端は発掘区外に延びる。主軸方位はＮ－80°－Ｅで、幅0.47ｍ、深さ0.07ｍであり、断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。礫とⅣ層（基盤層）ブロックが混じる。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　SD２と隣接して並行することから、14世紀後葉以降と考えられる。

SD９（図75）

検出状況　BH17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD12より新しい。当遺構の南側に隣接するSD10は、同一遺構の可能性があるが、遺構埋土と掘方の形状が異なるため、別遺構と判断した。

規模・形状　主軸方位はＮ－４°－Ｗで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.43ｍ、深さ0.20ｍである。壁面の傾斜は東西で異なり、東側は緩やかだが、西側は急である。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　３層に分層した。埋土全体にⅣ層（基盤層）ブロックが混じり、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

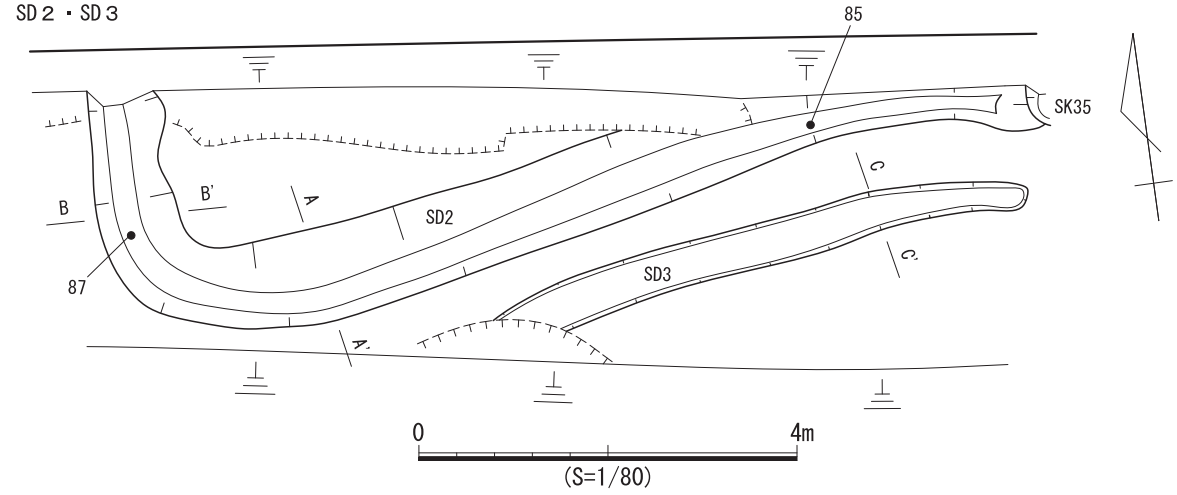
時期　当遺構より古いSD12から尾張型第５型式の山茶碗が出土したことから、12世紀後葉以降と考えられる。

SD12（図75）

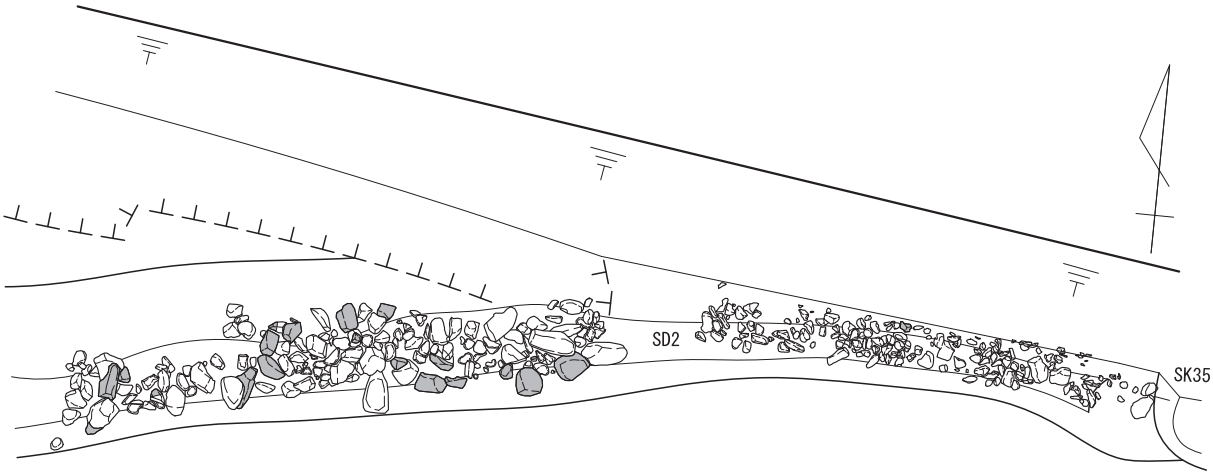
検出状況　BG17・BH17グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD９・SK114より古い。SD9とは位置関係から同一遺構の可能性が考えられるが、掘方の形状と遺構埋土が異なることから、別遺構と判断した。

規模・形状　主軸方位はＮ－２°－Ｗで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.75ｍ、深さ0.39ｍで

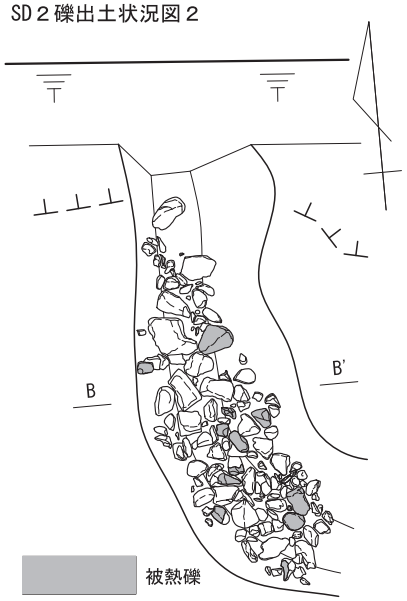
SD２・SD３



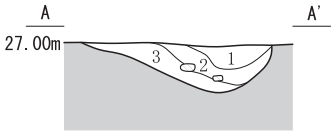
SD２礫出土状況図１



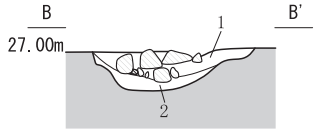
SD２礫出土状況図２



SD２

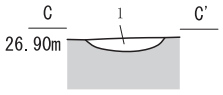


1　10Y4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む　径0.5～10cmの亜角礫30%含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む　径0.5～10cmの亜角礫30%含む
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cmの円礫わずかに含む



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む　径0.5～10cmの亜角礫30%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5cmの円礫わずかに含む

SD３



1　10YR4/1　褐灰色粘土　ややしまる　10YR5/6黄褐色土ブロック20%含む　径2cmの亜角礫20%含む

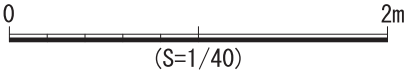


図73　SD２・３遺構図（１）

ある。壁面の立ち上がりは急で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　４層に分層した。埋土全体にⅣ層（基盤層）ブロックが混じるが、礫は含まない。流水を示す堆積は確認できなかった。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　須恵器１点、山茶碗類２点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器は瓶類の頸部の小片で、山茶碗類は尾張型第５型式の碗である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD14（図75）

検出状況　BH20～CI１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SI１・SD16より新しい。

規模・形状　主軸方位はＮ－５°－Ｅで、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.99ｍ、深さ0.10ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

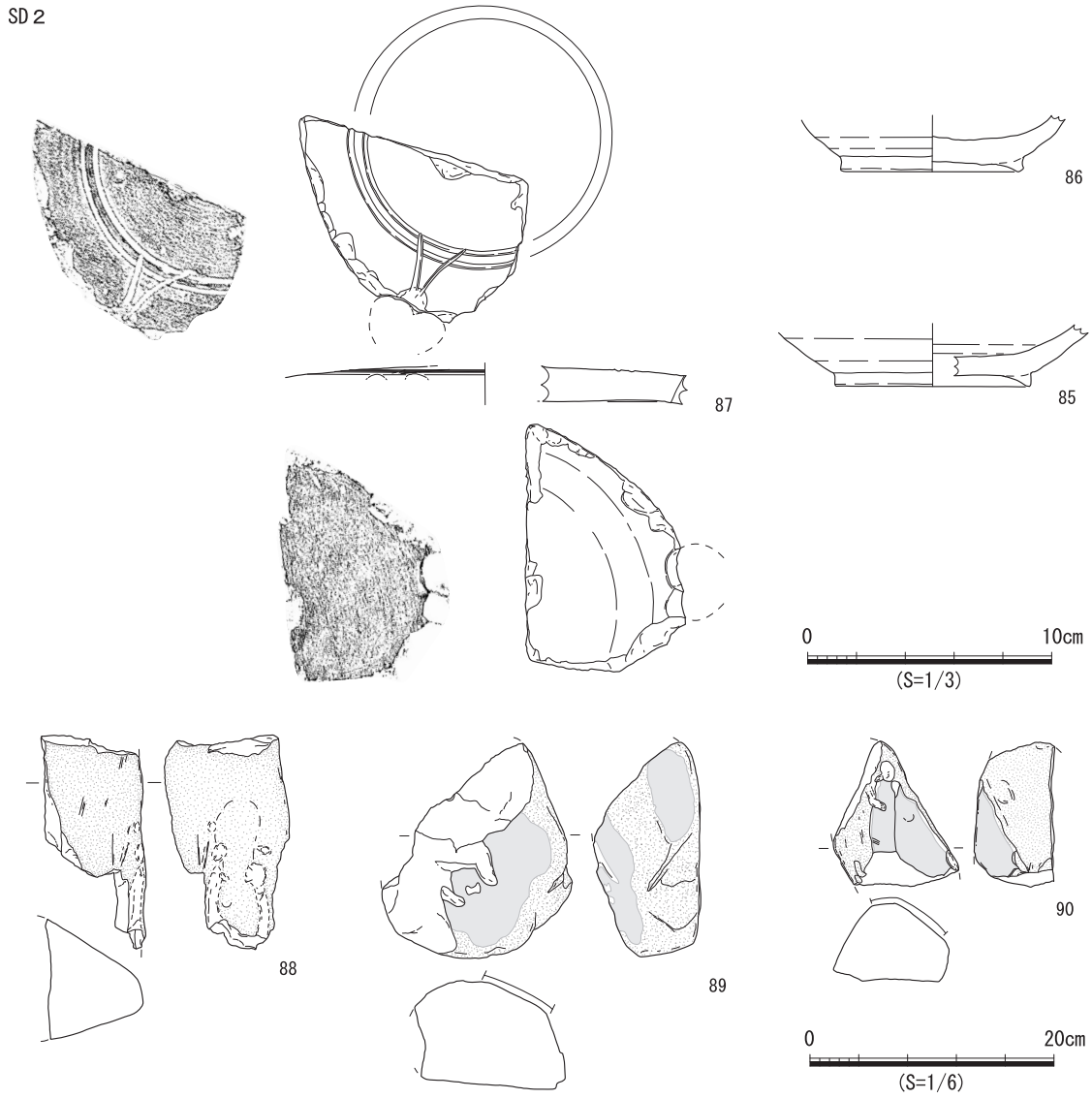


図74　SD２・３遺構図（２）、SD２遺物実測図

遺物出土状況　土師器３点、灰釉陶器２点、山茶碗類２点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

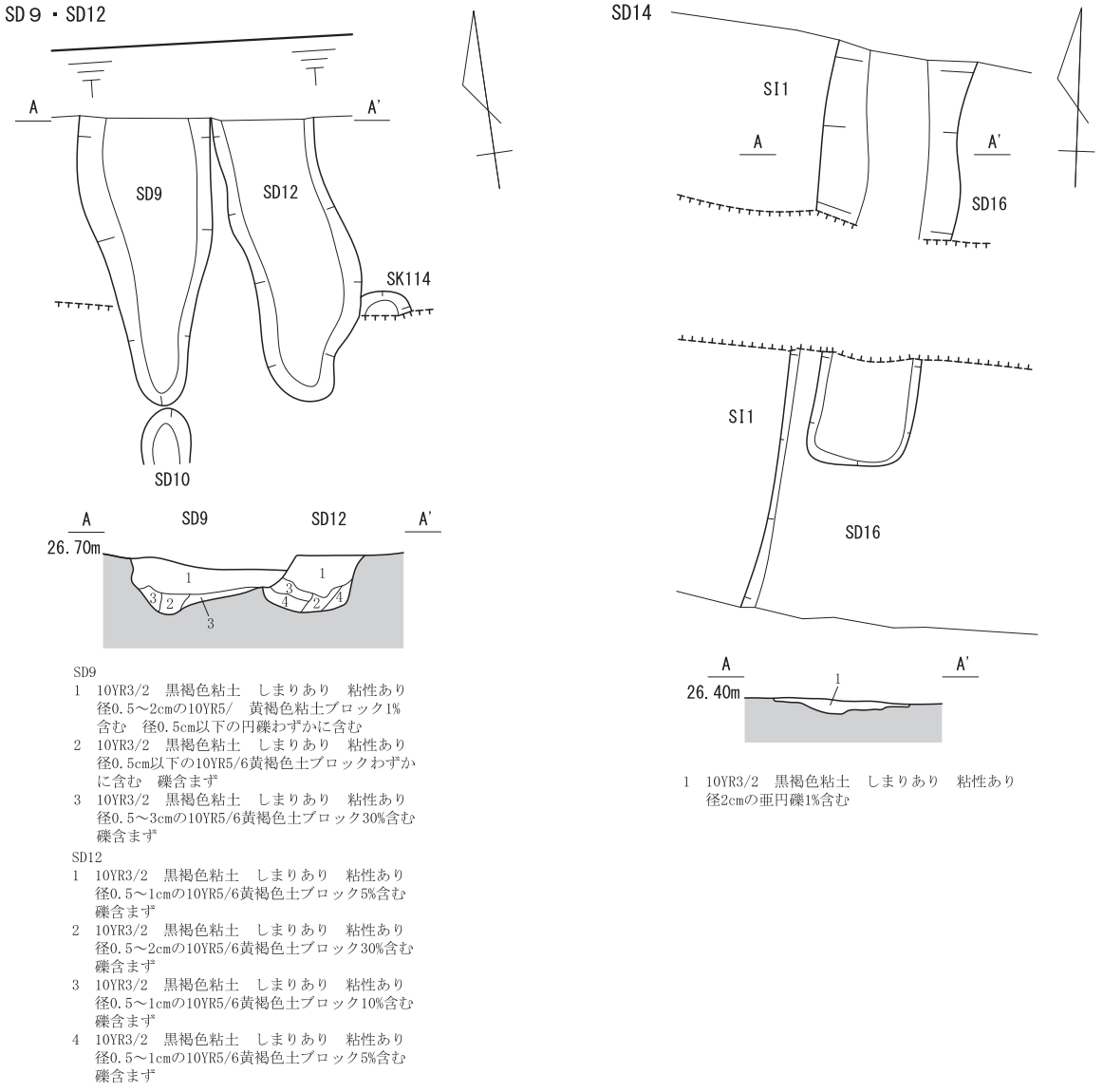
遺物　土師器は小片のため器種不明である。灰釉陶器と山茶碗類はいずれも碗の小片である。

時期　出土遺物から、中世と考えられる。

SD19（図76）

検出状況　BK15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD20より新しい。

規模・形状　主軸方位はＮ－７°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.63ｍ、深さ0.14ｍである。壁面の傾斜が東西で異なり、西側が緩やかで東側が急である。両端部の底面標高に大きな差はない。重複するSD20と、約４ｍ東に位置するSD21と主軸方位が類似する。



SD9
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～2cmの10YR5/　黄褐色粘土ブロック1%含む　径0.5cm以下の円礫わずかに含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5cm以下の10YR5/6黄褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～3cmの10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む
礫含まず

SD12
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む
礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む
礫含まず
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む
礫含まず
4　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径0.5～1cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む
礫含まず

1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
径2cmの亜円礫1%含む

図75　SD９・12・14遺構図

埋土　２層に分層した。遺構の北部では、１層埋土内に少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。範囲流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器１点、須恵器５点、灰釉陶器３点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は美濃須衛産の平瓶（91）で、把手を有する。８世紀前半のものである。灰釉陶器は碗と段皿の胴部で、いずれも小片である。

時期　当遺構より古いSD20から､尾張型５型式併行に比定した美濃須衛産山茶碗が出土することから、13世紀前半以降と考えられる。

SD20（図76）

検出状況　BK15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD19より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－９°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.93ｍ、深さ0.32ｍである。壁面の傾斜は東西ともに緩やかである。底面の東側は幅約0.4ｍの平坦部分が帯状に広がり、西側に向かって一段低くなる。重複するSD19と、約４ｍ東に位置するSD21と主軸方位が類似する。

埋土　２層に分層した。１層・２層ともにⅣ層（基盤層）ブロックと少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器８点、須恵器５点、灰釉陶器３点、山茶碗類１点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は坏身と壺と甕の小片である。灰釉陶器は碗と皿の胴部で、いずれも小片である。山茶碗類は尾張型５型式併行に比定した美濃須衛産の碗（92）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD21（図77）

検出状況　BK16グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK206・SK207・SK208・SK209・SK210より新しい。約４ｍ西に位置するSD19・SD20と主軸方位が類似する。

規模・形状　主軸方位はＮ－５°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.73ｍ、深さ0.15ｍである。断面形状は逆台形で、底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。少量の礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器13点、灰釉陶器１点、山茶碗類７点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は、ロクロ土師器の皿と甕の胴部の小片である。灰釉陶器は碗の小片である。山茶碗類は、美濃須恵産の尾張型第４型式併行に比定した碗（93）、尾張型第５型式の碗、谷迫間２号窯式に比定した東濃型山茶碗の小碗（94）である。93の底部外面には「万□（葉か）」の墨書がある。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD24（図77）

検出状況　CL３・CM３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明

瞭であった。他遺構との重複関係は、SK268より新しい。当遺構の東側に隣接するSD23とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状　主軸方位はＮ－７°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅2.46ｍ、深さ0.28ｍである。断面形状はＶ字状で壁面は緩やかに立ち上がるが、部分的にテラス状の平坦面が存在する。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積で、１層埋土にⅣ層（基盤層）ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器22点、須恵器７点、灰釉陶器12点、山茶碗類６点、常滑産陶器１点が散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

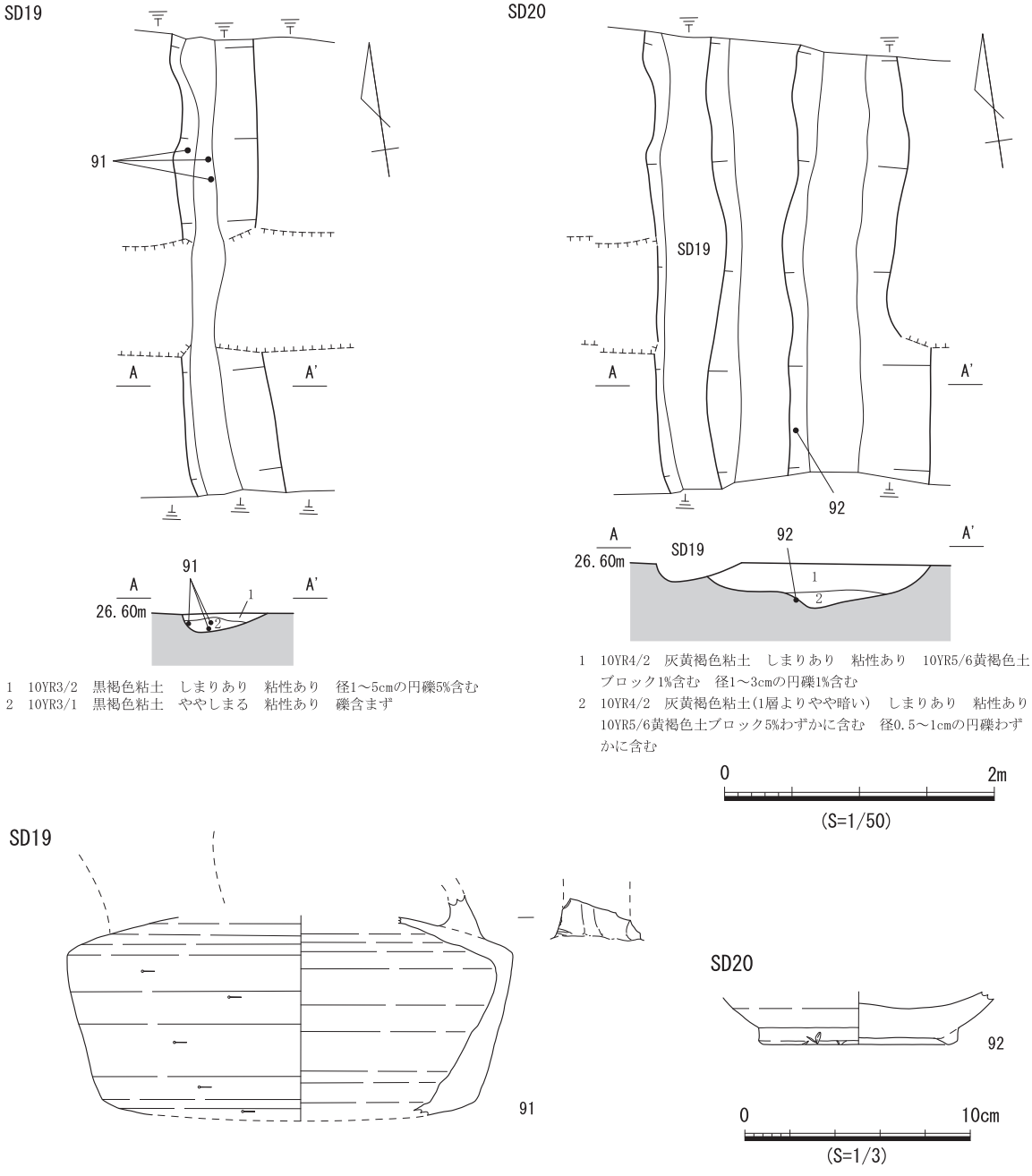
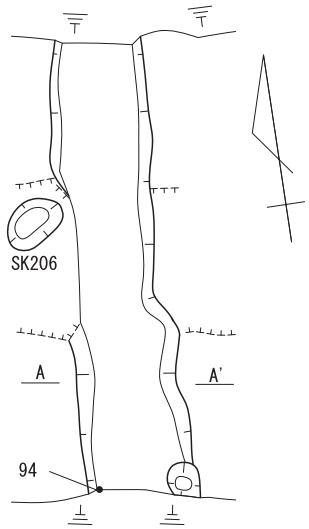


図76　SD19・20遺構図、遺物実測図

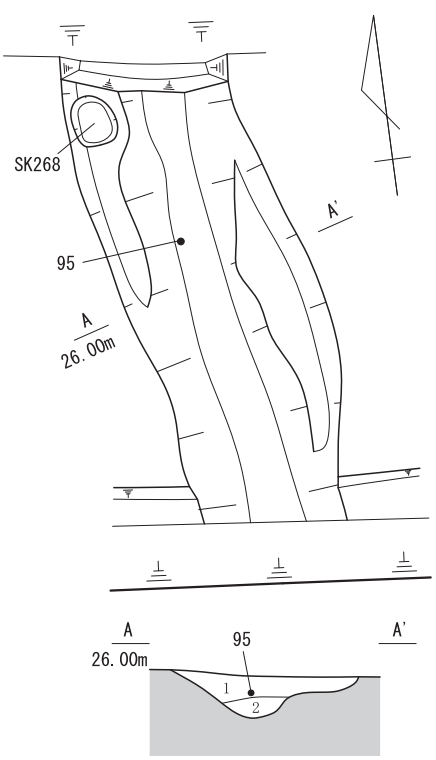
SD21



1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6
　黄褐色土ブロック1%含む　径1～2cmの円礫5%含む
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径2cmの円
　礫1%含む

0　2m
(S=1/50)

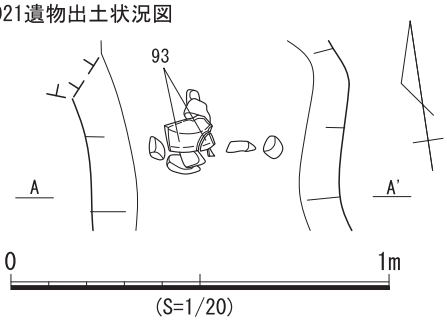
SD24



1　10YR3/3　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　10YR5/1
　黄褐色土ブロックわずかに含む　径1cm以下の円礫1%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色土　しまりあり　粘性あり　礫含まず

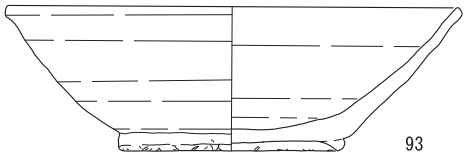
0　2m
(S=1/50)

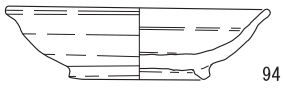
SD21遺物出土状況図



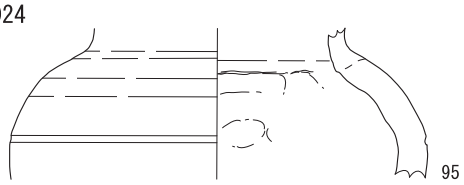
0　1m
(S=1/20)

SD21





SD24



0　10cm
(S=1/3)

図77　SD21・24遺構図、遺物実測図

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器は壺又は甕、瓶類、坏蓋Ａ、坏身で、いずれも小片である。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型の第３型式又は第４型式の碗と第６型式の碗がある。常滑産陶器は３型式又は４型式の三筋壺（95）である。

時期　出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

SD33（図78）

検出状況　DN１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK971・SK972より新しく、SK970・SK974より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－56°－Ｅで、遺構の北部から西部にかけての部分は撹乱により消失し、遺構の北端は発掘区外に延びる。幅0.83ｍ以上、深さ0.31ｍである。断面形状は、概ね逆台形で、遺構北部では底部が一段深く掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。当遺構の南側に位置するSD34・SD35・SD36と主軸方位が類似する。

埋土　５層に分層した。１層～４層にⅣ層（基盤層）ブロックを含む。また、Ａ－Ａ´断面の２層とＢ－Ｂ´断面の５層に多量の亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器２点、須恵器３点、山茶碗類14点、土製品２点が、１層・２層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期又はⅣ期に比定した坏蓋Ｃ類がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗、東濃型丸石３

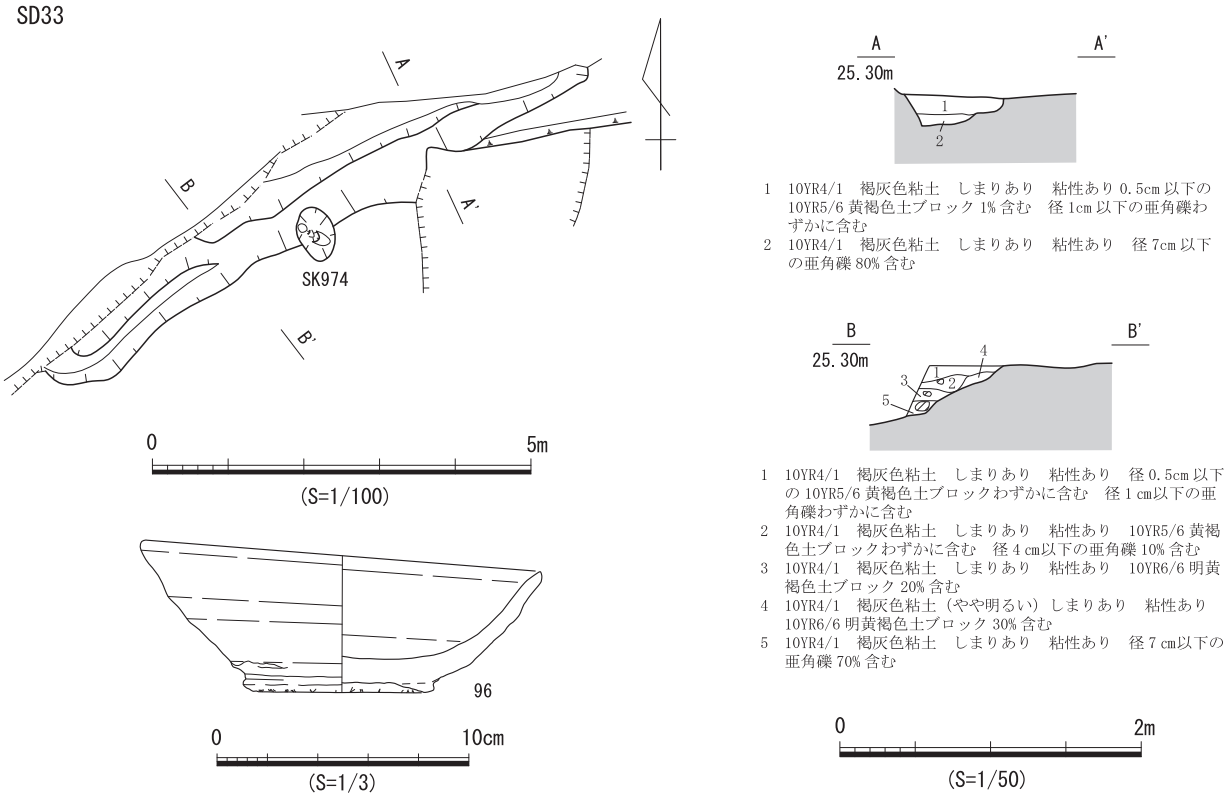


図78　SD33遺構図、遺物実測図

号窯式に比定した碗（96）がある。土製品は分類不能である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD34（図79）

検出状況　DN１～DM２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD36より新しく、SK974・SK978より古い。当遺構の東側に隣接するSD23とは主軸方位が異なり、発掘区北側で重複する可能性がある。

規模・形状　東西方向の直線部分の主軸方位はＮ－75°－Ｅで、遺構東端で北に向かって屈曲する。遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.70ｍ、深さ0.22ｍである。断面形状は半円形である。両端部の底面標高は、西から東に向かって緩やかに深くなる。当遺構の周辺に位置するSD33・SD35・SD36と主軸方位が類似する。

埋土　３層に分層した。２層にⅣ層（基盤層）ブロックを含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器15点、須恵器９点、灰釉陶器５点、山茶碗類31点、常滑産陶器２点、金属製品２点が、１層～３層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　土師器は大半が甕の胴部の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏身Ｃ類がある。灰釉陶器の分類可能なものとして、東濃産では明和27号窯式に比定した碗(97)と11世紀代の壺又は瓶、猿投産では黒笹90号窯式に比定した碗がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型では第３型式の小碗、第３又は第４型式の小碗（98）、第５型式の碗（99・100）、東濃型では丸石３号窯式に比定した碗、浅間窯下１号窯式又は丸石３号窯式に比定した碗（101）、窯洞１号窯式に比定した碗、美濃須衛産では、尾張型第５型式併行に比定した碗と小皿がある。常滑産陶器は甕の胴部と底部の小片である。金属製品は鉄製の鑿根鏃（102）である。

時期　出土遺物から、12世紀後半以降と考えられる。

SD41（図80）

検出状況　DN８～DM９グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1069・SK1070・SK1073等より新しく、SK1056・SK1066・SK1067等より古い。

規模・形状　主軸方位はＮ－34°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.65ｍ、深さ0.25ｍである。東側壁面にテラス状の平坦面が存在し、底面に土坑状の窪みがある。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　８層に分層した。６層・７層にⅣ層（基盤層）ブロックを含み、２層・４層・８層埋土には多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　縄文土器３点、土師器８点、須恵器16点、灰釉陶器７点、山茶碗類21点、瓦１点が、１層～６層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　縄文土器の分類可能なものとして、晩期の深鉢（103）がある。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。土師器は甕と壺の小片である。須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期第１小期に比定した坏蓋Ｃ類（104）がある。灰釉陶器の分類可能なものとして、光ヶ丘１号窯式又は大原２号窯式に比定した広口瓶（105）がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第３型式の

碗（106・107）、第４型式の碗（108）、第５型式の碗（109）がある。107は底部内面に焼成後に刻まれた複数の削痕が確認できる。瓦は平瓦の小片で、摩滅が著しい。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SD42（図81）

検出状況　DM10～DN11グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1111・SK1112・SK1119より古い。

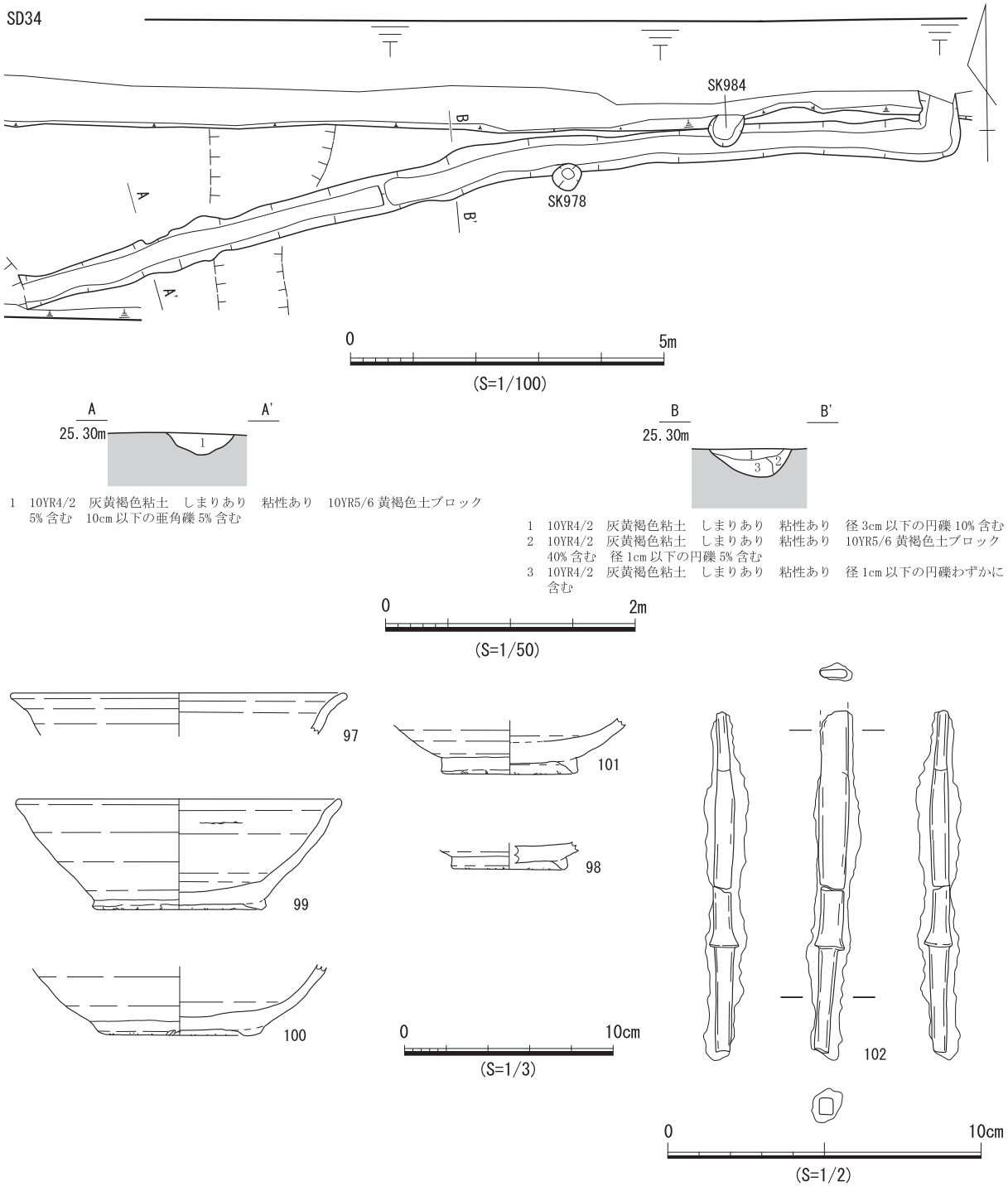
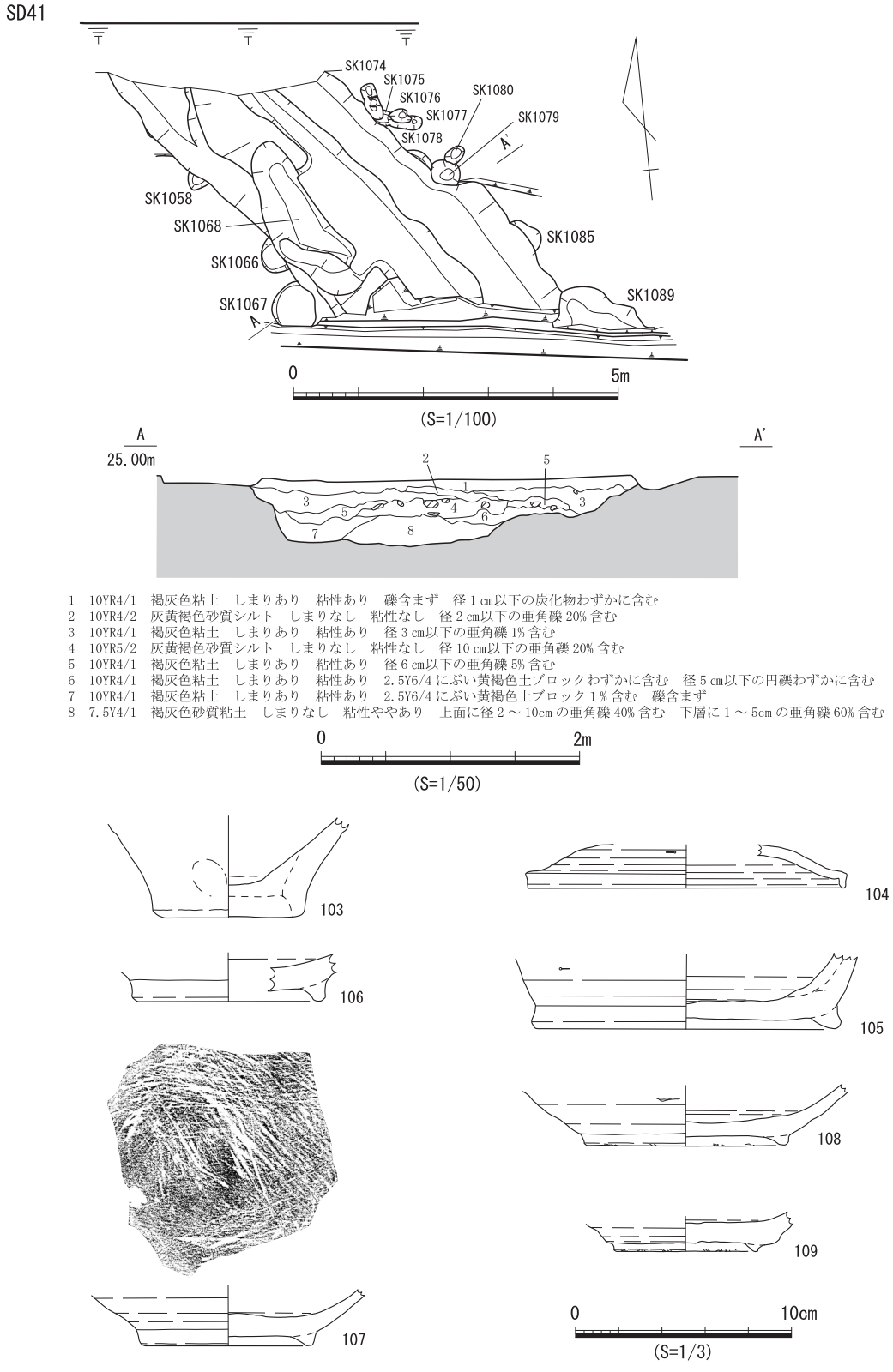


図79　SD34遺構図、遺物実測図

規模・形状　主軸方位はＮ－41°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.56ｍ、深さ0.34ｍである。東側壁面は緩やかに立ち上がり、西側壁面は傾斜が急である。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず　径１cm以下の炭化物わずかに含む
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　しまりなし　粘性なし　径２cm以下の亜角礫20%含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径３cm以下の亜角礫1%含む
4　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト　しまりなし　粘性なし　径10cm以下の亜角礫20%含む
5　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径６cm以下の亜角礫5%含む
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　2.5Y6/4にぶい黄褐色土ブロックわずかに含む　径５cm以下の円礫わずかに含む
7　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　2.5Y6/4にぶい黄褐色土ブロック１%含む　礫含まず
8　7.5Y4/1　褐灰色砂質粘土　しまりなし　粘性ややあり　上面に径２～10cmの亜角礫40%含む　下層に１～5cmの亜角礫60%含む

図80　SD41遺構図、遺物実測図

埋土　６層に分層した。３層に多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　須恵器５点、山茶碗類４点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　須恵器の分類可能なものとして、美濃須衛産のⅢ期又はⅣ期に比定した甕がある。山茶碗類の分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗（110）と小皿がある。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

３　土坑

SK141（図82）

検出状況　CH２グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.89ｍ、短軸長0.43ｍ以上、深さ0.07ｍであり、遺構北部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。断面形は浅い皿状で、半円形で、底面は概ね平坦である。

埋土　単層である。少量の礫が混じるが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器４点、山茶碗類２点が埋土中から出土した。土師器は同一個体の皿で、破片は全て遺構底部から出土した。

出土遺物　土師器は、美濃中世前期土師器皿Ａ２ａ類（111）である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗がある。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

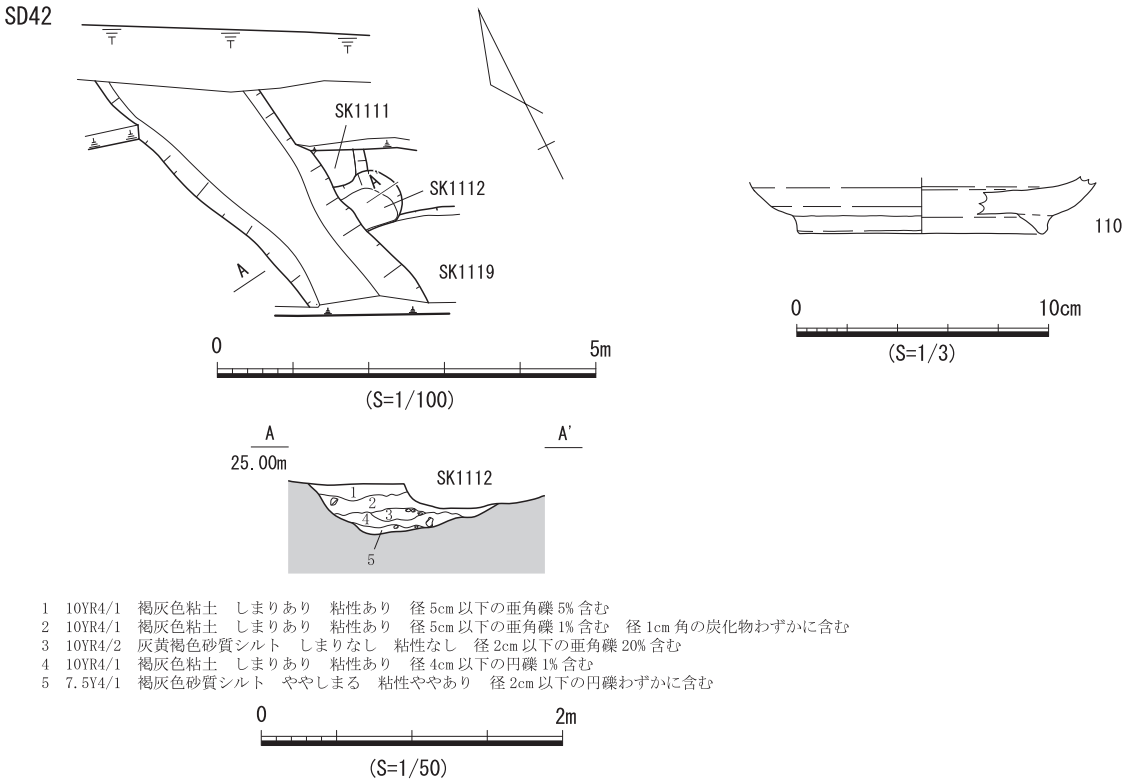


図81　SD42遺構図、遺物実測図

SK343（図82）

検出状況　CL３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似し、また重複するSK341との境界が不明瞭だったため、Ｂ－Ｂ'断面でトレンチ状に掘削し、遺構埋土を確認した。埋土と他遺構との重複関係は、SK341・SK344より古い。

規模・形状　長軸長1.94m、短軸長1.19m、深さ0.36mで、遺構南部が発掘区外に広がるが、平面形は概ね楕円形と考えられる。遺構北部では底面が平坦だが、南部では半円状に一段深く掘り込まれる。

埋土　８層に分層した。２層と３層に焼土ブロック、１層～５層・７層に炭化物を含む。概ね水平な堆積で、基盤層ブロックと礫が少量混じり、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器２点、土師器66点、須恵器６点、灰釉陶器２点、山茶碗類18点、中国産陶磁器１点、石製品１点が埋土全体から散在して出土し、層位による偏りは確認できなかった。土師器は皿と甕の小片で、埋土全体から散在して出土したが、灰釉陶器は５層から出土した。山茶碗は２層から、内面を遺構中央に向けた立位で出土した。

出土遺物　縄文土器は深鉢の胴部である。小片のため図示しなかった。土師器は大半が甕の小片で、分類可能なものとして、ロクロ成形の皿（112）がある。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した坏身Ｃ類がある。灰釉陶器は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型３型式の碗、尾張型４型式又は５型式の碗、尾張型５型式の碗(113)、谷迫間２号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗（114）がある。中国産陶磁器はⅤ類の白磁碗（115）で、11世紀後半から12世紀初頭にかけてのものである。石製品は砂岩製の砥石（116）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK519（図83）

検出状況　DJ３グリッド、SK623完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、平面形は不明瞭であったが、検出時に複数の円礫が表出していた。他遺構との重複関係は、SK517・SK623より古い。

規模・形状　長軸長0.41m、短軸長0.29m、深さ0.05mで、平面形は不整円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土　単層である。径１cm～８cmの円礫を多量に含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　山茶碗類１点、石製品１点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　山茶碗類は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。石製品は砂岩製の敲石（117）で、一面のみに敲打痕が確認できる。裏面は大きく欠損し、表面の風化が顕著である。

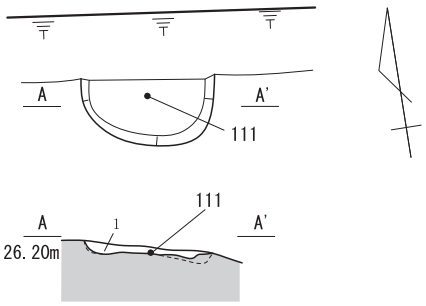
時期　出土遺物から、中世以降と考えられる

SK623（図84）

検出状況　DJ２・DJ３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、平面形は不明瞭であった。完掘後の底面で90基の土坑を検出した。他遺構との重複関係は、SK504・SK505・SK506等より新しく、SK498・SK583・SK586等より古い。

規模・形状　長軸長3.41m以上、短軸長3.26m、深さ0.16mである。遺構の北東部と南部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。壁面の傾斜は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦であるが、遺構東部が若干深く掘り込まれる。

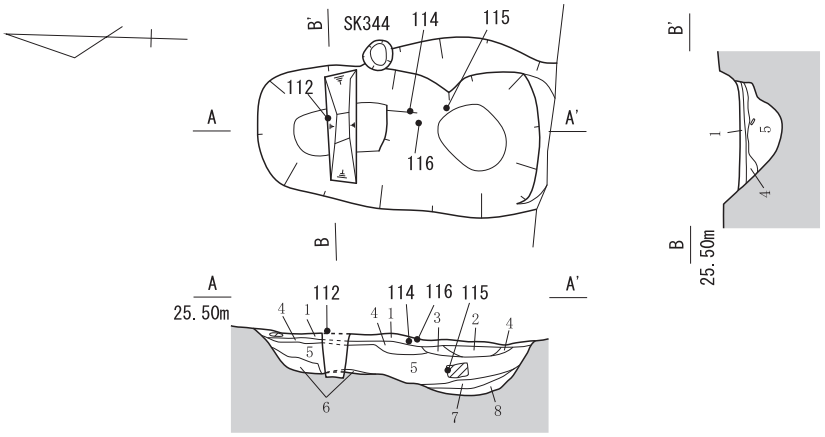
SK141



1　10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性ややあり　5YR5/6明赤褐色粒子をわずかに含む　径0.5～8cmの亜角礫10%含む

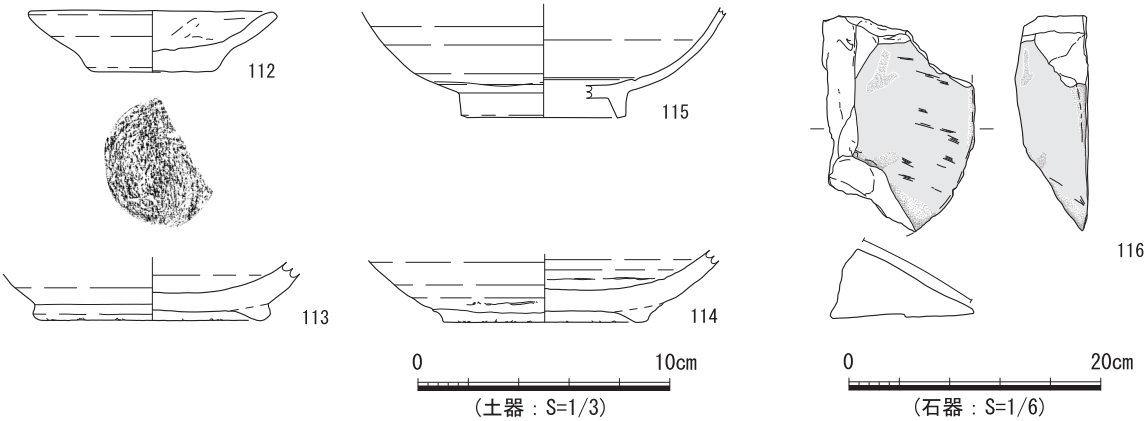
(S=1/3)

SK343



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　5YR6/8 橙色粘土ブロック 5% 含む　径 2cm 以下の炭化物 1% 含む　径 8cm の亜角礫 1 点含む
2　10YR2/1　黒褐色粘土　ややしまる　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　YR5/6 明赤褐色土ブロック（焼土）5% 含む　長さ 0.5 ～ 2cm の炭化物 1% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　5YR5/6 明赤褐色土ブロック（焼土）5% 含む　長さ 0.5 ～ 1cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
4　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 10% 含む　5YR6/8 橙色粘土ブロック 1% 含む　長さ 0.5 ～ 5cm の炭化物 5% 含む　礫含まず
5　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　径 2cm 以下の炭化物わずかに含む
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 30% 含む
7　10YR2/1　黒褐色粘土　ややしまる　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　10YR4/1 褐灰色粘土ブロック 10% 含む　5YR6/8 橙色粘土ブロック 1% 含む　長さ 2cm 以下の炭化物わずかに含む　礫含まず
8　10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR2/1 黒褐色土ブロック 30% 含む　礫含まず

(S=1/50)



(土器：S=1/3)　(石器：S=1/6)

図82　SK141・343遺構図、遺物実測図

埋土　２層に分層した。ほぼ水平な堆積で、亜角礫とブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点、土師器57点、須恵器33点、灰釉陶器10点、山茶碗類９点、瓦３点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　縄文土器は深鉢の胴部である。小片のため図示しなかった。土師器は大半が甕の胴部の小片で、分類可能なものとして、７世紀代と考えられる長胴甕（118）とロクロ成形の皿（119）がある。119は内外面の口縁部周辺にタール状の炭化物が付着し、灯明皿として用いられたと考えられる。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産ではⅢ期後半からⅣ期第２小期に比定した坏身Ｂ類、Ⅳ期第２小期又はⅣ期第３小期に比定した甕、Ⅳ期に比定した盤（120）、猿投産では鳴海32号窯式又は折戸10号窯式に比定した坏蓋Ｃ類と坏身Ｃ類がある。灰釉陶器は分類可能なものとして、明和27号窯式に比定した東濃産の碗がある。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第６型式の碗、谷迫間２号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗（121）がある。瓦は残存状況が良好な丸瓦１点（122）を図示した。122は凸面に布目痕、凹面に縄目痕が確認でき、古代の瓦と考えられる。

時期　出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

SK627（図85）

検出状況　DJ４・DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と類似するため、埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK628より新しく、SK629・SK631・SK634より古い。

規模・形状　長軸長1.45m以上、短軸長0.90m、深さ0.24mで、平面形は不定形である。断面形は概ね逆台形不明で、底面は平坦である。

埋土　６層に分層した。１層～４層はほぼ水平な堆積で、２層～５層に亜角礫と基盤層ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

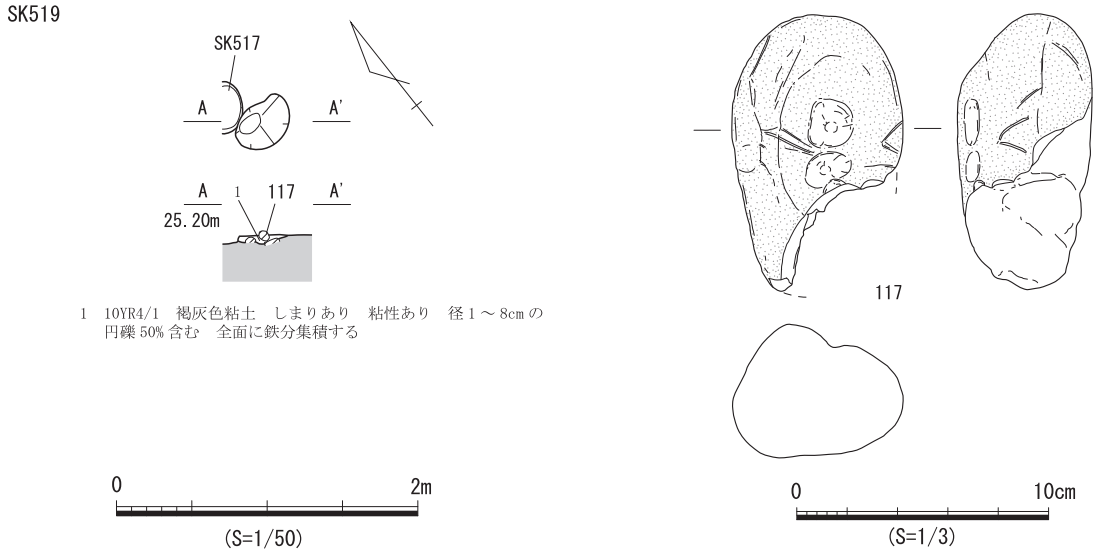
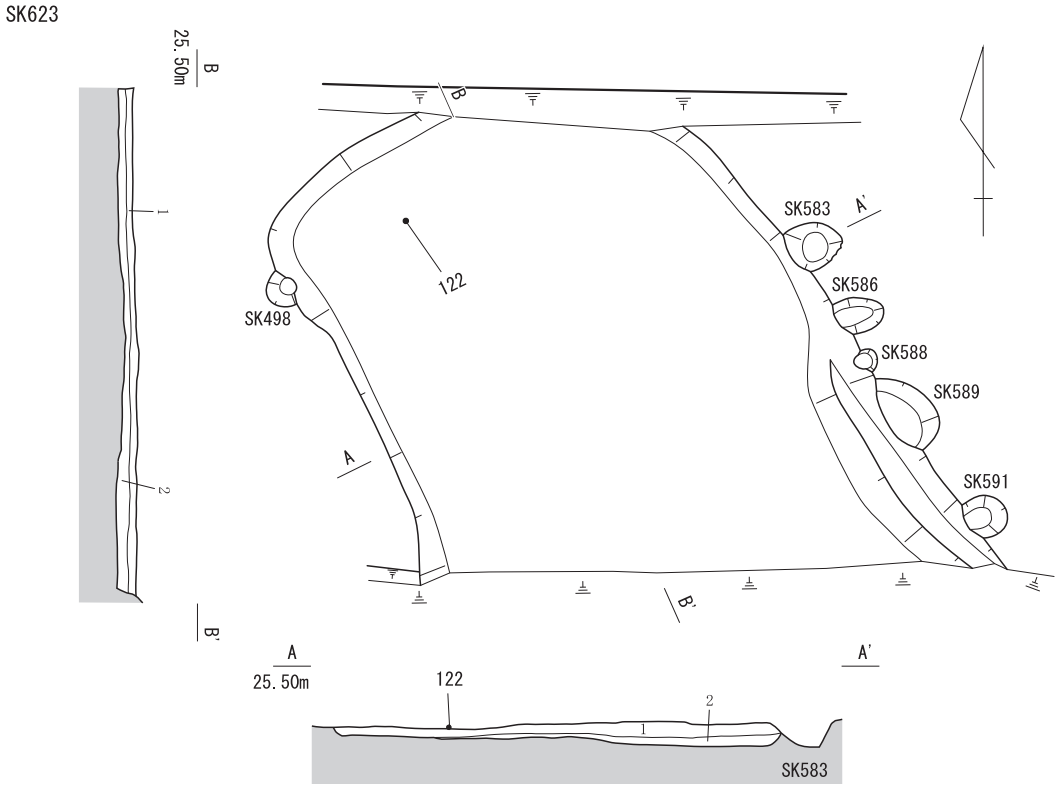
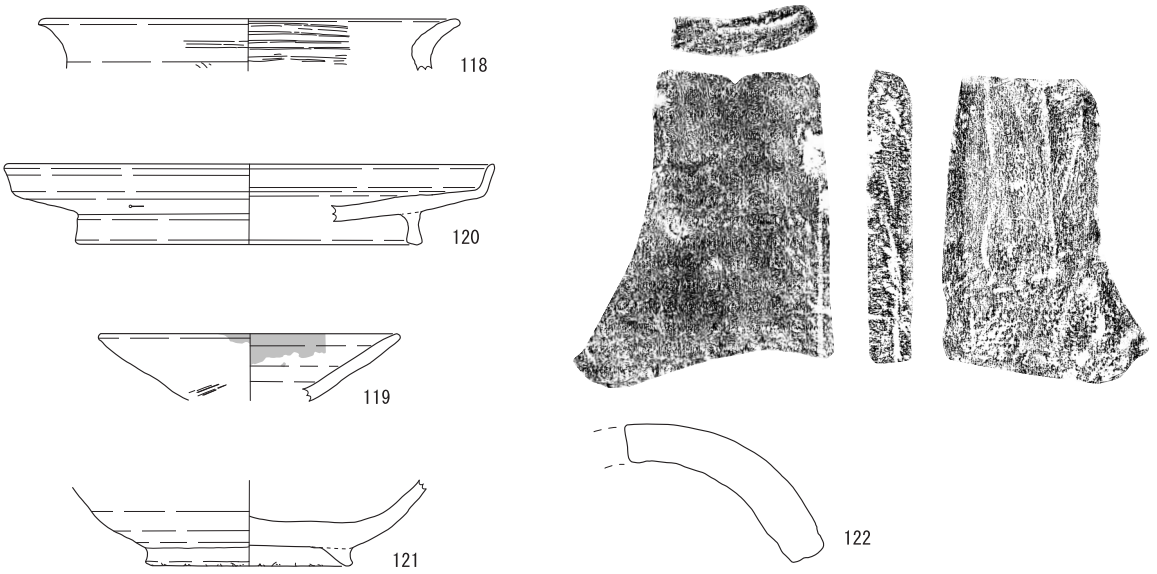


図83　SK519遺構図、遺物実測図



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径 0.5 ～ 10cm の亜角礫 5% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む
　長さ 1cm 以下の炭化物わずかに含む　径 0.5 ～ 1cm の亜角礫 1% 含む

0　2m
(S=1/50)



0　10cm
(S=1/3)

図84　SK623遺構図、遺物実測図

遺物出土状況　土師器74点、須恵器１点、灰釉陶器６点、山茶碗類35点、中国産陶磁器４点、石製品１点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとして、ロクロ成形の皿と伊勢鍋があるが、いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は坏身の胴部の小片、灰釉陶器は碗の小片である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第３型式の小碗（123）、第４型式又は第５型式の碗、東濃型では尾張型第３型式併行に比定した碗（124）、谷迫間２号窯式に比定した碗、美濃須衛産では尾張型第５型式併行に比定した碗（125）がある。123は内面底部に墨痕が付着し、摩滅が著しいことから、転用硯と考えられる。中国産陶磁器は白磁の碗と皿で、分類可能なものとして白磁碗Ⅳ－１類（126）がある。石製品は泥岩製の砥石（127）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK637（図86）

検出状況　DJ４・DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP103・SK638・SK639等より古い。

規模・形状　長軸長1.47ｍ、短軸長0.42ｍ以上、深さ0.11ｍである。遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形は不明である。断面形は浅い皿状で、底面は若干の凹凸がある。

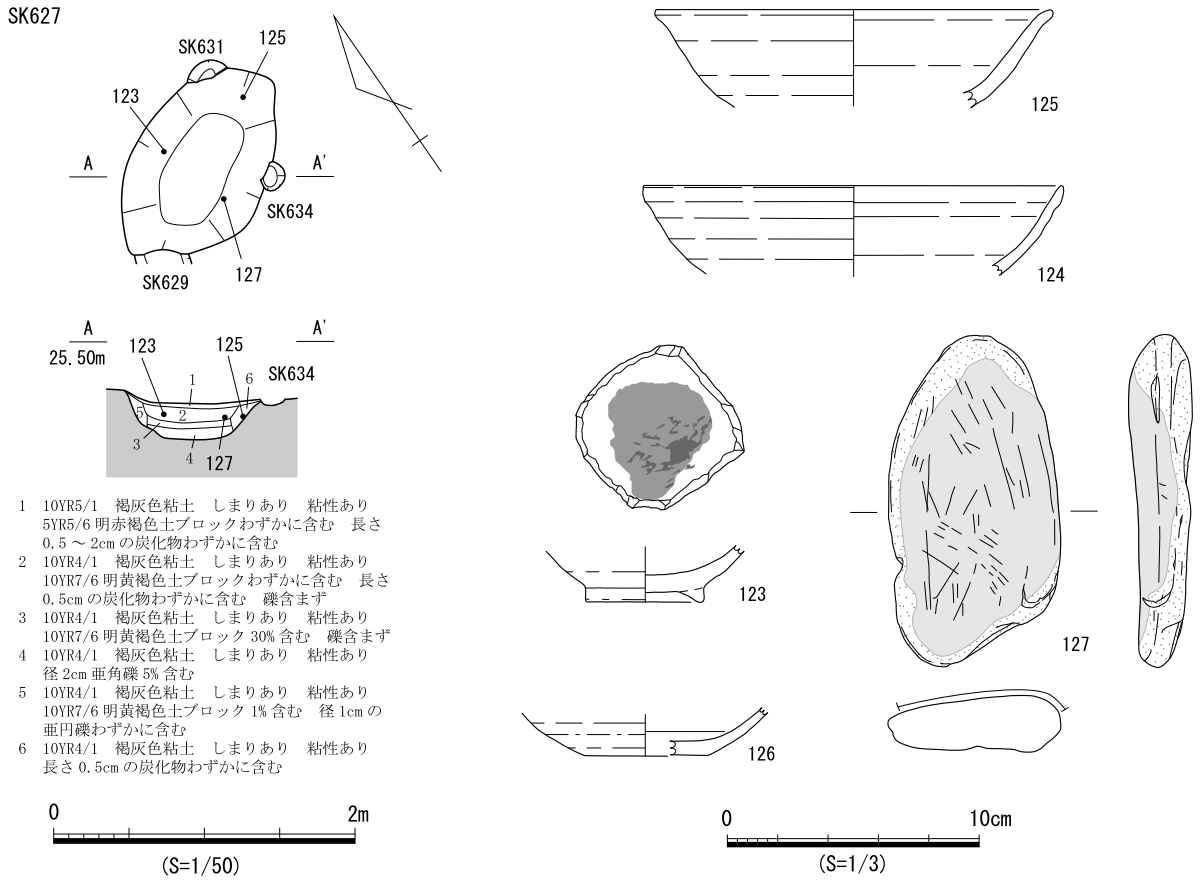


図85　SK627遺構図、遺物実測図

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックと角礫を含み、人為堆積と考えられる。

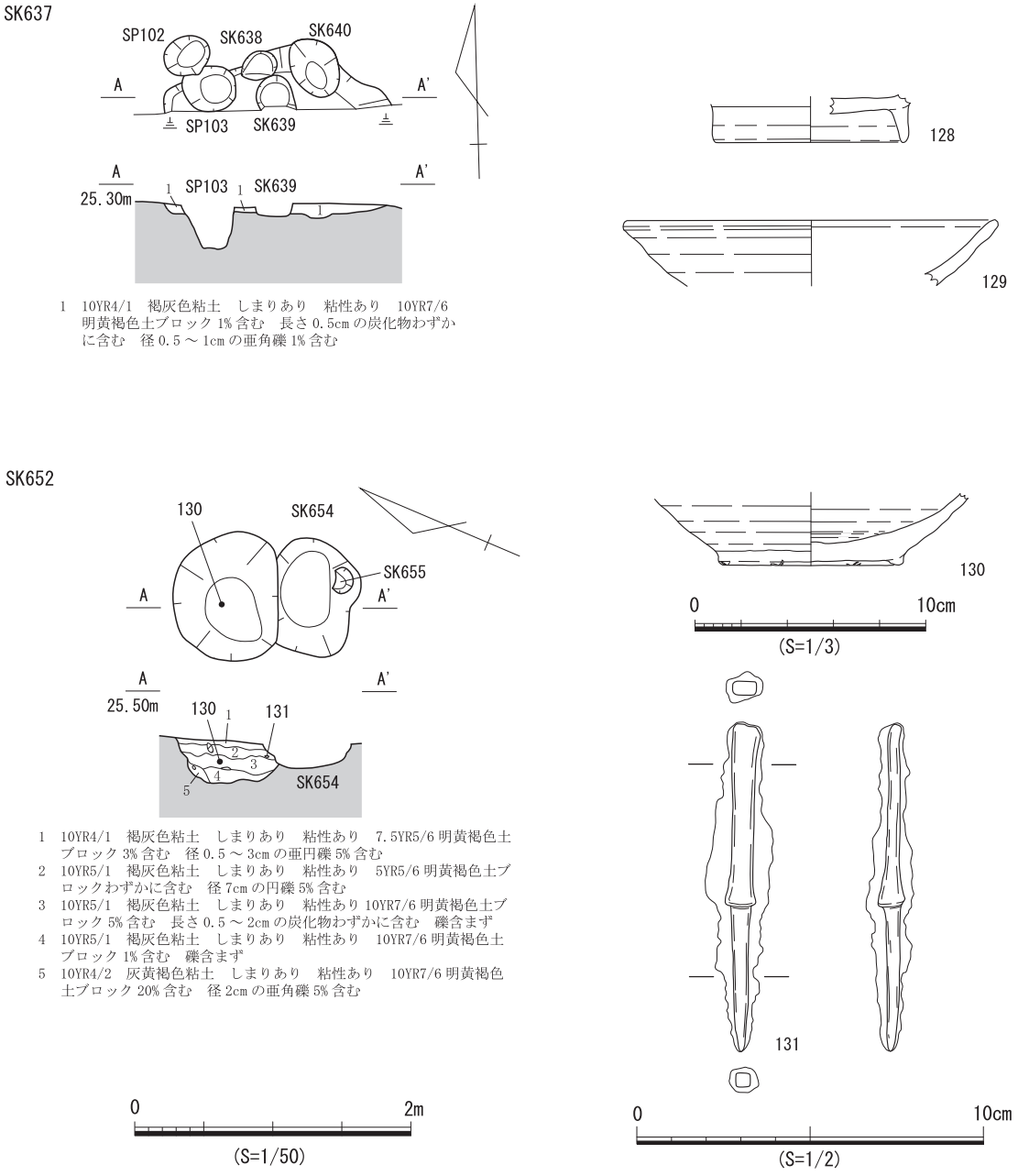
遺物出土状況　土師器７点、灰釉陶器１点、山茶碗類４点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。灰釉陶器は虎渓山１号窯式に比定した東濃産の深碗（128）である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗（129）がある。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK652（図86）

検出状況　DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA６より新しく、SP107・SK654より古い。



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む　径 0.5 ～ 1cm の亜角礫 1% 含む

1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　7.5YR5/6 明黄褐色土ブロック 3% 含む　径 0.5 ～ 3cm の亜円礫 5% 含む
2　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　5YR5/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　径 7cm の円礫 5% 含む
3　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり 10YR7/6 明黄褐色土ブロック 5% 含む　長さ 0.5 ～ 2cm の炭化物わずかに含む　礫含まず
4　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　礫含まず
5　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 20% 含む　径 2cm の亜角礫 5% 含む

図86　SK637・652遺構図、遺物実測図

規模・形状　長軸長0.94m、短軸長0.76m以上、深さ0.31mで、平面形は不整円形である。断面形は逆台形で、底面は若干の起伏がある。

埋土　５層に分層した。１層～４層は概ね水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックと角礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器７点、須恵器３点、灰釉陶器５点、山茶碗類17点、金属製品１点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕と坏である。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅴ期に比定した広口瓶がある。灰釉陶器は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第４型式と第５型式に比定した碗、丸石３号窯式に比定した東濃型山茶碗の碗（130）がある。金属製品は鉄製の鑿根鏃（131）である。131は刃部が欠損している。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK654（図87）

検出状況　DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK652より新しく、SK655より古い。

規模・形状　0.84m、短軸長0.69m、深さ0.19mで、平面形は不整円形である。断面形は逆台形で、底面は平坦ある。

埋土　３層に分層した。埋土全体に基盤層ブロック、１層と３層に亜円礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器５点、灰釉陶器１点、山茶碗類13点、石製品１点が埋土中から出土した。遺物は全て１層からの出土である。

出土遺物　土師器は器種不明、灰釉陶器は碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第３型式又は第４型式の碗、美濃須衛産では尾張型第３型式併行に比定した碗と第５型式併行に比定した碗（132）がある。石製品は砂岩製の砥石（133）である。

時期　当遺構より古いSK652との重複関係から、13世紀以降と考えられる。

SK658（図87）

検出状況　DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK657より新しい。

規模・形状　長軸長0.63m、短軸長0.49m以上、深さ0.19mで、平面形は楕円形である。壁面の傾斜は東側が緩やかに掘り込まれ、底面の西部が一段深く円形に掘り込まれる。

埋土　５層に分層した。埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器７点、灰釉陶器３点、山茶碗類９点、瓦１点、金属製品１点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとして13世紀のものと考えられる伊勢鍋がある。灰釉陶器は碗の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式の小皿（134）と、尾張型第５型式併行に比定した美濃須衛産の碗がある。瓦は布目痕が微かに確認でき、古代のものと考えられる。金属製品は鉄製の刀子（135）で、刃部の中程が欠損する。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK660（図88）

検出状況　DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK661より古い。

規模・形状　長軸長0.97m、短軸長0.82m、深さ0.21mで、平面形は不定形である。断面形は緩やかな半円形で、底面は平坦である。

埋土　３層に分層した。概ね水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。１層と２層に焼土粒と炭化物を含む。

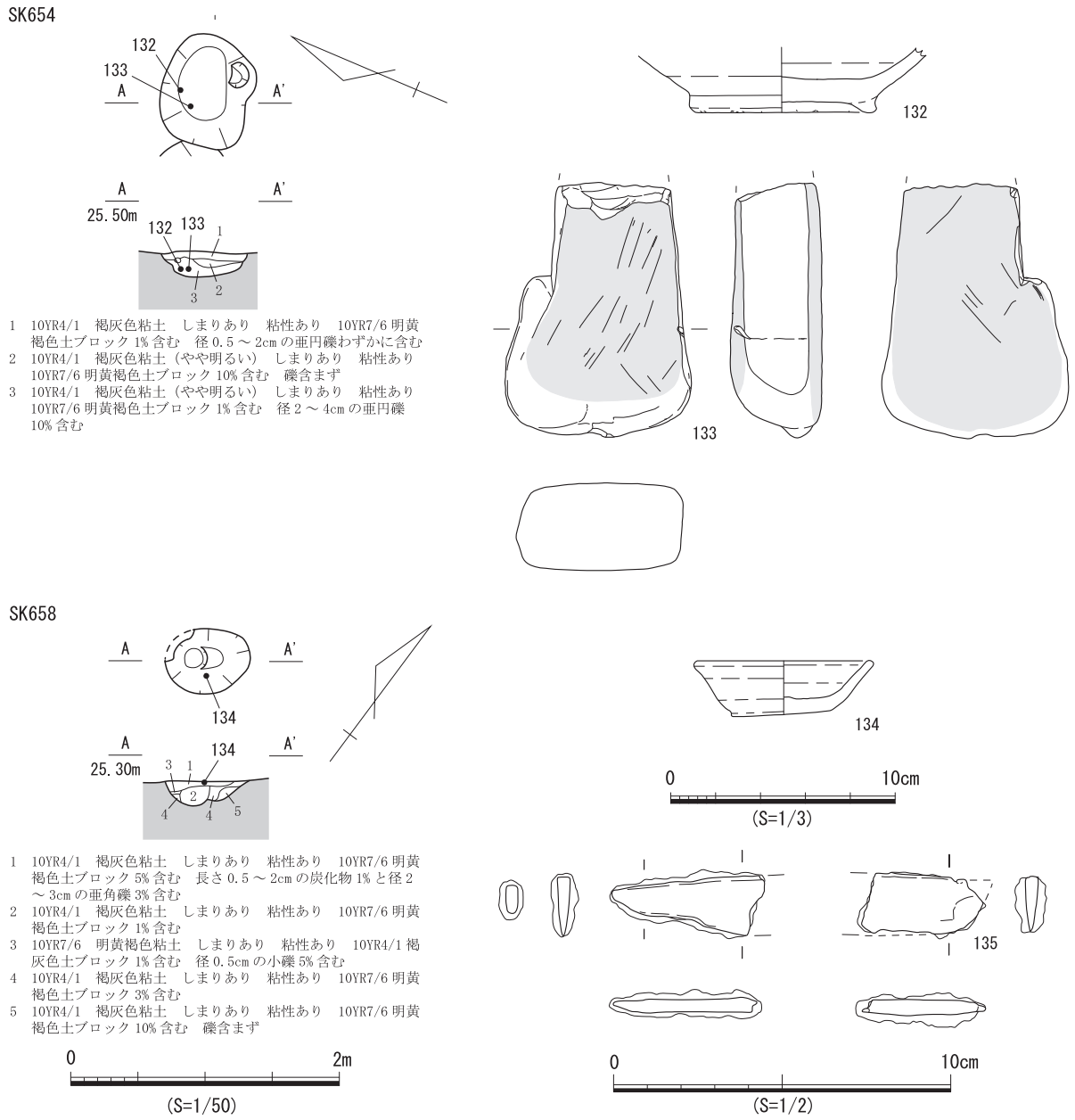


図87　SK654・658遺構図、遺物実測図

遺物出土状況　土師器８点、灰釉陶器１点、山茶碗類13点、石製品１点、鉄滓１点が埋土中から出土した。遺構の底部近くから扁平な砥石（136）が出土し、これの周辺から土師器（137）と山茶碗類（139・138）が出土したが、意図的に置かれたものかは不明である。

出土遺物　土師器は分類可能なものとして、ロクロ成形の皿（137）がある。灰釉陶器は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第３型式又は第４型式の碗と小碗、第４型式の碗（140）と小碗（138）、第６型式又は第７型式の小皿、尾張型第５型式併行に比定した美濃須衛産の碗（139）がある。139は底部内面全体に墨痕が付着し、底部内面の摩滅が著しいことから、転用硯と考えられる。石製品は砂岩製の砥石（136）で、扁平な一面のみに砥面が確認できる。鉄滓は成分分析を行った。分析結果の詳細は第６章で述べる。

時期　出土遺物から、13世紀後半以降と考えられる。

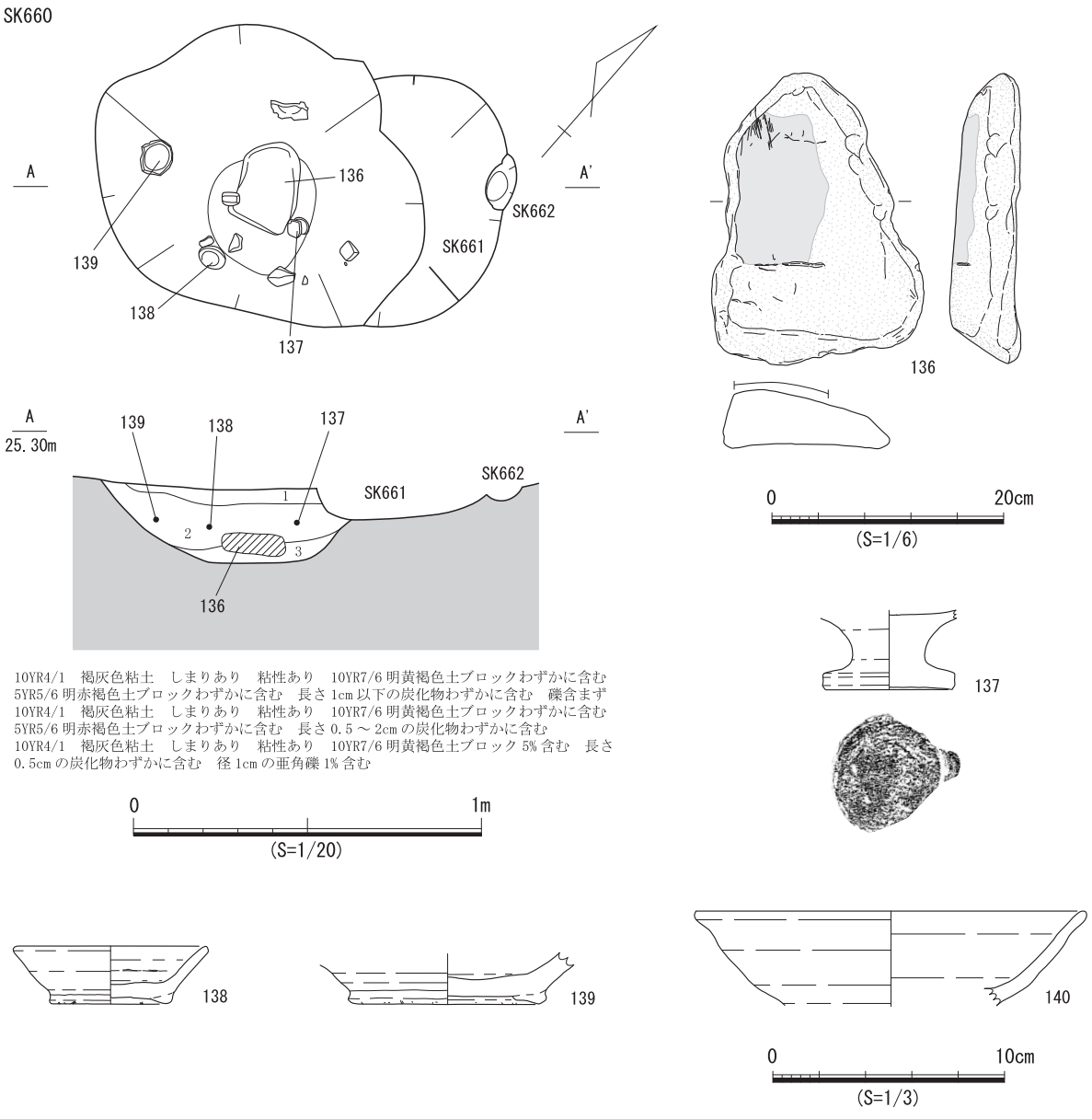


図88　SK660遺構図、遺物実測図

SK661（図89）

検出状況　DJ５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK660より新しく、SK662より古い。

規模・形状　長軸長0.72m以上、短軸長0.55m、深さ0.09mで、平面形は不整円形である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。１層に基盤層ブロックと亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。また、１層には焼土粒と炭化物を含む。

遺物出土状況　縄文土器１点、土師器４点、灰釉陶器１点、山茶碗類３点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　縄文土器は深鉢の胴部、土師器は器種不明、灰釉陶器は碗の口縁部である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第４型式又は第５型式の碗がある。いずれも小片のため図示しなかった。

時期　当遺構より古いSK660との重複関係から、13世紀後葉以降と考えられる。

SK766（図89）

検出状況　DJ12グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK767より古い。

規模・形状　長軸長0.28m以上、短軸長0.26m、深さ0.23mで、平面形は概ね楕円形と考えられる。西側壁面はほぼ垂直に立ち上がり、東側壁面の傾斜はやや緩やかである。

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックと礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器４点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は全て皿で、分類可能なものとして、美濃中世前期土師器皿のＡ２ｂ類（141）がある。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK777（図89）

検出状況　DJ13グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.63m以上、短軸長0.58m、深さ0.11mで、平面形は不整円形である。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

埋土　単層である。埋土中に基盤層ブロックと亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器１点、山茶碗類３点、中国産陶磁器１点が埋土中から散在して出土した。

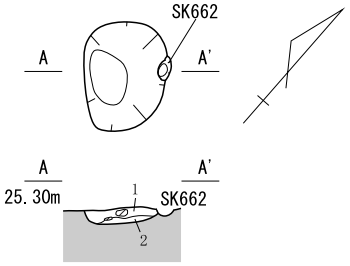
出土遺物　土師器は器種不明である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式又は第６型式の小皿（142）がある。中国産陶磁器は器種不明の白磁である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK826（図89）

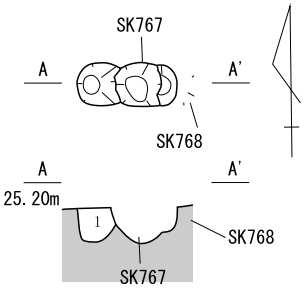
検出状況　EK９・EK10グリッド、Ⅱｂ層基底面で検出した。埋土がⅡｂ層と類似し、表土掘削時に当遺構の埋土の一部を表土として誤って掘削したため、発掘区壁面の観察時に遺構の範囲を確認した。他遺構との重複関係はSK942より古い。

SK661



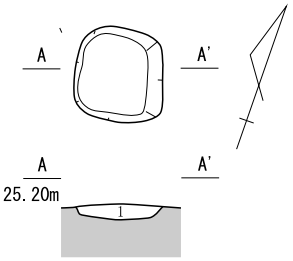
1　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 1% 含む　YR5/6 明赤褐色土ブロックわずかに含む　長さ 0.5cm の炭化物わずかに含む 5　径 1 ～ 7cm の亜角礫 3% 含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
径 4cm の角礫 1% 含む

SK766



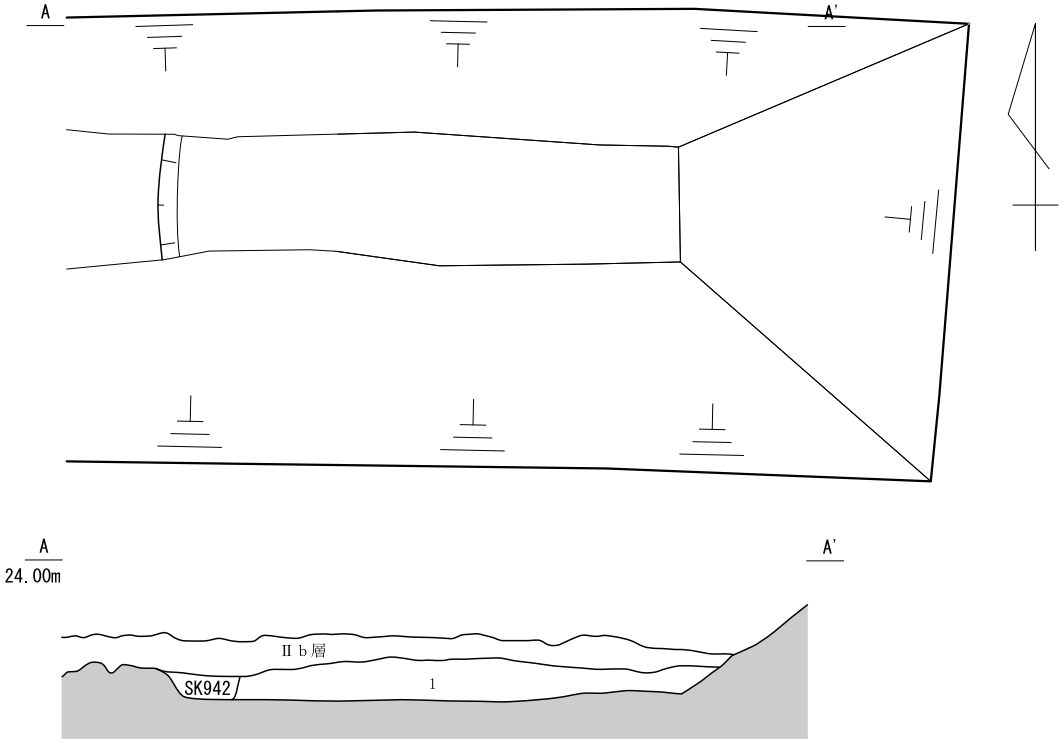
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR7/6 明黄褐色土ブロック 3% 含む　径 0.5 ～ 1cm の円礫 1% 含む

SK777



1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR5/6 黄褐色土粒 3% 含む　径 3 ～ 7cm の亜角礫 5% 含む

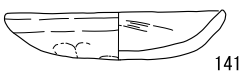
SK826



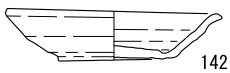
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり

(S=1/50)

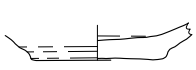
SK766

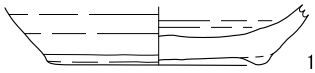


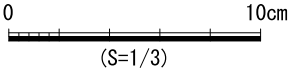
SK777



SK826







(S=1/3)

図89　SK661・766・777・826遺構図、SK766・777・826遺物実測図

規模・形状　長軸長3.60ｍ以上、短軸長0.88ｍ以上、深さ0.29ｍである。南北方向の溝状遺構である可能性があるが、遺構の大部分が発掘外に広がり、正確な規模や形状が不明であるため、土坑として扱った。底面は平坦で、西側壁面は外に向かって立ち上がる。

埋土　単層である。埋土の含有物が確認できず、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器７点、須恵器１点、灰釉陶器１点、山茶碗類３点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものとしてロクロ成形の皿（143）がある。須恵器は甕の胴部、灰釉陶器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第５型式併行に比定した渥美産の碗（144）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK879（図90）

検出状況　EK６・EK７グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP190より新しい。

規模・形状　長軸長0.24ｍ、短軸長0.19ｍ、深さｍ0.23で、平面形は楕円形である。東部壁面の傾斜は緩やかだが、西部は一段深く掘り込まれ、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土　４層に分層した。ほぼ水平の堆積で、２層～４層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器14点、灰釉陶器１点、山茶碗類３点、石製品１点が埋土中から出土した。山茶碗類の破片と砥石（145）は１層上部から、伊勢鍋（146）の破片は２層底部からまとまって出土した。

出土遺物　土師器は大半が甕の胴部で、分類可能なものに11世紀代と考えられる伊勢鍋(146)がある。灰釉陶器は皿の小片である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗がある。石製品は砂岩製の砥石（145）である。

時期　出土遺物と、当遺構より古いSP190から尾張型第４型式又は第５型式の山茶碗が出土していることから、12世紀後葉以降と考えられる。

SK888（図90）

検出状況　EK６グリッド、SK68完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。検出時に複数の礫が表出していた。他遺構との重複関係は、SP186・SK68・SK889より古い。

規模・形状　長軸長0.20ｍ以上、短軸長0.17ｍ以上、深さｍ0.14である。他遺構と重複が激しく、平面形は不明である。わずかに残る底面は平坦で、壁面は丸く立ち上がる。

埋土　単層である。基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器１点が埋土中から出土した。

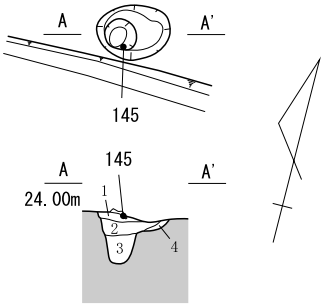
出土遺物　147は中世前期土師器皿である。器壁は６㎜と厚く、推定口径は約11㎝である。

時期　出土遺物から、12世紀以降と考えられる。

SK984（図90）

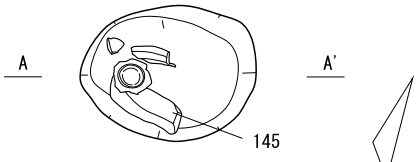
検出状況　EK８グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD34より古い。

SK879

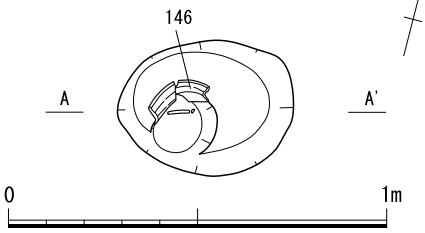


1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず　10YR5/6 黄褐色土ブロック 20% 含む
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　径 3cm の亜円礫 1 点含む
4　10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR3/2 黒褐色土ブロック 5% 含む

１層上部遺物出土状況図

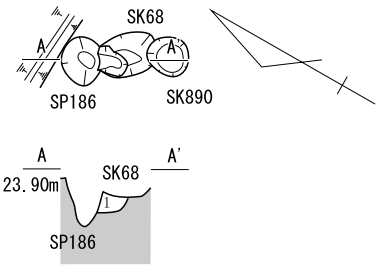


２層底部遺物出土状況図



(S=1/20)

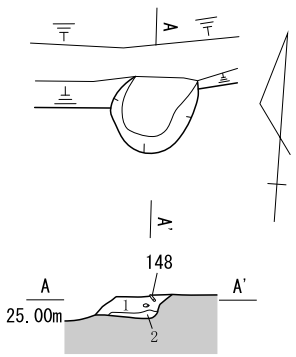
SK888



1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず

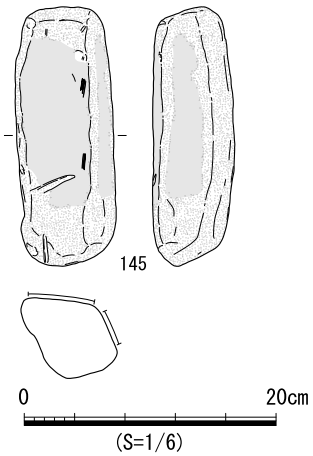
(S=1/50)

SK984

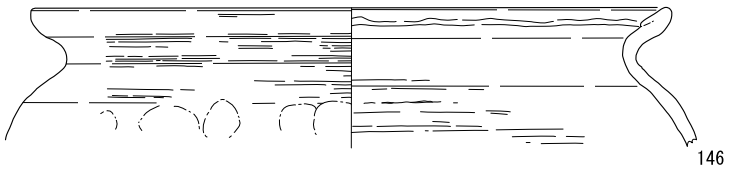


1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり 10YR5/6 黄褐色土ブロック 1% 含む　径 3cm の円礫わずかに含む　長さ 1cm 以下の炭化物わずかに含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6 黄褐色土ブロック 10% 含む　礫含まず

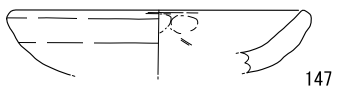
SK879



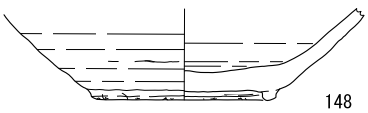
(S=1/6)



SK888



SK984



(S=1/3)

図90　SK879・888・984遺構図、遺物実測図

規模・形状　長軸長0.54ｍ以上、短軸長0.52ｍ、深さ0.15ｍである。遺構北部がSD34と重複するが、平面形は概ね楕円形と考えられる。壁面は底面から急に立ち上がり、外に向かって開く。底面は平坦である。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平な堆積で、埋土全体に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　灰釉陶器１点、山茶碗類１点が１層から出土した。

出土遺物　灰釉陶器は壺類の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は尾張型第５型式の碗（148）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK988（図91）

検出状況　EK８グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK1138より新しく、SD34より古い。

規模・形状　長軸長0.77ｍ以上、短軸長0.63以上、深さ0.17ｍである。遺構北部がSD34と重複するが、平面形は概ね円形と考えられる。断面形は半円形である。

埋土　３層に分層した。１層と３層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　山茶碗類１点が１層から出土した。

出土遺物　山茶碗類は尾張型第５型式の碗である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK1119（図91）

検出状況　DN11グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD42・SK1117・SK1118等より新しい。

規模・形状　長軸長4.60ｍ、短軸長1.33ｍ以上、深さ0.10ｍである。遺構南部が発掘外に広がるが、概ね隅丸方形と考えられる。東部壁面の傾斜は緩やかだが、遺構西部壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平坦である。

埋土　単層である。少量の亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器５点、須恵器１点、灰釉陶器３点、山茶碗類６点が埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部、灰釉陶器は器種不明、山茶碗類は碗である。いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は美濃須衛産Ⅳ期に比定した小型の脚付壺（149）で、ミニチュア土器と考えられる。

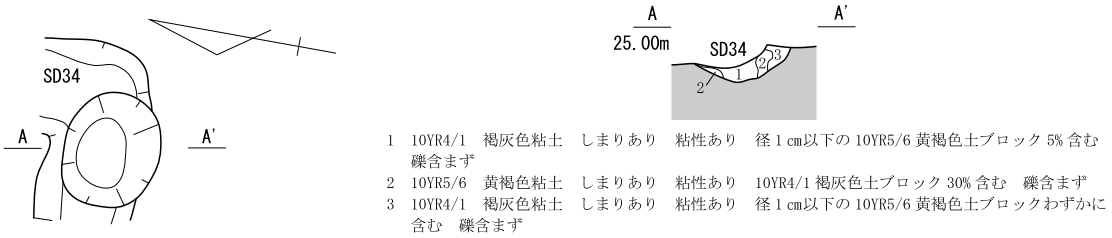
時期　当遺構より古いSD42から尾張型第５型式の山茶碗類が出土していることから、13世紀以降と考えられる。

SK1137（図91）

検出状況　DJ４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA５より古い。

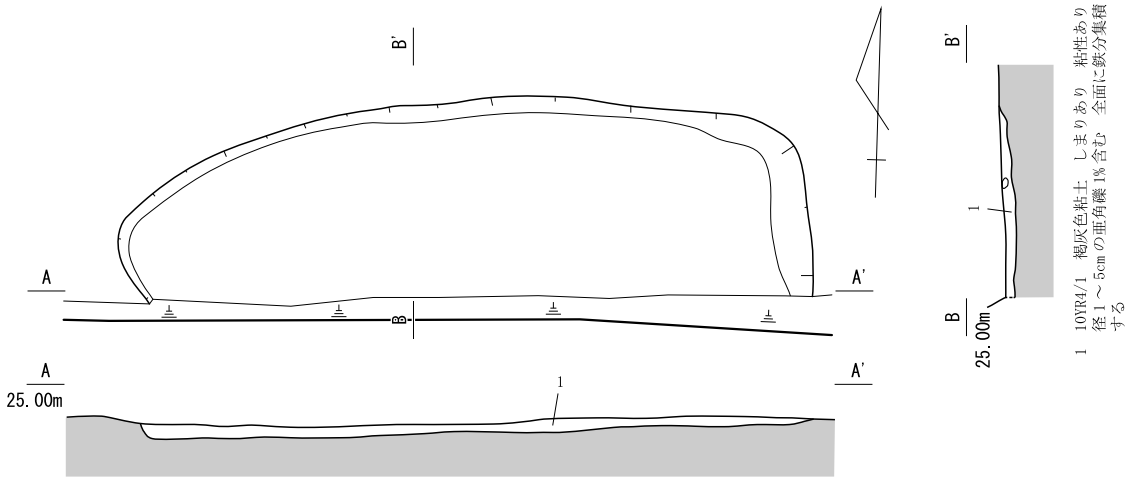
規模・形状　長軸長0.31ｍ、短軸長0.30ｍ、深さ0.12ｍである。遺構南部が発掘外に広がるため、平面形は不明である。断面形は浅い皿状で、底部は平坦である。

SK988



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１cm以下の 10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず
2　10YR5/6　黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR4/1 褐灰色土ブロック 30% 含む　礫含まず
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１cm以下の 10YR5/6 黄褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず

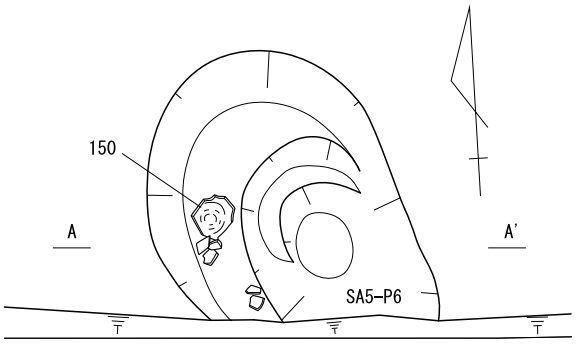
SK1119

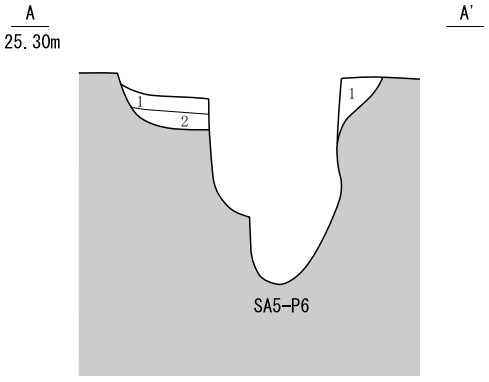


1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１～５cmの亜角礫 1% 含む　全面に鉄分集積する

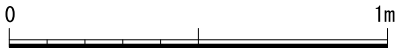
(S=1/50)

SK1137



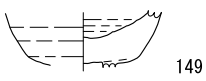


1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径１cmの炭化物わずかに含む

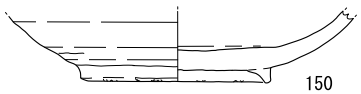


(S=1/20)

SK1119



SK1137



(S=1/3)

図91　SK988・1119・1137遺構図、SK1119・1137遺物実測図

埋土　２層に分層した。堆積状況は不明である。

遺物出土状況　土師器６点、須恵器１点、灰釉陶器１点、山茶碗類２点が埋土中から出土した。山茶碗類の底部（150）が、遺構底部付近から逆位で出土した。

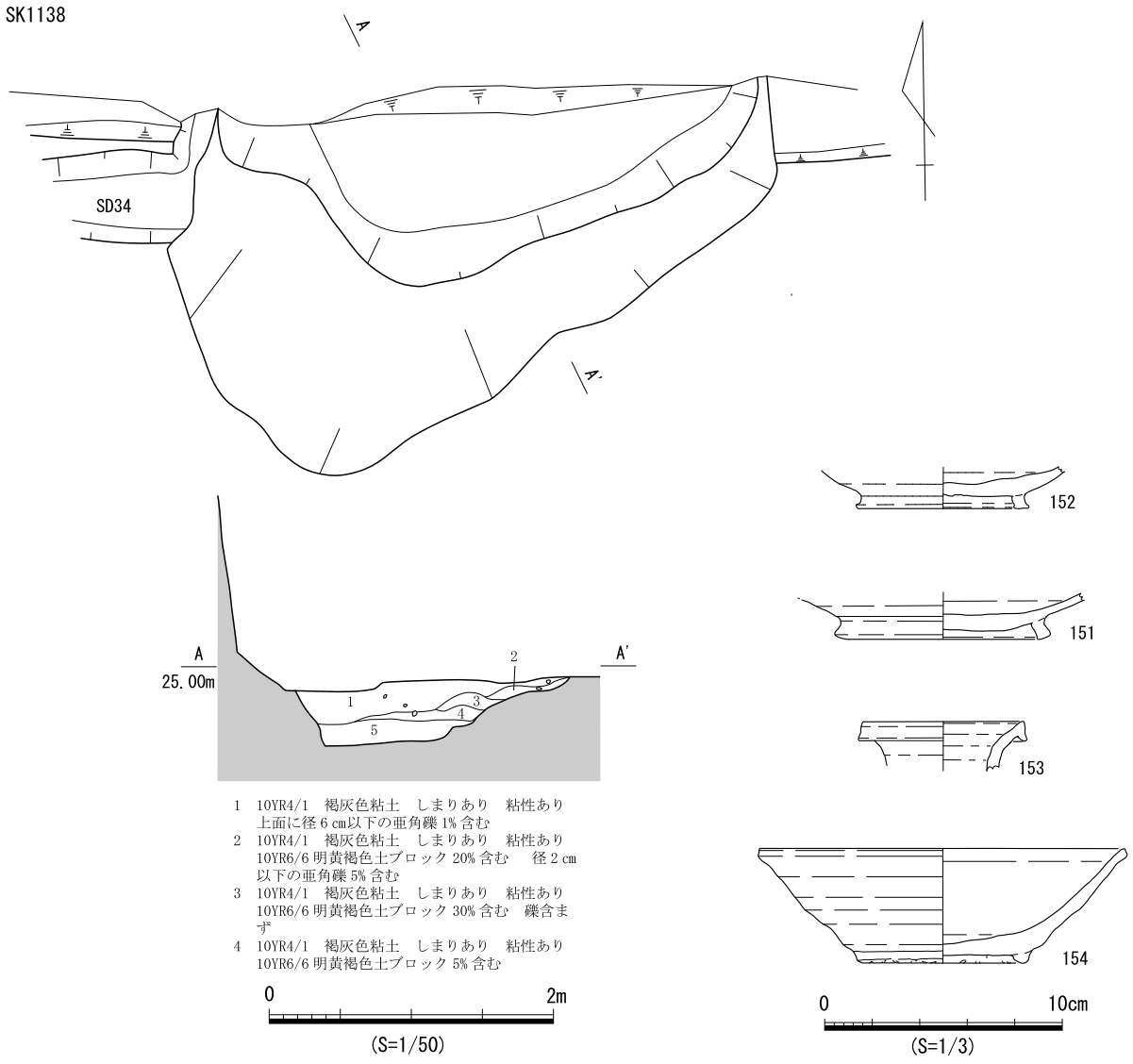
出土遺物　土師器は甕の胴部、須恵器は坏身の胴部、灰釉陶器は碗の口縁部である。いずれも小片のため図示しなかった。山茶碗は尾張型５型式の碗（150）である。

時期　出土遺物から、12世紀後葉以降と考えられる。

SK1138（図92）

検出状況　DN４～DM５グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD38・SK993・SK994等より新しく、SD34より古い。

規模・形状　長軸長4.10ｍ以上、短軸長2.47ｍ以上、深さ0.43ｍである。遺構北部が発掘外に広がる



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
上面に径６cm以下の亜角礫1%含む
2　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR6/6明黄褐色土ブロック20%含む　径２cm以下の亜角礫5%含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR6/6明黄褐色土ブロック30%含む　礫含まず
4　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
10YR6/6明黄褐色土ブロック5%含む

図92　SK1138遺構図、遺物実測図

ため、平面形の全容は不明である。南側壁面は緩やかに傾斜し、底面付近で一段深く掘り込まれる。底面は平坦で、基盤層の砂礫が露出する。

埋土　２層～４層に基盤層ブロック、５層に多量の亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　縄文土器１点、土師器12点、須恵器16点、灰釉陶器１点、山茶碗類16点、常滑産陶器１点、瓦11点が埋土中から出土した。

出土遺物　縄文土器は深鉢の胴部、土師器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期又はＶ期に比定した坏身Ｃ類、Ｖ期第１小期に比定した碗（151）と台付皿（152）、黒笹14号窯式又は黒笹90号窯式に比定した猿投産の小型の長頸瓶（153）がある。小型の長頸瓶はミニチュア土器と考えられる。灰釉陶器は長頸瓶の胴部である。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第４型式～第６型式の碗（154）がある。常滑産陶器は甕の底部である。瓦はいずれも小片で表面の摩滅が著しいが、微かに布目痕が確認できるものがあり、古代のものと考えられる。

時期　出土遺物から、13世紀前半以降と考えられる。

第４節　近世以降の遺構と遺物

１　溝状遺構

SD１（図93）

検出状況　BE１グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－７°－Ｗで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.21ｍ、深さ0.45ｍである。壁面の傾斜は急だが、西側壁面はテラス状の平坦面が部分的に存在する。底面は平坦である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　４層に分層した。２層にⅣ層（基盤層）ブロックを含み、４層に多量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　近代磁器１点が出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　近代磁器は染付小坏の小片である。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、近代以降と考えられる。

SD４（図93）

検出状況　BH10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK55・SK56・SK61等より新しい。

規模・形状　遺構は二股に分岐し、北東－南西方向部分の主軸方位はＮ－50°－Ｅ、北西－南東方向部分の主軸方位はＮ－15°－Ｗである。遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅0.80ｍ、深さ0.27ｍである。断面形状は逆台形で、壁面の傾斜は急である。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　単層である。埋土に少量の礫を含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　瀬戸美濃産陶器４点が、１層から散在して出土した。特徴的な出土状況は確認できなかった。

遺物　瀬戸美濃産陶器は、登窯第７小期の折縁輪禿鉢と、登窯第10小期又は第11小期の広東茶碗である。

時期　出土遺物から、19世紀以降と考えられる。

SD５（図93）

検出状況　BH10グリッド、SD４完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD４・SK59・SK61等より古い。

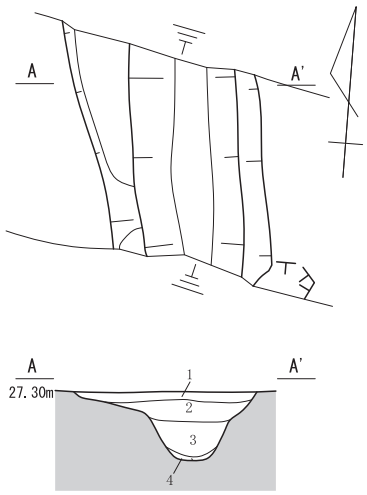
規模・形状　主軸方位はＮ－50°－Ｅである。遺構の北端は発掘区外に延び、南部はSK61によって消失している。幅0.78ｍ、深さ0.48ｍである。西側壁面はテラス状の平坦面が存在し、北部の東側底面がオーバーハング状に掘り込まれる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　３層に分層した。３層にⅣ層（基盤層）ブロックを含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

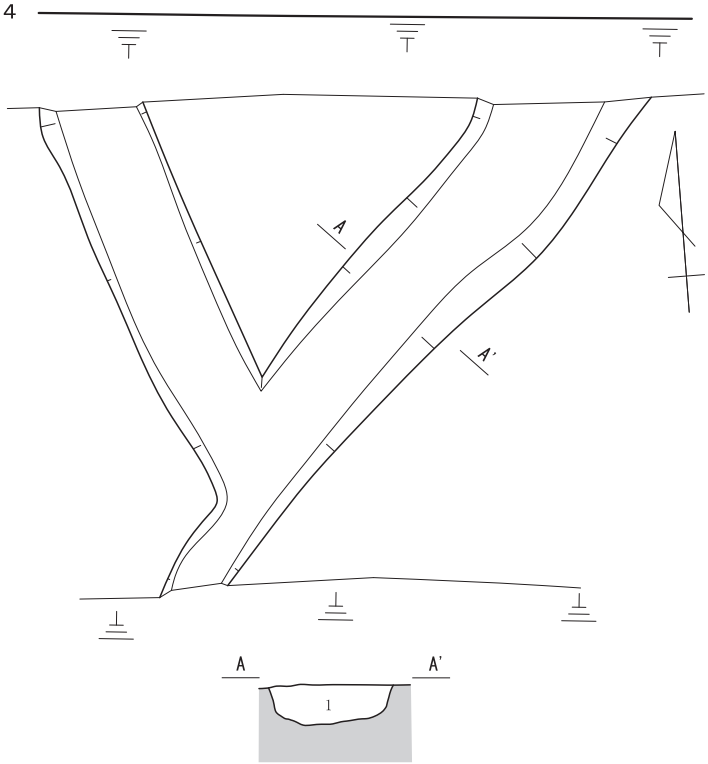
時期　明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置に対応する地割が確認できることから、近世末から

SD１



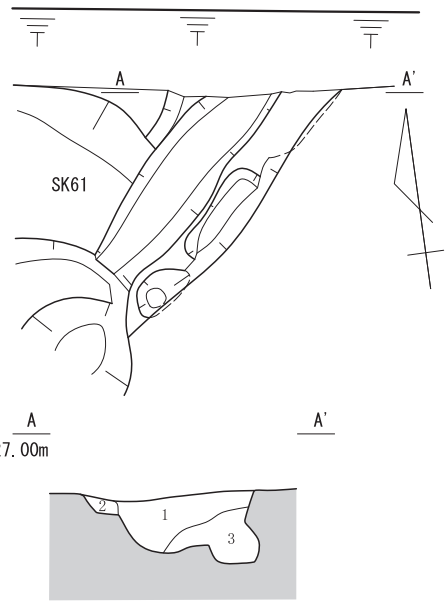
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性あり　径3cm以下の円礫1%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径5cm以下の10YR4/4褐色土ブロック10%含む　礫含まず
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
4　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径3cm以下の円礫50%含む

SD４



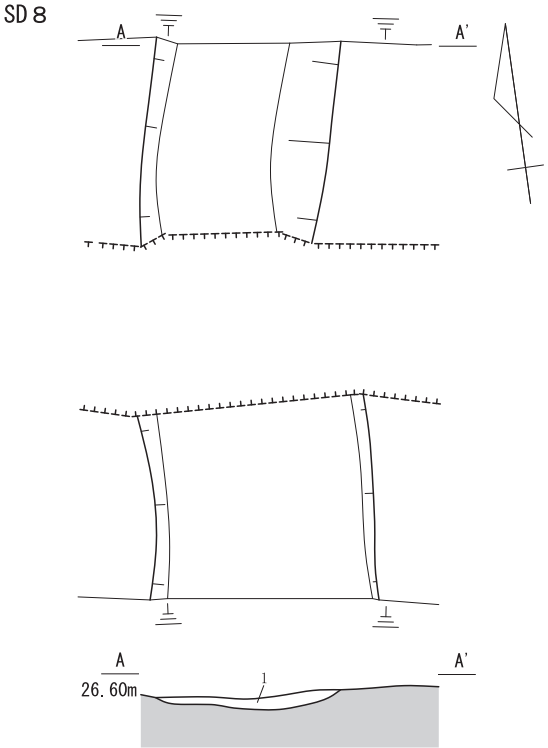
1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径4cmの亜角礫7%含む

SD５

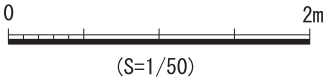


1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～1cmの円礫5%含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～2cmの10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む　礫含まず

SD８



1　10YR3/2 黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径0.5～3cmの円礫20%含む



(S=1/50)

図93　SD１・４・５・８遺構図

近代にかけての遺構の可能性がある。

SD８（図93）

検出状況　BG15グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　主軸方位はＮ－３°－Ｅで、遺構の南北端は発掘区外に延びる。幅1.50ｍ、深さ0.09ｍである。断面形状は浅い皿状で、底面は平坦である。底面標高は南から北に向かって緩やかに深くなる。

埋土　単層である。埋土に円礫を多量に含む。堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　遺物が出土しておらず、重複する遺構はないが、明治20年作成の地籍図では、当遺構の位置と主軸方位に対応する地割が確認できることから、近世末から近代にかけての遺構の可能性がある。

SD13（図94）

検出状況　BH18グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP30・SD11・SK119より新しい。

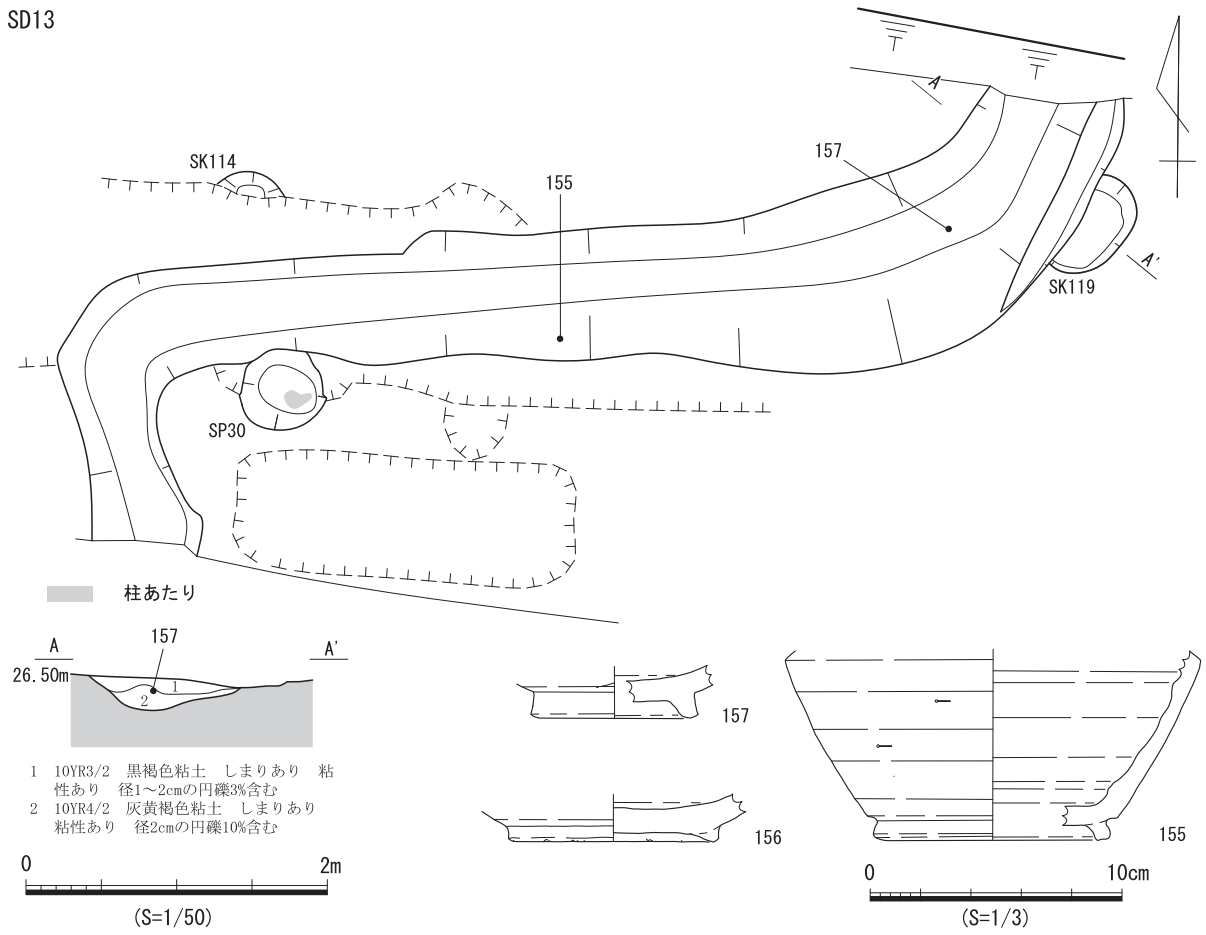


図94　SD13遺構図、遺物実測図

規模・形状　発掘区内でクランク状に屈曲し、遺構の両端は発掘区外に延びる。主軸方位は、東側の屈曲部分から北端までの直線部分はＮ－20°－Ｅ、東西方向の直線部分はＮ－87°－Ｅ、西側の屈曲部分から南端までの直線部分はＮ－13°－Ｅである。幅1.24ｍ、深さ0.22ｍで、東側の壁面は西側に比べて緩やかに傾斜し、底面は丸みを帯びる。両端部の底面標高に大きな差はない。

埋土　２層に分層した。１層と２層に円礫を含むが、堆積状況は不明である。流水を示す堆積は確認できなかった。

遺物出土状況　土師器１点、須恵器６点、山茶碗類６点、近世陶器１点が埋土中から散在して出土した。

遺物　土師器は器種不明である。小片のため図示しなった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した長頸瓶（155）がある。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式併行に比定した美濃須衛産の碗（156）がある。瀬戸美濃産陶器は登窯第３小期又は第４小期の丸碗（157）で、御深井釉が施される。

時期　出土遺物から、17世紀後半以降と考えられる。

２　土坑

SK61（図95）

検出状況　BF10グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD５・SK55・SK56より新しく、SD４より古い。

規模・形状　長軸長2.76ｍ、短軸長2.09ｍ以上、深さ0.53ｍであり、平面形は不定形である。壁面の傾斜は全体的に直立気味に立ち上がる。底面の形状は複雑で、南部と北部はほぼ平坦だが、最深部である東部は丸く掘り込まれる。

埋土　６層に分層した。１層・３層・５層に礫、３層・４層・６層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器３点、須恵器18点、灰釉陶器１点、山茶碗類２点、瀬戸美濃産陶器３点、常滑産陶器４点が、埋土中から散在して出土した。

出土遺物　土師器は甕の胴部である。小片のため図示しなかった。須恵器は分類可能なものとして、美濃須衛産Ⅳ期に比定した広口瓶（158）と甕がある。灰釉陶器は碗の胴部である。小片のため図示しなかった。山茶碗類は分類可能なものとして、尾張型第５型式の碗がある。瀬戸美濃産陶器は分類可能なものとして、大窯の徳利と擂鉢、登窯第４小期又は第５小期の尾呂茶碗（159）がある。常滑産陶器は分類可能なものとして、18世紀前半の甕（160）と、詳細な時期は不明だが赤物の甕がある。

時期　出土遺物から、18世紀前半以降と考えられる。

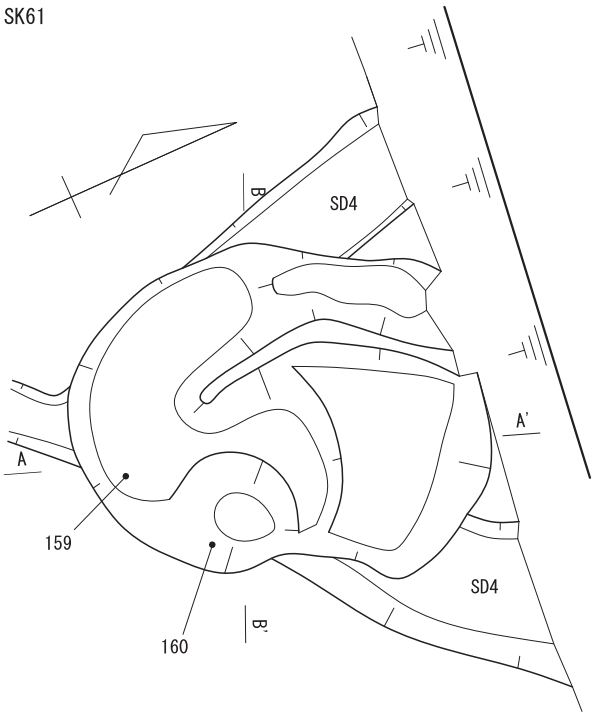
SK134（図95）

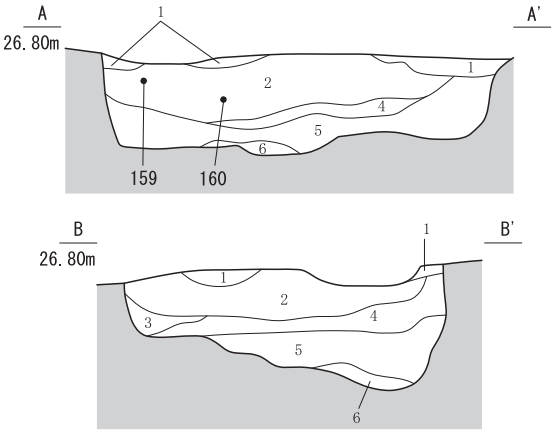
検出状況　BH20グリッド、Ⅲ層上面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長0.21ｍ、短軸長0.20ｍ、深さ0.17ｍであり、平面形は不整円形である。断面形は半円形だが、西側の壁面が垂直に立ち上がる。底面は丸くなる。

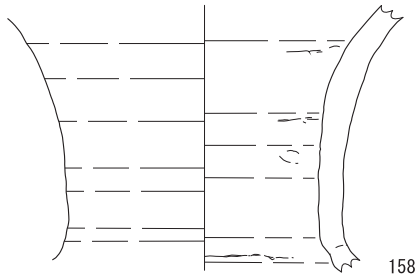
埋土　２層に分層した。２層に基盤層ブロックを含み、人為堆積と考えられる。

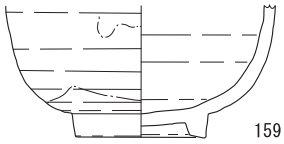
遺物出土状況　土師器６点、常滑産陶器の甕１点が埋土中から散在して出土した。

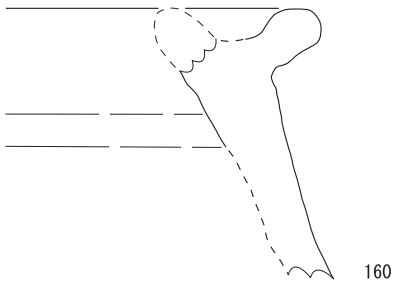


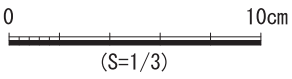


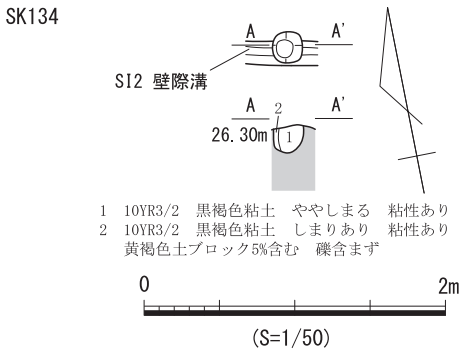
1　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　径4cmの亜角礫7%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
3　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック10%含む　径2～5cmの円礫50%含む
4　10YR4/2　灰黄褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む　礫含まず
5　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　径2～5cmの円礫50%含む
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック30%含む　礫含まず











1　10YR3/2　黒褐色粘土　ややしまる　粘性あり　礫含まず
2　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR5/6黄褐色土ブロック5%含む　礫含まず

図95　SK61・134遺構図、SK61遺物実測図

出土遺物　土師器は甕の胴部、常滑産陶器は甕の胴部である。いずれも小片のため図示しなかった。常滑産の甕は残存状況が悪く詳細な時期は不明だが、近世のものと考えられる。

時期　出土遺物から、近世以降と考えられる。

SK673（図96）

検出状況　DJ９グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK711・SK750より新しい。当遺構の北側には竪田古墳が隣接する。

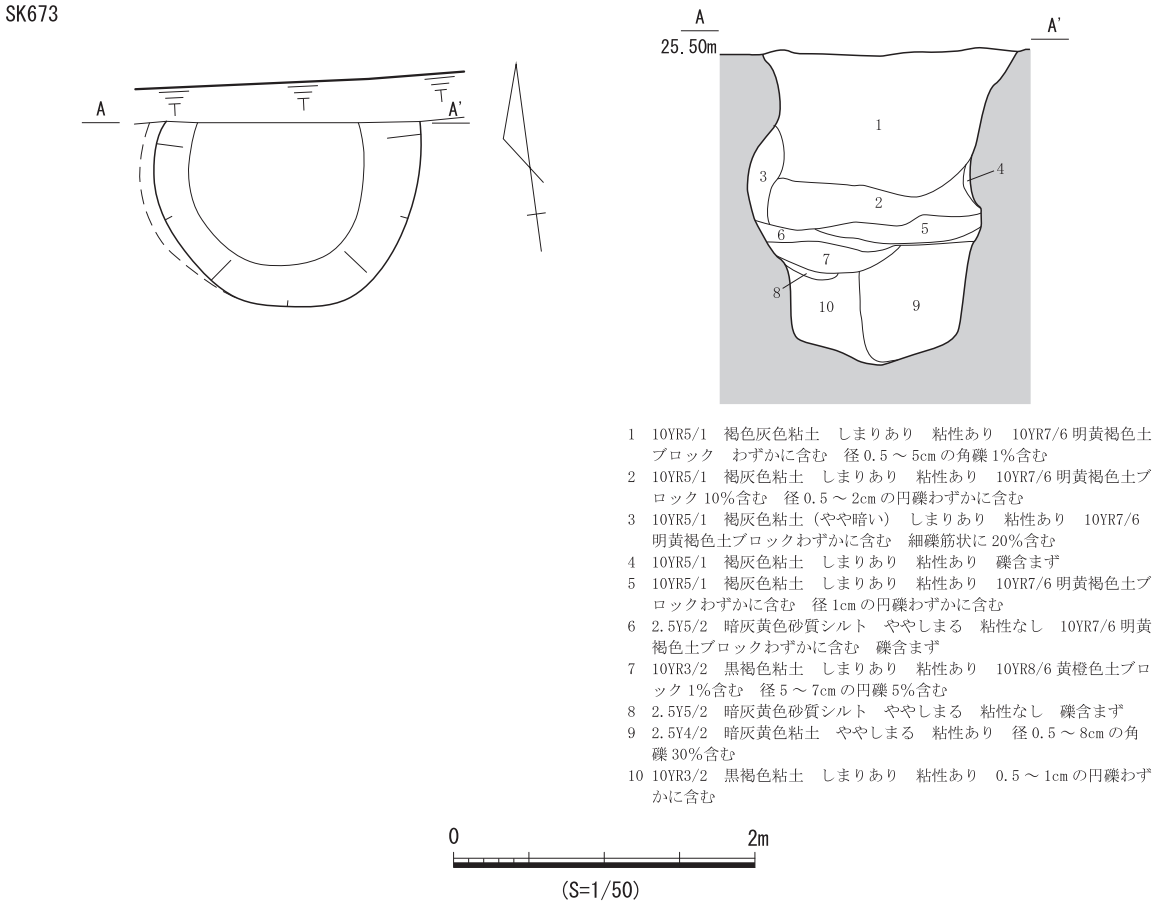
規模・形状　長軸長1.76m、短軸長1.22m以上、深さ2.50mである。遺構北部は発掘区外に広がるが、平面形は概ね正円形と考えられる。開口部は若干外向きに開くが、概ね円筒状に掘り込まれており、壁面が外に向けて膨らむ部分がある。底部は中央に向けて窪んでいる。

埋土　10層に分層した。１層・２層と３層・４層、７層・８層と下層、９層と10層はそれぞれの層界の様子から、埋め戻した後に再掘削された可能性がある。また、基盤層ブロックと礫を含み、詳細な堆積状況は不明だが、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　常滑産陶器１点が、検出面から約1.6mの深さで出土した。

出土遺物　常滑産陶器は甕の胴部である。胎土の特徴から近世以降のものと考えられる。小片のため図示しなかった。

時期　出土遺物から、近世以降と考えられる。



1　10YR5/1　褐色灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック　わずかに含む　径 0.5 ～ 5cm の角礫 1%含む
2　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロック 10%含む　径 0.5 ～ 2cm の円礫わずかに含む
3　10YR5/1　褐灰色粘土（やや暗い）　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　細礫筋状に 20%含む
4　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　礫含まず
5　10YR5/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　径 1cm の円礫わずかに含む
6　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト　ややしまる　粘性なし　10YR7/6 明黄褐色土ブロックわずかに含む　礫含まず
7　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR8/6 黄橙色土ブロック 1%含む　径 5 ～ 7cm の円礫 5%含む
8　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質シルト　ややしまる　粘性なし　礫含まず
9　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土　ややしまる　粘性あり　径 0.5 ～ 8cm の角礫 30%含む
10　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　0.5 ～ 1cm の円礫わずかに含む

図96　SK673遺構図

第５節　その他の遺構と遺物

１　柵

SA７（図97）

検出状況　DK20・EK１グリッド、Ⅱｂ層基底面でＰ１～Ｐ５を検出した。いずれも平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SP157より古い。

規模・形状　東西方向に５基の柱穴が直線上に並ぶことから柵とした。主軸方位がＮ－82°－W、柱間は1.1ｍ～2.5ｍ、東西長6.9ｍである。東側は発掘区外へ広がる可能性がある。

柱穴　柱穴の平面形は円形及び不整円形で、径は0.35ｍ～0.41ｍ、深さは0.11ｍ～0.26ｍである。Ｐ１とＰ２では柱痕跡と柱あたり、Ｐ３、Ｐ４では柱あたりを確認した。

遺物出土状況　Ｐ１の柱掘方埋土から鞴の羽口１点（161）が出土した。

遺物　15は先端部と基部が欠損するが、先端部に向かって細くなる形状と考えられる。外面にガラス状の硬化物が付着する。

時期　重複する遺構からも時期が分かる遺物が出土しておらず、主軸方位が類似する遺構も存在しないことから、時期は不明である。

２　土坑

SK148（図98）

検出状況　CI３グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。

規模・形状　長軸長1.19ｍ、短軸長0.55ｍ以上、深さ0.13ｍである。遺構南部が発掘区外に広がるため、平面形の全容は不明である。掘削中に底面付近で炭化物と焼土を含む堆積を確認し、カマドや炉等の存在を想定した。このため、炭化物・焼土堆積範囲をＢ－Ｂ'断面で分割して掘り下げたが、カマドや炉と考えられる焼土堆積や構造物、埋土が面的に被熱・変色している状況は確認できなかった。

埋土　２層に分層した。水平な堆積で１層と２層に少量の炭化物と礫を含み、遺構底部付近に焼土ブロックが集中することから、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

時期　遺物が出土せず、他遺構と重複しないことから、時期は不明である。

SK618（図98）

検出状況　DJ４グリッド、Ⅰ層基底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SK760より新しい。

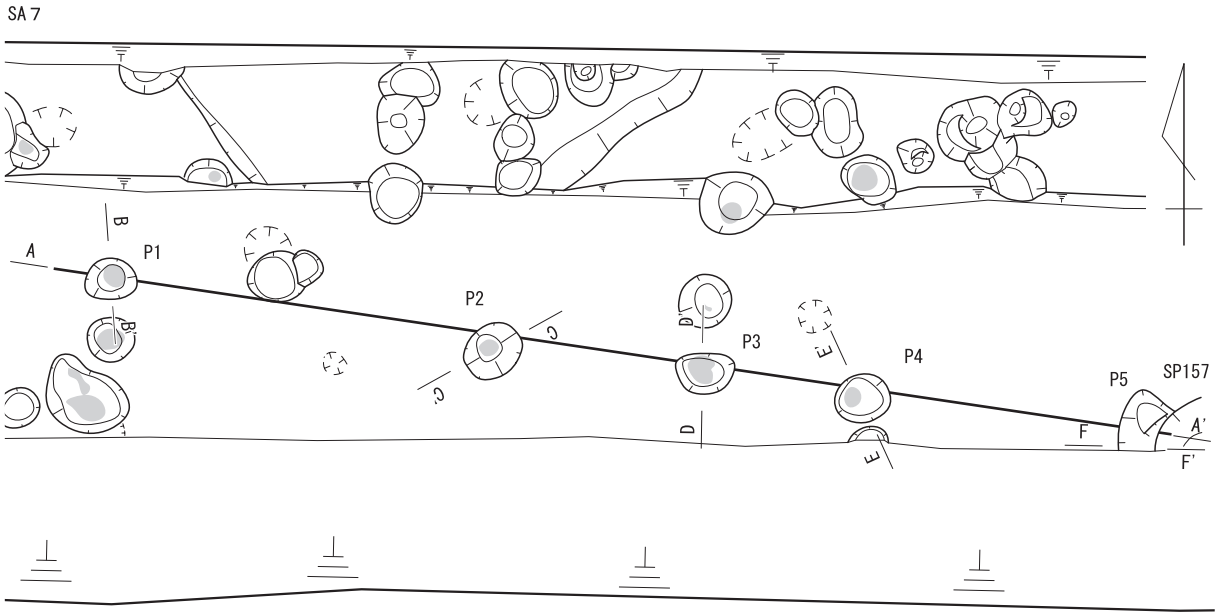
規模・形状　長軸長0.28ｍ、短軸長0.26ｍ、深さ0.17ｍで、平面形は不整円形である。断面形は半円形である。

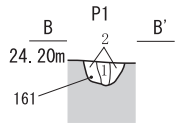
埋土　単層である。基盤層ブロックと亜角礫を含み、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　金属製品２点が埋土上部から出土した。

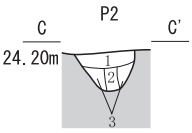
出土遺物　金属製品はいずれも棒状の鉄製品（162、163）で、鉄鏃の軸部又は刀子の茎部の可能性がある。

時期　時期判別可能な遺物が出土せず、他遺構と重複しないことから、時期は不明である。

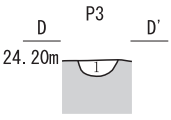




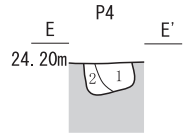
1　10YR2/3　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック 10% 含む　礫含まず
2　10YR2/3　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　礫含まず



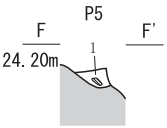
1　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック 5% 含む　上面に炭化物わずかに含む
2　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　礫含まず　底面に柱痕跡あり
3　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず



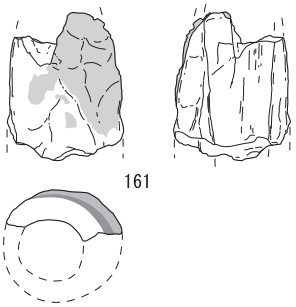
1　10YR4/2　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり

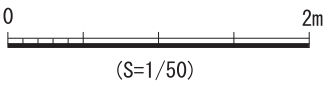


1　10YR2/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック　5% 含む
　礫含まず
2　10YR3/1　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR5/4 にぶい黄褐色土ブロック 30% 含む
　礫含まず



1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
　10YR2/1 黒褐色ブロック 1% 含む　10YR5/6 黄褐色土ブロック 5% 含む　礫含まず





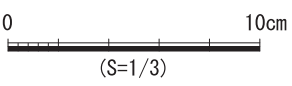


図97　SA７遺構図、遺物実測図

SK1072（図99）

検出状況　DM９グリッド、SD41完掘後の底面で検出した。埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SD41より古い。

規模・形状　長軸長0.46ｍ以上、短軸長0.34ｍ以上、深さ0.14ｍである。遺構上部がSD34と重複するが、平面形は不整円形である。断面形は概ね半円形で、底部中央が周辺より若干深く掘り込まれる。

埋土　単層である。多量の亜角礫を含むが、堆積状況は不明である。

遺物出土状況　石製品１点が埋土上部から出土した。

出土遺物　石製品は砂岩製の敲石（164）で、全ての面に敲打痕が確認できる。

時期　当遺構より新しいSD41から尾張型第５型式の山茶碗類が出土しているが、詳細な時期は不明である。

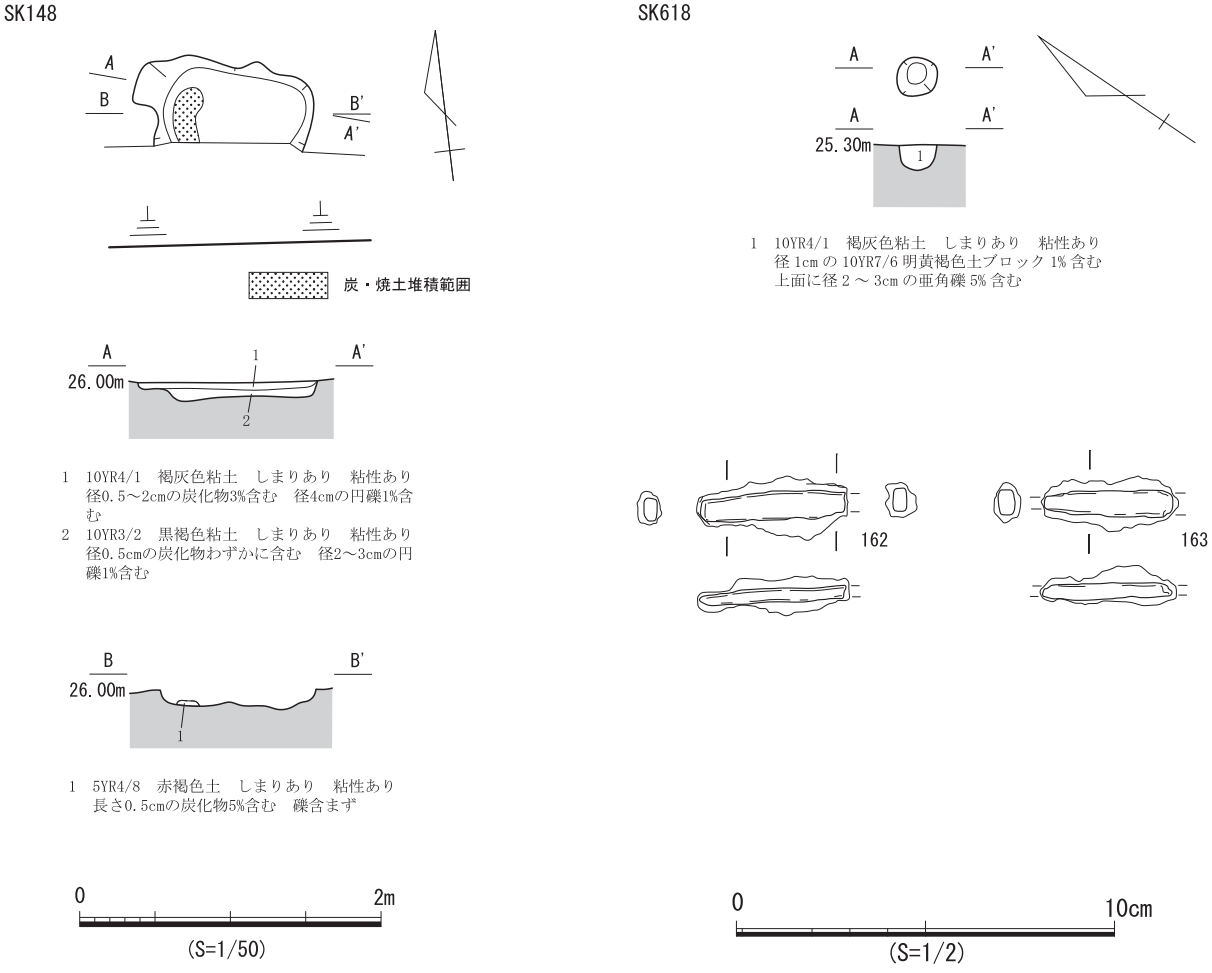
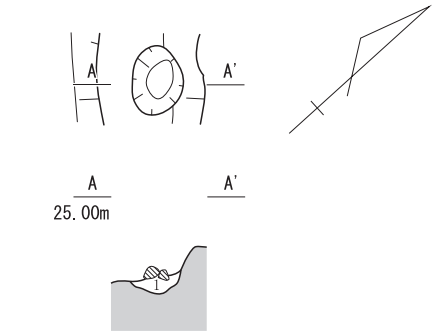


図98　SK148・618遺構図、SK618遺物実測図

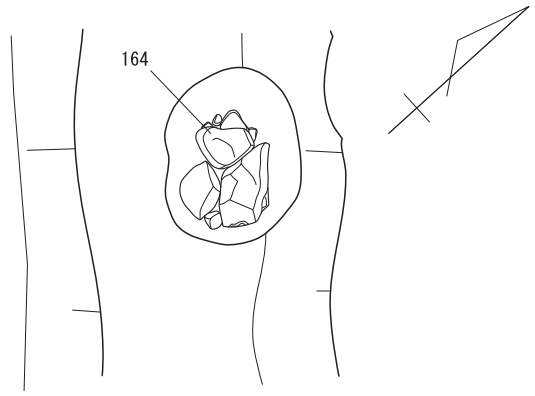
SK1072



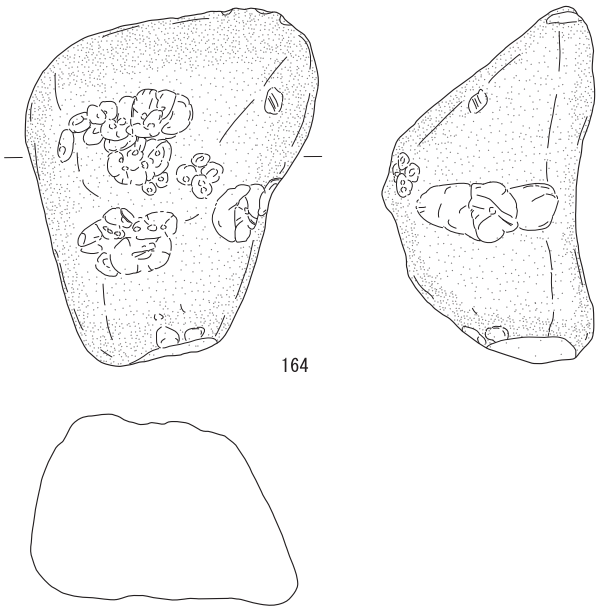
1　10YR4/1　褐灰色粘土　しまりあり　粘性あり
径 10cm 以下の亜角礫 20% 含む

(S=1/50)

遺物出土状況図



(S=1/20)



(S=1/3)

図99　SK1072遺構図、遺物実測図

第６節　撹乱坑・遺物包含層出土遺物

比較的残存状態が良好な遺物を18点図示した（図100・101）。

165と166は縄文土器である。165は波状口縁となる縄文時代中期後葉の深鉢である。口縁部に隆帯による文様を施す。166は変容壺の肩部付近で、縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけてのものである。横方向の条痕の下に幅１㎝ほどの突帯を貼り付け、その上を押圧する。

167は清郷型鍋である。10世紀後半のもので、内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。

168～174は須恵器である。168は産地不明の畿内系の坏身Ａ類で、美濃須衛産のものと比べて胎土が暗い。美濃須恵産Ⅳ期第２小期又は第３小期併行に比定した。169は美濃須恵産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した坏身Ｂ類で、外面底部が段状に突出する。170は美濃須恵産Ⅳ期第１小期又は第２小期に比定した長頸瓶の頸部である。171は産地不明の畿内系の壺で、器壁が厚く、美濃須衛産のものと比べて胎土が暗い。美濃須衛産Ⅱ期併行に比定した。172は産地不明の平瓶で、美濃須恵産Ⅳ期第１小期又は第２小期併行に比定した。173は美濃須恵産Ⅳ期第２小期又は第３小期に比定した甕である。焼成不良のため色調が全体的に灰白色である。摩滅が著しく、内外面ともに調整は不明瞭である。174は美濃須衛産の甕の胴部で、内面には青海波状の当て具痕、外面には格子目状の叩き目が残る。時期は不明である。

175は山茶碗で、尾張型第４型式である。

176～179は中国陶磁器である。176は白磁碗Ⅳ－１ｂ類で、厚めの玉縁状の口縁を有する。177は白磁碗Ⅳ－２類又はＶ類で、底部内面の外縁部が露胎する。玉縁状の口縁を有する。178は白磁皿Ⅱ類で、高台が露胎する。179は龍泉窯系の青磁碗Ⅰ－５類で、片切り彫りによる鎬蓮弁文が施される。

180・181は石製品である。180は軟質の粘板岩製の打製石斧である。表面の摩滅が顕著で、剥離面が不明瞭である。181は下呂石製の打製石鏃である。

182は鉛玉である。

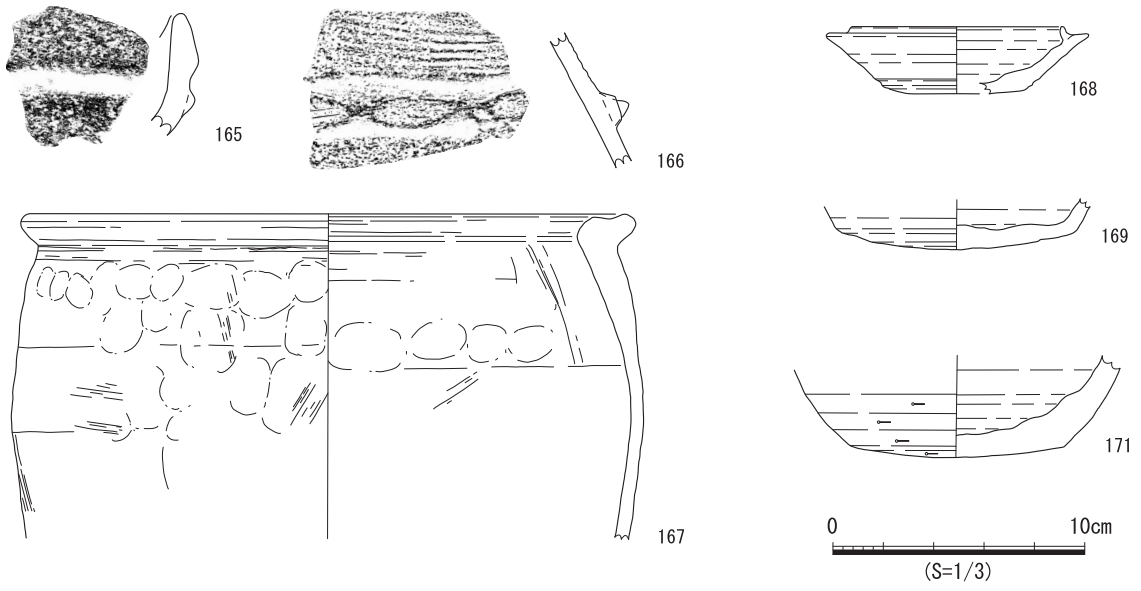


図100　撹乱坑・遺物包含層出土遺物実測図（１）

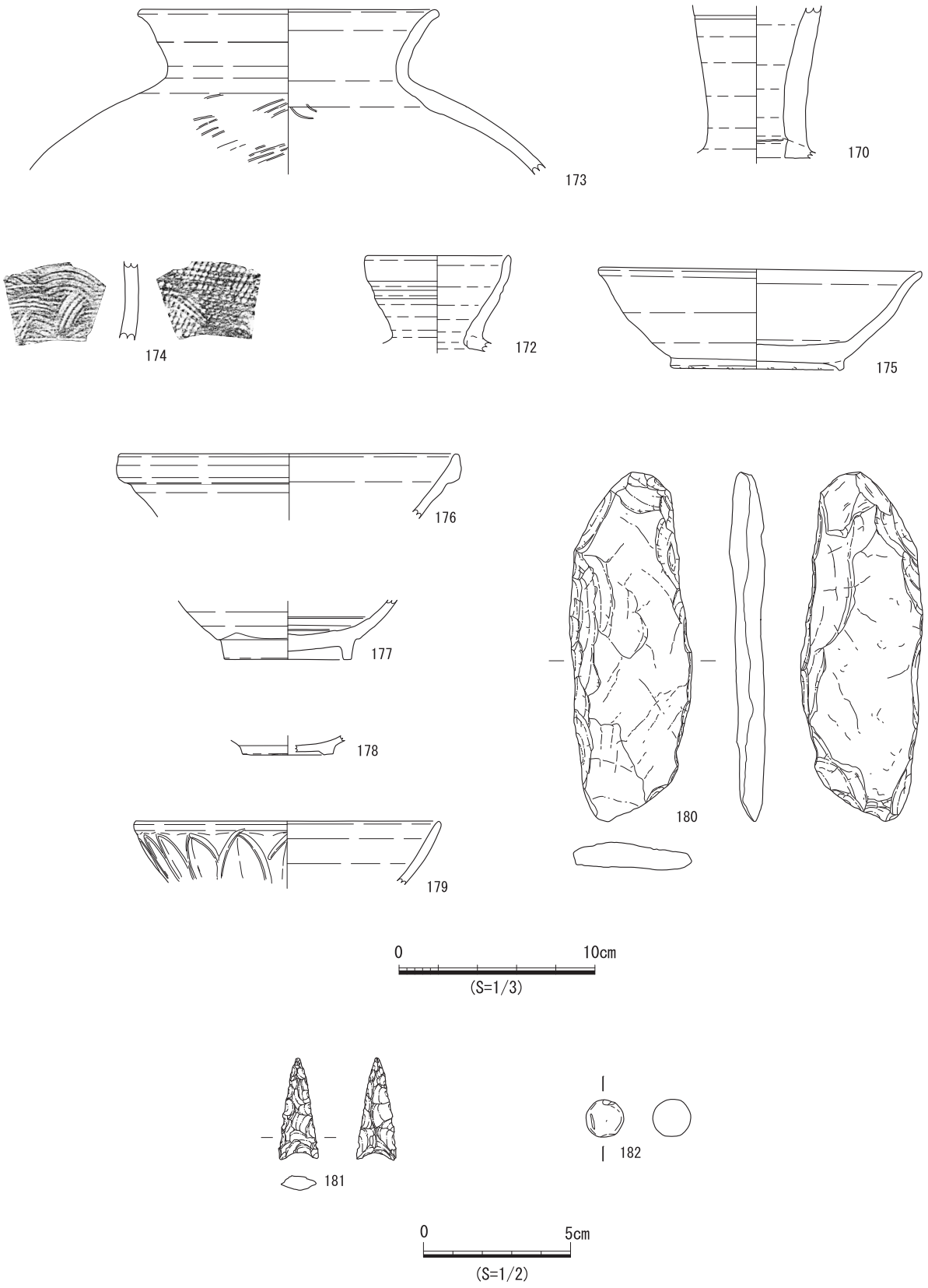


図101　撹乱坑・遺物包含層出土遺物実測図（２）